なにかも 何 なにしかもに同じ。萬三大方は何鬼(おに)恋ひむ、とあげせず、いもによりねむ年は近きを」

なにかから なにまで 一から十まで。何につけても。萬寄。大鏡狂言(昔語)「何から何まで行き屆いた、あのやうな御方が、恐らく天が下には又と二人有るまい」

なにくはぬかほ 何不食顔 何事をも知らぬかほ。さりげなき顔つき。そしらぬかほ。古朽木「裝束と共に深く隠し、何くはぬ顔にて夜著をかぶりぬ」

なにくらかず 何不暗 何に缺けたる處なし。何に不足なし。一つも不自由なし。松風村雨東帯鑑「太平の御代に生まれあうてござれば、何暗い事は御座らぬ」頃城酒呑童子「何暗からぬ王様」

なにしろ なににしろの略。「なにしろ寒い」「なにしろ行かう」

なにせ 何爲 なににせよ。

なにせん 一何をかなさん。宇治拾遺「何せんかせんと、のりのろひければ」二何にかはせん。何かせん。何にもならぬ。萬「悲ひ死なむ後は何爲牽(おもひ)、生ける日のためこそ妹を見まくほりすれ」曾根崎心中「云うて苦にさせ、何せうぞいの」

なにせんに 何爲 何にせんとて。何をなさんために。何の要ありて。何故に。萬「白金も黄金も玉も奈爾世武爾(なにせむに)、まされる寶子にしかめやも」同「何爲牽(なにせむ)わを召すらめや」

なにぞ 何 一いかなる。何といふ。どういふ。宇津保俊蔭「彼はなにぞの人ぞ」枕「なにぞの犬のかく久しくなにかあらん」二何か、はきとせぬ。の如き。源蜻蛉「見やりなる倉かなにぞな

る稻ども取り出でて」三何すれぞ。何ゆゑ。何とて。など。いかで。神代紀「吾夫君歟、何(なにぞ)の講來之晚也」萬「玉川に晒らす手づくり、さらさらに奈仁曾(なにぞ)此の子のここだかなしき」崇神紀

なにぞも 何 前條に同じ。萬「鶏鳴くふりにし里ゆ思(おも)へども、何如裳(なにぞも)いもにあふよしのなき」同「にぎたづにふなのりせむと聞きしなへ、如何毛(なにぞも)君が見えこざるらん」

なにたる 〔何とあるの約〕何としたる。いかなる。なんたる。醒睡笑「なにたる仔細に、かくいふぞ」

なにとも 何共 一何ものとも。何ごとも。物の數とも。枕「さるいふかひなき物にて、なかなか何とも見えず」同「司めしに少の司得て侍らんは、なにとも思ふまじくなん」源野分「おのがかく今日あすになりぬる命をば、なにともおぼしたらで」二いかやうとも。どうにも。どうとも。一向に。更に。宇治拾遺「衆中にてかく云ふことを、なにとも答へ、さらんもくちをしと思ひて」狂言(附子)「俄の出家でござれば、且那は無し、何共致さうやうがござらぬ」三何分にも。なにとも、はや。どうも。いかにも。狂言(貝)「つひにまだ聟入を致さぬよって、なにとも參りにくうござる」同(鳴神)「なにとも氣の毒なことでござる」

なにともあれ 何であらうとも。いかにも。醒睡笑「薪がめでたうなるは中興興二郎が居らう間は、なにともあれめでたうはなすまいぞ」

なにともかとも 何共斯共 いかやうとも。どうにも。どうにもかうにも。狂言(貝)「なにともかともならぬさま飲みて御座るが」

なにならず 何程のことにもあらず。物の數にも足らず。なんでもなし。源夕顔「いつの程にてかは、なにならぬ御名のりを聞こえ給はん」金葉夏「長强のまさごの數もなにならず、誠きせず見ゆる君が御代かな」平家一「此の世は假の宿なれば、恥ぢても何ならず」

なになり 何にてあり。何ものなり。何ごとなり。なんである。宇津保俊蔭「涙川淵瀬も知らぬ緣子を、しるべと頼む我れやなになり」後拾遺三「程もなく懲ふる心は何なれや、知らでだにこそ年はへにしか」

なにに 何 何しに。何のために。古今雜五「あひ見ねば戀こそまされ、みなせ川何に深めて思ひそめけん」枕「かうたての森中將森などいふべくもあらず、ただ一木あるを、なににつけたるぞ」

なににしろ 何爲 次條の轉。

なににせよ 何爲 どうにもせよ。いかにもせよ。なんとしても。

なにには よるまい 何と限りたることとなし。何にまれ。何にても。狂言(茶壺)「なにには よるまい、さわたって仕合を致さうと存ずる」同(茶壺)「なにには よるまい、醫のたったる和歌の心のあらうずる人を、聟にとらうと存ずる」

なににまれ 何 何にもあれ。何にても。なんでも。

なににも 何 何事にも。何ものにも。なんにも。

なににもかにも 何彼 なにもかも。いづれにも。

なにによらず 何不依 何でもかまはず。何とあらうとままよ。一代男「何によらず今日を限りに蘿儀を申しかけ、手をよくひきて、遊びを替へるぞ」

なにの 何 一何ほどの。どれだけの。少しの。ちっとも。なんにも。宇津保俊蔭「なにのかひも侍らじ」源賢「聞こえ知らせ給ふとも、何のしるしか侍らじものを」二何のための。なんにもならぬ。天智紀「赤駒のい行きはばかるまくず原、奈爾能(なにの)つてごと、ただにしえけむ」

なにはおけ 何置 何は扱おきても。何はともあれ。何より。まづ第一に。浮世床「子ども衆は何はおけ、御丈夫さまが一番結構なことでございますよ」

なにはきしおき 何差置 何彼のことはさしおき。何は扱おき。何はおけ。春花五大力「何はさしおき、これへ呼びませうかな」

なにはさておき 何扱置 前條に同じ。

なにはとまれ 次條の約。

なにはとも あれ 何兎有 何かの物事は、いかにあらうとも。ともかくも。まあまあ。

なにはともあれかくもあれ 何兎有斯有 何かの物ごとは、とまれかくまれ。萬事はともかくも。

なにはなくとも 何無共 何と取り立てていふほどのものはなくとも。したるものはなくとも。何もなければ。「何は無くとも御茶一つ」

なにまて 何迄 いかなるものまで。あらゆることまで。一切の物ごと、皆。後門葉集「神の國の離波の浦のなにまでも、惜しむ心はあしのやへよき」

なにも 何 一なに(何)に同じ。なにと。狂言(鳴)「手中間して、なにも、まそっともあがらうと思やるか」二何事なりとも。何に因りても。「何もそんな

にいちめずともよからう」

なにを 何 一何ごとを。叱責する意を含みていふ語。「何を小癪な」大鏡狂言(昔語)「有るやら無いやら、何を其方が知って」同「己れが、何を知って」二何を目あてとして。何のために。何の必要ありて。平家本(新中納言)「御後を御覽候へ、今はなにを御戰ひ候やらん」

なにをいふも 何云 なんというても。何をなすにも。なんとしても。大鏡狂言(昔語)「何卒わどりよにも飲ませてやりたいが、何をいふも、聞を隔ててるに依って、了簡に及ばぬ事ぢや」

なにをこしやくな 何小癪 何をなさんとするか、小しやくなる奴よ。はげしく罵る語。

なに-かの 何彼 (名・副) 何やかや。何とかかとか。なにくれ。とやかく。いろいろ。大和物語「より・組みなにかと、皆あづけてせさせ給うけり」源帚木「所所の聟、院のしもべ、ちやうの召しつぎ所、なにかのくままで、いかめしうせさせ給へり」中務内侍日記「顧ども立て、何かしけれども」

なにかなし 何彼無 何やかやといふことなし。何の分別する暇もなし。とやかくいはず。狂言(伯母)「何とも暮らさうやうがない所に、こなたに出家を抱へうと仰せられたに依って、何かなしに是れへ參り、有りついておりやる」一代男「まづ咄す事もある、此の舟へといふ、何かなしに乗り移りて」

なに-が 何 (副) 一何ものが。何ごとが。(更に然あらぬ意)。狂言(武悪)「此のお太刀でもって、何がござらうぞ、水を溜まらずぶち放してござる」同(大名)「なにがか惜しかろ」二なにがさて(何扱)の略。狂言(土產)

「みやげ物(土產)長崎の在京なれば、左樣の物をも調ふることもならなんだ。何が、みやげがいりませうぞ」同(八尺)「手つだひ人は數多おほうはおじやったいの。なにが、さやうで御ざりませう」

なにがさて 何扱 いふまでもなく。いかにも。勿論。いやいや。狂言(しび)「身共をば旦那に取らしやれて下されい。なにがさてお前樣さへもって、ならしやれて下さるるならば、私がためには一の旦那で御ざる」同(夷聟)「何が扱、堪忍せいでなりませうか」

なにがなし 何無 なにかなし(何彼無)に同じ。なにか(何彼)の條を見よ。聊徳太子繪傳記「はっとして、何がなしに突き戻す」冥途飛脚「何がなしに懐へ押し込んで、新町まで」一散に、どう飛んだやら覺えばこそ」膝栗毛「いやいや面倒だ、何がなし一貫五百よりまからぬまからぬ」

なに-がし 何某 某 (代) 一人・物・事・場所などの名を指して云はぬ時、又、名の知れぬ場合に代へて用ふる語。くれがし。それがし。だれそれ。どこそこ。宇津保上(三位)「左右大辨・頭藏人・殿上人、多くある限りのなにがし、聞き知り給ふもさらぬも、數數はかりなき中に」同(下)「俊理のつかさなにがし」枕「何がしにて、その人のせし八講・供養」二誰れも知りたる物事を、わざとおぼめかしていふに用ふる語。そんじよそれ。例の。彼の。なに。宇津保(下)「開の夜のなにがしの心ちなんせし」源(宮)「五つのなにがしも猫うしろめたきを」同(宮)「なにがしのみこの、此の花めでたる夕べぞかし」三自稱の代名詞。それがし。拙者。(やや卑下の意を含む)。宇津保(俊)「宮の御事は、なにがしがとり申しつる事にも侍らず」

なに-くれ 何呉 (名・副) 何やかや。かれこれ。何のかの。何かいろいろ。さまざま。宇津保俊蔭「染め草なにくれのこと、庄庄の物ども」枕「物あはせ何くれと挑む事に勝ちたる」源帚木「よろづの御よそほひ、なにくれとめづらしきさまに調じ出で給ひつつ」

なにくれとなく 無何呉 何くれと定めたることなく。どれこれとのきまりなく。何やかや。なにくれ。

なに-くれ 何呉 (代) 何がしくれがし。だれそれ。某某。枕「憎ぞく・上達部・殿上人・地下・六位、何くれまで」源夕顔「山の座主、なにくれとやんどとなき僧ども」

なにげなし 何氣無 (形ク) 何のやうすもなし。なにの氣もなし。

なに-ごころ 何心地 (名) どのやうなる心もち。いかなる心もち。古今雜別「惜しむから戀しきものを白雲の、たちなん後はなにごころせん」源夕顔「かかる茂き中に、なに心ちして過ぐし給ふらん」

なに-ごころ 何心 (名) いかなる心。いかなる考へ。なにごころ。萬「我が宿のくず葉日にけに色づきぬ、きまさぬ君は何情(なにごころ)ぞも」源若紫「なに心ありて海の底まで思ひ入るらん、そこのみるめも物むつかし」

なにごころなげ 何心無氣 (副) 何ごころなきやう。何心なささう。榮華衣珠「まだいと何心なげに打ち見て居給へり」

なにごころなさ 何心無 (名) 何ごころなきやう。何心なき度合。

なにごころなし 何心無 (形ク) 何の心もなし。何の氣なし。何げなし。無心なり。宇津保(琴)「琴中間賜はりて、なに心なく撥ならすに」源帚木「なに心なき空の氣色も、ただ見る人から艷にもすごくも見ゆるなりけり」

なに-ごと 何事 (名) 一いかなる事がら。いかやうのこと。どんなこと。なにわざ。萬「あが待ちし秋はきたりぬ、いもとあれ何事(なにごと)あれぞ紐解かざらむ」後撰三「何事を今は頼まん、ちはやふる神も助けぬ我が身なりけり」枕「いみじく笑へば、何事ぞ何事ぞと、おとどものた

まふ」㊁あらゆることがら。一切のこと。ばんじ。宇津保俊蔭「ふみもよみ、なに事もならはめ」源初音「親打ち具し、さしあたりて世の譽え花やかなる御方方にも劣らず、何事の儀式をもてなし給ひけれど」㊂何としたること。どうしたこと。いかなること。咎むる意などにいふ。狂言「天下太平目でたい御代に、關とは何事ぞ」續野「何事ぞ花見る人の長刀」

なにごとも神信心　信心の大切なるをいふ。

なにごとも知れぬでもったもの　内幕の知れ渡らぬところに價値あること。萬事内情を知り盡くさざるをよしとす。

なにさま　何様　（名、副）㊀いかなるさま。いかなる樣子。どのやう。いかやう。どういふふう。東鑑「文治元年十月十五日」「申狀如此、何樣可計沙汰乎」太平記「十七、東國入」「傍輩何樣、腹切り・討ち死にして見ゆるかと尋ねければ、一人も不見候とぞ答へける」延慶本平家「一本、二、三百人を際とするも不審也、何樣にも子細有らん」㊁いかさま。いかにも。げに。「何さま然だ」

なにさま　何方　（名）いかなるむき。いかやうなる關係。源東雲「なにさまの事ぞ、我れにはつゆむことあらじとなん思ふ」同玉鬘「彼の琴ね出でたりけんや、なにさまの人ぞ」

なにしか　何　（副）「しは助辭」何故か。なにしにか。なに。萬葉「朝づく日向かふつげ櫛ふりぬれど、何然かも君が見るに飽かざらむ」同「今更に何牡鹿か思はむ、梓弓引きみゆるしみ寄りにしものを」古今「東路のさやの中山なかなかに、なにしか人を思ひそめけん」

なにしかは　何　（副）何しにかは。何のためにかは。何かは。なぜ。枕「何しかはえ知らずといひしと、後に恨みられて」後拾遺「なにしかは人もきて見ん、いとどしくもの思ひまさる秋の山里」

なにしかも　何　（副）なにしにかも。ある。なんとしてか、まあ。萬「秋さらばあひ見むものを、奈爾之可母」「奈爾之加母霧にたつべくなげきしまさむ」同「萩の花匂へる宿を、朝庭に出でたちならし、夕庭に蹈み平げず」古今「なにしかも人を恨みん」

なにしに　何爲　（副）㊀何をなすために。何の用事にて。宇津保俊蔭「なにしに此の山にはあるぞ」宇治拾遺「なにしに酢をばかくるぞ」㊁何のために。何の故に。なぜに。どうして。なにすれぞ。落窪「なにしに部屋に籠め給ひて、かくをこなる者にあはせんとし給ひしぞ」枕「何しに人と思ひけんなど、殿上にていみじくなんのたまふ」㊂何として。いかでか。いかにしてかは。（下に、決してさることなしの意を含む）。竹取「見送り給へといへども、何しに悲しきに見送り奉らん」落窪「子供の中に幸ひありけるものを、なにしにおろかに思はん」

なにすれぞ　何爲　（副）何とすればぞ。何としてか。いかにしてか。なぜ。なんすれぞ。神代紀上「何爲然の理解誤我於亡者」萬「時時の花は咲けども、奈爾須疑曾母どふ花の咲き出こずけむ」

なにそは　何其　（副）㊀なに、それは。何なるぞ、そは。古今序「歌の山何そはありてあるかひは、きてもとまらぬ名にこそありけれ」同「命やはなにそは露のあだものを、あふにしかへば惜しからなくに」㊁何すれぞ。何ゆゑ。なんぞ。なぜ。續古今「見し人を昔にも聞かぬ澄つ潮の、なにそは袖にたえず落つらん」續後拾遺「立ち歸りきてもとまらぬ別れかな、何そは名のみあふ坂の山」

なにと　何　（副）㊀何とて。なぜ。續古今「岩代のまつこともなき我が身さへ、何とうき世にむすばほるらん」續後拾遺「枯れはつる淺茅に庭はとぢられて、何と露の玉を敷くらん」㊁いかやうに。いかに。どう。どのやうに。蹈「鎖みたる舟は遠かる、道手は跡に近づく、扨御命は何と仕り候べき」同放「座禪の公案、何と心得候べき」狂言「明日は正月元日、出仕にあがらうと思ふが、なにとあらうぞ」㊂なに（何）に同じ。蹈「某は總じて子を持たぬ者にて候」同「何と、御子は持たれぬと仰せ候か」同「何と、たとへば諸軍勢の中に、いかにも見苦しき武者に參れと候や」圓云ひかけて、相談する時などに用ふる語。いかに。どうぢや。狂言「何と、やい、して、なにと、あしたの燃つきはどうした物であらうぞ」同「何と、中間を打ったも療治をしてくれまいか」醒睡笑「初對面の時、斯のいふやう、なにと下戸にて候や」

なにとかして　何　㊀いかにしてか。何としてか。どうしたことか。大鏡「狂言「名馬中間何とかして逃げて行く」㊁どうにかして。何がな手を盡くして。「何とかして助けたい」

なにとがな　何　いかやうにとか、なあ。どうがな。なにがな。狂言「某は楊枝一本削った事がござらぬが、なにとがな致さうぞ」大鏡「何とがな致さうやれと存ずる所に」

なにとかは　何　㊀何とか、まあ。何なりとか、まあ。源「君なくて岩のかけ道たえしより、松の雪をも何とかは見る」㊁何とてか、まあ。なぜか。源「つれなき人の御心をば、なにとかは見奉りとがめん」續古今「何とかは月やあらぬとだるべき、我がもとの身を思ひ知りなば」

なにとかも　何　何とてか、まあ。などかも。孝德紀「もと毎に花は咲けども那智曙柯逗（なちあけつ）、うつくしいもぉ又さきてこね」

なにとかや　何　何と云ひたるか、よ。それよ、何とか云ひたるやらん。枕「若くてよろしきをのこの、下司女の名をいひ馴れて呼びたるこそいとにくけれ。知りながらも、何とかや片文字は覺えていふはをかし」拾遺「物名」何とかやくきの姿はおもほえで、あやしく花の名こそ忘るれ」

なにとした　何　何としてある。いかにしたる。どうした。狂言「烏帽子がはげてあったが、なにとした物であらうぞ」

なにとして　何　㊀いかやうになして。いかにして。どういふ風にして。續古今「むそぢ餘りみつるも悲し、何として心のどまる月になるらん」狂言「懐紙中間何としてある、見さしめ」㊁何として。なぜて。「新後撰「何として、うき身一つの殘るらん、同じ昔の人はなき世に」夫木「何としてうつろひぬらん、さを鹿の心あひ思ふ秋萩の花」㊂何のために。何ゆゑ。何なりとて。なぜ。蹈「此の者をば何として召しつれられて候ぞ」狂言「なにとして戻った」圓いかなる手だてをなして。いかなる手段にて。延慶本平家「出家」「多くの者共の中に、なにとして尋ね來ける」狂言「なにとして討ったぞ」㊃どうして。どうしてだうして。なかなか。なんとして。狂言「身共が爲めにも聞子ぢ

やものを、何として嗔ふものぢや」

なにとには　なし　何無　何といふ程のことにはあらず。何でもなし。なにとなし。土佐日記「此の事はなにとにはなければど物いふやうにぞ聞こえたる、人の程に合はねば咎むるなり」

なにとはなし　何無　なにとなし（何無）に同じ。源鈴虫「なにとはなければど、過ぐる齡にそへて、忘れぬ昔の御物語など承り聞こえまほしう思ひ給へるに」

なにとやらん　何　㊀何なるやらん。何ものやらん。何どとやらん。何やらん。蹈「平家」「物仰せられ候も、何とやらんはたらく物あり」㊁何となく。どことなく。どうやら。謠「今の折節、何とやらん似合はぬやうに御座候へば」同「物仰せられ候も、何とやらん物物しく見え給ひて候」

なにどき　何時　（名、副）㊀いつの時。いかなる時刻。なんじ。㊁いつのをり。いつごろ。いつ。和泉式部續集「戀ふる身はこともなれや、鳥のねにおどろかされしときは何どき」

なにとぞ　何卒　（副）㊀何とかして。いかやうにも。どうにか。何とぞして。狂言「相談致し、何とぞ、ならう事ならばかなへて進ぜうと存ずる」同「鳥定めて鯉をあてにしてござる事もあらう。何とぞ申しわけを仕らう」㊁どうぞ。どうか。ひたすら。是非。狂言「私の何とぞと存じたる事も首尾致し、此の樣な嬉しい事はない」同「物はしやう、事は才覺ぢや。何とぞ調ふやうにしてくれさしませ」大鏡「何卒途中で雨にあはぬやうに致したい事でござる」㊂なにと（何）に同じ。狂言「扨も扨も興がったなりかな、あの箕をかづいたなりは、何とぞあらうことぢや」

なにとて　何　（副）如何なれば。なにとして。などて。なに。後撰「夢のごとはかなきものはなかりけり、なにとて人にあふと見つらん」詞「訪はぬ間をうら紫に咲く藤の、何とて松にかかりそめけん」

なにとてなし　何無　（形ク）㊀とりとめて何といふことなし。これぞといふこともなし。どことといふこともなし。枕「若やかに青みたるに、霞も霧も隔てぬ空のけしきの、何となく、さと笑ふ聲、聞こえやすらん」㊁何と取り立てて云ふほどのことなし。なんでもなし。平凡なり。枕「卯の花は品劣りて、なにとなけれど」狹衣「「なにとなきなま孫王にて、よせなからんよりは」㊂何と定まりたる事なし。何によらず。細大もらさず。一切にわたり。太平記「貧天下の事、大小（ショウ）となく關東の御計らひとして、叡慮にも任せられざりしかば」運歩色葉「無大小」圖何といふ目的もなし。何心なし。何心なし。無意識なり。無心なり。夫木「何となく通ふ兎もあはれなり、片岡山の庵の垣根に」狂言「何となく饒を見れば、はやいつとなく衰へて」

なにとなに　何何　（代）何と何と。なに。どれそれ。宇津保俊蔭「ここら親が時の寶、くしげのなになにも、惜しきものなく失ひ」狂言「縞りたる布はなになに」どとか。（文書を讀み出す時にいふ）蹈「文の御座候、御覽候へ。何何中間」雜「上せしめ候」狂言「これに高札がある、讀うで見よう。何何、往來の者に宿貸すこと堅く禁制」

なには　何　（名、副）何といふことは。なにやかや。なにか。古今「津の國のなには思ひず、山城のとはにあひ見んことをのみこそ」辨内侍日記「津の國のなには知らぬ世の中に、いかでかあまの袖ぬらすらん」蹈「何はの恨み打ち忘れて」

なにはにつけて　何彼につけて。何や彼やの物事につけて。萬事に關して。方丈記「京のならひ、なにはにつけても、みなもとは田舍をこそたのめ」

なにはのこと　何事　㊀何かの事。萬事。何事。源「數なでなにはのこともかひなきに、などみをつくし思ひそめけん」後拾遺「古へになにはの事はかはらねど、涙のかかる旅はなかりき」㊁何のこと。いかやうなること。月詣集「津の國のあしでにもなき浦を見て、なにはの事に落つる涙ぞ」行宗集「九の重にあしではなしと聞こゆなり、なにはのことを語りましかば」

なにはあしげ　難波葦毛　（名）摂津國難波に產したる葦毛の馬。未木「ささ波やひらの高根に雪ふれば、なにはあしげの駒なめてけり」

なにはいばら　金櫻子　（名）【植】薔薇科、薔薇屬の落葉灌木。やや蔓狀を呈し、刺針を有す。葉は三小葉より成る複葉、各小葉は鋸齒を有す。五六月の頃、白色五瓣の大形なる花を開き、時に重瓣なるもの、色の變はれるもの等あり。我が國、各地の園圃に栽培せらる。いざよひばら。きいばら。きばら。さざんくわいばら。さんせういばら。

なにはかしは　難波柏　（名）蕨の葉をいふと。和訓集「紅葉菊千種の露にやどる月の、今はなにはのかしはにぞすむ」

なにはかぜ　難波風　（名）摂津國難波、即ち大阪に吹く風。二代男「難波風のくれぐれ、いかのぼりのはやりて」

なにはかり　何許　（副）いかばかり。なにほど。どれほど。どのくらゐ。竹取「何ばかりの深きをか見んといはん、いさかの事なり」落窪「何ばかりの者なれば、かく我が家をあかひるに入り立ちて、かくして出でぬらん」

なにはぐさ　難波草　（名）【植】よし（葦）の異名。篠目抄「秋來れば穂に咲き出づる難波草、かりそめながら見ゆる夕靄」

なにはけいしゃ　難波藝者　（名）かぶきやくしや（歌舞伎役者）に同じ。今宮心中「役者評判・扇うり、浪花藝者の風俗を橋橋名所に撰へて」

なにはかり　何何　（副）何なるぞ。何

なにはじゃうるり　難波淨瑠璃　（名）江戸時代、摂津國難波、即ち大坂に流行したる浮瑠璃節の稱。即ち、義太夫節など。（江戸淨瑠璃・京淨瑠璃の對）

なにはすがさ　難波菅笠　（名）摂津國難波より產する菅もて作りたる菅笠。萬「おしてる難波菅笠ならなくに」

なにはせん　難波錢　（名）享保十三年より同十五年まで、摂津國難波村にて鑄造せし寛永銅錢。銅色紫褐、徑九分、重量一匁。小なるは徑八分七厘。新寛永錢譜「難波錢」

なにはづ　難波津　（名）王仁（ワニ）の詠みたりといふ、難波津に咲くや此の花冬ごもり、今を春べと咲くや此の花の和歌の稱。古昔、今のいろは歌の如く、淺香山の歌と共に手習ひの初めに用ひたるより、手習ひの初步にいふ。古今序「なには

づの歌は中巻あさか山の言の葉は中巻此の二歌は歌の父母のやうにてぞ、手ならふ人の初めにもしける」源氏物語「まだなにはづをだに、はかばかしく讀け侍らざめれば、かひなくなん」

なにはづ の ながれ 難波津流　難波津の道の流れ。歌道の流派。歌道。諸芳野「難波津の流れは淺くして底をはかり難く、淺香山の道は又狭くして際を知らざりき」

なにはづ の みち 難波津道　難波津(ナニハ)づの條の古今集の序文より出でて、和歌の道の稱。歌道。諸後生「難波津・淺香山の道は、夫綿の伸だちなれば」

なには-づけ 難波漬　(名) 漬物の一種。刻みたる茄に蕃椒・酢をかけたるもの。

なには-の-あし 難波葦　(名) 【植】なにはぐさ(難波草)に同じ。御伽草紙「伊勢の濱荻、なにはのあし、鎌倉や武藏野の草の名多しと申せども」吉野都女補「伊勢の濱荻難波の葦、所にかはるは草の名なり」

(誹)濃遠の屋は伊勢の濱荻　物の名の、所によりて異なれるにいふ。蔓玖波集「草の名も所によりて變るなりの句浪速の蘆は伊勢の濱荻」

なには-の-ちよさ 難波猪牙　(名) しまみぶね(親船)を見よ。

なにはーばら 難波薔薇　(名) 【植】なにはいばら(金櫻子)の異名。

なには-ぶし 難波節　浪花節　(名) 【猶津國難波、即ち今の大阪にて始まりたればいふなるべし。嬉遊笑覽】講談に歌謡を混じたる如き一種の語り物。說經祭文より出でたるものなるべく、二上りの三味線を用ひて、祭文節に浮瑠璃節を交じへたる如き節を歌ふ。うかれぶし。ちよんがれぶし。ちよぼくれ。

なにはーやき 難波燒　(名) なんばやき(難波燒)に同じ。

なに-びと 何人　(名) いかなる人。なんびと。何者。古今秋上「何人かきて說ぎかけし麻袴、くる秋ごとに野邊を匂はす」源夕顏「此の西なる家には、なに人の住むぞ、問ひ聞きたりや」

なに-ぶん 何分　(副) 一如何になせども。どうしても。どうも。「何ぶんわからぬ」「何分なほらぬ」二ひたすら。なにとぞ。どうか。いかやうにも。「何分よろしく」

なに-ぶん とも 何分共　いかやうなりとも。よしや、如何にならうとも。萬事。「何分とも宜しく願ふ」

なに-ほど 何程　(副) 一いくらばかり。どのくらゐ。いかほど。どれほど。いくばく。狂言文蛇「人中略何程おいてよかろ」同講の「かねのねを聞いて來たか、何程するぞ」二いかに。なんぼ。どんなに。狂言百萬「なにほど其のやうに ほえたとても、いなす事ではないぞ」同對面唯今まで何程か、算用せう濟まさうといってだましたによって」

なに-も 汝妹　(名) 古語。男の、女を親しみて呼ぶ語。なね。記「愛我那邇妹(ナニモ)命」履中紀「汝妹(ナニモ)後妹、共云云」妹紀上

なに-もの 何者　(名) 一いかなる人。何といふ人。何人。落窪「よそ人もかく敵のやうなる人こそありけれ、なにものならん」枕「此の殿上の蟲・草は、何ものの恣みかくしたるぞ」

なに-もの 何物　(名) いかなる品もの。萬「わきもこがかたみの衣なかりせば、奈爾毛能(ナニモノ)もてか命つがまし」

なに-やう 何樣　(名、副) なにさま(何樣)に同じ。

なに-やつ 何奴　(名) いかなるやつ。どいつ。罵りていふ語。闘八州繋馬「大事の敵をのがしたか、かたうどは何奴」

なに-ゆゑ 何故　(副) いかなるわけ。何のため。なぜ。萬「何故(ナニユエ)か思はずあらむ、紐のをの心に入りて戀しきものを」續後撰「又もあふ契りあるやと頼まずば、なにゆゑ惜しき命ならまし」

なに-ら 何等　(代) なに。いかなる。どのやうなる。なんら。庭訓往來三月「久不啓案内之間、不審千萬、何等御事候哉」

なに-わざ 何業　(名) なにごと(何事)に同じ。

なに-んじん (名) 【植】にんじん(胡蘿蔔)の異名。

なぬ-か 七日　(名) 一日數七つ。ひとなぬか。一週日。一週間。萬「近くあらば今二日だみ、遠くあらば奈奴可(ナヌカ)の内は過ぎめやも」源帚木「寺の堂にうつろひ給ひて、七日のほど行ひ給ふ」二月の第七日。特に正月七日又は七月七日の稱。蜻蛉日記「天の川なぬかを契る心あらば、星あひばかりの影を見よとや」枕「むつき中巻なぬかは雪間の若菜青やかに摘み出でつつ」三しちや(七夜)に同じ。拾遺「うぶやの七夜にまかりて。君がへんやほよろづ代を數ふれば、かつがつ今日ぞ七日なりける」永久百首「七夜。鶴の子の千歳をふべき始めとは、七日よりこそ祝ひそめけれ」四なぬかなぬか(七日七日)に同じ。宇津保菊宴「ままこ君の七日のわざを、母君、佛・經書き法服調じて、比叡にてし給ふほどに」

なぬか　なぬか　七日七日　一七日めごと。各週。毎週。二七日めごとに死者の追福を營むべき日。初七日より七七日に至る各七日め。七七日。源夕顏「七日七日の佛書かせても、たがためとか心の内にも思はん」同若菜「七日七日の御ずきやう」

なぬか の せちゑ 七日節會　あをうまのせちゑ(白馬節會)に同じ。江次第「七日節會」年中行事秘抄正月「七日節會及敍位事」

なぬか の よ 七日夜　一七日の日の夜。特に、七月七日の夜。たなばた。萬「一とせに七夕(ナヌカヨ)のみあふ人の、戀もつきねば夜のふけゆくも」宇津保上巻「七日の夜は、たなばたに奉るべきには」二しちや(七夜)の稱。宇津保中巻「三日のよ一の宮うぶやしなひし給ふ。五日よは大將殿、七日よなん東宮より例の御とぶらひは有りけり」源上巻「七日の夜、内よりも御うぶやしなひの事あり」

なぬか の よひ 七日宵　前條に同じ。萬「其のつまの子が、あらたまの年の年を長く思ひこし戀ひ盡くすらむ、ふみ月の七日之夕(ナヌカヨヒ)は吾れもかなしも」鶴忠百首「彦星も袖に照らして知りぬらん、七日のよひの九のともし火」

(誹)七日の說法、屁一つ　百日の說法屁一つに同じ。ひやく(百)の條を見よ。鶴衣島田「昔、太平記の無禮講に之を許しそめたるより、終に條倉に嗅ぎつけられて、七日の說法屁一つに破れぬ」

(誹)七日の說法無にす　前條に同じ。

(誹)七日病む　いたく驚き又呆れなどせば、七日も病臥することありといふことなるべし。榮華物語「父おとどは七日やむといふらんやうに、あさましういみじきに、かい誹などいふ事をさせと。各週。毎週。二七日めごとに死者の追福を營むべき日。初七日より七七日に至る各七日め。七七日。源夕顏「七日七日の佛書かせても、たがためとか心の内にも思はん」同若菜「七日七日の御ずきやう」

なぬか の せちゑ 七日節會　あをうまのせちゑ(白馬節會)に同じ。江次第「七日節會」年中行事秘抄正月「七日節會及敍位事」

給ひて、空を仰ぎて夢さめたらん心地して居させ給へり」

なぬか-うらがき 七日裏書　(名) 其の發送の日より起算して、出廷の期日を七日に限る目安裏書。牧民金鑑「訴訟等差出」

なぬか-ざめ 七日鮫　(名) 【動】魚類中、軟骨類、鮫類の一種。體の長さ三尺餘。眼小さく口濶く、齒は微少なり。淡灰色にして、黑色の斜線を有し、黑き斑點を散在す。我が國、東海・西南及び西海に產し、近海の沙底に棲み、性强壯にして、水を離るるも容易に死せず。四月頃產卵す。

なぬか-しゃうぐわつ 七日正月　(名) 正月七日の異儀。古く五節句の初めとして、七種の羹(ナヌカ)をくらひ、遊宴などせし故にいふ。

なぬか-まつで 七日詣　(名) 七日詣、毎日神佛に參詣して祈願などをなすこと。なぬかまゐり。孕常磐「自ら御祈禱の七日詣と僞り」娘歌加留多「山王と唐崎へ、七日まうでの乘物に」

なぬか-まゐり 七日參　(名) 前條に同じ。癸亥法印日記「七日參り今日に滿ちぬると申し上ぐ」娘歌加留多「山王樣と此の神樣に願をかけ中略七日參りの今日五日目」

なぬし 名主　(名) 一みやうしゅ(名主)を見よ。盛衰記四十三、金魚「觀音所の名主・百姓」二昔時、町村又は鄉の長。地方によりて庄屋といへり。御定書百箇條人數付御仕置「支配を請け候名主を殺し候もの」

なね 星正。

なね (名) 古語。人を親しみ尊びていふ語。男女に通じて用ふ。記「神沼河耳命曰。其兄神八井耳命、那泥(ネ)汝命」神代紀「與女姊(ナネ)相見而」萬「朝奠の思ひ亂れてかくばかり、名姊(ネ)が戀ふれぞ夢に見えける」

なの-か 七日　(名) なぬか(七日)の轉。

なの-つき 名月　(名) めいげつ(名月)に同じ。運歩色葉「名月(ナノ)」

なのめ 斜　(名、副) 一ななめ(斜)に同じ。字鏡「嶮(ナノメ)可(ナノメ)奈(ナノメ)佐(ナノメ)」二きはだたず。ひと通り。なほざり。おほよそ。よのつね。たいがい。ななめ。宇津保俊蔭「なのめに、はかなげにやはおはする」枕「なのめにだにあらず、そこらの人のほめ感じて」源帚木「とあればかかり、あふさきるさにて、なのめにさてもありぬべき人の」三なのめならず(不斜)の略。諸「帝なのめに思し召され」狂言三千「大將なのめに思し召し」

なのめ ならず 不斜　一ななめならず(不斜)に同じ。ななめ(斜)の條を見よ。源夕顏「げにかたはらいたくはなめる」同帚木「院のおぼしの給はせしさまの、なのめならざりしをおぼし出づるにも」十訓「燕りの、なのめならずかをりて」二なのめなり。よのつねなり。琵琶平家二本、成親「うれしなんどは、なのめならず」

なのり 名告　名乘　(名) 一なのること。名をいふこと。又、その名。神樂「朝倉や木の丸殿に我が居れば、奈乃利(ナノリ)をしつつ行くは誰が子ぞ」宇津保俊蔭「誰れぞなのりし給へなどの給へど、いらへもせず」二中古以後、男兒元服の時、通稱の外に新に附くる實名の稱。盛衰記世繼「内者」「名乘りはいかにと問ひ給へば、名は未ゝ付、親には三郎に相當たり候と申す中略去らば汝をば鷲尾三郎と云ふべし、名乘りは我が片名に父が片名を取りて經春と付くべし」三實物の名を呼ばはり行くこと。源帚木「おほぢ近き所に、おほどれたる屋して、いかにとか聞きも知らぬなのりをして、打ちむれて行くなどぞ聞こゆる」四能樂の調の一種。男のして・わき又はつれが、その役名を名のること。

なのり を かへす 反名告　二字の名告(ナノリ)の宇音の反切をなして、出でたる宇の吉凶を見る。名乘祕傳抄幽軒の記に、名乘を返す事は中古よりありと見えたり」

なのり-あぐ 名告上　(自動ナ) 名のりをいひたつ。高高と名のる。なのる。

なのり-あげ 名告揚　(名) まゝぎやうじ(前行司)に同じ。相撲今昔物語七「行司中略、前行司中略當時は是れを觸れと云ひ、あるひは名乘揚げといふ」

なのり-あげる 名告上　(自動下) なのりあぐ(名告上)の口語。

なのり-あひ 名告合　(名) なのりあふこと。

なのり-あふ 名告合　(自動四) 互ひに名のる。

なのり-いづ 名告出　(自動ナ) 名のりて出づ。告白して罷り出づ。源螢「子と名のりいでくる人だになきこと」同常夏「我れなんかこつべき事あると名のいで侍りけるを」

なのり-かく 名告掛　(自動ナ) 名のりをいひかく。他に對ひて己れの名をいひかく。夫木「さ夜ふけてたれその森のほととぎす、なのりかけても過ぎぬなるかな」諸象「何がしは平家の侍、惡七兵衛景清と名のりかけ名のりかけ」

なのり-かける 名告掛　(自動ナ) 前條の口語。

なのり-かぺず 名告反　(他動ナ) 名のりかけられたるに對して、己れも亦名のる。又、くりかへして名のる。觀政集「「待ちけりと我れもや聞かんほととぎす、ながなのりをば名のりかへして」

なのり-がほ 名告顏　(名、副) 名のる如き顏つき。名のらんとするやうす。萬代夏「夕月夜たそがれ時の郭公、名のり顏なる聲ぞきこゆる」一茶句集「蛙峨村と名のりがほなり枇杷の花」

なのり-がみ 名乘紙　(名) なのりを書く紙。夏山雜談「香中略如此圖を名乘紙に書」

なのり-ざ 名乘座　(名) 能樂にて、出演のしてが、橫掛りより右に折れ、舞臺に入り、立ちながら謠ひ出だす處の稱。

な-のり-そ (名) 【莫ナ告りその義。なのりそもの條の允恭紀より出づ】【植】ほんだはら(馬尾藻)の異名。催馬樂「伊勢の海の清きなぎさに汐かひに、名乃利曾(ナノリソ)や摘まむ、貝や拾はむ、玉や拾はむ」萬「わたの底沖つ玉藻の名乘曾(ナノリソ)の花、いもとあれとここにしあり」と英語(ナノリソ)の花」民部省式「伊勢國鰒(中略)那乃利(中略)奈乃利曾(ナノリソ)」和名「神馬藻神馬藻、駿之義也」

なのりそ の (枕) 語路の同じきより、なのるにかけていふ。萬「みさご居る磯わに生ふる名乘藻乃(ナノリソノ)、名はのらしてよ親は知るとも」新六帖「磯がくれのりにまじれるなのりそ、なのりも今は知る人ぞなき」

なのりそ-も (名) 【植】なのりそに同じ。允恭紀「とこしへに君にあへやも、いさなとり海の濱藻のよる時時を。時天皇讃「哀通姫曰、是歌不可聆他人」皇后聞必大恨、時人號濱藻」讃「奈能利曾毛」などかも妹にのらずきにけむ」神馬藻「狂歌」

なのり-わらす 名告散 (他動) そ

なのり-でる 名告出 (自動) なのりいづ(名乗出)に同じ。

なのり-ぶえ 名告笛 (名) 能楽にて、次第なくて直ちに名乗りするわきの出づる時、笛のみにてあしらふこと。

なのる 名告 名乗 (自動) 一名を告ぐる。己れの姓名などを告ぐ。其のものの名稱を、其のものみづから云ふ。崇神紀「自稱名曰『貴信』」萬「あかときと名能里なくなるほととぎす、いやめづらしく知もはゆるかも」枕「蚊の細聲に名のりて」源「宮のさぶらひに、たひらのなのりつねとなんなのり侍りつる」二なのりに附く。なのりにてあり。著聞「此の殿に、御一家は皆陸の字をなのらせ」名

なのり-をき 難長 (名) たいな(大蘇)に同じ。

なは 縄 (名) 一主として植物の纖維を綯ひ合はせて細長くしたるもの。物を結ぶなどするに用ふ。普通、細きを紐、太きを綱といふ。麻縄・棕櫚縄など種種あり。神代紀「繩出之縄」二釣糸・釣縄・馬綱・馬手。萬「馬じもの縄ばりとりつけ」和名「縄」一名、索音宣」三大道物の馬場の縄圍ひ。小縄の外にあるもの。うちはうじ。いぬおふもの(犬追物)を見よ。四しばりなは。とりなは。狂言「なはをかかりぬるよな」博多小女郎波枕「一時常に召し捕らるるか、蹈み付けて縄かけうか」国なはいれ(縄入)に同じ。又、それに用ふる縄。「縄を入る」「縄を打つ」

なは たぐ 縄をたぐる。古今雜上「思ひきやひなの別れに衰へて、濃のなはたぎいさりせんとは」續拾遺雜三「世とともにあまのなはたぐいさり舟、うきておもひの焦がれてぞふる」

なは のざい 縄際 縄をかけられたる分際。縄目にあへる身分。狂言「汝なはのざいに至って、けなげだてはいらざる事よ」

なは のとぼそ 縄扉 縄にて出來たる戸。下民の住居にいふ。新葉集「玉の臺・金の殿より、瓦の窟・縄の戸ぼそその内に至るまで」

なは を うつ 打縄 一縄を延べ打つ。縄ばりをなす。二縄いれをなす。測量す。丈量す。三縄をかけて縛る。

なは を むすぶ 結縄 結縄(ケッジョウ)の政を結び。白河殿七百首「昔人いかなる縄を結びおきて、今に其の世の事を知るらん」夫木「木をきざみなはを結びし古も、世を憂きものと人やいひけん」

なは 縄 (名) 【植】きのこ(蕈)を云ふ。中國・九州の方言。物類呼稱

なは-あぶみ 那波鐙 (名) 木鐙の一種。下野國那波にて作れるものか。古今著聞「尺素往来「伴野鞍・那波鐙」」御庭訓往來「馬中鞍那波鐙懸」之」

なは-あぶみ 縄鐙 (名) 縄を輪狀にして鞍の兩脇に垂れ、鐙の如く乘る人の足蹈としたるもの。北条記「衣笠」

なは-あみ 縄網 (名) 縄にて結ぶきたる網。日本武尊「吾妻鑑「蘆莫」にて絢うたる縄網、輿にはらりと打ち掛け」聖德太子傳記「「窄輿に縄網かけさするからは、誇るに及ばず」

なは-いれ 縄入 (名) けんち(檢地)に同じ。田園類說「檢地」「地方答問書に云ふ、檢地入れ候を縄入れ候とも、竿入れ候とも申し候」

なは-うち 縄打 (名) 縄を打つこと。なはばり。築城記「平城は始めてこしらへ候時、先づ縄うちをする也」三河物語「「なは打ちを被」成両、城を取り給ふ」

なは-え 蘇 (名) 切机より生ひ出でたる芽。宇鏡「菪本矢報」「夫木「春南はいやぶりにけり、河邊なるゐぐひの柳なばえするまで」

なは-えい 縄纓 (名) 藁と布又は麻絹とを綯り合はせたる二筋の纓にて、一筋は黑、一筋は黃なるもの。天皇諒闇の時用ひ給ふ。西宮記「臨軒問「冠古以麻」」「切上結「縄纓「冠古以麻」」冠「縄纓之」」名目抄「縄纓ナイ」

(いえはな)

なは-おび 縄帶 (名) 縄を帶に代用すること。又、そのもの。二代男「油屋の手代めきて二十四五なる男、布地の柿染に縄帶をして」

なは-かくし 縄隱 (名) 【建築】土蔵の壁に卷き込みたる棕櫚縄を、漆喰などにて塗りかくすこと。

なは-からげ 縄紮 (名) 縄にてからぐること。又、そのからげたるもの。

なは-きり 縄切 (名) 手品の一。長き縄をたぐりて尺餘りは束ね持ち、刀をもて幾筋にか切り、その切り口と切り口とを結び合はせ、縄を向かうへ投ぐれば結び目は失せて原の長き縄となると見するもの。嬉遊笑覽「江戸鹿子「放下の品玉・縄切の曲を業とする者ども」

なは-ぐみ 縄組 (名) 箱などの隅の外方を狐形にして組み合はするもの。

(みぐはな)

なは-さいく 縄細工 (名) 縄にて服飾を細工すること。又、江戸時代、其れを著用して手の内を乞ひあるきたる物貰ひ。

(くいさはな)

なは-さは (名) 【動】いるか(海豚)の異名。和名抄「鯆魚佐波」大魚名也」

なは-しゃうじ 縄床子 (名) 縄を編みて造りたる床子。孝亮宿禰記「夏基平六年三月六日」「木工寮縄床子之事」

なは-しりがい 縄鞦 (名) 縄にて作れるしりかい。極めて粗末なるしりがい。宇津保蔭「なはしりがいはづれたる伊豫すだれをかけて」

なは-しろ 苗代 (名) 水に浸しおきたる穀(こ)の芽さしたるを蒔きて稻苗に仕立つること。又、その代の田。苗七八寸に成長するれば本田に移植す。なはしろだ。萬「奈波之呂」のこなぎが花をきぬにすり、なるるまにまにあぜかかなしけ」宇津保「俊蔭」「春は一二萬丁の田になはしろを蒔き、なへを植ゑても」

なはしろ-いちご 蒔田藨 (名) 【植】薔薇科。懸鉤子(ケイ)屬の落葉灌木。蔓狀にして四五尺の長さあり。葉は羽狀複葉にて、裏面は白色。夏季、枝端に淡紫色を帶びたる花を開く。果實は秋に至りて赤く熟し、食ふべし。我が國、各地の原野に自生す。あしくだし。うしいちご。さるいちご。はうらくいちご。みつばいちご。

なはしろ-がき 苗代垣 (名) 苗代田のほとりに、鳥の苗代をはまぬ爲めに結ひまはして置く垣。堀河百首「しづのをが苗代がきをあぜ置きて、今ぞたなゐに種おろすめる」夫木「しめはふる苗代がきのけしきにて、そへん田の面の程ぞ知らるる」

なはしろ-ぐみ 胡頽子 (名) 【植】胡頽子(ヒ)科、胡頽子屬の常綠灌木。幹の高さ一丈餘。葉は楕圓形、波狀緣を有し、褐色及び銀色の鱗毛密生し、質厚し。秋季、葉腋に帶白色の合瓣花を開く。果實は長楕圓形、紅色、翌年、春の末に至りて熟し食用に供す。我が國、各地の庭園に栽培せられて觀賞用とす。いそぐみ。くこみ。ぐみ。どゆみ。さつきぐみ。なつぐみ。はるぐみ。もろなり。夫木「を山田のなはしろぐみの春すぎて、我が身の色に出でにけるかな」

なはしろ-さぎ 苗代鷺 (名) 【動】あまさぎ(尼鷺)の異名。

なはしろ-さくら (名) 【植】やへざくら(八重櫻)の異名。

なはしろ-だ 苗代田 (名) 苗代を仕立つる田。なはしろ。

なはしろ-とき 苗代時 (名) 苗代を仕立つべき時。ひさご集「嗚道や苗代時の角大師」

なはしろ-どり 苗代鳥 (名) 【動】かもめ(鷗)の時に出づる鳥の義。【苗代時】をいふ、近江國の方言。

なはしろ-みづ 苗代水 (名) 苗代田に引く水。苗代にまかせたる水。萬「と出しは誰がとなるか、小山田の苗代水の中よどにして」後撰「小山田の苗代みづはたえぬとも、心の池のいひはなたじ」

なはしろ-をだ 苗代小田 (名) なはしろだ(苗代田)に同じ。松風村雨東帶鑑「うぐるぐっとも鳴たるは、苗代小田の蛙獨樂」

なは-すだれ 縄簾 (名) 縄を弧筋も垂れて簾の代用となすもの。なはのれん。二代男「門に縄簾を懸けて」松風村雨東帶鑑「千筋・百筋、縄すだれの裳裾に纏ふ如くにて」

なは-すぢ 縄筋 (名) 縄の筋。縄を延へたるすぢ。なは。室町千疊敷「「筋木の附けより、東西に引く縄筋の歪みなき代代の捉て」

なは-せみ 蛇蟬 (名) 【動】蟬類の雌の稱。雌は決して鳴くことなし。和名抄「雌蟬合波世美雌蟬不能鳴者也」蜻蛉日記「「なはせみ來にけるは、蟲だに時せちを知りたるよ」蟬記上

なは-た 菜畑 (名) 次條に同じ。野「春近く樗つみかゆる菜畑かな」

なはたけ 菜畑 (名) 菜を植ゑたる畑地。芭蕉句集「菜畑に花見顔なる雀かな」

なは-だすき 縄襷 (名) 縄をたすきとするもの。曾我虎磨「在所娘の縄襷」

なは-たづな 縄手綱 (名) 縄を馬などの手綱とせるもの。最明寺殿百人上萬「疲れ馬に縄たづな」吉野都女楠「野飼の馬の縄手綱、ちぎれ具足もあらばこそ」

なはたらし (名) 古へ縄を使ひてなす手品の一。一人は盜賊に扮ち、一人はこれを縛めて歌舞伎をなし、歌舞伎終はれば、彼の縛めたる縄のおのづから解くるやうに見するもの。嬉遊笑覽「不可德物語」縄たらし、自業自縛の過去の惡因まぬかれ難し、朝より暮れに及び、高手・小手に度度いましめられ」崑山集「まとはるる難はくちなはたらしかな」

なは-つき 縄附 (名) 捕虜・罪人など、身に縛り縄の附きてあること。縄目にかかること。就縛せらるること。又、その者。國姓爺「「縄をかけて縛りおき、縄付にして通せば」丹波與作「此の御目出度い道中に、縄付などは見ぬもの」

なは-て 縄手 (名) 一なはのすぢ。手にて扱ふ縄。續後拾遺雜三「いかりおろすとぞ思ふ」二田の間の道。あぜみち。たんぼみち。和名「「畷音衛田間道也」」元可集「霧むすぶ小出のなはてのかりしほも、靡く穂なみの色に見えつつ」畷。

なはて-みち 縄手道 (名) 前條に同じ。續猿蓑「涼しさや駕籠を出でての縄手道」

なは-とび 縄飛 (名) 遊戯の一。縄の左右兩端を甲乙二人にて持ちてまはす中に、他の人がくぐり入りて、身に縄の當たらぬやうに飛ぶこと。又、强り渡したる縄を飛び越すこと。

なは-とぼし 縄通 (名) なはを插みて引きとぼすもの。

なは-とり 縄取 (名) 縄附の逃走に備ふるため、其の縄の端を持つこと、又、その人。太平記「十三北「縄取に引かへられて、中門へ出で給ふ」」曾我「十五「御前召問」」小平次なはとりにて參りけるを」

なは-なひ 縄綯 (名) なはをなふこと。又、其れに用ふる車。

なは-なみ 縄波 (名) 縄が波の如くうねること。又、縄打つ時起つ波。夫木「「芳野川河瀨をくだす鵜飼舟、打つなはなみのよりやくるらん」」

なは-ぬけ 縄脫 (名) 縄附が其の縄をぬけはづして逃走すること。

なは-のられん 縄暖簾 (名) なはのれん(縄暖簾)に同じ。雅趣閑狂集「蘇のはな茶屋の軒ばにかかりけり、縄暖簾のどとく土がま」

なは-のび 縄延 (名) 一延びたる縄の長さ。引き延ばしたる縄の長さ。二實際の段別が縄入れの段別より多きこと。又、その高。

なは-のり 縄海苔 (名) 縄の如き長き海藻。宝鑑「萬「わたつみの沖つ奈波館里(ナハ)くる時と、いもが待つらむ月はへにつつ」同「夕なぎに來よる縄法(ナハ)」」

なはのり-の 縄海苔之 (枕) 縄海苔は弱くて、引けば切るるより、引けばたゆにかけ、又、同音の重なるより、名著告(ナハ)にかけていふ。萬「縄法之(ナハノ)」引けば絶ゆとや」同「わたつみの沖に生ひたる縄

乗乃(なはの)と名はかつてのらじ、懲ひは死ぬとも」

なは-のれん　縄暖簾（名）㊀數多の縄を結び垂れて造れるのれん。多く、米屋・居酒屋・車屋等にて用ふ。㊁居酒屋又は飯屋などの一稱。多くは縄暖簾を下ぐるよりいふ。「縄暖簾で一杯」

（諺）**縄暖簾にもたれるやう**　頼りにならぬこと、又、手答へなきことにいふ。暖簾と腕おし。

なは-はし　縄橋（名）縄を編みて互せる橋。

なは-はしご　縄梯子（名）二條の縄に、横に木又は鎌の柄を段段に渡したるもの。一端に鉤あり、物にかけて梯子の用に供す。

なは-ばり　縄張（名）㊀縄を張りわたすこと。又、そのわたしたる處。浦島年代記「假（縄張一重でも、隔てを越え」㊁建築・建築せんとする敷地に、建設物の位置を定むるため、配置の圖面によりて縄を張ること。さしづ。甲陽軍鑑「我れ等城を取りしく縄ばりは、委しく相傳申し候」太閤記「淀の城へひきいりて、普請のなはばりなどし侍りけり」㊂戯客を入るる座席を區劃すること。桟敷をわること。㊃博徒の縄分などの勢力範圍。

なは-ばり-うち　縄張内（名）㊀縄張をなしたる境界より内部の方。㊁其の人の勢力範圍。

なは-ばり-ちゃうにん　縄張町人（名）江戸時代、草分(くさわけ)の町人を云ふ。京阪の方言。

なは-ぶぎょう　縄奉行（名）檢地の役の一。檢案行の下にありて、專ら檢地の事を執り行ふもの。勅勘農固本錄「縄奉行は地方功者にて魂氣强く、算勘有る人吉し」

なは-ぶし　縄節（名）縄の、節をなせるところ。縄の結び目。狂言「鋸を用意致した。まづ縄ぶしを切らう」持統天皇歌軍法「口に縄節捻ぢこんで、猿轡かけたるは」

なは-ぶね　縄舟（名）漁獵の時、網の浮子縄(なはぶね)を積む小舟。摂津國兵庫邊にてはなうはへといふ。

なは-まき　縄卷（名）木材に漆喰を塗る時、其の制馭を豫防するために縄を卷くこと。

なは-むしろ　縄筵（名）縄にてつくりたるむしろ。枕(まくら)草子「なはむしろ」

なはめ　縄目（名）㊀縄の結び目。縄にて結びたるところ。二代男「足に金行燈括りつけられ、しかも結びし縄目に封まで附けられ」平家女護島「縄目血走る弱かひなし」㊁縄目の辱ぢにあふこと。縛らるること。縲絏。就縛。盛衰記「高手・小手に縛められて恥ぢをさらしたりける事を思ひ出でて、縄目にそへて申したりけるにこそ」吉野邪女楠「かかる縄目にあふことも、夫の武運の拙き故」㊂なはめがは縄目革の略。「縄目の鎧」

なはめ-の-はぢ　縄目辱　縄をかけらるる恥辱。縄附となる憂き身。捕縛せらるる不面目。狂言「一門九十三騎、平太縄目の辱ぢをすすがんと」

なはめ-がは　縄目革（名）染革の一。筋文の針にあるもの。

（はがめはな）

なはめ-の-いろかは　縄目色革（名）ふしなはめのかは（伏縄目革）に同じ。盛衰記「縄目の色革とそ多く候へ」

なは-もち　縄持（名）なはとり（縄取）に同じ。

なは-やか（副）古語。そびやか（聳）に同じ。字鏡「夠（縄長）也」（曾見也加）

なはやけし（形ク）古語。なはやかなり。字鏡「僅（長）也、夠（縄長）也」（曾見也加）

なは-らん（名）【植】いはひも（仙人條）の異名。

なばり　隠（名）古語。なばること。かくること。かくれ。天武紀「隱(なばり)郡」萬「宵にあひて朝おもなみ隱(なばり)にか、け長きいもがいはりせりけむ」

なばる　隠（自動ラ）古語。かくる（隱）に同じ。なまる。

なばる　訛（自動ラ）古語。なまる（訛）に同じ。允恭紀「訛(なばり)て談傍山」（訓「宇泥咩」）

なばね（名）なばえ（蘗）の誤り。松屋筆記　名義抄「蘖(なばね)」

なは-を　縄緒（名）縄にて製りたる履物の鼻緒。盛衰記「（緒）已下、縄紘(をの)の足駄はきて通ひ給ひしかば」

なはん　名判（名）名と判と。姓名と判形と。狂言「手がた中身どもが名はんの所を、引きさかっしやれて下されー」

なび　鍐火（名）おにやらひ（追儺）に同じ。雅語。一説、さぎちやう（左義長）に同じ。靖鈴日記「しはすも過ぎにけり中十五日なびあり。大夫の鍐色のをのこども、なびすとて裳ぐを開けば」

なびあ-たいすう　（——對數）（名）【數】e と稱する不盡數を底數とする對數。e=2.718 28……。

なびかく　絢掛（他動カ下二）絢ふことをしさす。絢ひ終ずにあり。

なびかく　廉（自動）なびく（靡）の延。萬「ひむかひにゆき廉闕(なびか)をありと聞きて」

なび-かけ　絢掛（名）なびかくること。なびかけたるもの。大鑑「狂言太刀」「縄中これに絢ひかけが御座る、之を絢うて掛けませう」

なび-かける　絢掛（他動カ下一）なびかく（絢掛）の口語。

なびかし　廉（名）なびかすこと。なびかすもの。新可笑記「門は印の杉のなびかし、值かなる酒商賈をせしに」

なびかす　廉（他動サ）㊀なびくやうにすること。なびかしむ。萬「たかしきの玉も奈綉可之(なびかし)酒きでなむ、君がみ舟をいつとか待たむ」宇津保物語「蔵の冬のとぐらや、春たてば風になびかす柳なるらん」㊁つき從はしむ。源氏「時のいうそくにて、天の下をなびかし給へるさまとなれば」同上「さりぬべくきこえなびかして」

なびかひ　廉（自動）なびくの活用なびきの延。古鑑「一說、なびきあひの約。萬「玉もなす、か寄りかく寄り廉和(なびか)しつまのみことの」同「川もの如く廉相(なびか)し、よろしき君が」

なびき　廉（名）㊀なびくこと。なびきたること。萬「捧げたる旗の廉(なびき)は、冬どもり春さりくれば、ぬ毎につきてある火の、風のむた廉ける如く」㊁旗の一種。指物の名。二本廉・三本廉・五本廉等あり。尾花(をばな)。

（にきびな）

なびき-あぶ　廉合（自動ハ四）互ひになびく。なびきて寄りあふ。萬「あすか川せゼに玉もは生ひたれど、しがらみあれば靡不相(なびかあは)」

なびき-えつる　廉桂（名）指物の名。

（るつえきびな）

なびき-がほ　廉顔（名）なびく如き顔つき。なびきげなるやうす。從ふやうなるやうす。源氏「さるべきついであらば、人の御ことになびきがほにてゆるしてんとおぼす」

なびき-く　廉來（自動カ変）なびききたる。從ひ來。源氏「とかくになびきて、なよびゆき」新千載「いづ方に又秋風のかはるらん、なびきそめにし小野の篠原」新六帖「風寒み雪は散りつつしかすがに、なびきそめたる青柳の絲」

なびき-げ　廉氣（名、副）なびくやうなるけはひ。從ひさうなるやうす。

なびき-ごころ　廉心（名）なびかんとする心。なびき從はんとする心地。五人女「口上手にていひ續けければ、おせんも自然となびき心になりて」

なびき-さま　廉狀（名）なびくさま。なびかんとするさま。「花の袂も、木草のなびきざまも」

なびき-そむ　廉初（自動マ下二）靡くことをなしはじむ。千載「いづ方に又秋風のかはるらん、なびきそめにし小野の篠原」新六帖「風寒み雪は散りつつしかすがに、なびきそめたる青柳の絲」

なびき-ぬ　廉寢（自動ナ三）なびきてふす。したがひて共に寢(ね)ぬ。なびきふす。萬「玉もなす靡寒(なびき)し見を」同「白たへの袖さしかへて靡寒(なびき)し」

なびく　廉（他動カ下二）㊀なびかしむ。なびかす。仙傳抄「一、なげしの花の事。なげしの如く、そば〳〵花をなびけて、むかひへさのみさし出で可からず」㊁我が意に從はしむ。思ひを寄せしむ。一代女「忍び忍びに且那をなびけて」五人女「文にして歎き、茂右衛門を引きなびけてはまらせんと、かつがつかきくどきて遣されけるほどに」

なびける　廉（他動カ下一）前條の口語。

なびと　汝人（代）なんぢ（汝）に同じ。允恭紀「汝(なびと)著也」（訓「儺比陛(なびと)耶倭廉珥」）

なび-まず　絢交（他動サ）まぜて絢ふ。さまざまの物を絢ひて、一つにまず。懸八封柱曆「まを積み溜めてなひまぜて、今日は我が身の縫り縄」

なび-まぜ　絢交（名）㊀なひまずること。なひまぜたるもの。一代男「菅笠にもみ裏附けて、なひまぜの紐を附け」浦島年代記「赤と黒絲なひ交ぜの太綱よったる如くなり」㊁演劇にて用ふる一種の鉢卷。丸括けの柿を縄の如くに絢ひたるもの。結びたる兩端は角の如くに突起せしむ。勇者の奮闘の時に用ふ。㊂在來の數種の脚色を纏めて、一つの脚本に脚色すること。

なび-まぜる　絢交（他動カ下一）なひまず（絢交）の口語。

なび-やか（副）しなやか。なよよか。やはらか。なびらか。名義抄「鮎(なびか)相(なびか)」事なければなびやかなれば、勝ちとは申すべけれども」散木集「其の國は觸れけん鳥もはねやすみ、草のはがひも末なびやかに」

なびやかし（形シク）なびやかなり。なびらけし。草根集「いそぐらん心もさぞな、あれわたる春の田づらの雁のとよを。なびやかしくきこえ鉄」

なびらか（副）なびやかに同じ。砂石集「若き女房の、みめ・かたちなびらかなりければ」

なびらけし（形シク）なびらかなり。なびやかし。字鏡「妍（容貌良）」

なびら（他動カ下二）駒なびらかす。古今春下「駒なびらかん、故郷は雪とのみこそ花は散るらめ」

なびらう　名披露（名）次條に同じ。

なびろめ　名廣（名）商人・藝人などが、其の名を世に初めて披露すること。なびろう。小町踊「名廣めは世に武藏野の秋の月」

なびろめ-くゐい　名弘會（名）名びろめをなす會。名びろめを催す會合。

なふ　一衲（名）なふえ（衲衣）に同じ。法中裝束抄「衲は綴り也、其又無二定樣一歟」佛眼統紀「平昔裝束、唯一艾衲」

なふ-の-けさ　衲裝裟　なふげさ（衲裝裟）に同じ。枕「なふのけさ」柴華抄「衲の裝裟は、もろとしより此の度の御堂の會にと心ざして、もて參れるものどもなれば」

なふ（自動ナ）ず（不）に同じ。古「東國の方言。萬「武藏ぬのをぐきがきぎし立ち別かれ、いにし宵よりせろにあは奈布(なふ)よ」同「たくぶすましら山風のね奈敵(なふ)ども、ころがおそきのあろこそえしも」同「あひづねの國をさ遠みあは奈波(なふ)ば、しぬびにせむと紐結ばさね」同「壺解けば解け奈敵(なふ)紐の、わがせなにあひ寄るとかも夜解けやまる」

なふ（自動ナ）手又は足に病ありて、運用自在ならず。和名「麥粥行不正也」

なふ　絢（他動カ）緩(なふ)りをかけて數多の線(なふ)を交じへ合はす。あざなふ。緩(なふ)る。名義抄「緯(なふ)」同「搓(なふ)」狂言「百ざしになはずとも、貫ざしになへ」

なふ　廉（他動カ）なびかす。なびかしむ。萬「しもとおし廉(なふ)市柳しのをおし雪に、宿借る今日しかなしくおもほゆ」

なふ　並（他動カ）なら（並）靡に同じ。なむ。古今春下「駒なびていざ見にゆかん、故郷は雪とのみこそ花は散るらめ」

後撰集「宿もせに植ゑなべつつぞ我れは見る、招くをばなに人や止まると」

なふえ 〔納衣　衲衣〕（名）佛語。世人の棄てて顧みざる布帛を縫ひ集めてつくれる法衣。衲袈裟。又、それを著る比丘の輩。衲子。衲僧。朗詠「衲衣僧代、綺羅人」謠曲「綺羅の御姿を引きかへて、衲衣を御身に寒り」大乘義章「言ニ納衣者、朽故破弊、縫納供身」傳燈錄「問、如何是衲衣下事」

なふかく 〔納額〕（名）納むべきたか。納入する額。市制第十條第三項「直接市稅の納額」

なふかく-とくわしょ 〔納額告知書〕（名）租稅其の他の公課を納むる義務ある者に、納額を告げ知らせて其の義務の履行を命ずる書面。會計規則第一條第三號「隨時の收入にして納額告知書を發するものは納額告知書を發したる日の屬する年度」

なふき 〔納期〕（名）次條に同じ。會計規則第一條第一號「納期の一定したる收入は其納期末日の屬する年度」

なふ-きげん 〔納期限〕（名）租稅などを納むべき期限。納期。國稅徵收法第三條「國稅の納期限」

なふ-きじつ 〔納期日〕（名）租稅などを納むべき期日。國稅徵收法第三條「納金額納期日及納付場所」

なふ-きょう 〔納經〕佛語。現世の安穩、來世の冥福を祈り、又は死者の追善などのため、經卷を寺社に奉納すること。眞俗佛事編「六十六部の納經の人、今世俗だ盛ん也」

なふきん （名）なふぎん・に同じ。

なふきん 〔納金〕金錢ををさむること。又、をさめたる金錢。宮內省官吏准官吏遺族扶助例第一「第三條の納金を爲すを要せざる者の遺族」

なふ-きん 〔納銀〕前條に同じ。

なふきん （英 Napkin）（名）食事の時用ふる拭巾。

なふきん-がく 〔納金額〕（名）納金のたか。納入する金額。國稅徵收法第六條「其の納金額納期日」

なふ-くわい 〔納會〕（名）㊀一年の最終に催す會合。をさめのくわい。主に遊藝などの師匠の催すにいふ。㊁取引所の語。月の最終の立會ひ。

なふ-くわん 〔納完〕くわんなふ（完納）に同じ。刑法施行法第十五條第三項「罰金又は科料を納完せざる爲め」

なふ-くわん 〔納棺〕死人などを棺にいるること。

なふ-げさ 〔衲袈裟〕（名）佛語。諸種の布帛を雜へて縫ひ、裏を附けて厚く製したる袈裟。もと人の廢物とせし布帛を補綴せしに起こる。高標の比丘の法衣。遠山の袈裟。衲の袈裟。法體裝束抄「一、衲袈裟事。甲も綴も色色不同、又、綾織物文等、不同也」

なふ-げん 〔納言〕諫めを納るること。書經「龍、朕堲讒說殄行震驚朕師」命汝作納言、夙夜出納朕命、惟允」

なふ-こつ 〔納骨〕佛語。骨を墓所又は棺などにをさむること。忍冬雜記「納骨作法」

なふこつ-だう 〔納骨堂〕（名）白骨ををさむる堂。羅山文集「骨殺後、深奥之處、有ニ納骨堂ニ」

なふ-ごん 〔納言〕（名）㊀太政官の次官。大納言・中納言・少納言の總稱。ものまうすつかさ。令義解「官員、太政官中置ニ大納言。從二位。中納言。從三位。少納言。正五位下」「問、如何是納言、大臣ニ成リテ」㊁明治四年七月二十九日太政官に置かれ、職掌太政大臣に亞ぎ、太政大臣闕席のとき其の事務を代理するを得る勅任官。同年八月十日廢せられたり。明治四年七月二十九日太政官職制「納言、相當從二位」同「納言、職掌大臣に亞ぐ大臣闕席のときは其事を代理するを得る」

なふさ （英 Naphtha）（名）【化】石油・こーるたーる等の分溜によりて得らるる無色透明の揮發油の總稱。

なふ-さい 〔納采〕ゆひ・なふを取りかはすこと。禮記「昏禮、納采・問名」漢書「爲ニ皇帝ニ納ニ采安漢公ニ奔女ニ」

なふ-さつ 〔納札〕千社札（せんじゃふだ）を社寺に納め貼ること。又、そのふだ。千箇寺參りの札。をさめふだ。

なふさ-なふさ 〔隨分〕（副）〔伊勢物語の歌の、おふなおふなる云云を眞名本に隨分云云と記せるを誤り調みたるによる〕おふなおふなの誤り。千五百番歌合「あはれなるなふさなふさの思ひかな、なほさりながら人に知れつつ」

なふさ-の-うま （名）黃に白を混じたる毛色の馬。和字鏡「騂 馬黑味也、種黃也、白色也、中黑、赤夫佐乃馬」伊呂波字類「騂 馬ナフサノウマ」

なふさりん （英 Naphthalene）（名）【化】なふたれん・に同じ。

なふ-し 〔衲子〕（名）なふす（衲子）に同じ。

なふ-しゅ 〔衲衆〕（名）佛語。法會の參衆の一。衲袈裟を著する僧衆。榮華物語「衲衆は、衲の袈裟は、もろこしより此の度の御堂の會にと心ざしてもて參れるものどもなれば」

なふ-じゅ 〔納受〕受納すること。受けつくること。聞き入るること。拒絕せざること。平家「憂鬼、千手の廿八部衆の其の一にて御座しませば、もつて御納受こそ祈願敬けれ」盛衰記「此の社に參りて、千夜通夜して新り申す旨ありき、其の御納受にや」漢書「上初納ニ受章言」一字、燒亡」

なふ-しょ 〔納所〕（名）衣服・調度等を入れ置く倉庫。東鑑「安貞元年二月八日、武州納所

なふしょ-たか 〔納所高〕（名）遠江國榛原郡などにて檢地の石高の稱。田園類記「或雲書云、遠州榛原郡永高之事、元來之檢地之高を納所高と申し候う而、年貢は納所高に而納め申し候」地方凡例錄「一、遠州榛原・豐田・周智の三郡、三州八名郡邊は檢地石高は納所高と呼び、年貢は納所高にて納む」

なふ-す 〔衲子〕（名）佛語。ただ一著の納衣を著て遊行する僧。主として禪家にいふ語。衲僧。なふし。

なふ-ぜい 〔納稅〕租稅ををさむること。又はをさむべき租稅。納租。大日本帝國憲法第二十條「納稅の義務」載蘇詩「寶ヶ牛納ニ稅坼ニ屋炊ニ慮淺不ニ及ニ明年饋ニ」

なふぜい-かいさぶ-せんきょ 〔納稅階級選擧〕（獨 Steuerklassenwahl）（名）【法】普通選擧の一。納稅額の多少により選擧人を數階級に分かち、各階級の選擧人をして同數の人を選出せしむるもの。

なふぜい-がく 〔納稅額〕（名）納稅の金額。稅額。衆議院議員選擧法第十八條第四項「納稅額及納稅地」

なふぜい-き 〔納稅期〕（名）租稅を納むべき期限。

なふぜい-きげん 〔納稅期限〕（名）前條に同じ。

なふぜい-さむ 〔納稅義務〕（名）租稅を納むべき義務。國稅徵收法第四條「納稅義務の確定したる國稅」

なふぜい-さむ-しゃ 〔納稅義務者〕（名）納稅義務を負ふもの。所得稅法第十一條「納稅義務者又は納稅義務ありと認むる者の所得金額」

なふぜい-ぐわんしょ 〔納稅願書〕（名）貨物の通關を請ふために稅關に差出だす願書。稅關はこの願書に記載せる貨物を檢査し、有稅品に向かひてはこれにより關稅を納めしむるものとす。

なふぜい-くわんりにん 〔納稅管理人〕（名）納稅義務者にして他出其の他の事故のために、納稅地にありて自ら納稅義務を履行し得ざるとき、其の代理として納稅の事務を處理するもの。地租條例施行規則第十一條第六條「納稅義務者其の土地所在の市區町村內に住所又は居所を有せざるときは地租に關する事務を處理せしむる爲其の市區町村內に住居を有する者を納稅管理人と定め其の市町區村長又は戶長に屬出つべし」

なふぜい-こくわしょ 〔納稅告知書〕（名）收稅官吏、又は收稅官吏の通知を受けたる市町村が、納金額・納期日及び納付場所を記載して、納稅人に其の稅金の納付を命ずる文書。國稅徵收法施行規則第一條第一項「其の納金額納期日及納付場所を記載したる納稅告知書」

なふぜい-しかく 〔納稅資格〕（名）納稅額を一の要件とする資格。貴族院多額納稅者議員互選規則第三條「前財產主の納稅額を以て其の納額資格に算入す」

なふぜい-しゃ 〔納稅者〕（名）租稅を納むるもの。納稅人。所得稅法第三條第三項「納稅者納稅管理人を定めずして帝國外に住所若は居所を移すとき」

なふぜい-ち 〔納稅地〕（名）稅金を納むべき官公署の所在地。衆議院議員選擧法第十八條第四項「選擧人の氏名中華納稅額及納稅地等」

なふぜい-にん 〔納稅人〕（名）なふぜいしゃ（納稅者）に同じ。國稅徵收法第三條「納稅人の財產上に質權又は抵當權を有する者」

なふぜい-ほしょう 〔納稅保證〕（名）納稅義務者が其の義務履行の擔保として政府に提供する物上保證。酒造稅法第十一條「酒類を製造する者は納稅保證として一酒造年度見込造石數一石に付金四圓の割合を以て算出したる金額に相當する保證物を豫め提供すべし」

なふぜい-ほしょうにん 〔納稅保證人〕（名）納稅義務者のため、其の納稅義務の履行を政府に保證する人。酒造稅法施行規則第三十一條第六條「納稅保證人は稅務署長に於て納稅保證に堪ふる資力ありと認むる者に限る」

なふぜい-ほしょうぶつ 〔納稅保證物〕（名）納稅保證として、納稅義務者が政府に提供する擔保品。酒造稅法第七條「納稅保證物の免除を得すして保證物の提供を爲ささるとき」

なふ-せん 〔納錢〕なふきん（納金）に同じ。嬉川親元記「寶德元年二月十五日、依ニ折紙方遲遲、先以ニ納錢ニ可ニ渡遣之由、被ニ仰聞」

なふせん-いちりゅう 〔納錢一衆〕（名）納稅者議員互選規則第三條「前財產主の納稅額を以て其の納額資格に算入す」

なふぜい-しゃ 〔納稅者〕（名）租稅を納むるもの。納稅人。所得稅法第三條第三項「納稅者納稅管理人を定めずして帝國外に住所若は居所を移すとき」

なふ-ぢ 〔納地〕土地を上納すること。

なふ-ち 〔納地〕土地を上納すること。

條に同じ。

なふぜい-さむ 〔納稅義務〕（名）租稅を納むべき義務。國稅徵收法第四條「納稅義務の確定したる國稅」

なふぜいさむ-しゃ 〔納稅義務者〕（名）納稅義務を負ふもの。所得稅法第十一條「納稅義務者又は納稅義務ありと認むる者の所得金額」

なふぜい-ぐわんしょ 〔納稅願書〕（名）貨物の通關を請ふために稅關に差出だす願書。稅關はこの願書に記載せる貨物を檢査し、有稅品に向かひてはこれにより關稅を納めしむるものとす。

なふぜい-くわんりにん 〔納稅管理人〕（名）納稅義務者にして他出其の他の事故のために、納稅地にありて自ら納稅義務を履行し得ざるとき、其の代理として納稅の事務を處理するもの。地租條例施行規則第十一條第六條「納稅義務者其の土地所在の市區町村內に住所又は居所を有せざるときは地租に關する事務を處理せしむる爲其の市區町村內に住居を有する者を納稅管理人と定め其の市町區村長又は戶長に屬出つべし」

なふぜい-こくわしょ 〔納稅告知書〕（名）收稅官吏、又は收稅官吏の通知を受けたる市町村が、納金額・納期日及び納付場所を記載して、納稅人に其の稅金の納付を命ずる文書。國稅徵收法施行規則第一條第一項「其の納金額納期日及納付場所を記載したる納稅告知書」

なふぜい-しかく 〔納稅資格〕（名）納稅額を一の要件とする資格。貴族院多額納稅者議員互選規則第三條「前財產主の納稅額を以て其の納額資格に算入す」

なふぜい-しゃ 〔納稅者〕（名）租稅を納むるもの。納稅人。所得稅法第三條第三項「納稅者納稅管理人を定めずして帝國外に住所若は居所を移すとき」

なふ-ぢ 〔納地〕土地を上納すること。

なふ-ち 〔納地〕土地を上納すること。

なふたりん （獨 Naphthalin）（名）【化】なふさりん・に同じ。

なふたれん （英 Naphthalene）（名）【化】$C_{10}H_8$ なる組成の炭化水素。無色板狀の結晶をなし、七九度にて熔融し、二一八度にて沸騰す。揮發性にして强き臭氣を有し、點火すれば油烟の多き光强き焰を放ちて燃ゆ。殺菌力强きを以て防腐劑となせども、多くは色素の原料として用ひらる。こーるたーる・の分溜によりて得らるる中油の中より多量に採取せらる。

なふ-ぢ 〔納地〕土地を上納すること。又、その土地。史記「悉納ニ其地ニ」

なふ-ぢ 〔納地〕土地を收納すること。又、その土地。史記「悉納ニ其地ニ」

なふどーる （名）【植】なつづゐせん（月下香）の異名。

なふどーる （英 Naphthol）（名）【化】なふたれん・の水素原子一つを水酸基にて置換したるもの。光輝ある板狀の結晶をなし、水に溶け難きもあるこーる・に溶解す。石炭酸に類せる臭を有し、染色術に多く使用せらる。

なふ-とく 〔納得〕なっとく（納得）に同じ。律宗綱要「納得戒體、要由ニ羯磨ニ」

なふ-にふ 〔納入〕をさめいること。受納・收入すること。上納してうけ入れしむること。

なふ-にん 〔納人〕（名）租稅などを納むる人。納付人。會計規則第五條第三項「收入官吏租稅其他の收入金を領收するときは其領收證を納人に交付し」

なふ-はい 〔納盃〕酒盛りの納めの盃。酒宴の終結の時、受け又はさす盃。韓じて、酒宴のをはり。をさめのさかづき。

なふ-ふ 〔納布〕（名）運上として納入する布。東鑑「寶治元年十二月廿日、運上中華納布九反內中七反」

なふ-ふ 〔納付〕官公署にをさめいること。郵便規則第九條「料金納付の日より六十日」

なふ-ふ-ぎむ 〔納付義務〕（名）納付する義務。臺灣租稅滯納處分規則第三條「滯納者の納付義務は此規則處分の結了を以て終る」

なふ-ふ-にん 〔納付人〕（名）納付する人。納人。郵便規則第八條「其の納付人の請求」

なふ-へい 〔納幣〕㊀幣帛を奉納する

たいかい【大会】（名）多くの人が集まる会。「―を開く」

たいかく【大学】（名）高等教育を行う学校。「―に入る」

たいがく【大学】（名）大学で学ぶこと。「―を卒業する」

たいがくせい【大学生】（名）大学に学ぶ学生。

たいがくりょく【大学力】（名）大学で学ぶ力。

たいかん【大官】（名）高い地位の官吏。

たいかん【大観】（名）大きな眺め。「―する」

たいかん【大寒】（名）二十四節気の一。一年中で最も寒い時。

たいかん【大官】（名）高い地位の官吏。

たいかん【大観】（名）大きな眺め。「―する」

たいかん【大寒】（名）二十四節気の一。一年中で最も寒い時。

たいき【大気】（名）地球を包む空気。「―汚染」

たいき【大きい】（形）大きい。「―人」

たいきょく【大局】（名）物事の全体。「―を見る」

たいきょく【大局】（名）物事の全体。「―を見る」

たいぎ【大義】（名）人の道。「―を重んじる」

たいぎ【大義】（名）人の道。「―を重んじる」

たいぎ【大義】（名）人の道。「―を重んじる

津保物語「これ造らんには、なべてのたくみは寄せじ」源氏「あひ見ずてしのぶるころの涙をも、なべての秋のしぐれとや見る」

なべて ならず なべてにあらず。一とほりならず。なみなみならず。おしなべたらず。源氏「やんごとなき御思ひなべてならず」金葉「あやめ草我が身のうきに引きかへて、なべてならぬに生ひも出でなん」

なべてっくわ 【怪語】 (名) 飲食を調りて産を敗りなどすること。又、その人。なべどら。

なべどこ 苗床 (名) 苗を仕立つる地。苗代。

なべどら 鍋取 (名) なべてっくわに同じ。

なべどり (名) 一鉉なき鍋釜を取りはづしなどする時、両手に持ち、鍋釜の縁に當てて取るもの。藁にて、初めは扇形後には足半(ハキ)の形に編む。袋林、鳳蓋「鍋取飛んで焙烙豆踊る今宵の天」狂言「荷茶屋中居茶碗・茶筅・鍋取は前へかくる」二(形の似たるよりいふ)おいかけ(老鼠)の異名。又、これをつけたる冠をかぶるもの。太平記抄「老鼠とは下下の者の鍋取といふやうな物ぞ」油かす「公家と武家とは二あしらなり(の句なべ)とりを兜の脇に飾りつけ」

なべとりくげ 鍋取公家 (名) 老鼠(ネズミ)ある冠をかぶる公卿の侮稱。又、そを嘲りていふ語。又、汎く公卿を嘲る語。鶴、前條二を見よ。醒睡笑「昔からなべとり公家とあるほどに」松風村雨東帯鑑「鍋取公家の子は盗めど」

なべな 山芹菜 (名) 【植】山蘿蔔(ヤマダイコン)科、黄精葉飼吻屬の多年生草本。地上莖は高さ五六寸、柔軟なり。葉は對生、二回羽狀に分裂し、各裂片は卵形なり。春季、紫色の花を開き、頭狀に排列す。我が國、各地の山地に自生す。

なべのぞき 鍋覗 (名) 主婦などが臺所の事を下女に任せずして、世話をやき過ぐること。

なべはたけ 苗畠 (名) 苗を仕立つるはたけ。

なべむし (名) 【動】あをむし(青蟲)の異名。名義抄「蝿蛉(アヲムシ)」。

なべーぶた 鍋蓋 (名) 鍋に用ふるふた。鍋のふた。二代男「屋高に御臨走の珍魚はと申せば、鍋蓋を明けて悔やしき」炭俵冬「鍋ぶたのけばけばしさよ冬の暮れ」かざし「中宮物語 鍋呼」

なべぶたの のし 鍋蓋の字 の の字の稱。「秋つき」の字などの對。

(諺)鍋蓋と鼈 月と鼈に同じ。つき(月)の條を見よ。正章千句「鍋蓋に似て殘る有明の月すっぽんが秋の汀に浮きあがり」

(諺)鍋蓋に目鼻 圓く扁平なる顔の稱。

なべぶたなり 鍋蓋形 (名) 一定して變化なきさまをいふ語。おざなり。「鍋蓋なりのお世辭」

なべぶたやま 鍋蓋山 (名) 【山】は相撲取の名に擬していふ。常に仰向けに投げ倒さるる相撲取の稱。

なべーまく (他動) ならべて卷く。(諺解)一說、自動にて、ものをならべて其の方へ向く。(長恨歌)萬葉「かなしいもをゆづか奈倍麻伎(ナベマキ)、もころをのこととしいはばいや勝たましに」

なべーまつり 鍋祭 (名) つくまなべまつり(筑摩鍋祭)の略。

なべーや 鍋屋 (名) 鍋を鑄造し、又賣る人。又、その家。又、なべいかけ。醒睡笑「鍋屋の子」

なべーやき 鍋燒 (名) 一鳥肉・魚肉などに野菜などを交ぜ、鍋に入れたる儘よく煮ること。料理物語「なべやき、みそ汁にて鍋にて共ままに申し候也、たひ・ぼら・こち、何にても取りあはせ候」二次條の略。

なべやきーうどん 鍋燒饂飩 (名) 小さき土鍋にてうどんを煮たるもの。多くは、冬の夜、街上に賣りあるく。

なべーわり 黄精葉鉤吻 (名) 【植】百部(ビャクブ)科、黄精葉鉤吻屬の多年生草本。根莖を有し、之より莖を抽出して三四葉を著く。葉は平行脈葉、波狀に皺縮す。夏季、葉腋に一二花づつ、暗紫色の下生せる花を開く。我が國、各地の山地に自生す。果實は有毒なり。あさまにんじん。きちがひぐさ。さはなすび。どくうつぎ。

なほ 直 (名、副) 一なほきこと。なほきもの。すぐ。萬葉「とよ國のきくの濱邊のまなご地のゝ直(ナホ)にしあらば何か歎かむ」二いたづら。徒(ナホ)。よのつね。なみ。なべて。平凡。土佐日記「かうやうの物もてくる人人、なほしもえあらで、いささけきわざせさす物もなし」夢語「天の下の色どのみの歌にては、なほぞありける」拾遺雜賀「咲きし時なほこそ見しか桃の花、散れば惜しくぞ思ひなりける」

なほ あらじ 直不在 ただにてはあらじ。いたづらにはえ過ぐさじ。ただにあらんよりはと思ひて。徒(ナホ)にはあらじと思ふ餘り。當座の出來心より。なほざり。宇津保「神上「御もの隱しなほあらじの御言葉などは、きんなどの音よりもすぐれてこそおはすれ」落窪「少し打ちとけたるを見るままにいとをかしげなれば、なほあらじにて思ひやみなましかはと思ふ」源花宴「なほあらじに、弘徽殿の細殿に立ちより給へば」

なほ あり 直有 ただにてあり。ただあり。何もなさずしてあり。だまりてあり。徒(ナホ)にてあり。いたづらにあり。なべてなり。續紀「今勅御事法者常事(ナホ)(ナホ)物有(ナホ)思行之」同「默在(ナホ)牟止雖止止不得」蜻蛉日記「彼岸に入りぬれば、なほあるよりはしやうじせんとて」

なほ もあり 直有 なほあり(直有)に同じ。蜻蛉日記「なほもありしかば、かへりことどとしうもあらざりき」大和物語「男女中略年月限りなく思ひて住みわたりけるを、いかがしけん女を得てけり。なほもあらず、此の家にねてきて、壁を隔てて住みて」

なほ 猶 (副) 一もとの如く。やはり。それでも。まだ。いまだに。神代紀「雖已三歲、脚猶不立」萬葉「くれなゐはうつろふものぞ、つるばみの馴れにしきぬに奈保(ナホ)」同「旅衣八つ著重ねていぬれども奈保(ナホ)膚寒し、いもにしあらねば」二その上に又。いよいよ。ますます。更に。一層。なほさら。もっと。後撰秋中「女郎花匂へる秋の武藏野は、常よりもなほむつまじきかな」枕「哀れなる事の有りしかば、猶とり集めてあはれなり」源明石「猶これより深き山を求めてや、跡たえなまし」三あだかも。ちやうど。漢籍訓みにて、下に如しの語を加へていふ。神代紀「洲壤浮漂、譬猶(ナホ)游魚之浮水上也」

なほ あ 猶 一なほ(猶)に同じ。萬「かくばかり雨のふらくに、ほととぎす卯の花山に猶(ナホ)香(カ)鳴くらむ」二なほ(猶)に同じ。膳栗毛「これのとこの客衆さあ、あじやうしたらよかんべい

か、猶かお江戸の衆にやあ、氣が詰まってなりましない」

なほ かし 猶 前條に同じ。今宮心中「なほかし逢へば逢ふ現世さへ、未來は猶かし曇家なや」

なほ し 猶 なほ(猶)を強めていふ語。なほこそ。續紀「猶之(ナホ)法平興隆之事」萬「橘は花にも實にも見つれども、いや時じくに奈保(ナホ)之見がほし」

なほ しも 猶 前條に同じ。玉葉「一犀はなほしもつらし時鳥、聞かぬよりはと思ひなせども」貧根崎心中「現世の願ひを今此處で未來へ回向し、後の世も猶しも一つ蓮ぞや」

なほ ぜ かし なほかし(猶)に同じ。膝栗毛「脇へ聞って置きをりましたをなほぜかしかみ樣がずかましくいって」

なほ のこと 猶事 猶猶なること。猶一層。なほさら。「爲さるなといへば猶のことする」

なほ も 猶 やはりまあ。まだも。又も。猶その上に。大和物語「今はわれいづち行かまし、山にても世の憂きことはなほも絶えぬか」拾遺「あはれとも思はじものを、白雪の下に消えつつ猶もふるかな」

なほ もって 猶以 なほさらもって。なほなほ。狂言「いづれもの煉りせられては煉りそこなひがあらう、某が煉って進ぜう。それはなほもっての事ぢや」

なほ-あひ 直相 (名) なほらひ(直會)に同じ。建武年中行事「直あひの御飯・みきまゐりぬれば」

なほえ-ばん 直江板 (名) 慶長年間、直江山城守兼續が銅の活字を用ひて刊行したる本。經籍訪古志「此本慶長丁未歲、直江兼續用銅彫活字印行、世因稱直江板」

なほ-さら 猶更 (副) なほ又さらに。ひとしほ。其の上。いよいよ。なほなほ。

なほざり 等閑 (名、副) 深き注意を拂はず。まめやかならず。本氣ならず。かりそめ。おろそか。疎略。とうかん。宇津保「忠こそ「なほざりなる御心かな」落窪「といふ聲いとらうたければ、少將の君、なほざりに思ひしを、まめやかに思ひ給ふ」後撰「なほざりに秋の山べを越えくれば、織らぬ錦をきぬ人ぞなき」

なほざり おてら 等閑 なかばなほざりに。かりそめながら。名義抄「等閑(ナホザリ)」十訓「何斗りの事かはと等閑がてらにいひ出でたりつるを、かくげにげにしくはからひのたまはするに」

なほざり ならず 不等閑 なほざりにあらず。なほざりの心ならず。一とほりならず。續拾遺「別かれけん昔にあはぬ泪こそ、なほざりならず悲しかりけれ」新後拾遺「誠ぞと思ひ定めぬ夕暮の、なほざりならずなど待たるらん」

なほざり-ごと 等閑事 (名) なほざりなる事。なほざりになすわざ。眞實よりならぬものごと。すずろごと。源「國つ神そらにことわる中ならば、なほざりごとをまづやたださん」同「心とまりぬべきも、しひてなほざりごとにしなして」

なほざり-ごと 等閑言 (名) なほざりなる言語。なほざりの心にていふ言葉。眞實の能もらぬことば。すずろごと。源「なほざりごとなどの給ふわたりの、心がろうて膠もやすなるなどを」同「すきすきしきなほざりごとを打ち出で、あざればまんも」

なほざり-ごと 等閑事 (名) なほざりなる事。なほざりになすわざ。眞實よりならぬものごと。すずろごと。源「國つ神そらにことわる中ならば、なほざりごとをまづやたださん」同「心とまりぬべきも、しひてなほざりごとにしなして」

なほざる 等閑 (他動) 一なほざりにする。正しくなすこと。二つくろひなほすこと。改むること。又、そのもの。又、そのところ。しなほし。修繕。修復。修理。三せったなほし(雪踏直)の略。柳樽「寛下の藝者なほしの娘なり」四なほしざけ(直酒)の略。五なほしみりん(直味醂)の略。六昔時、江戸の遊里にて、登樓の客が一定の時間遊興の後、更に時間を延長して遊興すること。(物類呼稱)あづさ「梓巫」をいふ、中國の方言。

なほし 直衣 (名) 古へ主上を始め奉り、摂家・大臣等、貴き人人の通常服。其の製ほぼ袍に似て稍短く狹し。地質はじら綾にて、色は白、蘇の丸の模樣あり。裏は紫の平絹。老幼によりて濃淡異なり。夏は紗の類にて裏なく、三重襲(ハヘ)の模樣あり。下に單・下袴・指貫を著く。略服なれば、勅許を得ざるものは之を著けて參内する事を得ず、勅許を得たるを雜袍を聽ゆるといふ。宇津保「嵯峨「宮たち・おとどたちは、なほし奉れり」源「位なき人はとて、無文の御なほし」同「浮舟「ゑぼしなほしの奏、いとあらまほしく清げにて」欄干

なほし そくたい 直衣東帯 東帯して、袍の代りに直衣を著くること。江次第「地下者直衣布袴(或直衣)」左經記「長元四年八月三日、兒童著座(直衣束帯)、不起(袍)」

なほしの おんぞ 直衣御衣 なほし(直衣)に同じ。宇津保「吹上「今日の御よそひは、昔なほしの御ぞども」同「民部卿中將「調ぜられたる服、なほしの御ぞども奉り給ひて」

なほしの くらゐ 直衣位 特に直衣にて參内するを聽されたるもの。宇津保「嵯峨「心に入れて殘す手なくつかうまつらせたらば、なほしの位たまはせんとのたまふ」

なほしの ころも 直衣衣 なほし(直衣)に同じ。和名「欄衫(俱曾須加乃古路毛)」

なほしの ほうこ 直衣布袴 直衣に下襲・指貫を著て、鉾を帶び笏を把ること。古事談「直衣布袴と云ふ事をとり、如然裝束は其の事に不遇之時はせでも有る也」江次第「地下者直衣布袴」

なほし を ゆる 聽直衣 正式の朝服ならざる直衣を著て參内することを、特に勅許あらせらる。東鑑「十一(建久元年)月九日付民部卿(藤原)可聽直衣之由、奏之給、即勅許」禁祕抄「聽直衣事」

なほし 直 (形) 一まがらず。ゆがみなし。まっすぐなり。枕「いとなほき木をなん、おし折りためる」十訓「麻の中の蓬は、ためざるにおのづから直し」平「ふらされたり。枕「あらばたけなどいふものの、土もうるはしうなほからぬに」三よのつねなり。なべてなり。かたはならず。すなほなり。なみなり。源「目も鼻もなほなしとおぼゆるは、心のなしにやあらん」四よこしまならず。ただし。公明なり。正直なり。うしろぐらからず。續紀「明文淨文直(ナホキ)誠之心以而」源「世の靜かならぬことは、必ずまつりごとのなほく・ゆがめるにもより侍らず」

(諺)直き木に曲がれる枝 物は一概に律すべからざる譬へ。後撰「なほき木

にまがれる枝もあるものを、宅を吹き疾をいふがわりなさ」

なほし-がみ 直紙 (名) 美濃紙の一種。大直し・中直し・小直し等の種類あり。

なほし-さらそく 直衣装束 (名) 直衣を著用したること。又、其の装束。字津保平「いでたちて、狩衣きうぞくをして、なほしさうぞくは持たせて」同上「大將中將これは恥づかしき人ぞやとて、なほしさうぞくにて出で給ふ」

なほし-さかな 直肴 (名) 昔時、江戸の鯉里にて、直(ナホ)る六の時、肴を倍にして再び出だすこと。又、その肴。

なほし-さけ 直酒 (名) 劣等なるか又は腐敗したる酒などに加工して、普通のものと同等の香味を有たしめたるもの。なほし。

なほし-すがた 直衣姿 (名) 直衣を著用したる姿。字津保平「右大將、夕つ方なほしすがたにてまうで給へり」枕「はなやかに清げなるきんだちのなほしすがた」

なほし-たつ 直立 (他動ナ) もとの如くなほしたつ。全くなほしはつ。源平「ものの報いありぬべくおぼしげるを、なほしたて給ひて、御心ちすずしくなんおぼしける」

なほし-どころ 直所 (名) なほすところ。なほすべき點。源平「ただひたぶるにこめきて柔かならん人を、とかく引きつくろひてはなどか見ざらん、心もとなくとも、なほし所ある心地すべし」同上「さなほし所なく、誰れも物し給ふめれば、心やすくなん」

なほし-はじめ 直衣始 (名) 直衣を勅許される人の、始めて直衣を著すること。又、その儀式。山槐記「仁治三年、今日殿中將(藤原有家)直衣始事」東鑑「六、文治二年正月三日「去年叙二品(頼朝)給之後、未及御直衣始沙汰」」

なほし-はひ 直灰 (名) 酒の腐敗を直すに用ふるもの。本石灰一斗に疊後灰四升を煮りて用ふ。

なほし-びな 直衣雛 (名) 直衣・狩衣などを著けしめたる雛人形。

なほし-みりん 直味醂 (名) 燒酎と味醂を混合したる酒。燒酎に比し、甘くして弱し。なほし。

なほし-もの 直物 (名) ㊀なほすもの。なほすべきもの。㊁古へ、除目の時、式部・兵部二省に給はりたる召名に、誤りあるものを直し改むる儀。この召名は、二省より外記に渡し、外記、文殿に納むる時、校合して姓尸の誤りなどを記し置き、後日大臣陣に著き、參議をして改め直さしむ。もとは毎年除目のありし月中に行はれしが、中古以來必ずしも毎年行はれざる事となれり。榮華玉葉「三月には例の直しものなどいふことあればにや、三月四日つかさ召しあり」江次第抄「二省之召名中、有失錯者、除目之時被給於二省之召名中、有失也。上古、毎年除目訖、一月中行之、中古以來、毎年不必行之、其時召出年召名而悉改之、其失錯者、外記作直物勘文奏上也」

なほしもの の かもん 直物勘文 直物の次第などを勘へ記したる勘文(ホウブン)。江次第「直物勘文」

なほしもの の ちもく 直物除目 直物によりて直したるに從ひてなす除目。

なほす 直 (他動サ) ㊀なほくす。なほからしむ。正しくす。まっすぐにす。もとの如くにす。なほらしむ。神代紀上「菩提(ナホ)之其狂而生神、號曰神直日神」源氏「秋萩にこぼるる露の惜しければ、折れふす枝をなほさでぞ見る」㊁あらたむ。かふ。變更す。垂仁紀「卒性任眞、無所二矯(ナホ)飾」狂言「機嫌を直いて」大鑑「同川」同を直いて問はう」㊂つくろひ改む。修正す。訂正す。修補す。記詞式「大鑑「漏所(ナホ)見直(ナホ)之」」神直日命・大直日命、閑直(ナホ)」枕「歌などの文字をいひ過ちて中將なほすべきにもあらじものをとぞおぼえたる」榮華「初花」造物所の物ども御覽じては、なほしなさせ給へるを」㊃添刪す。「作文をなほす」㊄とりつくろふ。とりなす。あつかふ。調停す。源「きこえなほし給へど、ことに御けしきもなほらず」平家「二、小松」入道のさしも横紙を破らるる事をも、此の大臣のなほし宥められつればこそ、世も穩しくて過ぎつるに」㊅正しくおく。改めておきすう。正しく据う。正座せしむ。平家「十、先帝身投」あるひは射殺され、或ひは斬り殺されて、船をなほすに及ばず。船ぞこに皆倒れふしにけり」狂言「鬼瓦」石「中將」なほすならば云ひ付けなほさせ、なほさぬにおいてはくせごとにいひ付くる」㊆病ひを癒やす。治す。治療す。狂言「鬼瓦」醫師と申して、人間の病を直す者で、どざる」㊇切り、裂き又むしりなどす。忌みていふ語。謡曲「源氏」ものきこしめさずと聞き給ひて、とかう手づからまかなひなほしなどし給へど、ふべくもあらず」

(語)直すは一時、見るは末代　一時の勞を惜しまざれば、末代まで恥ぢを殘すことなし。

なほ-なほ 直直 (名、副) なほく。すなほに。直(ナホ)。彼れ是れいはず。萬葉「久方の天ぢは遠し、奈保奈保(ナホナホ)に家に歸りてなりをしまさに」同「足柄の箱根の山に道ふ葛の、引かば寄りこね、した奈保奈保(ナホナホ)に」

なほ-なほ 猶猶 尙尙 (副) ㊀なほ(猶)の重言。やはりやはり。まだまだ。字津保上「なほなほかくことどとしき御心ごころ、世の中にわびしかりしか」平家「一、殿下乘船」著し尙尙も廣瀨を懇しと思し食されん時は」㊁いよいよ。ますます。なほ一そう。なほさら。狂言「比丘尼」一つ飲うで庵太郎にささうか。それは尙尙有りがたう御座る」㊂猶、其の上に。なほまた。つけ加へて。追って。書狀の追書にいふ。

なほなほ-がき 尙尙書 (名) おってがき(追而書)に同じ。冒頭に尙尙と書くよりいふ。追啓。二伸。二白。一代男「書き續けてもはや島の子も無いと申されければ、然らばなほなほ書きをと望みける」日本武尊吾妻鑑「一、一つ書きにして、發句書にまで」

なほなほ-し 直直 (形ク) 直直(ナホナホ)なり。ことなることなし。きはだたず。なみなり。平凡なり。なほざりなり。なんのこともなし。字津保「藤原」なほなほしき御きな出でまかりて、つれづれとさうざうしくて侍る」蜻蛉日記「その文のはしに、いとなほなほしき手して」源氏「末摘花」もなほなほしの御さまや」

なほ-び 直日 (名) 素み慎みたるを常の如く直すこと。延喜式「古今六帖」おほなほびのうた。あたらしき年の始めにかくしこそ、千歳をかねてたのしきをへめ」

なほ-びと 直人 (名) 家柄の普通なる人。家門高からぬ人。よのつねの人。ただびと。勢語「父はなほ(ただ)人にて、

ねなん蘆原なりける」源氏「なほ人の上達部までなりのぼりたる、われは頼にて」

なほ-み 直日 (名) なほび(直日)に同じ。神樂催馬「宮人のしでは榮ゆるおほなほみ、いざわがともに神さかもどれ」

なほ-もの 直者 (名) ただなほなる人。直(ナホ)なるもの。蜻蛉日記「氷(ヒ)くくみたる摩にて、丸をのたまふるかといふを聞くに、なほものなりけりと思ひぬる」

なほらひ 直會 (名) 〔なほりあひの約〕齋をなほりて平常に復る義〕神祭の後、解齋として、神饌のおろし物を分かちて酒食すること。後紀「今日ヲ大新嘗乃饗良比(ナホラヒ)を豐明聞行日ヒ在」延喜儀式帳「川原仁侍(ル)奈保良比(ナホラヒ)酒井菜、從二解宜一給皆悉給」儀式帳「解宜・内人・物忌等、集二酒院一直會被二給一」

なほらひ-でん 直會殿 (名) 神社に附屬する殿舍。神官が會集してなほらひをする所。げさいでん。儀式帳「直會殿、一院」江次第「野宴」「著二直會殿一」

なほらひ-どころ 直會所 (名) 前條に同じ。止由氣宮儀式帳「直會所壹院」

なほらひ-どの 直會殿 (名) 前條に同じ。

なほらひ-ひゐん 直會院 (名) 前條に同じ。儀式帳「直會院」

なほり 直 (名) なほること。なほりたること。大鑑「狂言」「そのやうにやましいうても、直りはすまい」

なほり-もの 直物 (名) ㊀なほるもの。なほるべきもの。なほしもの。㊁死すること。齋宮の忌詞。儀式帳「死ヲ奈保物(ナホリモノ)と云ふ」

なほる 直 (自動ラ) ㊀なほくなる。正しくなる。まっすぐになる。伊勢集「道風に舟はなほりて吹きねとも、あまのいかりにとどまりやせん」㊁あらたまる。かはる。變ず。源氏「からうじて今日は日のけしきもなほれり」㊂もとの如くなる。復舊す。平常に復す。源氏「とある事もかかる事も、ながらふればなほるやうもあるを」同氏「つらき心を忍びて、思ひなほらんをりを見つけん」㊃つくろひ改めらる。添刪せらる。「歌がなほる」㊄みけしきなほる。かしこまり解(ケ)す。千載「雜上」「心の外なる事にて知らぬ國にまかりけるを、ことなほりて京にのぼりて後」月詣集「上」おほやけの御かしこまりにて遠くまかりたりけるに、ことなほりて都へかへりけるに」㊅病ひなど、よくなる。癒ゆ。治す。平愈す。全治す。字津保「藤原」ここちよくなほり給ひなば、參り給へかし」著聞「二」腰折れたる者をば、足にて蹈みなどしければ、たちまちになほりけり」㊆正しくすわる。正座す。盛衰記「門(佐佐木)、座席になほりて長まり」兒教訓「座敷(生)」「座敷になほりつつ、箸を取るより程もなく、大くつろぎにくつろぎて」㊇齋宮の忌詞。しぬ。死す。齋宮寮式「凡忌詞「中略」外七言、死稱二奈保留(ナホル)一」

なま 生 (名) ㊀生きたるままなること。動植物の、枯れず、萎ず、燒かず、乾さず、漬けずして、そのままなること。なましきこと。又、そのもの。「なまで食ふ」「なまを好む」㊁あたらしきこと。新鮮なること。ふるからぬこと。あら。又、そのもの。㊂成熟せざること。十分に熟せざること。「なまの菓物」㊃よく乾き切らぬこと。なほ水氣の殘れること。又、そのもの。八笑人「二」眞木(ナ)が生で、一歳さへいぶって計りゐて、やうやう焚いたものを」㊄なまなかなること。なまじひなること。十分ならざること。かりそめなること。少しなること。字津保「藤原」御ぐしのなましめりたる、いそぎぼし給ふ」源「椎本」宮なますさまじと思ひたる」同「若菜下」かやうに夜深かし給ふもなまにくくて」狭衣「三」さぶらふ人人も内内には、なまいかにぞやと思ひたりしかど」㊅未熟なること。年功の足らざること。源「若菜下」ことなることなきなま受領などやうの家にある人は」五代帝王物語「亀山」遁世してなま禪宗たてて、萬の人つどへて法文申しければ」㊆なまえひ(生酔)の略。心中二枚繪草紙「酒に酔ひくづれ、ひよろりひよろりとなまになり」㊇なまいき(生意氣)の略。㊈げんなま(現生)の略。

なま とく あり 生徳有 少し有徳(トク)なり。やや有福なり。又、やや德行あり。狭衣「かぞへのかみなどいふ者のめにて、なまとくありけるが」今昔「下京遁に、生德有る法師有りけり」

なま-あつし 生暑 (形シク) なまなかあつし。何となくあつし。雪女五枚羽子板「おお生暖(ナマ)いと上殿ぎかけ、汗押し拭うて居たりけり」

なま-あらあらし 生荒荒 (形シク) ややあらあらし。何となく荒だつやうなり。

なま-あたたかし 生暖 (形ク) 少しあたたかし。何となくあたたかなり。

なま-あたらし 生新 (形ク) なまなましくあたらし。新鮮なり。極めてあたらし。

なま-あつし 生暑 (形ク) なまなかあつし。何となくあつし。雪女五枚羽子板「おお生暖(ナマ)いと上殿ぎかけ、汗押し拭うて居たりけり」

なま-あらあらし 生荒荒 (形シク) ややあらあらし。何となく荒だつやうなり。

なま-あび 生揚 (名) 油揚げの一種。軽く豆腐などを揚げたるもの。外部に皮が出來、内部は依然豆腐のままなるもの。諸事留「天保十四年」生揚、但右同斷、拾六に切り、壹つに付き五文」

なまいき-さかり 生意氣盛 (名) 生意氣なる盲行の盛んなる年ごろ。何かにつけて生いきなる年配。

なまいた 生板 (名) 生木の板。よくかれざる板。

(語)全振に訂　入り易き譬(ヘ)。生木に釘。

なまいだ (句) なむあみだぶつ(南無阿彌陀佛)の略訛。なむ(南無)の條を見よ。狂言「豆腐」「御經時になった。くわくわくわ、なまいだ」「孕常磐」「南無阿彌豆腐なまいだ、ああ南無あいだ」

なまいだ-ばらず 生揚 (名) 昔時ありたる物貫ひの一。浮瓢箪などを、節の間間になまいだといひて唄ひ、物を乞ひ歩きたる俗形の者。天網島「なまいだ坊主がてんがう念佛申して來る」「中略」炮碌頭巾の背道心、墨の衣の玉疎、見物ぞめきに取り卷かれ、鉦の拍子も出合ひどんどん、ぼでてんどんど念佛に仇口噛み交ぜて」

なまいた-はり 生板張 (名) いたはりのなまじひなること。いたはる心の少なきこと。心に入れて大切にせぬこと。枕「なまいたはりなりと腹だちて、返事もとらせで」

なまいで 生茹 (名) なまゆで(生茹)

に同じ。著聞集「くたちのやいばは垂りて見ゆるかな。房主打ち聞きて附けける。なまいで誰れかつくりそめけん」

なま-いとほし （形シク） 何となくいとほし。源氏花鳥「まだ世馴れぬ人の打ちかしづかれたると見ゆるし給ふものから、心えず、なまいとほしとおぼゆる御さまなり」同若菜下「琴の音中略亂るる所もやと、なまいとほしくおぼす」

なま-いどむ 生挑 （自動四） 何といふことなく、いどみあふ。大和物語「なまいどみて、時時ものなどいひける人の許より」

なま-いり 生煎 （名） 煎り方の不十分なること。よくいらぬこと。又、そのもの。醒睡笑「いり豆中略よくいりたると、なまいりなるとまじりたりし」

なま-いわけなし 生幼稚 （形シク） 何となくをさなし。どことなくいわけたり。源若菜「例はなまいわけなき戯れごとなども打ちとけ聞こえ給ふを」

なま-いを 生魚 （名） なまうを（生魚）に同じ。運歩色葉「生魚イキウヲ」御伽草紙梵天国「なまいをの鮧をほしく思へり」

なま-うかび 生浮 （名） なまじひに浮かぶこと。なまなかに佛道に入ること。源帚木「淘りにしめる程よりも、なまうかびにては、かへりて惡しき道にもたどひぬべくぞおぼゆる」

なま-うしろめたし （形シク） 何となくうしろめたし。何となく心ぐるし。源蜻蛉「女ならば必ず心うつりなんと、おのがけしからぬ御心ならひにおぼしよるも、なまうしろめたかりければ」同蜻蛉「いかでいかばかりも、人に屈きかすべきものと習ひ給ひけんと、なまうしろめたし」

なま-うだ （句） なむあみだぶつ（南無阿彌陀佛）の略訛。なむ（南無）の條を見よ。狂言六人「後生を願はう。夫れならば菜おんどを取って申さう、なまうだ」賀古敎信七慕廻録「なまうだなまうだ中略舌も廻はらぬ念佛」

なま-うたり 生茹 （名） なまゆだり（生茹）の訛り。

なま-うで 生茹 （名） なまゆで（生茹）の訛り。

なま-うらめし 生恨 （形シク） 何となくうらめし。源紅葉「とくにも渡り給はぬ、なまうらめしかりければ、例ならずそむき給へるなるべし」

なま-うを 生魚 （名） なまの魚。生きてある魚。煮焼きなどせざる魚。鮮魚。盛衰記「十六有王殿「僧形として、生魚を手に把りたる心うさよ」

なま-えのき （名） 【植】にんじんぼく（牡荊）の異名。和名抄「荊奈賀良衣木名也」

なま-おきな 生翁 （名） なまなまのおきな。なま心ある老人。勢語「なまなまのおきなの、今はさる事にげなく思ひけれど」

なま-おそろし 生恐 （形シク） 何となくおそろし。そらおそろし。更科日記「只今行くへなく戯びうせなばいかが思ふべきと問ふに、なまおそろしと思へるけしきを見て」

なま-おぼえ 生覺 （名） 一しかとは記憶せぬこと。うろおぼえ。枕「女房などこそさやうのもの忘れはせね、男はさもあらず、よみたる歌をだになまおぼえなるを」二おぼえの花やかならぬこと。深き恩顧を蒙らぬこと。源宮木「中納言殿の御前の中にして、眞實に思ひいれて仰せを信ずる人なし」三とくと聞き屈げずして知りたりとなすこと。よくは知らずして知りたるふりをなすこと。又、その人。

なま-おぼおぼし （形シク） 何となくおぼおぼし。どうやらうとうとし。どことなくおぼつかなし。紫式部集「方たがへにわたりたる人の、なまおぼおぼしき事ありて歸りにけるつとめて」

なま-おゆ 生老 （自動上二） 少し老ゆ。やや年寄りたり。榮華物語「なまおいたる人は涙も落ちけり」

なま-がくしゃう 生學生 （名） なまなまの學しやう。未熟の學生。年功少なき大學生。大鏡「父がなまがくしやうに使はれ奉りて」今鏡「親に侍りしはなま學生にて、大學に侍りき」

なま-かくす 生隱 （他動四） どうやら隱すやうなり。何となく打ちあけず。源手習「なまかくすけしきなれば、人にも語らず」

なま-がくもん 生學問 （名） いささかのがくもん。未熟なる學問。

なま-かじり 生齧 （名） 一十分に嚙まぬこと。なまがみ。二一寸聞きかじりたるのみにて、深き根柢なきこと。一知半解。生學問。生物しり。

なま-かた 生方 （名、副） すこし。いささか。はつはつ。

なま-かたば 生片端 （名、副） なまなかにて、かたはなること。どことなく不完全なること。なまかたほ。源手習「なまかたはなる事をかくなん聞こえ給ふ」

なま-かたはらいたし 生傍痛 （形シク） 何となくかたはらいたし。何となく癪止なり。源若菜「なまかたはらいたければ」榮華物語「上の御方の女房、さきざきは宮の女房に劣らぬさまの裝束を、上のおまへなど、なまかたはらいたく思しめすに」

なま-かたほ 生偏 （名、副） 何となく十分ならず。どことなく成り調はず。なまかたは。源行幸「なまかたほなること見え給はば、かうまでことどとしうもてなしおぼさじ」同紅葉「琵琶中略なまかたほにしたるに、聞きにくき物の音がらなり」

なま-かてん 生合點 （名） なまなかにて合點すること。なまのみこみのまま了解せりとなすこと。

なま-がね 生鐵 （名） よく鍛錬せざる鐵。東海道名所記「たとひ其の心ね生鐵の鈍き人なれども」

なま-かば 生皮 （名、副） 一なまのままのかは。よく乾かぬかは。二料理の一種。雁・鴨などの皮を酢に漬けたるもの。沸騰せる醤油に浸して食す。料理物語「雁生かはは、雁にても鴨にても皮をはぎつくり、すをはしらかし、二へんかけておき、又身を作り、すを一返かけてしたみ、だしたまり加減して、煮え立ち候時、吸ひあはせ鳥を入れ、そのまま出し候也」三なまけること。物ぐさがること。懶惰。鶏衣「人物ぐさの藏人と召されけるより、世にはなまかはの藏人とも呼ぶことになん」

なま-かは-もの 生皮者 （名） 生皮なる人。なまけもの。

なま-がひ 生貝 （名） 一なまの貝。貝の生肉。一代男「生貝のふくら煎り」若風俗「生貝を角切にして」二夏季の料理の一。飽の生肉を薄くはやして、三杯酢をかけ、又は、冷水に浸したるもの。水貝。酢貝。

なま-かべ 生壁 （名） 一壁土の未だよく乾かぬ壁。塗りたての壁。七十一番歌合雲鳥「我が袖のひるよも知らぬなまかべの、よりそふ人のなきもうらめし」二代男「生壁の童寒く」三なまかべいろ（生壁色）の略。

（語）生壁を算盤で扣いたやう　癡のつき

島き聲へ。

なまかべ-いろ 生壁色の濃き色。 （名） 藍氣鼠

なま-がみ 生嚙 （名） 十分嚙まぬこと。嚙みやうの不十分なること。

なま-がれ 生枯 （名） 十分に枯れざること。又、そのもの。

なま-かれがた 生枯方 （名） やや枯れんとせること。枯るるやうすの見ゆること。養證集「かしは木植ゑたるが、なまかれがたになりにたる」

なま-かわき 生乾 （名） 十分にかわかぬこと。乾燥し切らぬこと。なまび。

なま-かんだちめ 生上達部 （名） なまなまの上達部。年功の積まざる公卿。狭衣「世のつねのなまかんだちめ・殿上人などを」太平記「藤原元は公家のなま上達部にて、盛なりし御代を見たりし女房」

なま-き 生木 （名） 一生活機能の失せざる樹木。地に生ひて、いきてをる木。二よく枯れざる木材。乾き切らぬ木。砂石集「薪中略生きには遅く火燃ゆ」聖德太子繪傳記「生木・ふし木の嫁ひなし」

なまき を さく 裂生木 強ひて相愛の男女間の關係を絶たしむ。あきもあかれもせぬのを強ひて絶縁せしむ。

（語）生木に釘 生板に釘に同じ。なまいた（生板）の條を見よ。雙生隅田川「詞を押へ、ひっしひっしと生木に釘打つ鐵槌論」

（語）生木に鉈 前條に同じ。醒睡笑「借鉈を乞へどもくれぬ氣の毒や、なま木に鉈の庄のものかな」新狩犬筑波「つくたび毎に汁はじくじく中略の山寺の鐘の撞木は生木にて中略門守が婆を見れば女た頭。生木に鉈といふ事あり」

なま-ぎき 生聞 （名、副） 一なまなかに聞き取ること。とくと聞き屈げざること。十分に了解するまで聞かぬこと。今川大草紙「主君の御使を申す時は、よくよく心をしづめて仰せを聞くべし。扨なまぎきなる事をば押しかへして不審を申すもの也」實悟記拾遺「ものをなまぎきにして、眞實に思ひいれで仰せを信ずる人なし」二とくと聞き屈げずして知りたりとなすこと。よくは知らずして知りたるふりをなすこと。又、その人。きいたふう。なまいき。

なま-ぎず 生疵 （名） なま愈えのきず。なまなましききず。（ふるきず等の對）義經記「上佐坊上」西國の合戰に疵をかうぶり、いまだ其の疵愈えぬに、なまきず持ちながら熊野參詣に苦しからぬか」

なま-きれ 生切 （名） 切れ味の鋭かぬこと。甲陽軍鑑「刀・脇指中略よく研ぎ立てたると、惜しみて刃もつけず候へば、なまきれにて」

なま-きんだち 生公達 （名） なまなまのきんだち。なまじひなる貴族の子弟。源若菜「娘多かりと聞きて、なま君だちめく人人も、おとなひいふとあまたありけり」狭衣「なま君だちのいたうかくろへて、よるよる時時おはするを」

なま-く 曩謨 （名） なうまく（那謨）に同じ。諸經要集「曩謨三曼多嚩日羅南」同桑上「一祈りこそ祈たれ、なまくさまんだばさらだ」

なま-くげ 生公家 （名） なまなまの公家。公家を嘲る語。吉野都女補「なま公家ばら、引っ括れ」

なま-ぐさ 生臭 （名） なまぐさし（生臭）の語幹。又、そのもの。狂言鈍「狐を釣る道具中略ななまぐさや、なまぐさや」

なま-ぐさ-さ 生臭 （名） なまぐささ。なまぐさき度合。

なま-ぐさし 生臭 （形シク） 一なまなましくて臭し。肉類の生の香あり。和名抄「腥赤市腥奈久佐之」字鏡「胜奈久同」勝奈久」二僧侶落せり。僧の修行、未熟なり。僧、戒行を守らず。僧、濫行なり。僧、俗臭を免れず。大鏡狂言綺語「法然とやらが生臭い珠數はいやぢや」櫻陰比事「今時の世間寺、皆なまぐさき坊主」三なまいきなり。しやらくさし。又、うさんくさし。壽門松「生臭い男呼ばはり、置け置け、置いてくれ」孕常磐「尾鰭を附けて生臭い言ひ分めさるれど、くだらぬくだらぬ」

なま-ぐさ-つき 生臭附 （名） まかなひの獻立に、なまぐさものの のつきてあること。

なま-ぐさ-でら 生臭寺 （名） 生臭きにほひのする寺。なまぐさ坊主の居る寺。二代男「觀音中略御手に庖丁とまな箸持たせ、なまぐさ寺と樂がき」同「今時のなまぐさ寺」

なま-ぐさ-なべ 生臭鍋 （名） 一なまぐさ物を煮などするに用ふる鍋。二遠き親族。僅かに一族のにほひあるのみなる義と。壓言蒙求

なま-ぐさ-ばうず 生臭坊主 （名） なまぐさき坊主。戒行を守らぬ僧。修行未熟の僧。破戒無慚の僧。鷹筑波「なまぐさ坊主人ぞ笑へる」の句かくしてやあのくたら汁食ひぬらん」若風俗「腥坊主も女は嫁ふ事」

なま-ぐさ-ばうちゃう 生臭庖丁 （名） 生臭物を切るに用ふる庖丁。さかなばうちゃう。

なま-ぐさ-もの 生臭物 （名） 生臭き品物。肉類など。（精進物の對） 二代男「「腥物と燒き立て」薩摩歌「寺も精進も取りおいて中略生臭物で祝うてたも」

なま-ぐさ-れうり 生臭料理 （名） なまぐさ物にてこしらへたる料理。（精進料理の對）

なま-くちをし 生口惜 （形シク） どうやらくちをし。何となくくやし。源若菜「いと御心とどめ給へる御子と聞きしをと思ふもなまくちをしけれど、僧からず見奉り給ふ」

なま-くねくねし （形シク） どうやらくねくねし。何となうねぢけがまし。源紅葉「御方の人などは、うるはしうもあらぬ心ばへ打ちまじり、なまくねくねしき事も出でくる時時あれど」

なま-くび 生首 （名） なまなましき首。斬りて程へぬ首級。盛衰記「昨日鮮かにさかさかしげなりし有樣に、今日は魂もなき生首」唐船噺今國姓爺「斬り首・生首、珠數繋ぎ」

なま-くら 鈍 （名） 一刃物の切れ味のにぶきこと。なまりてあること。又、そのもの。二なまけること。怠氣地なきこと。鈍なること。又、そのもの。

なま-くらうど 生藏人 （名） なまなまの藏人。年功少なき藏人。著聞「ある藏人の妻の」

なま-くら-がたな 鈍刀 （名） なまくらなる刀。鋭利ならざる刀。どんたう。なまくらもの。

なま-ぐらし 生暗 （形シク） 何となく暗し。うすぐらし。ほのぐらし。大和物語「御車のあたりなまぐらき折りに立てりけり」

なま-くら-ぶし 鈍武士 （名） なまくら刀を帶びたる武士。武士らしからぬ武士。武士の精神を失ひたる武士。臆病ざ

むらひ。

なまくらもの　鈍物（名）なまくらなる刃物。なまくらがたな。唐船噺今國姓爺「乳の下をずっぱと斬れば、胴半分折りかけたる如くなり。ええなまくら物と、からりと捨て」

なまくらもの　鈍者（名）なまくらなる人。なまけもの。どんぶつ。浮世風呂「ほんにほんに、おへねえなまくら者で、憎くてなりません」

なまぐり　生栗（名）生のままなる栗の實。茹で・焼き又は乾しなどせぬ栗の實。類聚雜要「菓子一種生栗」庭訓往來十月「生栗・搗栗」

なまぐるし　生苦（形シク）どうやらくるし。何となく心ぐるし。源蜻蛉「格子中端引きあくるに、宮もなまぐるしと聞き給ふ」同若菜下「思ひの外に此の宮のかくわたりものし給へるこそは、なまぐるしかるべけれど」

なまけ（名）なまけること。なまけたること。又、其のもの。ずるけ。懶惰。怠慢。浮世風呂「今日はお手習はお休みかえ。いいえ。はは、おなまけだね」

なまけいこ　生稽古（名）不十分なる稽古。學修の不十分なること。

なまけもの（名）なまけること。なまけたる人。なまくらもの。懶怠もの。

（諺）**なまけ者の足から鳥が起つ**　まける人は、非起こりて狼狽す。

（諺）**なまけ者の實いそぎ**　懶怠者の食急ぎに同じ。けだいもの（懶怠者）の條を見よ。童子教「懶怠者食急、疾猿如食菓」

（諺）**なまけ者の節句働き**　平生なまけ居る者は他人の休む時になりて働く。

なまけもの　樹懶（名）（動）哺乳類中、貧齒類の一屬。外貌ナマケモノに似て類圓く、全身長き毛を生ず。齒は不完全なり。四肢共に長大にて屈曲せる爪を具へ、之を樹枝に懸けて體を支ふ。常に森林中に棲息す。歩行捌く、性遲鈍なり。中央亞米利加及び南亞米利加州に產す。

（のもけまな）

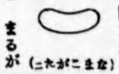
なまけやけし　生尤（形シク）何となくけやけし。何となくわづらはし。源初音「待ちとり給へるはた、なまけやけしとおぼすべかめる心の内はかられて」同夕顔「なまけやけしとは見給へど」

なまける（自動下一）一精を出さず。勉强せず。働かず。おこたる。ずるける。怠惰なり。二空くもる。

なまこ　海鼠　沙噀（名）一（動）棘皮動物、沙噀類の一種。體は稍扁平にして、長さ五六寸を通例とす。色は蒼黑にして暗褐色の雲紋あり、又、赤色を帶ぶるものあり。背に肉質の突起多く、腹面には三綴線の歩足帶を有し、これより多くの歩足を出だす。酢漬けとして生食す。腸もこのわたと名附け食用に供す。我が國、各地の淺海に產す。かいそ。こ。運歩色葉「生海鼠ナマコ」二なまこもち（海鼠餅）の略。三なまこかべ（海鼠壁）の略。四天條の略。五なまこじくい（海鼠漆喰）の略。六なまこぼり（海鼠鉾）の略。七なまこいた

なまこいた　海鼠板（英 Corrugated steel）（名）亞鉛引き鐵板又は亞鉛板を、海鼠の如き波狀に迂曲せしめたるもの。質强く且つ輕きを以て壁・屋根等に用ふ。波狀鋼板。

なまこがた　海鼠形（名）一海鼠の如き形。かまぼこなり。二火鉢のふちなどに手を掛ける穴にて、海鼠餅を切りたる如き形のもの。


（こまがこまな）

なまこがはら　海鼠瓦（名）まるがはら（丸瓦）に同じ。

なまこかべ　海鼠壁（名）土藏・塗屋などの外壁に竪瓦（ナマコ）を張り付け、其の縫目を、漆喰にてかまぼこ形に塗りて作りたるもの。

なまごころ　生心（名）一なまなかの心。なまじひに物ごとをわきまふる心。若風俗「なまなかかうといひたらば、世間にはかへぬ命なるべき事に、なまに視ぐちぐちと胸に固めて解かず」二いろけ。春情。色情。

なまごころえ　生心得（名）不十分なる心得。

なまごころおとり　生心劣（名）何となく心おとりすること。どことなく劣れるやうに思はるること。取替「なま心おとりもしぬべき事ぞまさりたるや」

なまごころぐるし　生心苦（形シク）何となく心ぐるし。何となく苦に思はる。なまぐるし。源若菜「なま心ぐるしう、さまざまおぼし亂る」

なまごころづきなし　生心附無（形ク）少し心にかなはず。何となく氣にくはず。源若菜「聞こえわづらひて、うちなげきて臥し給へるも、なまこころづきなきにやあらん」榮華「蓋、几帳ながらおざりより給ふほどぞ、なま心づきなく御覽ぜらるるに」

なまごころかし　生小賢（形シク）どことなく小ざかし。生いきにして小しやくなり。なまさかし。砂石集「なまこざかしきさかしら異義の出で來ること、返す返すもなまじひに賢かきあげて供奉しけり」

なまじ（名、副）聞の一種。

なまじめ（名）生濕（自動下一）すこししめる。何とやらしめっぽし。よく乾かず。宇津保「御ぐしのなましめりたる、いそぎほし給ふ」

なまじゃうゆ　生醬油（名）煮などせざる醬油。きじやうゆ。

なまじゃけ　生鮭（名）なまざけ（生鮭）に同じ。

なまじり　生知（名）十分には知らぬこと。熟知せざること。

なまじろし　生白（形シク）何となく白みを帶ぶ。「顏色なまじろし」

なまず　膾鱠（名）一料理の一種。肉を細く薄く切りたるもの。愛行記「白蛤爲膾ナマズ而進之」萬葉「さを鹿の妻わがしは、み奈麻須ナマズはやし」和名抄「鱠ナマズ細切完也」鮮記「鱠ナマズ」二細く薄く切りたる肉を酢に和したるもの。名義抄「膾ナマス・アヘ物」「字鏡集「鱠ナマス」三茶菓ナマス。胡蘿蔔ナマス等を細く刻み、胡麻・砂糖・味噌などをまぜて酢に和したるもの。

なます　に　たたく　叩膾　次條に同じ。

なます　に　つくる　作膾　一肉などを刻みてなますとする。二こまごまに切る。切りさいなむ。宇治拾遺「いかでか一人持ち奉り給へ、らん御女を、目の前に生きながらなますにつくり、切り虞げさせては見給はん、ゆゆしかるべき事なり」

なます　もる　膾盛　床に入る。元祿頃のはやり言葉。下文を見よ。傾城色三味線「隨分强藏、自慢を申し、汝は鱠何すあるまじき事なり」用明天皇職人鑑「なまこざかしき丁稚めかな」

なまこじくい　海鼠漆喰（名）海鼠壁の瓦の縫目に、瀧餅形に塗りたるしっくひ。

なまこしぼり　海鼠絞（名）（裂）の形、海鼠に似たればいふ。有松絞の一。一層繁く絞りたるもの。根がけなどに用ふ。

なまこなし　生熟（名）不十分になすこと。十分消化せざること。

なまこなれ　生熟（名）こなれの不十分なること。十分消化せざること。

なまこのまくら（名）【植】うみれいしの異名。

なまことひし　生戀（形シク）何となく戀し。やや慕はし。大和物語「京さへなまことひしき旅のほどなりければ」

なまごめ　生米（名）炊ぎ又は煎りなどせざる米粒。

なまごも　生薦（名）生の菰。又、それもて編みたる蓆。民部省式「凡神祇官下竹、及諸祭・諸節等所須雜・竹・柏・生薄・山菅等類、亦仰畿內令進」

なまごもち　海鼠餅（名）海鼠形に作れる餅。薄く小口切にしてかき餅とす。

なまごろも　沙噀類（名）【動】棘皮動物の一綱。體は柔軟にして圓筒狀をなし、一端に口を開き、他端に肛門を具へ、口の周圍には多數の觸手を環生す。皮膚には形狀種種なる小骨片を藏す。歩足は之を帶ぶるものと、無きものとあり。蓋ね雌雄異體なり。悉く海產にして、種類少なからざるも、なまこ・きんこ等を除きては人生に關係少なし。

なまさ　ろし　生殺（名）一冶ど死なんばかりにすること。牛死牛生。はんどろし。歳寒記「三宮「死ぬる程に打ち成して生殺にして、遺ひありかせよ」」二結束をつけんとして、つけ終らずにおくこと。

なまさいがく　生才學（名）なまなまの才學。なま學問。太平記「そぞろなる長食鐵、道も立たぬなま才學に時移りて、數日を徒らに過ぎにけり」

なまさかし　生賢（形シク）こざかし。なまさかしらなり。源蜻蛉「今日なん、かくおぼす事ある人はみそぎし給ふべきと、なまさかしき人のきこゆれば」著聞「なまさかしき事し出でては悪しかりなん」

なまさかしら　生賢（名、副）なまなかのさかしら。なまじひに賢がること。蜻蛉日記「心の解くるとよなよななげかるるに、なまさかしらなどする人は」

なまさかな　生魚（名）なまの魚。なまうを。源氏烏帽子折「御土產に生肴を持參致せし故、損ぜぬ內に」

なまざけ　生鮭（名）生魚の鮭。鹽をかけなどせざる鮭。なまじやけ。東鑑「文治年三佐佐木三郎盛綱進生鮭、越後國所領土產」

なまさき　生笹（名）一青青としたる笹。二武具の名。青笹を扮物とせるもの。續撰清正記「木村又藏中將生笹をさし物に致し」

なまさとり　生悟（名）なまなかのさとり。十分にさとらぬこと。孕婦賢「又、鯖の生さとり」

（諺）**生慢掘に落つる**　生物識川（はまるに同じ。なまものしり（生物識）の條を見よ。

なまさぶらひ　生侍（名）未熟のさぶらひ。官位など高くもあらぬ侍。あをざむらひ。大鏡「年廿ばかりなるなまさぶらひめきたるもののー」宇治拾遺「人のもとに宮づかへしてあるなる（まち）侍あり けり」

なまさむらひ　生侍（名）前條に同じ。

なまし　生（形シク）一生（ひ）なり。なまなまし。著聞「なましき魚を求めて」砂石集「木中間枯れたるも生しきも、燒く事同じかるべし」二未熟なり。不十分なり。青し。砂石集「衆生の機なましき時は感應なし中間信心の薄く、智解の發せざる事、これなましき奏なり」同上「熟處を捨ててなましからしめ、生處を習ひて熟せしめよ中間なましくせよといへり。なましとはしならはぬ奏なり」

なまし　（助動）ぬ助動の活用　なに、ましの添はりたるもの。未來を推量する意を表はす語。萬葉「きへ人のまだらぶすまに紐さはに、入り奈麻之ナマシものいもがを床に」同「さすひたて、ゐてき奈麻之ナマシを」古今序「今日こずば明日は雪とぞ降りなまし、消えずはありとも花と見ましや」

なまじ　然（名、副）なまじひ（然）の略。氣障八島「なまじ附かずば附かぬまでよ」

なまじ　なまなか　然生中　なまじ（然）に同じ。

なまし-がたな　生刀（名）なまくらがたな（鈍刀）に同じ。東北院職人歌合「わが戀はなましがたなのかねあまみ、思ひきれどもきられざりけり」

なまし-そぞく　生氏族　生親族（名）なまなまの氏族。家柄のよくもあらぬ門流。又、血緣の餘り近くもあらぬ親族。蜻蛉日記「なましそぞくだつ人、とぶらひにものしたり」狹衣「うせにし母の、なましそぞくの高きまじらひして」檜垣嫗集「なましそぞくなる人を子といひつけて顧みてなますとす。二こまごまに切る。切りさいなむ。宇治拾遺「いかでか一人持ち奉り給へらん御女を、目の前に生きながらなますにつくり、切り虞げさせては見給はん、ゆゆしかるべき事なり」

なます　もる　膾盛　床に入る。元祿頃のはやり言葉。下文を見よ。傾城色三味線「隨分强藏、自慢を申し、汝は鱠何

盃もったと、所所のはやり詞にて、床に入る事を鱠盛るとは申しならはせしが、何の腎張が申し出だせしやらん」

（謎）鱠は酢でもて、男は氣てもて　各其の特長を發揮すべし。

なます　（自動サ）昔時、遊廓の詞。なさいますの略。「言ひます」「寄りなませ」「來なまして」浮世床「寝なますなら、爰な上へ寝なませ」

なます　焠　（他動サ）焼きたる鐵を水に入れて鍛ふ。

なまず　（名）（副）なまなか（生半）に同じ。新氷代蔵「曾へいかやうに銀の入用ありとも、一緡求めたる家を、なまずにては離すべからず」

なますくらべ　鱠食　（名）出雲國にて、陰暦二月一日より七日まで、年神に鱠を供する神事。

なますさまじ　（形シク）何となくすさまじ。何となく興さむ。源氏「え參らぬ由のかしこまり申し給へり。宮なますさまじとおぼしたるに」

なますずろはし　（形シク）何となくすずろはし。何となくすずろなり。榮華「例の君達參らせ給へれば、なますずろはしう思しめされて」

なますぶな　膾鮒　（名）【動】魚類中、硬骨類の一種。源五郎鮒の大なるもの。

なまずりやう　生受領　（名）なまなまのずりやう。格別にもあらぬ國司。源「生受領ことなる事なきなまずりやうなどやうの家に有る人は」

なまぜ　（名、副）なまじ（惣）の訛り。松の葉「なまぜなまなか調れずばかほど、物は思はじさりとては」

なまぜん　生禪　（名）なまなかの禪學。なまざとりの禪機。野狐禪。

（謎）なま禪大疵の墓　生兵法大疵の基に同じ。なまびやうはふ（生兵法）の條を見よ。芭蕉句集「或智識の曰はく、なま禪大疵のもとゐと」

なまぞり　生反　（名）彫刻に用ふる刃物の一。鑿に似て小に、刃、薬刀の如く反りたるもの。

なまそんわう　生孫王　（名）なまなまの孫王。皇族らしくもあらぬ皇族。皇統よりはいたく隔たれる御一族。世に知られ給はぬ皇族。源「なまそんわうめく賤しからぬ人あまた、おほきみ・四位のふるめきたるなど」狭衣「何となきなまそんわうにて、いと寄せなからんよりは」

なまだ　（名）【動】うつぼ（鯔魚）の異名。

なまだ　（名）【動】なまづ（鮎）をいふ。安房國吉濱村邊の方言。

なまだ　（句）なむあみだぶつ（南無阿彌陀佛）の約。

なまだけ　生竹　（名）なまなましき竹。切りて、まだ全く枯れざる竹材。あをだけ。

なまだこ　生蛸　（名）生のたこ。煮などせぬたこ。生きたるたこ。狂言「なまだこ」

なまだひ　生鯛　（名）なまのたひ。生きてゐる鯛。煮・焼き、又、鹽につけなどせざる鯛の肉。昨日は今日の物語「尾張の熟田へ、なまだひを調へに遣はしけるが」三代男「生鯛・鮟」

なまたきこ　生玉子　（名）なまのたまご。茹で・焼きなどせざる雞卵。

なまたる　生垂　（自動ナ）京阪の語。男子などのやさし過きて、舉動に勇氣なし。にやける。

なまたれ　生垂　（名）京坂の語。なまたるること。なまたれたること。又、その人。にやけ。

なまだれ　生垂　（名）垂れ味噌の一種。下文を見よ。料理物語「生垂は味噌一升に水三升入れ揉みたて、袋にて垂れ申し候也」

なまち　生血　（名）なまなましき血。生きて居る動物の血。いきち。せいけつ。鮮血。關八州繋馬「耳ぎはずんどひつそぎ、生血を台子に絞り受け」

なまづ　鯰　（名）【動】魚類中、硬骨類の一種。體の長さ一尺數寸、稀に二三尺に達す。頭部は扁大にして、尾部は側扁なり。皮膚に鱗無く、粘質に富む。口は濶大にして、上顎の鬚鬚は頗る長し。體色は背部蒼黑色、腹部は白色なり。我が國、各地の池沼・河川に住し、泥濘の水底を好む。捕獲して食用とす。本草和名「鯰魚」和名抄「鯰魚・鮎字・鯰似・鮧而大頭者也」宇治拾遺「瓦の下に三尺ばかりの鯰にてなん、行く方なく水も少なく、せばく暗き所にありて」

なまづひげ（鯰髯）の略。又、それを蓄へる人を嘲りいふ語。

なまづ　生煮　（名）生煮直ちに火は程經てあらはるる皮膚病。白或は黑き斑點を生ずるもの。下學集「歴搗ナマヅ薬」

なまつ　の　さらさり　鯰皿切　鯰の尾の方より始めて一刀づつ切りのぼせ、取りなほして、頭を縦さまにおし割りて煮たる料理。

（謎）鯰の飄箪　次條の略。傾城反魂香「鯰の瓢箪中間叩けばすべり、打てばすべり、ぬらりぬらりと手にたまらず」

（謎）鯰を飄箪でおさへるやう　（うたん）なまづ（瓢箪鯰）に同じ。守武千句「瓢箪を見れば山からなまづにて」傾城反魂香「鯰おさへた瓢箪の、ぶらぶら生きもて甲斐なし」

なまづいか　鯰凧　（名）鯰の形せるいかのぼり。心中刃氷朔日「鯰・瓢箪・鯰いか、吹かぬ風もつ扇いか」

なまづがた　鯰形　（名）鎧の小手の一種。上下のふくべ・大指初め、すべて指の形なきもの。

なまづけ　生漬　（名）漬け方の生なること。十分漬からぬこと。又、その漬け物。

なまつけなし　（名）なまけること。又、その人。

（謎）なまつけなしの節句ばたらき　なまけ者の節句働きに同じ。なまけものの條を見よ。

なまづだな　鯰棚　（名）三角の棚板の稱。

なまづつまし　生慎　（形シク）何となくつつまし。少しはづかしく差し控ふ。榮華花山「この女御、后にする奉らんとのたまはすれど、おとどなまつましうて」

なまつばさ　生唾　（名）次條の略。

なまづはだ　瘢肌　（名）なまづ（鯰）に同じ。和名「歴易ナマヅハダ」

なまづひげ　鯰髯　（名）泥鰌髯よりは細く長き口ひげ。

なまづぶね　鯰船　（名）船の首圓くして、鯰の形に似たる小船。

なまづむし　（名）【動】【植】たがめ（田鼈）の異名。

なまづめ　生爪　（名）生きて居るものの爪。武烈紀「解人指甲」

なまね　生寝　（名）十分にねひらざること。眠りの不足なること。熟睡せざること。

なまねたし　生妬　（形シク）何となくねたし。何となくにくらし。枕「竹の名とも知らぬものを、なまねた（めかし）しと思ひおぼしつらん」源「何やかやと諸心にあつかひ給へるを、おとどは人知れずなまねたしとぞおぼしける」

なまねぶたし　生眠　（形シク）何となくねぶたし。すずろにねぶたし。落窪「なまねぶたかりつる目もさめて、驚きて見れば」

なまのみこみ　生呑込　（名）十分の

をはおしとる。昔時、遊女などが、心中ニを見するためになしたり。壽門松「伏見擅木町拝屋の高尾に、又したたか使うて、心中に生爪を放してくれた」

なまねぶ　（自動ハ四）姉を去って暇をやり、私が夫婦になると、生爪放して入れたる文」

なまのづら　生面　（名）生きたる顔。いきづら。當流小栗判官「相傳の主君を殺し、ようもようも生面下げ、我れ我れに物言はんと思はるるぞ」出世景清「夫の訴人をしながら、何の生面さげて今此の所へ來たりしぞ」

なまはづる　生鶏　（名）生きたる鶏。又、鹽などせぬ鶏の肉。醒睡笑「生鶏の汁を食はせよ」傾城酒呑童子「何がな珍らしい物をとて、生鶏の御汁」

なまびを　鯰尾　（名）【刀】刀劍などの制。しやうぶづくり（菖蒲作）に同じかるべし。三代實錄「鯰尾槍一百八竿」中右記「鯰尾二柄」増鏡「三條の家に傳はりて、鯰尾とかいふ刀のありけるを」

なまびをづくり　鯰尾作　（名）刀劍などを鯰尾の制につくりたるもの。持統天皇歌軍法「そっと指いたるだんびら物、鯰尾作り引ん投いて」

なまどうふ　生豆腐　（名）煮・焼きなどせざる豆腐。

なまとり　生鳥　（名）生きてをる鳥。煮・焼き、又、鹽につけなどせぬ鳥肉。運歩色葉「生鳥ナマトリ」

なまなか　生半　（名、副）【物】物事が甲乙の何れにも屬せざるにいふ語。どちらつかず。未だ成り調はず。なからはんと。中ぶらり。不十分。なまじひ。三代男「なまなかの戀知りとなりて、女郎の腹の内はびいどろの如く見えすき」生玉心中「生中武士の娘とは、薄知りに人も知る」

なまなかに　（名、副）前條に同じ。なまじなまなか。

なまながし　生長　（形）なまなかに長し。いやに長し。妙に長し。狂言「わどりよは悄惱な人ぢや、なまながいことを、よう覺えてゐやる」

なまなま　生生　（名、副）【物】なま（生）を重ねて意を強むる語。いかにもなまなること。「生生として居る」

なまなり　生成　（名）【物】十分成り終はらざること。又、そのもの。

なまにし　生鰊　（名）次條に同じかるべし。

なまにしん　生鯡　（名）生のにしん。干しなどせざるにしん。

なまにようばう　生女房　（名）なまなまの女房。未熟なる宮仕への女房。宇治拾遺「ある人のもとに、なま女房のありけるが」

なまにんじやく　（名、副）なまはんじやく（生半尺）に同じ。

なまぬかる　生拔　（自動ラ四）【物】なまなか手ぬかりとなる。なまじひに油斷す。

なまぬ　松風村雨東帯鑑「生拔かって傷られな」【物】何となくぬけたるところあり。なまぬるし。大藏狂言山賊「あのなま拔かった禰宜奴が、某に證もせいで、高膳を掛けて茶を飲うだ」

なまぬり　生塗　（名）塗り方の不十分なること。塗りてまだよく乾かぬこと。又、そのもの。「生塗の壁」盛衰記「北條殿四「田舍合子の大きに、尻高く底深きに生塗なるが、所所剝げたるに」

なまぬるし　（形シク）【物】なまなかにぬるし。少し微温なり。いやにぬるし。さほど暖かならず。「湯がなまぬるし」【物】何となく柔弱なり。強みなし。にやけたり。東海道名所記「なまぬるき、色の白きひな男也」鄙山姥「鬼を欺く其の中へ、生ぬるいなりをして」【物】きびしからず。あまし。なまぬかりたり。手ぬるし。愛生隅田川「事ねうとは思はずか、えん生ぬるい襦の正殿」國姓爺後日合戦「母が生ぬるい」

なまぬるっこし　（形シク）前條の音便。曾我扇八景「開けるはいな、待たんせな。やあがいに生ぬるっこい香太め」

なまね　生寝　（名）十分にねひらざること。眠りの不足なること。熟睡せざること。

なまのづら　生面　（名）生きたる顔。

なまはづる　生鶏　（名）生きたる鶏。

なまびを　鯰尾　（名）【刀】刀劍などの制。

なまにく　生肉　（名）なまの肉。煮・焼きなどせざる肉。

なまにくげ　生憎氣　（形ナ）なまにくきやう。なまにくさう。源「生なまにくげなる言葉ども、いひ聞かせつつ」

なまにくし　生憎　（形シク）何となくにくし。何となくつらにくし。どうやら心にくし。源「かやうに夜ふかし給ふもなまにくくて、入り給ふを聞く聞く、疲たるやうにて物し給ふなるべし」同「なまにくくて物し給ふなるもなまにくきものから」

なまにし　（名）次條に同じかるべし。津軽の方言。

なまにしん　生鯡　（名）生のにしん。

なまにようばう　生女房　（名）なまなまの女房。未熟なる宮仕への女房。宇治拾遺「ある人のもとに、なま女房のありけるが」

なまにんじやく　（名、副）なまはんじやく（生半尺）に同じ。

なまぬかる　生拔　（自動ラ四）【物】なまなか手ぬかりとなる。なまじひに油斷す。

なまねたし　生妬　（形シク）何となくねたし。何となくにくらし。枕「竹の名とも知らぬものを、なまねた（めかし）しと思ひおぼしつらん」源「何やかやと諸心にあつかひ給へるを、おとどは人知れずなまねたしとぞおぼしける」

なまねぶたし　生眠　（形シク）何となくねぶたし。すずろにねぶたし。落窪「なまねぶたかりつる目もさめて、驚きて見れば」

なまのみこみ　生呑込　（名）十分の

みこまぬこと。よく會得せざること。なまがてん。

なまのり 生海苔 (名) なまのあまのり(ぼしのりの對)

なまのろし 生鈍 (形)ク いやにのろし。ばかにのろし。浮世風呂三「なまのろいロぢやうし」

なまは 生葉 (名) 枯れきらぬ葉。

なまはしたなし (形)ク どうやらはしたなし。何となく異さめたり。源少蜻「御いらへもなく程へければ、なまはしたなきに」同堀河「生ひ先遠くあなづりにくきはひにてうつろひ給へるに、なまはしたなくおぼさるれど」

なまはづかし 生恥 (形)シク 何となくはづかし。どうやらうらはづかし。すずろにはづかし。狭衣四「なまはづかしとおぼしたる御けしきにて、中中ふともえとり隠させ給はぬに」

なまばむ (自動四) 何となくあやし。うさんくさし。太平記廿三「人殺「用心の最中、なまばうたる人のつかれ乞ひするは、夜討・強盗の案内見る者歟」

なまばやり 生流行 (名) 十分にはやらぬこと。やや用ひらるること。東海道名所記「なまばやりなる藪薬師」

なまはらぎたなし 生腹穢 (形)ク 何となくはらぎたなし。すこし根性わろし。增鏡「内に近くさぶらふ上達部などのなまはらぎたなき」

なまはらだたし 生腹立 (形)シク なま腹だつやうなり。何となく腹だたし。宇治拾遺三「二時ばかりまで出であはねば、なまはらだたしうおぼえて」

なまはらだつ 生腹立 (自動四) 何といふことなく腹だつ。少し腹が立つ。源夕顔「心ちなくなどはあらぬ人の、なまはらだちやすく、思ひのままにぞ少しありける」

なまはんか 生半 (名、副) なまなか(生半)に同じ。

なまはんじゃく 生半尺 (名、副) なからはんじゃく(半半尺)に同じ。なから(半)の條を見よ。

なまはんじゅく 生半熟 (名、副) 一半熟を強めていふ語。二みじゅく(未熟)に同じ。

なまび 生干 (名) 全く乾かぬこと。十分に干さぬこと。又、そのもの。なまぼし。なまかわき。

なまひがひがし 生僻僻 (形)シク 何となくひがひがし。どうやらひがみたるやうなり。紫式部日記「殊に深き用意なき人の、所につけて我れは顔なるが、なまひがひがしき事も物の折りにいひ出だしたりけるを」

なまひとわろし 生人惡 (形)シク 何となく人聞きわるし。どうやら外聞わろし。源賢木「なま人わろく爪食はるれど」

なまびやうはふ 生兵法 (名) 一なまなかに兵法を學び知ること。蘊奥を極めざる兵法。二なまなかに物事を知ること。なまなかの智識。なま學問。(諺)生兵法は大疵の基　兵法の未熟なる者が、夫れを頼みて事を起こして大疵を受く。一知半解の徒が其の得たる少しの智識に自負して、大失敗を招くに譬ふ。清水物語「何事も佛の方便に委せ正直なるこそよけれ、生兵法は大疵のもとなり」貞徳文集「天狗之自由程無之候者、御慎肝要候、生兵法は大疵基と申す誹御座候」

なまふ 生麩 (名) 乾又は燒かぬ麩。

なまぶし 生節 (名) なまりぶし(生節)に同じ。

なまぶし 生武士 (名) なまくらぶし(鈍武士)に同じ。百日貫我三「武士に似合はぬあまい事、これ爰ななぶしたち」

なまふせがし 生防 (形)シク 何となくふせぐやうなり。どうやら防ぐやうなり。

なまふせがしげ 生防氣 (副) なまふせがしきやう。なまふせがしさう。枕四「おほのみかどはさしやなど問はすれば、まだ人のおはすればなど、なまふせがしげに思ひていらふるに」

なまぶね 生船 (名) 鮮魚を荷積みしたる船。利根川圖志「鳥銚子浦より鮮魚を積み上するを生船といふ」

なまぶり 生鰤 (名) 生のぶり。煮・燒き・干し又鹽などせぬ鰤の肉。浦島年代記三「鹽物では珍しかず、丹後の生鰤」

なまへ 名前 (名) 一人の名稱。姓名。二名義。名分。

なまへかへ 名前書換 めいかきかへ(名義書換)に同じ。明治十九年十月勅令第六十六號整理公債條例(六月十一日)「記名證書の賣買讓與を爲したるものは中略日本銀行本支店又は代理店に差出し名前書換を請ふへし」

なまへかんばん 名前看板 (名) 名前を記したる看板。昔時、大阪の劇場にて、正面入口の上に、立者八人の名を記したるを八枚上げて八枚看板と稱せり。

なまへにん 名前人 (名) 正式に名前を現はしたる人。名義人。

なまへわけ 名前別 (名) 人人の名前によりて區別すること。

なまへんじ 生返辭 (名) はきとせぬ返辭。煮えきらぬ返答。曖昧なることたへ。

なまほし 生干 (名) なまび(生干)に同じ。

なまぼうし 生目映 (形)シク 何となくまばゆし。やはづかし。源紅葉「矣はせ給へば、内侍はなままばゆけれど」

なまめ 生豆 (名) 生の豆。煮・燒き・煎りなどせざる豆。

なまめた 生丸太 (名) なま木の丸た。いまぎり。

なまみ 生身 (名) なまなましき身。現に生きて居る身。いきみ。

なまみそ 生味噌 (名) 生の味噌。製したるままの味噌。

なまみだ (旬) 次條の略。なまいだ。昨日は今日の物語「これを取って子持に食はせよ、なまみだ」

なまみだぶつ 南無阿彌陀佛 (旬) なむあみだぶつ(南無阿彌陀佛)の約。なむ(南無)の條を見よ。

なまみづ 生水 (名) 汲みたるままにて、煮沸などせざる水。きみづ。

なまみや 生宮 (名) なまなまの皇族。はかばかしからぬ宮。古事談「如此之生宮(ナマミヤ)達、立板敷上、召執柄人乎」狭衣四「なまみやばらにてうしろむる人なからんよりは、大將にまかせたらんに、惡しうもあらじ」

なまみやづかへ 生宮仕 (名) なまなまの宮仕へ。はかばかしからぬ宮仕へ。勢語「此の男なまみやづかへしければ、それをたよりにて、衛府のすけども累まり來にけり」十訓三「なま宮仕へする女房の」

なまむき 生剝 (名) あからさまにすること。(鳥獣)

なまむぎ 生麥 (名) なまのむぎ。煮・煎りなどせざる麥の實。

なまむづかし (形)シク 何となくむづかし。なまなか面倒なり。源夕顔「さがなくことがましきも、しばしはなまむつかしうわづらはしきやうに悩らるることあれど」大鏡一陣に左大臣殿の御車やどぜんどものあるを、なまむづかしとおぼせど」

なまめ 雛豆 (名) 節分の夜、鬼は外福は内と呼びて撒じ、惡鬼を驅逐するといふ豆。日本歳事記三「晦日中略俗に隨ひて今宵の雛豆を打つべし」藝苑日渉七「民間如除夜、炒黄豆供神佛祖先、向歳徳方位撒豆以迎福、又背歳徳方位撒豆以逐鬼、謂之雛豆」

なまめ 生海布 (名) なまのめ。生えたるままのめ。煮・干しなどせざる海藻。拾遺物名「水もなく舟も通はぬ此の島に、いかでかあまのなまめかるらん」

なまめかし 生 (形)シク 一なまめきて見ゆ。わかわかし。みづみづし。源若菜上「いと若く清らにて、かく御賀などいふことは、ひが數へにやと覺ゆるさまのなまめかしく、人の親げなくおはしますを」二優に奥ゆかし。上品なり。みやびやかなり。優美なり。閑雅なり。宇津保俊蔭上「はづかしうなまめかしき顔姿にてぞものし給ひつる」枕三「人の娘、やんごとなき所どころに御文きこえ給ふ人も、今日は心ことにぞなまめかしうをかしき」徒然草「すべて神の社とそ、捨てがたくなまめかしきものなれや」三艶に美し。いろめかし。繊ぶるさまなり。あだっぽし。紫式部日記「けさうなどのたゆみなく、なまめかしき人にて、艶に顔つくりしたりけるを」若風俗三「容顔なまめかしき若衆」

なまめかしげ 生氣 (副) なまめかしきやう。なまめかしさう。落窪三「いと若う清げなる十餘人ばかり物語りして、いとなまめかしげなり」

なまめさまし 生目覺 (形)シク 何となくめざまし。何となくおどろかるるやうなり。源乙ふりがたう由ある書きざまにも、なまめざましきものに覺したりしを」

なまめく 生 (名) なまめかしきさま。なまめかしき度合。落窪二「御形のなまめかしさは、げにたぐひあらじとこそ見侍りしか」堤中納言「かるかやのなまめかしさの姿には、そのなでし子も劣るとぞ聞く」

なまめき 生交 (自動四) 互ひになまめく。源賢木「なまめきかはすに、憎くなるをも知らで」

なまめき-さま 生狀 (名) なまめくさま。なまめきたる樣子。取替三「これも同じなつかしさ、なまめきさまなれど」

なまめき-すがた 生姿 (名) なまめきたる姿。なまめける姿。美しく上品なる姿。源若菜下「女御の君は同じやうなる御なまめきすがたの、今少し匂ひ加はりて」

なまめく 生 (自動四) 一わかわかしくあり。みづみづしくあり。二若若しくて美しく見ゆ。花やかに美し。朝鄰なるさまなり。但勢集「斎の宮、御心風りなくなまめき給うて、世に聲ふべくもあらずなんおはしましける」源乙紅葉のやうやう色づきわたりて、秋の野のいとなまめきたる」名義抄「鄰(ナマメク)」三上品に見ゆ。品位高し。優美にして閑雅なり。優美なり。字津保俊蔭三「十三四になりぬ。かたち清げに、心なまめきたること限りなし」源蜻蛉「月は霧に隔てられて、木の下も暗くなまめきたり」四銷ぶる色あり。色めく。あだっぽくあり。持統紀「傷清白、昨求幸(ナマメク)編」勢語「此の車を女車と見て寄りて、とかくなまめくに」枕三「壺さうぞくなどばかりして、なまめきけさうじてこそありしか」

なまめさまし 生目覺 (形)シク 何となくめざまし。何となくおどろかるるやうなり。源乙ふりがたう由ある書きざまにも、なまめざましきものに覺したりしを」

なまもの 生物 (名) なまのもの。生きたるもの。煮・燒き・干しなどせざるもの。いきもの。宇津保中「なま物・かち物・くぼつき物盛りて」類聚雜要「生物五坏(古方白瓜・黒瓜・白瓜・黒瓜)」庭訓往來五月「生物者鯛鱸中略雉・兎」艶狩劍本地三「生物二疋預かって、斯ういふ内も氣遣ひ絶えず」

なまもの 生者 (名) なま心ある者。なま心えある人。源玉鬘「る中びたる人をば、かやうの所には、よからぬなまものどものあなづらはしうするも、かたじけなき事なり」

なまものうし 生物憂 (形)シク 何となく物うし。すずろに物うし。何となくおくこふなり。源若菜下「なま物うくすずろはしけれど、其のあたりの花の色をも見てや慰むと思ひて參り給ふ」

なまものしり 生物識 (名) なまなかに物を知れること。生學問をなしたること。生かじりなること。又、その人。(諺)生物識川へはまる　生兵法は大疵の基に同じ。なまびやうはふ(生兵法)の條を見よ。爲愚痴物語「小智は菩提のさはり、生物識川に流るるとは是れなるべし」風俗文集「果ては己れが慢心増長して身を滅すに至る、是れぞまことの破家者なるべし、あゝ生物識川へはまるとは天下の金言也」(諺)生物識地獄に墮つ　生物識が佛法を誹謗する者あるを戒めていふ。

なまやいと 生灸 (名) すゑて程へぬ灸點。艶狩劍本地三「捻り艾の生やいと、疳もうぐはず痛みなし」

なまやか 生 (副) なまめきたるやう。なまめかしげ。著聞三「いとなまやかなる(めきたる)女房一人」同四「いとなまやかにて、扉・けはひより初めて、よに尋常なる男の」

なまやき 鈍燒 (名) 刃物の、なまくらに燒くこと。なまくらに燒くこと。又、そのもの。大織冠鏡三「奈良刀の鈍(ナマヤキ)燒な」

なまやけ 生燒 (名) 十分に燒けざること。燒きの足らぬこと。又、その食物など。

なまやさし 生優 (形)シク なまなかにやさし。なみひと通りなり。容易なり。浮世風呂三「何や角やで一貫二三百の出入りだ。なまやさしいこっちやあねえよ」

なまやすし 生易 (形)シク なにとなくやすし。どうやら心やすし。源若菜「對の方の煩ひける頃は、猶そのあつかひに聞こし召してだになまやすからざりしを」

なまやっこ 生奴 (名) なまの奴豆腐。生豆腐を奴にしたるもの。(煮奴の對)

なまやゆかし 生懐 (形)シク 何となくゆかし。すずろにおくゆかし。狭衣四「なまゆかしき方さまに打ちまじりたる御中にぞありける」

なまゆがむ 生歪 (自動四) やゆがむ。どことなく正しからず。源若菜「大方にては惜しくめでたしと思ひきこゆる院の御ため、なまゆがむ心や添ひにたらん」

なまゆだり 生茹 (名) ゆで方の不十分なること。又、そのもの。

なまゆで 生茹 (名) ゆで方の不十分なること。又、そのもの。

なまゆぶぐれ 生夕暮 (名) 夕暮に閉近きころ。たそがれ。今昔三「大きなる蝦蟇一つ有りて、生夕暮に成ぬれば出で來て」宇治拾遺三「株ども結ひたる許に立ちまはりて、なま夕暮に見られけるほどに」

なまよび 生酔 (名) なまよひ(生酔)の訛り。

なまよみの (枕) かひにかかる語。其のかかる由は詳かならず。なまよみは生肉(ナマシ)にて、貝の肉は生なるが味ひ善ければ、かひとかけたるなりとも有義。なまよみは生弓の韓にて、生木の弓の反るといふ意にて、かへるの反切かひにかく(冒頭)ともいふ。萬三奈麻余美乃(ナマヨミノ)甲斐の國」

なまよろし 生宜 (形シク) やや可なり。やや世のつねなり。珠に悪しくもあらず。宇津保俊蔭「世の中の人もなかなかかちしと思ひたるを、なまよろしくてあるべき」榮華物語「なまよろしき折りのだに、乘人も馬もいみじう挑みて、とみにやは出づる」

なまり 訛隱 (名) なまること。なまり。

なまり 訛 (名) 訛ること。なまりたること。又、その言語又は發音。頓政集「みちのくのかねをば懸ひて朝の間なく、いもがなまりの忘られぬかな」當流小栗判官「所によりて蟲の音も、訛りありと聞くものを」

(諺)訛りは國の手形　訛りは其の人の生國を知らしむ。

なまり 生 (名) なまりぶし(生節)の略。本朝食鑑「鰹中等者煮熟之、候中外作白、而入冷水、則塗霜白、呼號奈萬利」

なまり 鉛 (名) 【化】軟かなる金屬。展延性あるも比較的に脆く、比重一一・四酸點三二五度なり。空氣中にて熱すれば酸化鉛となるも、常温にては酸化鉛の薄層を表面に生じてよく内部を保護す。硝酸・鹽酸等に溶くるも、硫酸に侵されざるを以て硫酸製造の鉛室となす。細工容易なる故に瓦斯・水道の鉛管となし、又、合金として貴重なるものあり。和名抄「鉛(青金也)」字鏡「錫(錫青金也)」名義抄「鉛(ナマリ)」

なまりーす ちゅうどく 鉛中毒 【醫】鉛を工業品・化粧品・器具・藥品として用ふるより起こる中毒。急性は嘔吐・下痢・胃腸の痛みを傳し、慢性は齒龈が鉛黑色を呈し、貧血を來たす。

(諺)鉛の刀で人を斬ったやう　あるべからざる事なれば、信ず可からざるに譬へていふ。

なまりーす かみ 鉛紙 (名) 【植】たまずだれの異名。

なまりーど 訛聲 (名) 訛りたる音聲。だみごゑ。訛音。著聞集「なまり聲にて高聲に挽てければ」盛衰記「なまり聲にて、何猫の來た、猫とは何ぞ、鼠とる猫獅」過麿色葉「木曾不意得とて、なまり音にて、何猫の來た、猫とは何ぞ、鼠とる猫獅」

なまりーせん 鉛錢 (名) 鉛にて鑄造せる錢。類聚雜抄「鉛錢世」敕令類纂「なまり錢・大われ錢」

なまりーちらす 訛散 (自動) やたらに訛る。訛り聲にて威ばりちらす。冥途飛脚「徒士・若黨も刀の威光、銀拵へも胡散なるなまり散らして歸りしが」

なまりーづきん 鉛頭巾 (名) おもりづきん(重頭巾)に同じかるべし。御伽草子「關東ではやるはなまりづきん」

なまり 鈍箸 (名) 食事の時、何れの菜に箸をつけんかと迷ふこと。禮容筆粹「ものを食ふ時中間燒物を食はんか、又さし身を食はんかとうろたへたる體、さてさて見苦しき加樣に手のなまるをなまりばしとて嫌ふ也」

なまりーぶし 生節 (名) 鰹節を製する前に、煮たる鰹の肉を一度乾し、十分に乾燥し終はらざるもの。蒸して其の儘食用に供す。或ひは鯖にても製す。なまり。なまぶし。新撰常陸國誌「なまり節、郡珂の樂成濱等にて作る、鰹の尖を切りて湯にてゆで、さて湯をきるなり。下總の銚子にて製するものは、むしてゆでず、故に松葉の火にてくすぶるなり」

なまりーぶし 鈍武士 (名) 【前條に通じ。俚語】なまくらぶし(鈍武士)に同じ。

なまりーぶし 訛節 (名) 訛りのある節。國訛りの添へる歌などの節。浦島年代記「唄は西國訛節」

なまりーふで 鉛筆 (名) えんぴつ(鉛筆)を直譯したる語。

なまる 隱 (自動) 古語。なばる(隱)に同じ。萬三おし照るや難波の江に蘆作り、蘇麻理(ナマリ)て居る葦蟹を」

なまる 訛 (自動) 物云ふに、言語又は發音正しからず。よこなまる。神武紀「訛(ナマリ)也熊襲云者」金葉三聲なまりたる人の物いひけるを聞きて」過麿色葉

なまる 鈍 (自動) 一銀ひ方不十分なる爲め、切れ味にぶし。なまくらとなる。二志望を貫徹せんとする心、衰へ弱る。意志薄弱になりゆく。勢ひ沮む。三論鋒ひるむ。鋭鋒にぶりゆく。舌端鋭からずなる。

なまわかげ 生若氣 (名) なまわかきやう。なまわかさう。

なまわかさ 生若 (名) なまわかきさま。なまわかき度合。

なまわかし 生若 (形シク) なまなか年わかし。甚だ弱年なり。うらわかし。緋縅編卯月紅葉「生若いわしが身で、出過ぎた事と控へしが」

なまーわづらはし 生煩 (形シク) なんとなくわづらはし。どうやらうるさく厭はしげなり。源氏「なまわづらはしけれど、上なる衣を押しやるまで、求めつる人と思へり」同末摘花「はかなきついでに、さる人こそとばかりきこえ出でたりしに、かくわざとがましうの給ひわたれば、なまわづらはしく」

なまーわろ 生惡 (名) 次條の語幹。源氏「なつかしき妻子と打ち頼まんに、無才の人なまわろならんふるまひなど見えんに、はづかしくなん見え侍りし」

なまーわろし 生惡 (形ク) 何となくわるし。どうやらわるし。宇津保俊蔭「たとひ人のはらからなまわろくても侍らんからに、それにつけてやは覺えの劣らん」

なまぬ (名) 【植】一おもだか(澤瀉)の異名。本草和名「澤瀉奈末奴」一」二くろくわゐ(烏芋)の異名。

なまゑ 生餌 (名) 一いき餌(生餌)に同じ。運歩色葉「生餌エマ」二すり餌(擂餌)に同じ。

なまゑび 生酔 (名) 少し酒に酔ふこと。酔ひつぶれぬ程に酔ふこと。又、その人。續猿蓑「生酔をねちすくめたる涼みかな」浮世風呂「大皇(ナマ)暮(ナマ)に紅紅の酔(ナマヨビ)も、朝湯に醒的(ナマ)となるが如く」(諺)生酔本性たがはず　酒の酔ひ本性忘れずに同じ。さけ(酒)の條を見よ。御伽草子「ひてもほんぢ忘れずとて、御持參の酒に酔ひ」

なまをかし 生可笑 (形シク) 何となくをかし。どうやら笑ふべし。源氏「さやうなる世の中を見ましかば、こなたかなたいかにおはばし見給はましなどと、なまをかしくも哀れにもおぼし出でける」

なまーをんな 生女 (名) なま心ある女。なま女房なる女。身分低き女。未熟なる女。宇津保藤原「かやうのなま女こそは物たばかりはすめれ、たばかりきこえてんや」蜻蛉日記「例の人はあないするたより、もしはなま女などしていはするなどこそあれ」

なみ 波 浪 (名) 一天氣の動搖等に因り、水が平準を失ひ、うねの如く凹凸・起伏して運動するもの。波浪。波濤。記「つ那美(ナミ)、そこにぬぎうて」萬「利根川の河瀬も知らずただ渡り、奈美(ナミ)に逢ふのす逢へる君かも」和名「水波。釋名云、風吹水、波成文曰漣(ナミ)、又曰波」波體韓相逢及也」潮三うしほ。潮流。海流。神武紀「會有浮潮(ナミ)之太急」三波浪の如く凸凹・起伏すること。又、その、或ひはかたち。萬「天の海に雲の波(ナミ)たち、月の船星の林に漕ぎかくる見ゆ」同「藤奈美(ナミ)は咲きて散りにき」新後拾遺「浪をこす尾花がもとに隠るなり、夜寒の末の松蟲の聲」四彈性體の各部が少しづつ遲れて同一の振動を繰りかへすと身は、異種狀態が連續して傳播するものにして、此の異種の狀態の一組の稱。五波のおと。なみおと。源朝五「せうそこをだに通はさで久しうなり侍りぬるを、波のまぎれに、いかなることかあらんとおぼめく」六紋所の名。波に象りたるもの。しらなみ・なみにうきぎ・ひとつなみ

(なみ な)

とも五・まつだなみなど種種あり。七年老いて皮膚に生ずる皺。老いの波。波の皺。住吉「髮は雪をいただき、額に四海のなみをたたみ」後葉集物名「老いのくるみのからうのみ覺ゆるは、面に波のたたむなりけり」八なみかぜ。さわぎ。どたばた。もめ。紛擾。平治物語「海内波治りて」夫木「跡垂れて守るとならば玉津島、筑紫なみたつなわかの浦風」謠曲「賢き君の御調なれや、波をさむるも氷」九消え易きものに譬へていふ語。泡沫。謠江口「發ひあら磯の波と消えにし跡なれや」十槇樣の名。

なみ うつ 波打 波が音を立てて寄せ來たる。浪の如く高低す。浪おこる。浪たつ。「胸に波うつ」古今雜三「風吹けば浪うつ岸の松なれや、ねに顯れてなきぬべらなり」

なみ かかる 波掛 波が打ちかかる。波がふかかる。玉葉雜三「いかなれば朽ちぬる袖ぞ、浪かかる岩根の松もきてこそはあれ」風雅「波かかるしづえは消えて磯の松、梢ばかりに積もる白雪」

なみ かく 波掛 波が打ちかく。波を注ぎかく。金葉「天の河かへさの舟へ浪かけて、乘りわづらはば程もふばかり」千載雜「よしさらば磯の苫屋に旅ねせん、波懸けぬとて潤れぬ袖かは」

なみ たつ 波立 波高くなる。波生ず。萬「かつしかのままの浦まを漕ぐ舟の、舟人騒ぐ奈美多都(ナミタツ)らしも」同「奈美多底(ナミタ)ばなどの浦まに寄る貝の、まなき戀にぞ年は(にける)」

なみ に いる 入浪 浪間に入る。波間に沒す。水中に入る。爲忠百首「月影の浪に入りぬと見ゆるかな、西なる山や八雲ゐるらん」夫木「浪に入る海より西の夕日こそ、蓮の花の姿なりけれ」

なみ のあや 浪綾 波の縱横に打ち寄るさまが綾織物を織る如くなればいふ。波文。源氏「細き枝どもをくひもちて飛びちがふをしの、浪のあやをまじへたる」榮華初花「御几帳の裾ども川風に涼しさまさりて、波のあやもけざやかに見えたるに」

なみ のいそ 波磯 波の打ちよするいそ。土佐日記「風によるなみのいそ(ろ)には、雪も春もえ知らぬ花のみぞ咲く」

なみ のいはがき 浪岩垣 波うちよする岩垣。玄玉「ひき殘す跡忍べとや萬葉草、涼しく寫る波の岩がき」

なみ のいりひ 波入日 波に入る日。波閒に沒する夕日。著聞「契りあれば蘇波の里に宿りきて、浪の入日を拜みつるかな」

なみ のうきくさ 波浮草 波に浮かぶ浮き草。浮かれありくものにいふ。爲忠百首「川の瀬になみのうき草うかれありく、そのたはれめをいかが飼まん」

なみ のうきす 波浮巣 波に浮きてある浮き巣。うきす(浮巣)を見よ。新拾遺「鴛鳥の下の通ひぢ絶えざらば、浪の浮き巣はうかれたりとも」

なみ のうきどり 波浮鳥 波に浮きて游ぐ鳥。した安からぬにいふ。略記「波の浮鳥住む程も、下安からぬ心かな」

なみ のうきね 波浮寢 波の上になす浮きね。水に浮かべる船中にて寢ること。千載五月雨は苫の雫に袖ぬれて、あなしぼたれの波のうきねや」續拾遺「問へかしな由良の港のかぢ枕、行くへも知らぬ波のうきねを」

なみ のうきはし 波浮橋 波たつ所に架けある浮橋。波にゆらるる浮橋。玉葉秋「待たれつる天の河原に秋立ちて、紅葉を洗す波の浮橋」

なみ のうへ 波上 波の上つら。波のおもて。はじやう。又、波のほとり。波頭。萬「奈美能宇倍(ナミノウヘ)に浮きねせしよひ、あども(か心がなしくいめに見えつる」古今雜二「沖べにもよらぬ玉藻の浪の上に、靡れてのみや戀ひわたりなん」

なみ のおよびぢ 波通路 波によりて通ふみち。ふなぢ。新古今雜三「見し人のおもかげとめよ清見潟、袖にせきもる浪の通ひ路」同神祇「熊野川くだすはやせの通ひ路」

なみ のところ 波心 波を人と見立てて、其の心。後撰雜三「蛍かりし浪の心はつちけれど、す起しによせし歎ぞ戀しき」蜻蛉日記「あさましやのどかに飼む床の上を、打ちかへしける浪の心よ」

なみ のしがらみ 波筋 しがらみの如くに見ゆる浪。せきとむるかと思はるる波。後拾遺「見渡せば浪のしがらみかけてけり、卯の花咲ける玉川の里」

なみ のしほさる 波潮騒 しほさる(潮)に同じ。萬「牛窪の浪乃塞左藝(ナミ)鳥どよみ、寄せてし君にあはずかもあらむ」

なみ のしめ 波標 一面に起つ波を、しめ張り渡したるに譬ふ。續後撰「ゆふかけて波のしめゆふ川やしろ、秋より先に涼しかりけり」清輔集「河やし

ろ浪のしめゆふ水の面は、月の光も清く見えけり」

なみ　の　しらいと　波白絲　波の白沫の長く續きたるもの。山家集「五月雨に水増さるらし、宇治橋や蜘手にかかる波のしら絲」浦島年代記「龜も悦び、合みし潮、波の白絲吹き出だし」

なみ　の　しらにぎて　波白幣　白き波を白にぎてと見立てていふ語。波のしらゆふ。諸国名所「御裳濯川の波の白和幣、水の青和幣」

なみ　の　しらべ　波調　波の音の如き調子。諸国名所「太鼓中興今打ち寄るも波の調べ」

なみ　の　しらゆふ　波白木綿　白き波を白ゆふと見たてていふ語。波のしらにぎて。新古今神祇「住吉の濱松がえに風吹けば、波のしらゆふかけぬまぞなき」新勅撰雜五「みぬ熊野の浦わの松の手向草、幾世かけきぬ浪の白ゆふ」

なみ　の　しわ　波皺　㊀波にて現はるる水面のあや。波紋。貫之集「菊の花ひぢて流るる水にさへ、波のしわなき宿にぞありける」㊁なみ(波)に同じ。古今雜躰「なにはの浦に立つ波の、なみのしわにやおぼほれん」行宗集「流れ行く年は今日にぞなりにける、おもてに浪のしわをとどめて」

なみ　の　すがぬき　波菅貫　川祓へに、波のかかる菅ぬき。拾玉「さもこそは川の瀬どとに川はらへ、ゐぜきにも又波の菅ぬき」

なみ　の　せき　波關　波のため往ききの容易ならざるを關所に譬へていふ語。堀河百首「いとどしく都戀しき夕ぐれに、波のせきもる須磨の浦風」

なみ　の　せきぢ　波關路　波の關のあるみち。夫木「さらぬだに人過ぎがたき清見潟、浪の關路に花や敷るらん」

なみ　の　せきど　波關所　波の關のある場所。建保三年名所百首「清見がた鎧の犀だに清うつ、なみの關どに明くる月かげ」

なみ　の　せきもり　波關守　波關(ヤセキ)を守るもの。波濤の音にさまされて家路に夢の通ひ難きなどにいふ。新後撰下秋「清見潟雲をばとめぬ浦風に、月をぞ宿す浪のせきもり」太平記三後醍醐東下向「清見潟を過ぎ給へば、都に歸る夢をさへ、通さぬ波の關守に、いとど涙を催され」

なみ　の　たかせ　波高瀨　波の高きところ。卽ち、淺瀨のある所。濱松「長濱や長き心を思ふまに、あやぶみかかる波のたかせを」

なみ　の　ただま　波手玉　舟漕ぐ人の手に波のかかりて月の映るを、手玉に見なしていふ語。草根集「しげ宿る浪の手玉も由良のとに、まかぢしげぬき渡る舟人」

なみ　の　たちゐ　波立居　波の、たち又はゐること。波の起こり又は靜まること。人の立ち居にかけていふ。金葉雜上「あふことはいつとなぎさの濱千鳥、なみの立ちゐにねをのみぞなく」榮華音樂「いけるかひなき身なれども、浪の立ちゐにつけつつも、かたみにこそは頼みしか」

なみ　の　たて　波楯　波の如く、一面に楯を並ぶること。諸八島「舟よりは岡の屋、陸には波の楯」

なみ　の　たま　波珠　波の白沫を玉と見たてていふ語。美しき波の白沫。新拾遺雜恋「君がため浪の玉敷く三津の濱、行きすぎがたし下りて拾はん」新續古今雜上「川ぎしのかけ行く水に打ちなびき、浪の玉ぬく青柳の絲」

なみ　の　たより　波便　寄せてはかへる波を、吾が方へ來て歸るに託する幸便なりとしていふ語。波のつかひ。續拾遺雜上「古へ の跡をば告げよ濱千鳥、昔にかへる浪のたよりに」玉葉雜三「離波寓浪のたよりははるかにて、汐ひにとまるあまの釣舟」

なみ　の　ちさと　波千里　波の、はてなく續けること。續古今雜上「わたつ海の波のちさとや霞むらん、幾かぬ靡せに立つ烟かな」續千載雜下「明石がた浪のちさとの末はれて、月は限りも見えぬ空かな」

なみ　の　ちぢみ　波縮　なみのしわ(波皺)に同じ。日本武尊吾妻鑑「波の縮みの小倉より、絲は眞紅の結び紐」

なみ　の　つかひ　波使　なみのたより(波便)に同じ。夫木「別かれにし千歳の浦の忘貝、今日こそ見つれ浪のつかひに」

なみ　の　つづみ　波鼓　波の音を鼓を打つ音に譬へていふ語。又、波の調べに打つ鼓。諸重修「白川の波の鼓や風のささら」同月雜「猛猛舞中興蘆の葉の笛を吹き、波の鼓どうと打ち」

なみ　の　て　波手　浪を自由にあやつる手。盛衰記四十二「熊野詣「究竟の楫取なり、浪の手風の手を作りて、大なる波をばついくぐり、小浪をば飛び越え飛び越え」

なみ　の　とざし　波扉　波音の閉近く聞こゆる戸ざし。又、その家。都のつと「清見潟波の戸ざしも明けて行く、月をばいかに夜半の關守」

なみ　の　とまや　波苫屋　波音の閉近く聞こゆるとまや。波の琴のかかる苫屋。夫木「冬の日の短きあしは霜がれて、なみのとまやに風ぞ吹らぬ」

なみ　の　なると　波鳴門　波音の高き瀨戸。玉葉「天の原浪の鳴門を漕ぐ舟の、都戀しきものをこそ思へ」

なみ　の　はつはな　波初花　波の花。のあらはれそめたるもの。新續古今雜上「吉野川氷り解け行く春風に、あらはれそむる波のはつ花」

なみ　の　はな　波花　㊀波の白沫を花に見たてていふ語。貫之集「潮ごとに咲き出づるなみのはな見れば、海には春も暮れぬなりけり」㊁食鹽をいふ、女詞。

なみ　の　はなずり　波花摺　風に吹かれなどして數多の花が波立ちて入り亂るるを、互ひに色を摺りつくるものと見立てたる語。夫木「よせかへるなみのはなずり亂れつつ、しどろにうつるま野の萩原」

なみ　の　へ　浪上　なみのうへ。波上。萬「かぢの音しつつ浪上(ナミ)を、い行きさくくみ」同「波上(ナミ)ゆ見ゆる兒島の雲がくり、あないきづかしあひ別かれいねば」

なみ　の　ほ　波穂　なみほ(波穂)に同じ。記「自波穂(ナミ)乘天之羅摩船」而中興有歸來神」萬「おしていなと稻は搗かねど奈美乃保(ナミ)の、いたぶらしもよ、きぞ一人ねて」

なみ　の　ほ　波帆　船の、波に從ひて走るが、帆かけて走るに似たればいふ。拾玉「浦風に浪の帆かくる月の船、こよひ明石や泊りなるらん」

なみ　の　まくら　波枕　なみまくら(波枕)に同じ。新古今冬「水鳥の鴨の浮きねの浮きながら、波のまくらに幾夜へぬらん」同雜「つくづくと思ひあかしの浦千鳥、なみの枕になくなぞ聞く」

なみ　の　まよひ　波迷　波のために心まよふこと。源帚木「荒かりし浪のまよひに、住吉の神をばかけて忘れやはする」

なみ　の　もくづ　波藻屑　波に漂ふもくづ。諸雜「海士の捨て草の、波の藻屑の寄るべもなくてあられん物か、あさましや」

なみ　の　もん　波紋　なみのあや(波紋)に同じ。又、波形の紋。著聞「洲濱に打ちしきあり、青き色のうすものをもて浪の文になずらふ」松風村雨東帶鑑「波を切ったる波の紋、巴に廻れば巴に追っかけ」

なみ　の　やへがき　波八重垣　波の幾重も起つを、幾重も重なりたる垣に見立てていふ語。夫木「すさのをの尊を新るともなしに、こえてぞ見ましなみのやへがき」

なみ　の　ゆき　波雪　波の白沫を雪に見立てていふ語。諸元服「ほのぼのとうつろふ富士の湖の、波の雪も時知らで、春夏秋をば送れども」

なみ　の　ゆふ　波木綿　なみのしらゆふ(波白木綿)に同じ。新六帖「世とともに波のゆふこそかけつらめ、神さびたてる磯のつままに」

なみ　の　ゆふはな　波木綿花　波の花。を白木綿に見立てたる語。夫木「水無瀨川高せ吹きまく山颪に、岩さきのぼる浪のゆふ花」

なみ　の　よるよる　波寄寄　波の打ち寄るといふに、夜夜又は緣(ヨスガ)をかけていひたる語。新古今雜上「うど濱のうとくのみやは世をばへん、波のよるよるあひ見てしがな」續千載雜「夏衣かとりの浦のうたたねに、浪のよるよる通ふ秋風」

なみ　の　を　波緒　波の音を、琴などの緒を弾ずるによりて出でたるものと想像していふ語。古今雜上「都まで響き通へる唐琴は、浪のをすげて風ぞ弾きける」新六帖「波のをを風のかけたる唐琴に、ひきとめられぬ舟人ぞなき」

なみ　よる　波寄　波たちてよる。波、打ち寄る。金葉雜「鶴鳴く眞野の入江の濱風に、をばななみよる秋の夕ぐれ」

なみ　を　くふ　食波　波をかぶる。

(誹)波にも磯にも著かず　次條に同じ。平家七「忠度「一門には引き別かれて落ち留まりぬ、浪にも磯にも附かぬ心地ぞせられける」盛衰記四十二「義高「源平の亂逆に不安塔「浪にも磯にも著かぬ風情也」

(誹)波にも著かず磯にも著かず　どちらつかずなり。中ぶらりなり。たよりなし。沖にも附かず磯にも離る。盛衰記「源氏は未打入「平家には引き別かれぬ、浪にも付かず磯にもつかぬ心地かな」

(誹)浪にも著かず磯にも離る　前條に同じ。太平記「武藏守に離れぬ、御方の勢共は何地へか引きぬらん、浪にも不著磯にも離れたる心地して」

なみ　並(名・副)　㊀並(ナミ)むこと。並(ナミ)みたること。又、そのもの。ならび。つら。つづき。列。記「齒那美(ナミ)はし愛なす」萬「ともなくありこしものを、老い奈美(ナミ)にかかる戀にも我れはあへるかも」同「人奈美(ナミ)にあれも作るを」㊁そのたぐひ。その一類。同類。等類。ひとしなみ。比類。土佐日記「これなみに多かれど、書かず」源帚木「彼の中の品に取り出でていひし、此のなみならんかし」同玉鬘「我がなみの人にはあらじ」㊂よくもあらず惡しくもあらぬこと。よのつね。おほかた。尋常。通例。ひと通り。

なみ　並(名)　なみ(並)に同じ。

なみ-いしゃ　並醫者(名)　伎倆のなみなる醫者。平凡なる醫者。庸醫。新永代蔵「元來上手なれば、雜治必死の症となみ醫者の捨てたるも、手ぎはよく不日に功をあらはし給ふ」

なみ-いた　波板(名)　㊀なまこいた(海鼠板)に同じ。㊁演劇の道具の一。波の形を畫き作りたる板。

なみ-いと　波絲(名)　かべいと(壁絲)に同じ。

なみうち-さは　波打際(名)　波の打ちよするところ。なぎさ。みぎは。盛衰記「波打ぎはを歩ませ落ちける」太平記二「波打際に扣へて、續く萬「若ゆ釣る松浦の川の川なみの、奈美(ナミ)にしもはば我れ戀ひめやも」字鏡「倫位濱也、下屋也、人」雪女五枚羽子板「女と思ひ怪我するな、並みやつうづな女でない」圖物毎又は時毎などになること。どと。「日なみ」「月なみ」「かどなみ」夫。

なみ　なし　並無　ならびなし。比類なし。散木集雜歌「いかにいかにと見向かへてはありなめど、猫しなみなき品ぞほしけき」

なみ(副)　なさに。なきまま。なくて。なきゆゑ。記「おほたくみをぢ那美(ナミ)こそ、すみかたぶけれ」萬「君に戀ひいたもすべ奈美(ナミ)、あしたづのねのみし泣かゆ朝よひにして」同「富み人の家の子どもの著る身奈美(ナミ)、くたし捨つらんきぬ綿らはも」

なみ-あし　並足(名)　早くも遲くもあらぬ足どり。なみの速度にて歩むこと。普通の足なみ。(はや足・かけ足などの對)

なみ-あひ　波間(名)　なみま(波間)に同じ。

なみ-ぢ　並醫者(名)　なみ醫者に同じ。

なみ-ぢ　波板(名)　なまこいた(海鼠板)に同じ。

なみ-ぢ　波絲(名)　かべいと(壁絲)に同じ。

なみ-ぢ　波打際(名)　波の打ちよするところ。なぎさ。みぎは。盛衰記「波打ぎはを歩ませ落ちける」太平記二「波打際に扣へて、續く御方をぞ待ちたりける」

なみえ-げら　波江啄木鳥(名)【動】鳥類中、攀禽類の一種。啄木鳥(キツツキ)の一類。翼の長さ五寸五分許り。上面黑くして、背上に三條の白帶横走す。我が國、大和國に產す。

なみ-おと　波音(名)　波がうねりておこす音。波の打ち寄せ又は引く時のおと。濤聲。

なみ-おにがはら　波鬼瓦(名)　鬼瓦の一。その下の左右に波の模樣あるもの。

なみ-おろし　波颪(名)　波の風。波を吹き立つるつよき風。諸雜「有明の月は入る沙に、吹く靈風、嶮くは波おろし、はやち・千潟・あひの風、吹き曇れども」

なみ-かげ(名)　波蔭にて、山蔭の如く、波の打ちよせざる所をいふか、又は、波影にて、波のしげく打ち寄することか。物類名稱「蛸鈴日記「なみかげの見やりに立てる小松原、心をよすることぞあるべし」

なみかけ-ごろも　波掛衣(名)　波のかかるる衣。波をふりかけたる衣。波に濡るる衣。波のぬれぎぬ。新古今雜二「須磨の蜃の浪かけ衣、よそにのみ聞くは我が身になりにけるかな」續後撰秋中「里のあまの浪かけ衣よるさへや、月にも秋は藻しほ垂るらん」

なみ-がしら　波頭(名)　波のいただき。波の穂。はとう。松風村雨東帶鑑「あとより寄せ來る波頭に漂ふ委は」俳諧新選「白萩や細茨川の波頭」

なみ-かず　並數(名)　人並のかず。後撰雜三「なみかずにあらぬ身なれば、住吉の峰にもよらずなりやはてなん」

なみ-かぜ　波風(名)　㊀波と風と。波或ひは風。風吹きて波の立つこと。波をおこす風。風波。かぜなみ。風濤。源

なみが　波形　（名）波の如きかた。波の紋。爲忠百首「なみがたのみづまき雲にかげくれて、鹽に見ゆる月のふなかげ」

なみ-かたらま　並片馬　（名）幕葉にて三段の段位の稱。幕葉奇覽「上、幕葉段位、三段、並片」

なみ-かはせ　並爲替　（英 Bomittance; draft）（名）【商】そうきんかはせ（送金爲替）を見よ。

なみ-がへし　波返　（名）雅樂の青海波の曲にある太鼓の打ち方の祕曲。諸雅楽、青海の青海波の波返し、かへすや袖の折りも得て」大鏡冠、樂は平調波返し、心耳に澄みて覺えけり」

なみ-き　並木　（名）一並み立てる木。列樹。爲尹千首「名もしるしなみ木の梅の宮居して、所所にまじる榊葉」小大君集「君しあればなみ木の花も賴まれず、いたくな吹きそ木がらしの風」二道路の兩側などに、一列に樹木を植ゑつけたるもの。又、その木。若風俗「並木の眞砂道百閉ばかり行きて」槍權三「鳥居通りの流鏑馬馬場、並木に落つる風の音」

なみぎ-がくれ　並木隱　（名）並木に隱るること。並木にて隱れたる所。若風俗「野路に出で、人を忍べる風情にさし足して、並木がくれに行くを」

なみぎ-さう　（名）【植】羊形科、たつなみさう屬の多年生草本。莖の高さ一尺許りにて方莖。葉は對生、披針形、鈍鋸齒を有す。中部以上の葉腋に一箇づつ紫碧色の不整齊花を開く。我が國、各地の山地に自生す。ほたるさう。るりたつなみ。

なみぎ-しき　並木敷　（名）並木のための敷地。即ち、道路より並木の根もとだけ取り殘せる土地。並木の立てる土地。

なみ-ぎぬ　波衣　（名）大嘗會の時、主上の沐浴し給ふ浴槽に覆ふ絹なりと。代始和抄「浪ぎぬといふは、御湯舟におほふきぬ也」

なみ-ぎは　波際　（名）なみうちぎは（波打際）に同じ。新六帖「みさごゐる磯のまさごの打ち上げに、波ぎは見えて寄るもくづかな」

なみ-ぎり　浪切　（名）しほきり（潮切）に同じ。

なみぎり-の-つむじ　波切旋毛　（名）

なみ-きる-ひれ　切浪比禮　（名）古語。古代の寶物。浪をしづむるといふひれ。駿河記「切浪比禮（ちなみ）」

なみ-くぐり-ぶね　浪潛船　（名）浪の入らぬ樣に包みたる輕き小船。波浪の中に出沒すとも覆へり沈むことなし。

なみ-くぬぎ　（名）釣樟根（釣樟）の根。藻鹽草「釣樟根（くぬぎ）」

なみくも-の　（枕）なみくもは靡く藻にて、藻の靡くが如く我れに靡ける愛しき妻といふ意にて、うつくしづまにかく。冠辭考「一說、浪雲は浪の形の雲の義なりと。されど、宣長及び萬葉古義の、誤字なりとせるが可なるべし。萬三「浪雲乃（なみくも）うつくしづまと」

なみ-くら　並藏　（名）並みたてる藏。ならべて作れる藏まち。拾遺雜賀「高島やみをの中山そまたてて、造りかさねよ千代のなみくら」長秋詠草「君が代は千重の並倉際もなく、作りかさねよ横の枝人」

なみ-くるま　波車　（名）かはふね（川舟）の異名。蔵玉「波車（阿波物語に有り）」波を越してすること。波を陽てたること。萬三「朝なぎにまかぢ漕ぎ出て見つつこし、みつの松原浪越（なみこし）に見ゆ」承安二年十月廣田社歌合「浪どしにや、への潮路を見わたせば、海人の友船數ぞ消え行く」

なみ-こし　波越　（名）

なみ-しな　並品　（名）なみなみの品もの。なみのしな。普通の品。

なみしな　（名）あま（海人）の異名。

なみ-す　無　（他動詞）【無（み）す義】ないがしろにす。あなどる。蔑視す。萬如す。盛衰記「海人、君をもなみし奉り」

なみ-せき　浪關　（名）和船の名所。

なみ-せん　波錢　（名）背に波紋ある錢。即ち、寛永眞鍮錢・精鐵錢及び文久錢の總稱。四文錢。當四錢。四當錢。

なみそ　（名）【動】あをだいしやう（青大將）の異名。

なみ-そや　並征矢　（名）征矢の尋常なるもの。今昔「節黑の胡錄の箙跨に、並征箭四十許り差したるを負ひたり」

なみだ　涙　泪　（名）一眼球の上外方にある涙腺より分泌して、眼球を潤す透明なる水樣液。感情の激したる時などに出づ。なんだ。萬「いもが見しあぶちの花は散りぬべし、わが泣く那美多（なみた）いまだひなくに」同「ま袖もち奈美太（なみた）を拭ひ、むせびつつ語らひすれば」懸水物語「涕涙。說文云、涕淚太奈美（なみた）目汁也」二涙を流すこと。涙にくるること。泣くこと。涙ながらにすること。流涕。宇津保「中納言、なみだをも惜しまず」狂言「涙のていにて居たりしが」五人女「何ながらへて甲斐なしと、泪に語るにぞ」三思ひやり。同情の涙。人情。情愛。四一片の情にて與ふる物どとにいふ語。おなさけ。「なみだ金」

なみだ-おほし　涙多　一涙をおとすこと多し。泣く時節多し。悲しみ多し。榮華初花「帥殿、中納言殿など、あさましう涙多うおはしける身どもかな」二同情の心あつし。多涙なり。多慨なり。

なみだ-かたて　涙片手　片手にて涙をおさへつつ。涙ながら。なきながら。なくなく。曾根崎心中「涙片手に袂を見れば」川中島合戰「跪方泣く泣く、涙片手に琴引き寄せ」

なみだ-がち　涙勝　涙の優しがちなること。泣きがちなること。泣くことの多きこと。源夕「すずろになみだがちなり」同蜻蛉「年の積もるままに、いとなみだがちにてすぐし侍るを」

なみだ-くもる　涙曇　涙にくもる。涙のために暗くなる。千載「大方にさやけからぬか月かげは、涙くもらぬ人に見せばや」

なみだ-ながら　涙乍　涙を流しながら。涙かた手。又、涙を其のまま。涙も共に。續拾遺「かき流す涙ながらぞ手向けつる、物思ふ袖の露の玉づさ」新續古今「思ひやる涙ながらやしぐるらん、都の方の山の端の雲」

なみだ-に-おぼほる　溺涙　涙の川に溺る。正體なきまで泣く。續松「我れもぼろぼろと泣くと思ふに、泪におぼほれて打ち驚きぬ」榮華玉「當の行啓のめでたかりつるを思ひあはするに、あさましう涙におぼほれまどふ」

なみだ-に-おぼる　溺涙　前條に同じ。榮華「泣く泣く申させ給ふままに涙におぼれ給ふ」同烏邊「そこらの女房、涙に溺れたり」

なみだ-に-くらす　暗涙　涙のために暗くなす。涙に曇らす。玉葉「露もさはおもかげをのみ身にそへて、なみだにくらす有明の月」續千載「ひとりわが涙にくらす月影を、誰れとさやかに人の見るらん」

なみだ-に-くらす　暮涙　涙にくれて月日を暮らす。泣きくらす。

なみだ-に-くる　暗涙　涙のためにくらくなる。涙曇りとなる。濱松「いかばかり涙にくれて思ひ出でん、西へ傾く月を見つつも」源夕「雲の上もなみだにくるる秋の月、いかですむらんあさぢふの宿」

なみだ-に-くれる　暮涙　泣きつつ月日暮る。泣きしづみて途方にくる。悲しみのため分別なくなる。盛衰記「十五、宣都宮、南都焼討」共に涙にくれて、行く前も見えず」一代男「こまごまと書き續けしを、涙にくれて讀む中に」

なみだ-に-しづむ　沈涙　なきしづむ（泣沈）に同じ。萬「吾が袂まかむと思はむますらをは、無水定（かづ）白髮生ひにけり」源夕「涙にしづみ給へるを見奉らせ給ふも」

なみだ-に-しぼる　絞涙　涙を拭ひたる袖などが、しぼるばかりになる。續千載「思ひきや泪にしぼる袖になほ、身を知る雨をそへんものとは」

なみだ-に-まよふ　迷涙　涙の闇にまよふ。涙にくれて心まよふ。重井筒「涙に迷ふ其の中にも、男はさすが男にて」

なみだ-に-むす　喧涙　涙のため犀のむせるほどになる。犀のよくたたぬまで泣く。榮華「鳥「涙にむせて仕うまつる」宇治拾遺「涙にむせかへりて、泣く泣くいひければ」

なみだ-に-むせぶ　喧涙　前條に同じ。榮華「なみだにむせびて、何事もすがすがしう申さで」宇治拾遺「涙にむせびながら申すやう」

なみだ-の-あめ　涙雨　一涙のしげくこぼれ落つるを雨に譬へていふ語。雨とふる涙。宇津保「上、山はさえ川べの氷雪しみて、涙の雨とふりし宿かな」後撰「五、めも見えず涙の雨のしぐるれば、身のぬれ衣はひるよしもなし」二なみだあめ（涙雨）に同じ。

なみだ-の-あられ　涙霰　霰の如くはらはらと落つる涙。井筒榮平河内通「くらむ眼に涙の霰はらはらはら」

なみだ-の-いけ　涙池　涙を湛へたるところ。涙の淵。宇津保「藤原、ならびゐて遊びしものを、鴛鴦のなみだの池にひとりゆくかな」

なみだ-の-いけん　涙意見　涙ながら意見すること。涙片手になす忠告。今宮「心中「泣いつつ威しつさまざまに、慈悲心餘る涙の意見」

なみだ-の-いと　涙絲　涙の垂るを絲に見立てていふ語。涙の雨の絲。涙の淵の白絲。涙の筋。聖德太子繪傳記「涙の絲のむすばほれ、より合ふ絲の哀れさや」曾根崎心中「二人の心の不便なる、涙の絲の結び松」

なみだ-の-いろ　涙色　一いたく歎きに沈む時は血の涙を流すといふより、その涙の色、即ち紅色をいふ。後撰「三「世の常のねをしなかねば、あふことの涙の色もことにぞありける」伊勢集「涙の色のくれなゐは、我れ等が中のしぐれにて」二泣くやうす。悲歎のいろめ。謠「先非を悔ゆる父が心、涙の色にも見ゆらんものを」鎌田兵衛名所歌「思ひを告ぐる涙の色」

なみだ-の-うき　涙憂　涙を流すほどの憂き事。金葉「上、おのづから夜かるるほどのさむしろは、涙の憂きになると知らずや」

なみだ-の-うしほ　涙潮　あまたの涙を潮水に譬へていふ語。浦島年代記「白波寄するせきかくる涙の潮ひったりと、身も濡れ烏の磨ばかり」

なみだ-の-うみ　涙海　涙の多く流ふるを海に譬へていふ語。泣きしづむこと。宇津保「藤原」ただなみだのうみをたたへゐたり」狹衣「かぢをたえ命も絕ゆと知らせばや、涙の海に沈む舟人」

なみだ-の-くも　涙雲　涙に曇れるを、雲の月などをおほふに譬へていふ語。夫木「仰げども空行く月の晴れやらぬ、涙の雲を夜半の風拂ふなことの」

なみだ-の-くれ　涙暮　涙にくれたること。又、その時。夫木「大井河ゐせきに淀む筏しを、涙のくれにまつぞかなしき」

なみだ-の-とほり　涙氷　流れたる涙の氷れるもの。いたく悲しめるにいふ。涙のつらら。新勅撰「冬、閨塞きねくたれ愛の長き夜に、涙の氷むすばほれつつ」聖德太子繪傳記「埋火のあたりは春の心地して、涙の氷り溶けぬべし」

なみだ-の-こり-を-かく　掻涙垢離　垢離の行をなしてもよきほど涙を流す。盛衰記「十五、都落ち」「妻子の事を思ひ出でて、故郷の方を見渡して、涙のこりをぞかき給ふ」

なみだ-の-ころも　涙衣　なみだのそで（涙袖）に同じ。夫木「うき人になみだの衣ひきかへし、宿すと語れ袖の月かげ」

なみだ-の-しぐれ　涙時雨　なみだのあめ（涙雨）に同じ。新勅撰「五、月の内の桂の枝を思ふとや、涙の時雨ふることちする」夫木「いかばかりなみだの時雨色なれば、なげきおほしの山を染むらん」

なみだ-の-しほ　涙潮　なみだのうしほ（涙潮）に同じ。曾丹集「谷川の涙のしほに朽ちぬべし、世にはからくて住みの江の松」

なみだ-の-じゅず　涙數珠　なみだのたま（涙玉）に同じ。懸八卦柱曆「母は涙の數珠袋、ふくさ物取り出だし」

なみだ-の-しるべ　涙導　涙を誘ふもの。涙ぐましむるものどと。新六帖「衣手の露吹き拂ふ秋風は、やがてなみだのしるべなりけり」

なみだ-の-すぢ　涙筋　涙の絲筋。流るる涙。壽門松「美ましさと悲しさと、涙の筋は多けれど」

なみだ-の-すゐしゃう　涙水晶　なみだのたま（涙玉）に同じ。曾我虎磨「伏し拜む手には涙の水晶を、數珠に貫く白玉の」

なみだ-の-すゑ　涙末　涙の成り行く末。なみだのはて。千載「あさましやおさふる袖の下くぐる、泪の末を人や見つらん」續後撰「あはでふるなみだの末や增さるらん、妹せの山の中の瀧つ瀬」

なみだ-の-せゞ　涙錦　涙をせきとむるものどと。謠「物を乞ふ、乞ひ得ぬ時は涙の關寺に歸り侯」

なみだ-の-そこ　涙底　悲しみのそこ。涙の淵の最も深きところ。千載「懸ひわぶる心は空に浮きぬれど、涙のそこに身はしづむかな」新勅撰「二、昔思

ふ涙のそこに宿してぞ、月をば袖のものと知りぬる」

なみだ の そで 涙袖　涙を拭ふ衣の袖。涙のかかる袖。なみだのころも。續後撰愚三「いかにせん涙の袖に海はあれど、同じ渚に寄る舟もなし」續後拾遺墨「かたみとてきるも悲しき藤衣、なみだの袖の色に染みつつ」

なみだ の たま 涙玉　一涙の露を玉と見立てたる語。玉なす涙。大つぶの涙。土佐日記「緒をよりてかひなきものは、落ち積もる涙の玉をぬかぬなりけり」古今哀傷「藤衣はづるる絲はわび人の、涙の玉の緒とぞなりける」二かうじんの玉(鮫人珠)に同じ。かうじん(鮫人)の條を見よ。拾遺墨「遠くゆく人のためには、我が袖の涙の玉も惜しからなくに」

なみだ の たまくら 涙手枕　涙のかかる手枕。悲しみ寝ぬる時の手枕。謠清經「くゐる涙の手枕を、ならべて二人が逢ふ夜なれど」

なみだ の つま 涙端　涙をさそふいとぐち。涙のしるべ。後成集「朽ちはてん泪のつまと知らざりき、契りし中の夜半のさ衣」拾遺愚草「都思ふ涙のつまとなるみ潟、月にわれとふ秋の汐風」

なみだ の つむじ 涙旋毛　馬の旋毛。ふうるゐ(風涙)に同じ。

なみだ の つゆ 涙露　涙のしづくを、露に見立てていふ語。拾遺雜上「限りなき涙の露に結ばれて、人のしもとはなるにやあるらん」榮華玉鳳「數ならぬ涙のつゆを添へてだに、玉の飾りをまさんとぞ思ふ」

なみだ の つらら 涙氷柱　なみだのこほり(涙氷)に同じ。新古今雜上「年暮れし泪のつららとけにけり、苦の袖にも春や立つらん」續古今雜「誰れか又涙のつらら袖さえて、霜夜の月にもの思ふらん」

なみだ の とこ 涙床　涙を流す床。涙に濡れたる寢床。玉葉雜三「待ち瓢に人には見えじとばかりに、涙のとこにしをれてぞぬる」新拾遺雜三「ひとりぬる泪の床の濡れどろも、逢ふ夜も知らで朽ちゃ果てなん」

なみだ の なみ 涙波　涙が浮かび、又は涙に沈むを、波の浮き沈むにいひかけたる語。謠舟「浮き沈む涙の波のうつぼ舟」

なみだ の はつしほ 涙初入　涙の色に初めて一しほ染むること。夫木弐「この比の雁のなみだのはつしほに、色わきそむる峰の松風」

なみだ の はつそめ 涙初染　涙の色に初めて染むること。紅涙に染め初むること。初めて涙を流すこと。草根集雜「時鳥啼くや涙の初そめに、木木の若葉や色に出づらん」

なみだ の ひとふで 涙一筆　涙ながら書く一ふで。泣く泣く記す短文。大磯虎稚物語遊行「しども涙の一筆を、文に書くべきかな川や」

なみだ の ひま 涙際　涙のたえま。涙の出でざる時。榮華著書は花「しのびつつ、涙のひまにはいひかはしたり」新後撰雜上「こよひとて涙のひまもなきものを、いかなる人の月を見るらん」

なみだ の ふち 涙淵　淵と流へたる涙。涙の多きをいふ語。なみだのいけ。齊宮女御集「かけ見えぬ涙の淵は衣手に、うづまく泡の消えぞしぬべき」夫木雜「たむけする廣瀬の神のしるしあらば、戀のなみだのふちもあせなん」

なみだ の ほか 涙外　一涙をよそにして。涙の出でざる時。涙のひま。新勅撰秋上「荻の葉に風の音せぬ秋もあらば、涙のほかに月は見てまし」續門葉雜秋下「いつよりかうき世の秋をのがれ出でて、涙の外の月を見るべき」二涙といふもののほか。涙以外。續古今冬「柴の戸に雨のしぐるる木の葉かな、涙の外に袖は濡れねど」

なみだ の やみ 涙闇　涙にくれて心の闇となること。悲歎の極、分別を失ふこと。戀八卦往暦「影を隠すは母の慈悲、打つ秋は父の慈悲、心かはると子や思ふ、哀れは同じ涙の闇、逢ひの上の迷ひなり」鞠山姥「太刀振り上げし手も弱り、涙の闇に迷ひしが」

なみだ の わかれ 涙別　涙ながら相別かるること。又、その別離。なきわかれ。世繼曾我「さらばさらばとの、涙の別れぞ哀れなる」

なみだ はなる 涙離　涙と緣遠くなる。悲しみに離る。涙の外となる。榎十郎「山かげはうき世の外と思へども、涙はなれぬ墨染の袖」

なみだ まじり 涙交　涙のまじれること。涙ながらなること。夕霧阿波鳴渡「涙まじりの笑ひ顔」

なみだ みだる 涙亂　涙のために正體亂る。性根なきまで泣く。泣き亂る。夕霧阿波鳴渡「叩いつ擦っつ聲を上げ、涙亂れて髪ほどけ、書も性根も無かりけり」

なみだ を ひとめ うく 涙浮一目　目一ぱいに涙を浮かばす。涙目に滿つ。眼中みな涙なり。源留木「涙を一めうけておはするに」同繪「涙をひとめうけて見おこせ給へる、いと忍びがたし」

なみだ を ふるふ 振涙　涙をこぼす。(謠涙を揮って馬護を斬る　下文より出でて、私情を捨てて法を正しくするにいふ。三國志魏志「寃爲政無私、馬謖素負寃所知、及敗軍、流涕斬之、而郭其後」

なみだ-あめ 涙雨　涙が降ると思へば照る日も曇る、關の小萬が涙雨か」いふ雨。虎が涙雨の類。丹波與作「與作

なみ-たいてい 並大抵　(名・副)一なみなみ。普通。平凡。凡庸。二よのつね。おほかた。

なみだ-がすみ 涙霞　(名)涙が霞となりて、目のはきと見えぬこと。涙のために眼のかすむこと。涙ぐもり。謠松山鏡「戀ひ痩せ痩せ瓢ぞ見ても泣く、涙がすみの悲しやな」

なみだ-がは 涙川　(名)涙の多く流るるを川に譬へていふ語。川と流るる涙。涙の川。土佐日記「行く人もとまるも袖の涙川、みぎはのみこそ濡れまさりけれ」古今雜「涙川何みなかみを尋ねけん、物思ふ時の我が身なりけり」

なみだ-さん 涙金　(名)同情の涙を撒きて與ふる金銀。おなさけのかね。抵當流れ又は解雇などの時、權利者又は主人などより抵當主又は罷免人などへ與ふるものの類。

なみだ-ぐさし 涙含　(形二)涙ぐむやうなり。記「やましろのつつきの宮にもの申す、あがせの君は那美多具麻志(ナミタグマシ)も」萬「いもとこしみぬめの崎を、歸るさに、一人して見れば涙具末之(ナミタグマシ)も」

なみだ-ぐむ 涙含　(自動四)涙、きざしめぐむ。涙、催し來たる。涙、眼にさしぐむ。泣かんとす。宇津保菊「なみだぐみてものし給へる、いとほしかりつれ」源御法「なみだぐみ給へる御顔のにほひ、いみじうをかしげなり」

なみだ-くもり 涙曇　(名)涙のため

に目のくもりかすむこと。歎きのためにや、空の曇ること。涙のためにはればれしからぬこと。謠紅葉「民の歎きの心にや、涙曇りの春の色」同檜垣「涙曇りの顔ばせは、それとも見えぬ袞へを」

なみ-たけ (名)「植」をなもみ(菓耳)の異名。藻鹽草「菓耳(なもみ)、菓耳(たけ)」

なみだ-ごころ 涙心　(名)涙を催す心。涙がちなる心。哀れを覺ゆる心。謠三井「古へを今思ひ寐の夢だにも、涙心のさびしさに」

なみだ-ごゑ 涙聲　(名)涙ぐみたる時の聲。泣かんとする音聲。なきごゑ。

なみだ-じむ 涙染　(自動四)涙ににじむ。涙に濡る。

なみだ-じる 涙汁　(名)なみだ(涙)に同じ。「姑の涙じる」

なみだ-せん 涙錢　(名)なみだきん(涙金)に同じ。

なみだ-たり 涙垂　(名)經穴(ツボ)の名。目の下、凡そ七分ほどのところ。和名抄「黃帝內經云、目下謂之承泣(太素)」

なみ-だち 並立　(名)なみたつこと。ならびてたてること。萬「ふたがみのたふとき山の、併立(ナミダチ)の見がほし山と」

なみ-だちん 並駄賃　(名)なみの駄賃。通例の駄賃。椀久物語「白馬は並駄賃より高し」

なみ-たつ 並立　(自動四)ならびてたつ。ならびたつ。宇津保歌上「大いなる松に藤かかりて、廿丈ばかりなみたちたり」後撰雜「なみたてる松の綠の枝わかず、をりつつ千代を誰れとかは見ん」

なみ-たて (名)魚の尾の名所。うを(魚)を見よ。

なみだ-はやし 涙早　(形二)なみだもろし(涙脆)に同じ。

なみだ-べんけい 涙辨慶　(名)なきべんけい(泣辨慶)に同じ。

なみだ-ぼふし 涙法師　(名)なきむし(泣蟲)に同じ。散木集遊歌「俱かに憂りてしぐれのしければ申したりける。おほ空はなみだぼふしになりにけり」

なみだめ 涙眼　(名)涙ぐみたる眼。涙の目もと。櫻陰比事「泪眼になって申し上ぐる」

なみだ-もろ 涙脆　(名)なみだもろし(涙脆)の語幹。蜻蛉日記「ただ涙もろなるこそ、いと苦しかりけれ」源野分「しかはかなきことにつけても涙もろにものし給へば」

なみだ-もろ-げ 涙脆氣　(副)なみだもろさう。

なみだ-もろ-さ 涙脆　(名)なみだもろき度合。源竹川「泣い給ふも、ふるめい給ふしるしの涙もろさにや」狹衣「常よりはことなる御涙もろさなり」

なみだ-もろし 涙脆　(形二)一涙を堪ふる力、弱し。ややもすれば涙出づ。蜻蛉日記「よろづに付けて涙もろくおぼゆ」狹衣「いまいましきまで、涙もろくおはします」二思ひやり深し。氣が弱し。意志動かされ易し。なさけぶかし。慈悲ぶかし。多涙なり。國姓爺後日合戰「さ程涙脆うては追っ付け國を切り取られ中略雜人の刃に罹り給はんは今の事」浮世床下「おらが親父は、おめめ(目)へ達の知ってる通り、泪もろい性だから」

なみ-ぢ 浪路　(名)波の上の、船の通ふ路すぢ。ふなぢ。航路。土佐日記「白妙のなみぢを遠くゆきかひて、我れに似べきは誰れならなくに」古今物名「彼の方にいつからさきに渡りけん、波路は跡も殘らざりけり」

なみぢ の きり 波路霧　波路に立ちこめたる霧。水上にたてる霧。玉葉雜下「消見湖波路の霧ははれにけり、夕日に殘る三保の浦松」

なみぢ の くも 波路雲　波路にたちたる雲。水上の雲。玉葉雜「明け渡る波路の雲のたえまより、むらむら白き雪の遠山」

なみづま-ざみ 波豆麻君　(名)なみづまといふ土地の住人を云ふか。一說、波里摩著の誤りにて、はりすりつけと訓むべしと。宣長説萬「住の吉の波豆麻君(ナミヅマ)が馬のりどころも、さにづらふあやめをすゑて縫へる衣ぞ」

なみ-と 浪音　(名)なみのおと。なみおと。萬「天の川浮き津の浪音(ナミト)さわぐなり、わがまつ君し船出すらしも」

なみ-とう 並等　(名)普通の等級。高くも低くもなき等級。中等。

なみ-なと 浪音　(名)なみのおと。浪のと。なみと。萬「ゆときさきに奈美奈等(ナミト)ゑらひ、しるへには子をら妻をらおきてらも來ね」

なみ-なみ 並並　(名・副)一なみ(並)の重言。ならぶこと。ならびたること。萬「何せむとかたがひは居らむ、いなもうも友の波波(ナミナミ)我れも依りなむ」二あたりまへ。なべて。よのつね。つねなみ。ひとほり。通例。尋常。平凡。人なみなみ。枕「ねずもちの木、人なみなみなるべきさまにもあらねど」源夕顏「かやうかやうのなみなみまでは、おもほしかからざりつるを」同末「なみなみの人ならばこそ、荒かにも引きかなぐらめ」

なみ-なみ 波波　(副)波だつまで。あふるるばかり。十二分。滿滿。(主として流動物にいふ)狂言水鳥「隣りの田には、水がなみなみとある」

めたる霧。

なみ-に-うさぎ 波兎　(名)なみ(波)を見よ。

なみ-に-うさぎの-ゑる 波兎丸　(名)紋所の名。

なみ-に-うらぐく 波裏菊　(名)紋所の名。

なみ-に-ちどり 波千鳥　(名)紋所の名。

なみ-に-つばめ 波燕　(名)紋所の名。

なみ-の-と 波燕　(名)【動】天蛾の略。

なみのこ-がひ (名)【動】紋體動物中、蝦蟹類の一種。殼は稍三角形にして丸味を帶び、長さ一寸許り、帶白乃至褐色の地に暗色の放射帶及び輪線帶を有し、內面は紫色なり。我が國、各地の淺海に產す。

なみ-の-まくら 波枕　(名)【植】をかひじきの異名。

なみ-の-ゑる 波丸　(名)一波の形を丸く描きたる模樣。二紋所の名。

なみ-はづれ 並外　(名)なみなみにはづれたること。通常のものに異なりたること。又、そのもの。

なみ-ひとつともゑ 波一巴　(名)紋所の名。

なみ-ふる-ひれ 振浪比禮　(名)古語。古代の寶物。浪を起たしむるといふひれ。記中「振浪比禮(ナミフルヒレ)」

なみ-ほ 波穂　(名)浪の高く立つこと。浪のいただき。なみがしら。波のほ。神代紀下「秀起浪穂(ナミホ)之上、起八尋殿」神武紀「蹈浪秀(ナミホ)而往、平常世鄉矣」

なみ-ま 波閒　(名)波と波との間。又、波のこのま。波のたぬあひだ。波の音せぬ時。波のなか。波の打ちよするあひだ。なみのま。萬「きの國のさひかの浦に出でて見れば、あまのともしび浪閒(ナミマ)より見ゆ」拾遺愚「玉江漕ぐこも

刈り米のこしはくて、米国ものこしはくて、米国ものこしはくて、米国もの

なめたるさま。竹取「心づよく承らずなりにしこと、なめげなる者におぼしめしとどめられぬるなん、心にとまり侍りぬる」枕「すんざの、なめげにあなづるもの」

なめげさ 無禮氣 (名) なめげなるさま。なめげなる度合。落窪「心には更に知り侍らぬなめげさも、御覽ぜられつる事をいかが限りなく思ひ給ひつる」源夕顔「いかさまにして此のなめげさを見じとおぼしければ」

なめ-さか 滑坂 (名) 滑かなる坂。

なめ-ざれ 無禮戯 (名) なめたれごと。無作法なるたはむれごと。犬子集「親子居るあたりで戯はなめざれぞ」

なめし 糅 (名) なめすこと。なめしたること。又、そのもの。運歩色葉「滑革」

なめし 菜飯 (名) あぶらなの葉を蒸して細かに刻みたるを入れ、味をつけて炊ぎたる飯。蕪・大根などの葉をも用ふ。鈴鹿家記「寛文十年十一月十日日記」「菜飯呼びに參り、兩人參る」おあん物語「朝菜飯を炊ぎて賣飯にもちたれた。其の時に我れ等も菜飯を貰うてたべておじゃった」

なめし 無禮 (形ク) 禮なし。ぶれいなり。無作法なり。失禮なり。なめげなり。なめたり。繼體紀「何故二國之王、不到來集受天皇勅、遣使乎」左京人名「不敬」宇津保「めのと、不敬、物いひなめし」

なめし-がは 糅皮 革 (名) なめしたるかは。皮より毛を去りたるもの。つくりかは。をしかは。若風俗「なめし革の巾著に、駒ひきの根つけを下げ」

なめし-がはし 糅革師 (名) 糅革にて馬具・蒲團など種種の細工をするもの。人倫訓蒙圖彙「滑革師」革は所所の穢多これを造る、革師これを求めて、馬具・鎖袋・蒲團・枕等、是れをつくる」

なめし-でんがく 菜飯田樂 (名) 田樂を副食物として菜飯を食ふこと。又、その食事。

なめす 糅 (他動サ) 毛皮の毛と脂とを去りて柔かにす。

なめ-すう 並据 (他動ハ) ならべすう。なべすう。宇津保「御子どものきんたち、なめすゑ奉り見せ給ふ」同「奉り給へるものども、御まへになめすゑ」

なめ-すぎる 無禮過 (自動ハ) いたくなめたり。餘りに無禮に過ぐ。度に過ぎて僭上なり。甚しきまで生いきなり。孕常勢「男の留守に女房の寢込へ仕懸け、嬶が出花を能う飲んだなあ、嘗め過きた、金で濟まさうや」曾我虎磨「嬶嬶十「嘗め過ぎたりやと虎御前、あべかこうとて瓶を振る」

なめ-すすき 滑薄 (名) 【植】ねずみ芻鰯物語「まつだけ・ひらだけ・なめすすき」殿中申次記「一、滑薄(ナメスヽキ)一折」運歩色葉「滑薄(ナメスヽキ)」

なめ-せん 嘗 舐 (名) なめに同じ。

なめ-づる 嘗 舐 (名) なめづること。なめづりたること。今昔「蛇中舌舌嘗づりをして」玉塵「狼が中舌口なめづりをして、守りつめてをるぞ」

なめ-づる 嘗 舐 (他動ハ) 舌にて皮膚などを嘗む。なむ。なめまはす。靈異記「嘗(ナメ)舌飲唾」伊呂波字類「嘗(ナメ)」

なめ-て 並 (副) なべて(並)に同じ。宇津保「なめて使ひにくしとて、人よりことに憎み給ひし下仕へなん」夫木「吹く風のなめて梢に當たるかな、かばかり人の惜しむ櫻に」

なめて ならず なべてならずに同じ。なべて(並)の條を見よ。平家「なめてならぬ御事は、ゆめゆめ思し食し留まり給へ」

なめ-にんぎゃう 嘗人形 (名) 小兒の口に入れて嘗めらるるほどの極めて小さき人形。浮世風呂「この御裏美には、嘗め人形に、何んでも四文の人形か」

なめ-みら (名) 【植】にら(韮)の異名。宇鏡「蒜(ナメミラ)」宇鏡集「蒜(ナメミラ)」

なめ-みる 嘗見 (他動ハ) 嘗めて試みる。著聞集「なめみつる五つの色の味ひも、きはだの紙にがくなりぬる」

なめ-もの 嘗物 (名) 味噌の調製品。ひしほ等の總稱。大膳職式「正月最勝王經齋會供養料中略僧別日菜菜料。米七合菜料二合」

なめら 滑 (名、副) 【動】しまへび(縞蛇)の異名。

なめ-らか 滑 (名、副) ㊀滑(ナメ)るさまにいふ語。なめりたること。すべすべ。つるつる。宇津保「いと美しげにつややかに、なめらかなるく付針に」太平記「三、陶山小次郎見山陶山時好宇鏡集「澤(シタヤラカ)」」㊁ルしもつか(ず)。澀滯せず。淀まず。「辯舌なめらかなり」

なめら-けし 滑 (形ク) なめらかなり。すべすべしたり。宇鏡「餘(ナメラケシ)」

なめら-ぶぐ (名) 【植】などやふぐの異名。

なめり 滑 (名) 【動】なめりうを(滑魚)の略。

なめり-ありさ (名) うろうろとあるきまはること。紅梅千句「若きやつめと知らばただされの句あだふくは鍛のやうになめり歩き」

なめり-うを 滑魚 (名) 【動】すなめり(砂滑)の異名。

なめり-がは 滑革 (名) 佩機(ナメリ)の刀革の下なる一文字の革。安宅物語

なめり-ごと 無禮言 (名) 古語。なめき言葉。無禮の言。繼體紀「鄙語(ナメリゴト)揚言曰」

なめり-みち 滑道 (名) すべる道。常陸國の方言。物類呼稱

なめる 無禮 (自動ハ) 古語。なめくあり。なめげなり。無禮なり。繼體紀「風(ナメリ)語」

なめる 滑 (自動ハ) なめらかにてあり。すべるばかりなり。すべすべしたり。宇鏡「滑薄(ナメリ)女」名義抄「膩(ナメリ)」謠石「石の橋苔は滑(ナメ)りて足もたまらず」

なめる 嘗 (他動ハ) ㊀なめ(嘗)の口語。㊁物の數ともせず。眼中におかず。萬如す。のむ。「人をなめてかかる」

なめんだう (名、副) 次條に同じ。建武年間記「品ありし武士もみな、なめんだう(らう)にぞ今はなる」

なめんだら (名、副) 物事の正しからぬこと。醒睡「無禮(ナメ)みだらの義なるべし。狂言合戰物語「綾内・近國の勢揃せ集まりて、在在所所なめんだらに、此に一手かしこに一手」

なも 南謨 (名) (梵 Namah; Namo) なむ(南無)に同じ。源夕顔「なも當來の尊師とぞ拜むなる」榮華物語「なもと拜み奉る」

なも あみだ 南謨阿彌陀 次條の略。千載釋句「なもあみだの五字をかみにおきて、旅の心をよめる」

なも あみだぶつ 南謨阿彌陀佛 なむあみだぶつ(南無阿彌陀佛)に同じ。なむ(南無)の條を見よ。夫木「人を見るも我が身を見るもこはいかに、なもあみだぶつなもあみだぶつ」今物語「源氏物語の名をゝして、なもあみだ佛といふ歌を、卷毎に人人によませて」

なも (助動) 願望の意。なむ助動に同じ。萬「かみつけのをどのたどりが川ぢにも、見らにあは奈毛(モ)一人のみして」

なも (助動) らむ助動に同じ。古へ東國の方言。萬「うべこなはわぬに戀ふ奈毛(モ)、たとつくのねがなへゆけばこほしかる奈母(モ)」同「ひたがたの磯のわかめのたちみだえ、わをか待つ那毛(モ)きぞもこよひも」

なも (助) なむ助に同じ。繼紀「進賜爭止者(ナモ)、隨神所思行佐久詔」同「忌記事似事(ナモ)所念坐止宣」萬「いつは奈毛(ナモ)戀ひずありとはあらねども、うたて此の頃戀のしげきも」

なもし 名文字 (名) 名の文字。名を表はせる文字。宇津保「ふんの結び目に、故治部卿のぬしのみなもじよりつけたり」

なもだ (句) なまうだの約。狂言「をどり念佛中略なもだ」關八州繁馬「なもだなもだの鉢叩き」

なもみ (名) 【植】をなもみ(葈耳)の異名。和名抄「葈耳。一名、羊負來」蘇。

なもめ (名) 【植】前條に同じ。

なもめ (句) ろは添へたる辭にて、なもに同じ。一說、もろは助辭にて、勿(モ)に同じ。萬「まつがうらにきわ五うらたち、ま人どとおもほす奈母呂(モ)わがもほのすも」

なーや 納屋 (名) 物を藏め置く小屋。ものおき。ものおきごや。今宮心中「納屋に油の白を引く」

なーや 魚屋 (名) 魚をあきなふ店。魚問屋。

なーやーらーや 否諾 (句) 否むことと諾なふことと。いやかおうか。拾玉「さぞといはば誠にさぞとあとうちて、なやうやといふ人だにもなし」

なやす 萎 (他動ハ) ㊀萎(ナエ)えしむ。なよなよとならしむ。やはらかにす。蜻蛉日記「きなやしたるものの色も、あらぬやうに見ゆ」胡琴教錄「撥音中略手首をやしてひくはれつなり」大鑑狂言「諸脛を打って打って、打ちなやいてやりまするところ」㊁打ちきたふ。ねやす。ねる。字鏡「鍛(ナヤス)。奈夜須也。」同「槌加中奈」名義抄「鍛(ウチナヤス)。ナヤダフ爪」同「鈎(ヒトナヤス)」

なや-ない 納屋米 (名) 昔時、諸國商人の手にて、大阪又は兵庫に輸入する米穀の稱。(藏米の對)

なやない-しゃらにん 納屋米商人 (名) なやものし(納屋物師)に同じ。

なやまし 惱 (名) なやますこと。又、そのもの。宇津保「此の人のなやましにやあらん」

なやまし 惱 (形シク) ㊀なやむやうなり。難儀なり。くるし。顯宗紀「吾父先王、雖是天皇之子、遭遇逃遁、不登天位」㊁病ひなどのため心地あし。氣分よろしからず。宇津保「なやましく侍りて、内へも參らず、まかりありきもしく侍らねばなん、そこにも參りこね」伊勢集「常にはなやましうのみし給ひけるを、つひにみな月の八日になんかくれ給ひにける」

なやまし-がる 惱 (自動ラ) なやましと思ふ。源夕顔「なやましがりて臥し給へれど」

なやましげ 惱 (形ナリ) なやましの活用。なやましきの訛り。古へ東國の方言。萬「奈夜麻思家(ナヤマシ)人妻かもよ、こぐ舟の忘れはせなな、いやもひますに」

なやましげ 惱氣 (副) なやましう。なやましさう。源若紫「脇息の上にもたれて、いとなやましげによみゐたる尼君」同夕顔「いとあやしう物におそはれたる人のなやましげなるを」

なやまし-さ 惱 (名) なやましきさま。なやましき度合。源若紫「猶いと心うき身なりけりとおぼしなげくに、なやましさもまさり給ひて」榮華「若宮と敬宮と、さやうの御氣色おはしましけるなやましさにことづけさせ給ひて」

なやます 惱 (自動サ) なやみいます。なやみ給ふ。萬「くがねかも樂しけくあらむとおもほして、した奈夜麻須(ナヤマ)に」

なやむ 惱 (他動ハ) なやましむ。なやむやうにす。くるします。こまらす。困難せしむ。神代紀「既被厄困(ナヤマ)乃自伏罪曰」萬「ほととぎす中略あやめぐさ玉ぬくまでに鳴きとよめ、やすいしなさず君を奈夜麻勢(ナヤマ)」土佐日記「とくと思ふ舟なやますは、我が淺きなりけり」蓮花記「代代

なやませる 惱 (他動ハ) ㊀なやむこと。くるしみ。わづらひ。㊁病氣。病氣。所勞。源若紫「おどろおどろしき御なやみにはあらで、例ならず時時なやませ給へば」同夕顔「御目のなやみさへ、このごろ重くならせ給ひて」

なやむ 惱 (自動ハ) ㊀くるしむ。難儀す。こまる。困難す。煩惱す。神代紀「悶熱懊惱(ナヤム)」萬「かしこき道を、やすけくもなく奈夜美(ナヤ)きて」土佐日記「川尻に舟入りたちて澄ぎのぼるに、川の水ひてなやみわづらふ」崎嶇記「偏字鎮」㊁病む。わづらふ。病氣す。景行紀「有一痛身(ナヤコヒ)」宇津保「月どろなやみ給ひければ、おぼつかなくおぼされければ」枕「やんどとなく思ふ人のなやむを聞きて」㊂わづらはしく云ふ。とやかくと非難す。うるさく評判す。榮華花山「御子もおはせぬ女御の后に居給ひぬる事、安からぬことに世の人惱み申して」

なやむ 惱 (他動ハ) なやます(惱)に同じ。砂石集「杖にて少し打ちなやめ」狂言「いかう路次で、出家をとらまへてなやめたが」

なやめる 惱 (他動ハ) 納屋物 (名) なやまし(納屋米)に同じ。

なやーもの 納屋物師 (名) 納屋米を取り扱ふ商人。納屋米商人。

なやものし 納屋物師 (名) 納屋米

なやーやか (副) なよよかに同じ。宇津保「いとなややかなるうちきに、御のおり物の薄きおり物かさねてきてゐ給へり」

なやらひ 追儺 (名) なやらふこと。おにやらひ。つゐな。紫式部日記「鼓口もなやらひはてけるままに、皆まかでてけり」

なゆ 萎 (自動ヤ) ㊀力失せてくたくたとなる。氣力なくなりて、なよなよとなる。竹取「手に力もなくなりて、なえかがまりたる中に」太平記「三、陶山小次郎見山陶山時好宇鏡集「萎(ナエ)」」太平記「目くれ足もなえて」運歩色葉「痿・萎・萎(ナエ)」㊁衣服など、久しく著用してくたくたとなる。糊など落ちてしかとせず。やはらかなり。なえばむ。枕「わらはべ中略なりは皆なえほころびうち亂れかかりたるもあるが」同「なえたれど色などよき、うちきたる」源若紫「なえたるきぬどものあつぐえたる、大いなるこに打ちかけて」㊂しをる。しなぶ。枕「萎・かづらも打ちなえて見ゆ」

なえ-になゆ 萎萎 なえたる上に猶なゆ。ひたすら萎ゆ。甚だしくなゆ。宇津保「蜻蛉「いとおそろしく病みあかし給ひつゝその日の巳つ方よりをさをさ物もの給はず、ただなえになえふし給ひ

ね」

なゆた 〔那由他　那由陁　那庾多〕（名）梵語。極めて大なる數の稱。倶舎頌疏・華嚴經・新華嚴經・那由他者十億爲洛叉、十洛叉爲一俱胝、十俱胝爲那由多」

なゆ-たけ 菱竹（名）一なよたけ（弱竹）に同じ。二〔植〕めだけ（山竹）の異名。

なゆたけ-の 菱竹乃（枕）なゆ竹のたわわなるといふより、たわの轉なるとをにかけていふ。萬三「名湯竹乃（なゆたけ）とをよるみこ」

なゆた-どぶ 〔那由他劫〕（名）佛語。人力にて計算し能はざるほど數多の劫。永劫。無量劫。碁盤太平記「那由他劫が其の間、阿鼻の苦患は受くるとも」

なゆみ （名）古（鼠を捕へたる器。ねずみおとし。和名抄「機弩射鼠斗也」

なゆむ （自動）なやむ（惱）の動をいふ、古（東國の方言。萬四人の子のかなしけしだは濱す鳥、あ奈由牟（なゆむ）駒の惜しけくもなし」

なよし （名）〔動〕鰹（なよし）の小なるもの。いな。ないし。神代紀「口女即鰹魚（なよし）也」土佐日記「九の（の門のしりくめ縄。なよしのかしら。ひら木ら」和名抄「東海鰹佐倍魚之」鰹・鰹（なよし）

なよせ 名寄（名）名稱を寄せ集むること。名ある所の名稱を寄せ集めたもの。運歩色葉「名寄（なよせ）」吉野忠信「彼の里にて殺り置きたる名寄あり」

なよせ-ちやう 名寄帳（名）江戸時代、檢地帳より地主の姓名、田畑等の反別等を、一人毎に區別して抄錄せる帳簿。村役場に備へおきて、納税及び村費賦課の準據とせしもの。

なよ-たけ 弱竹（名）一細くしなやかなる竹。わか竹。なゆたけ。字津保「田鶴「なよ竹の茂れる宿にまとゐして、だよにぞ積む數は知るやと」源氏「人がらたをやぎたるに、强き心をしひて加へたれば、なよたけの心ちして、さすがに折るべくもあらず」名義抄「篁竹（なよたけ）」二〔植〕めだけ（山竹）の異名。

なよたけ-の 弱竹之（枕）なよ竹はたわたわとして起き伏しするより、たわの轉とを又おきふしにかけ、又、竹の縁語の節（ふし）にかけてもいふ。なゆたけの。萬三「秋山のしたべるいも、奈用竹乃（なよたけ）とをよる子ら」古今序「なよたけの長き上に、初霜のおきゐて物を思ふころかな」堀河百首「風吹けばなびくものから、なよ竹の思ふふしぶしありげなるかな」著聞「あだに見し夢かうつつか、なよ竹のおきふしわぶる戀ぞ苦しき」

なよ-なよ （副）なえたるさまにいふ語。なよよか。しなやか。たをやか。枕三「荻中納言朝露に濡れて、なよなよとひろごりふしたる」源氏「なよなよと、われかのけしきにてふしたれば」榮華物語「御くし中納言いみじう筋細うめでたう、なよなよとよりかけたるやうにて」

なよび-か （副）なよびたるさま。しなやか。なよなよ。なよよか。源氏「なよびかに女しと見れば、餘り情に引きこめられて」同胡蝶「青にびの紙のなよびかなる」

なよび-すがた （名）なよびたる姿。なよよかなる姿。なまめける姿。源氏「なよびすがた、はたいといたうたをやぎけるをや」

なよび-すぐ （自動上二）餘りになよびたり。程を過ぎてなよよかなり。源氏「少し弱き所つきて、なよびすぎたりしけぞかし」

なよび-ゆく （自動四）なよよかになり行く。いよいよなよよ。源氏「とかくになびきて、なよびゆき」

なよぶ （自動四）なえたるさまなり。なよよかなり。しなやかなり。ことばしかりず。源氏「御心なよびたる方に過ぎて、つよき所おはしまさぬなるべし」同明石「いといたうなよびたる薄やうに」同夕顔「なよびたる御ぞども脱ぎ給うて」

なよ-や （感）拍子の詞。催馬樂「美作や久米のさら山さらさらに、なよや、さらさらに、なよや」

なよやか （副）矢條に同じ。秋夜長物語「きんしやの水干なよやかに、打ちしほたれたるていにて」若風俗「なよやかなる風情のをかしげになれる」

なよよか （副）なえたるさまにいふ語。なよなよ。なよびか。なよやか。たをやか。宇津保藤原「いとなよよかなるうちきに」蜻蛉日記「なよよかならぬほし、しほれよい程なり」

なよ-らか （副）前條に同じ。枕三「白きひとへ、なよらかなる袴、よきほどにて」源夕顔「なよらかにをかしばめる事を好ましからずおぼす人は」

なよる 馴寄（自動四）なれてよる。したしくなりて近よる。夫木「ふる里の月ふく風になよたけの、なよりあひてもいく世へぬらん」

なら 楢（名）〔植〕一かし（樫）の異名。二こなら（柚）の異名。和名抄「楢奈良堅木也」椚字

なら-の-かしはぎ 楢柏木〔植〕なら（楢）に同じ。一説、ならがしはの異名と。新六帖「さほ山のならのかしは木又ばえの、もとつ葉茂み紅葉しにけり」

なら-の-したかぜ 楢下風　楢の木の下を吹く風。楢の下陰を吹く風。後千載夏「秋きぬといはねばかりぞ夏衣、すそ野の原の楢の下風」新六帖「岡邊なるならの下風吹きぬなり、草刈るをのこ袖や涼しき」

なら-の-はがしは 楢葉柏　楢の木の葉。後拾遺夏「さか木とるろづきになれば神山の、ならのはがしはもとつ葉もなし」續古今夏「見るままに楢の葉がしは紅葉して、佐保のわたりの山ぞしぐるる」

なら-の-はかぜ 楢葉風　楢の木の葉に吹きわたる風。玉葉夏「みな月の照る日といへど我が宿の、楢の葉風は涼しかりけり」

なら-の-はしば 楢葉柴　ならしば（楢柴）に同じ。今撰集「琴するならの葉しばに飲る露の、はらはらとこそねはなかれけれ」

なら-の-はもり 楢葉守　楢の葉を守ること。又、楢の葉を守るといふ神。謡金札「青丹吉し楢の葉守の神心」曾我會稽山「楢の葉守の崇りなし」

なら-の-はわけ 楢葉分　楢の葉を分くること。雲葉集秋中「風ならで身にしむものは片岡の、楢の葉分けの有明の月」夫木「いづくよりおほしたてたる竹のこの、ならの葉分けのかげによるらん」

なら-の-ましば 楢眞柴　楢の木の柴。小さき楢の木、ならのはしば。堀河百首「みゆきの狩りすと楢のましばを踏みしだき、交野の里に今日もくらしつ」新和歌集「外山なるならのましばの色づきて、夜寒に秋のなりまさるなり」

なら （名）ならもめん（奈良木綿）の略。伊勢貞助雜記「右京大夫高國朝臣に、必ず衆生難忍の受苦を助け給ふ」謡曲「那落に沈む惡人を佛所に送り給ふなる、其の瑞相のあらたさよ」二奈落に墮つること。陳獄すること。大鏡冠「ならず者は奈落の種」井筒業平河内通「共に奈落の憂き目を見せん」三奈落の底。最後のころ。物事のどんぞこ。いづくのはて。永劫。雪女五枚羽子板「御身の上、奈落まで隠密ぢや」傾城佛原「私はこなたの様と一所に、奈落までも勘當ぞ」文武五人男「奈落までも勘當ぞ」四劇場にて、舞臺の床下の地下室の稱。

なら-の-そこ 奈落底　一佛語。地獄の底。地獄の最下部。保元左府「終に奈落の底に墮す」十訓「いふならくならくの底に入りぬれば、せつりもすだもかはらざりけり」二底の知れざる深きところ。どんぞこ。九泉の下。三永久に浮かぶ瀬のなきところ。四物事の最終。はてのはて。壽門松「奈落の底まで此の異次兵衛が切ったになって、相手が死んだら切らるる覺悟」曾我會稽山「つぎかけつぎかけ、奈落の底まで飲み伏せ」

なら-く （助動）なりの活用。なるの延。「閑くならく」十訓「いふならく奈落の底に入りぬれば、せつりもすだもかはらざりけり」

ならく-か 〔捺落迦〕（名）ならく（奈落）を見よ。軟長集「地獄を。ならくかの烟の底にむせぶ身は、きさの報いのかかるなりけり」

なら-こよみ 奈良曆（名）大和國奈良より發行せし曆。やまとごよみ。小町踊「八重に咲く梅の異名や奈良曆」

なら-こんがう 〔奈良金剛〕（名）なら（奈落）に同じ。盛衰記「奈落炎中にしては、必ず衆生難忍の受苦を助け給ふ」謡曲「那落に沈む惡人を佛所に送り給ふなる、其の瑞相のあらたさよ」二奈落に墮つること。陳獄すること。大鏡冠「ならず者は奈落の種」井筒業平河内通「共に奈落の憂き目を見せん」三奈落の底。最後のころ。物事のどんぞこ。いづくのはて。永劫。雪女五枚羽子板「御身の上、奈落まで隠密ぢや」傾城佛原「私はこなたの様と一所に、奈落までも勘當ぞ」文武五人男「奈落までも勘當ぞ」四劇場にて、舞臺の床下の地下室の稱。

なら-こんがう 〔奈良金剛〕（名）なら（奈落）を見よ。太平記十八「法華山寺」以無垢三昧力、濟奈落迦重苦」倶舎頌疏「奈落迦重苦」此云苦具、義翻爲地獄」

なら-かう 〔奈良香〕（名）染色の名。あをに（青丹）に同じ。

なら-がき 奈良柿（名）大和國奈良に產する柿。又、その實。後撰夷曲集「奈良柿にさし添へ送る一折りは、是れぞ三かさの山の松茸」

なら-かし （名）下文を見よ。醒睡笑「秀吉公の御時ならかしといふ事あり、貸したる者もとを失墜せし上に、驕放埒の働き弾科輕からずとて再び黄金を出ださせ給へば。奈良かしや此の天下殿二重どり、とにもかくにもねだれ人かな」

なら-かし-は （名）〔植〕一かし（樫）の異名。狭衣「むら雨中納言かしは木の下風涼しく吹きいれたれば中納言ならがしはは」げにいたくもりわづらふも」爲忠百首「ならがしは其のやひらでをそなへつつ、宿のへつひにたむけつるかな」二おほならの異名。

なら-がたな 奈良刀（名）大和國奈良に住める刀工の手にて鍛ひたる刀。後には鈍刀にいふ。庭訓往來「奈良刀・高野刺刀」東海道名所記「下手の造れる奈良刀の鞘鳴りして、小尻つまりぬれば」

なら-がみ 奈良紙（名）古（大和國奈良より產せし薄き紙。三好筑前守義長亭江御成記「御西浮之内に棚あり、其れに置く紙、ならがみあり」宣風聊記「自花恩院使中納言奈良紙一束」

ならきや 捺落迦（名）次條を見よ。Narakya

ならく 〔奈落〕（名）〔ならか又ならきやと發音するを正しとす〕一佛語。おどく（地獄）に同じ。盛衰記「奈落炎中にしては、必ず衆生難忍の受苦を助け給ふ」謡曲「那落に沈む惡人を佛所に送り給ふなる、其の瑞相のあらたさよ」二奈落に墮つること。陳獄すること。大鏡冠「ならず者は奈落の種」井筒業平河内通「共に奈落の憂き目を見せん」三奈落の底。最後のころ。物事のどんぞこ。いづくのはて。永劫。雪女五枚羽子板「御身の上、奈落まで隠密ぢや」傾城佛原「私はこなたの様と一所に、奈落までも勘當ぞ」文武五人男「奈落までも勘當ぞ」四劇場にて、舞臺の床下の地下室の稱。

なら-ざけ 奈良酒（名）大和國奈良より產する酒。醒睡笑「なら酒や此の天目に二つ三つ、飲めと仰せあらばとにもかくにも」風俗文選「なら漬・奈良酒・奈良こんがう」

なら-ざ-せん 〔奈良座錢〕（名）寛永十三年大和國奈良にて鑄造せしといふ寛永銅錢。徑八分强、重量一匁。

なら-ざらし 奈良晒（名）大和國奈良より製し出だす上品の晒らせる麻布。五人女「奈良ざらしの中ぐらゐなるを一つ」大鏡冠「なんそうだる子の親が、因果晒らしに奈良晒らし」

ならし 馴慣（名）一馴らすこと。慣れしむること。習はしむること。練習。稽古。馴致。續門葉集「機會のならしの頃、人のもとより、かざしの花に具して文を送り侍りけるを」太平記「七、山ならしに一づつ射て見給へ」二ならはし。習慣。風習。盛衰記「奈良」此の河の水出でたるをば何とかすべき、宇治・勢多のならしに、馬筏を組んで渡して心見ばや」甲陽

軍鑑に申しならはしを惡しう致せば、よきも惡しう成るか中略御窓の如く、ならしをよきやうになさるる事、肝要にて候」

ならし 均 (名、動) 一ならすこと。平らにすること。均しくすること。平均すること。二おしならして。平均して。平均。三すりこぎ(擂粉木)をいふ。堂上詞。和訓栞

ならし (名) 一木・鐵などを平かにする器具。和名十五、鑢「鑢。銼類色立品云鑢。奈上平木器也、下削也」名義抄「鑢。良之。銀。沿月。刀ノ」同「削刀(銀沿具)」二雌床(ナラシ)の類。雅言集覽注和名抄

ならし (名) かけざを(掛竿)をいふ、九州の方言。物類呼称

ならし (助動) 一なるらしの約。にてあるらし。であらう。萬一「世の中は、かくのみ奈良之(ナラ)」同廿七「あたらしき年の初めに、とよの年しるすと奈良思(ナラ)雪のふれるは」同四「たち山にふりおける雪をとこ夏に、見れども飽かずかむがら奈良之(ナラ)」二尊じて、なり(也)に同じ。十訓序「漢靈帝かき誤れる言の葉もつもり、梓弓引き見ん人の嘲りも恥かしながら、志のゆく所ただにはいかがやまんとてならし」萬紫千紅「もとめいなみがたく、いささかをろちの足を書きそふるものならし」

ならしいし 均石 (名) 石垣又は土臺などの上に、凹凸なきやう一直線に並べ据ゑたる石。かさいし。

ならしーかご 均籠 (名) 堤防の具の一。地形の平かならざる場合に、大小の蛇籠を取り交ぜて其の地形をならし、其の上に蛇籠出しをなすもの。地方凡例錄「地形不平ならば、平均籠とて、二間籠・三間籠其の處に應じ小籠・大籠取り交ぜ、地形を均し平らかにして、其の上に籠出し仕立てる」

ならし-がほ 馴顔 (名) 馴らす如き顏つき。馴らさんとする如きやうす。なれがほ。後撰雜三「わが宿をいつならしてかならの葉を、ならし顏には折りにおこする」實方集「蕊にだに立ちよりがたき花のえを、ならしがほにもくらべけるかな」

ならし-だけ (名) かけざを(掛竿)に同じ。ならし。博多小女郎波枕下「今の小町屋總七は博多小女郎がならし竹、何時も心に懸けて置く」

ならしは 鳴羽 (名) 鷹の尾羽の名。たか(鷹)を見よ。

ならしば 楢柴 (名) 【植】なら(楢)に同じ。藻鹽草「楢しば」

ならしば-どり 楢芝鳥 (名) 【動】たか(鷹)の異名。藏玉「なら柴鳥鷹」

ならしば-の 楢柴之 (枕) 同音の語を重ねて調のよきより、ならしばのなるとつづけていふ。萬三「みゆきかりするかりばのをぬの樣柴之(ナラ)、馴れはまさらず戀こそまされ」大和物語三「我が宿をいつかは君が楢柴のならし顏には折りにおこせる」

ならし-もの 鳴物 (名) 鳴らす品もの。音を立てしむるもの。樂器。なりもの。宇津保俊蔭「すべて今日のならし物の聲は、いみじかりつるものかな」

ならす 成 (自動) 御成りになる。成り給ふ。お出ましある。歌四季物語十月「主上もならせおはしまして」

ならす 均 (他動) 一高低・凹凸なきやうにす。平にす。水平にす。崇神紀「少女らに男立ち添ひ蹈み奈良須(ナラ)、西の都はよろづ代の宮」萬四一青柳のはらろ川とになを待つと、せみとは汲まず立ちど奈良須(ナラ)も」枕「殿もりづかさの官人ども、手ごとに帚とり砂どなす」鏡色紙抄二大小・多少を合せて、そを均しくす。平均す。均一にす。ひとしくす。

ならす 馴慣 (他動) 一馴るるやうにす。慣れしむ。なつける。古今物名「小ぐら山みね立ちならし鳴く鹿の、へにけん秋を知る人ぞなき」宇津保俊蔭「この奉れる琴の摩荒き所あり、しばしひきならして奉れ」二習はす。試みる。練習せしむ。稽古せしむ。源若菜下「十二月に成りにけり。十よ日と定めて、舞どもならし、殿の內ゆすりてのしる」三馴れすぎてあなどる。心やすだてをなす。十訓「庶人の振舞は、おもらかに飼ずくなにて、人をもならさず、人にもならされず」

ならす 鳴 (他動) 一鳴るやうにす。音をたてしむ。ひびかす。萬一「にひむろを蹈み靜の子が手玉鳴(ナラ)も、玉のごと照らせる君を內(と申せ)竹取「うそを吹き、あふぎをならし」千載「吹く風も木木の枝をばならさねど、山は久しき聲ぞきこゆる」聲名抄二音をたてて放屁す。おならをならす。大鏡「いと高やかにならして侍りけるに」「宇治拾遺「いと高くならしてけり」三あまねく知らしむ。公然と觸る。普く告ぐ。周知せしむ。うったふ。「罪名を天下にならす」國音に聞かしむ。ひびきわたらす。はばをきかす。大鏡狂言「此の世では刀金をならいた侍が、あの世では扇子一本に事を缺かせらるる」五いふ。つぶやく。說く。「不平をならす」

ならす 生 (他動) みを結ばしむ。果實を生ぜしむ。みのらしむ。結實せしむ。字津保俊蔭「豆中略種ならして、いくそばくなりぬる。子を一つあてに出だすとも十まりなり。ならしてとらば、多くの須(ナラ)も」枕「殿もりづかさの官人ども、手ごとに帚とり砂どなす」鏡色紙抄二大小・多少を合せて、そを均しくす。平均す。均一にす。ひとしくす。

ならす 馴慣 (他動) 一馴るるやうにす。慣れしむ。なつける。古今物名「小ぐら山みね立ちならし鳴く鹿の、へにけん秋を知る人ぞなき」宇津保俊蔭「この奉れる琴の摩荒き所あり、しばしひきならして奉れ」二習はす。試みる。練習せしむ。稽古せしむ。源若菜下「十二月に成りにけり。十よ日と定めて、舞どもならし、殿の內ゆすりてのしる」三馴れすぎてあなどる。心やすだてをなす。十訓「庶人の振舞は、おもらかに飼ずくなにて、人をもならさず、人にもならされず」

ならす 鳴 (他動) 一鳴るやうにす。音をたてしむ。ひびかす。萬一「にひむろを蹈み靜の子が手玉鳴(ナラ)も、玉のごと照らせる君を內(と申せ)竹取「うそを吹き、あふぎをならし」千載「吹く風も木木の枝をばならさねど、山は久しき聲ぞきこゆる」聲名抄二音をたてて放屁す。おならをならす。大鏡「いと高やかにならして侍りけるに」「宇治拾遺「いと高くならしてけり」三あまねく知らしむ。公然と觸る。普く告ぐ。周知せしむ。うったふ。「罪名を天下にならす」國音に聞かしむ。ひびきわたらす。はばをきかす。大鏡狂言「此の世では刀金をならいた侍が、あの世では扇子一本に事を缺かせらるる」五いふ。つぶやく。說く。「不平をならす」

ならす 生 (他動) みを結ばしむ。果實を生ぜしむ。みのらしむ。結實せしむ。字津保俊蔭「豆中略種ならして、いくそばくなりぬる。子を一つあてに出だすとも十まりなり。ならしてとらば、多くのぬかご芋出できぬべし」

ならず (名) ならずものの略。曾我會稽山「ならずの野良者をすかし」大織冠「聖の破落漢(ナラ)はまた留守か」

ならーずみ 奈良墨 (名) 大和國奈良地方にて製する墨。奈良油烟にて製せる墨。上品とす。

ならずーもの (名) 一どうもならぬもの。生計の不如意なる人。足らはぬがちなる人。風流旅日記「しまうたやの樂隆居、ならずものの、にはか道心」俚言集覽「昔のたはれ歌に、身代はならず者とて、六兵衛が羽織を借りて七兵衛かな」二手のつけられぬほどのわるもの。のらもの。長町女腹切「金の才覺ならず者と、茶屋にはせかれ親方に見限られつつ」大織冠「鈍(ナラ)殘な破落漢(ナラ)は、奈落の種」三一定の職業なく、放浪して惡行を働く者。屋惡事をなす人。どろつき。無賴漢。わるもの。

(諺)ならず者の振りづんはい 貧乏者が身のほどを考へずに何事かなさんとすること。

ならずーや (名) 赤貧の家。ならずものの家。

ならーせん 一奈良錢 (名) ならざせん(奈良座錢)に同じ。

ならーそ 奈良麻 (名) 大和國奈良に產する麻。ならを。大織冠「ならそうんだる子の親が」丹波與作「ひねり芋(ナラ)のをがせ亂いた胸の中、何と奈良芋(ナラ)のうき身ぞや」

ならーたいしゅ 一奈良大衆 (名) 多數の奈良法師。奈良の大衆。南都の衆徒。保元新院御所。明日までも延べばこそ、吉野法師も奈良大衆も入るべけれ」

ならーちゃ 一奈良茶 (名) 一大和國奈良に產する茶。又その茶汁。大織冠「昔より字治茶・近江茶中略などとはいへど、奈良茶といふ茶を飲まず」同四「孫に奈良茶の黃花を、親仁も一杯、且那も一杯」二ならちやめし(奈良茶飯)の略。料理物語「奈良茶。まつ茶を少しいりて袋に入れて、あづきと茶ばかり煎じ候。扨大豆と米入れ候を半分づついり候うてよく候、大豆は引きわり、皮を捨ててよし、又、ささげ・くわる・鮑・栗なども入るるよし。山椒のこ鹽かげん有り」二代男五「酒は定まって川海老の吸物に、ひね米の奈良茶」三代男「奈良茶がこはうて、蒐鞠が薄うて」やじふ「音良ならちやがゆ內膳物語呼称」博多小女郎波枕「をいふ。鏡內の方言。物類呼称」前條

ならーちゃがゆ 奈良茶粥 (名) 前條

ならちゃ-ぶね 奈良茶船 (名) 奈良茶飯を賣るうろうろ船。新水代藏「牧方にて中略四文の釣り取らんといふに、はやなら茶舟を漕ぎ出して、密に之を横著にしける」

ならーちゃめし 奈良茶飯 (名) 茶飯の一種。古くは豆・蕗姑・栗などを入れたるもの。大和國奈良の東大寺・興福寺に行はれたるに擬したればいふと。後には、普通の茶に豆腐汁・煮染等をそへたる一膳(飯)。雅語集 本朝食鑑「奈良茶飯者、本南都東大・洪福兩寺之僧舍所製中略其法先煎好茶、取初煎再煎其初者漬、再者淡、故用再煎淡者、和鹽少許、煮火作飯、復合炒大豆・炒黑豆・赤小豆・燒栗等物、亦好、飯熟後、別浸初煎濃者而食之」

ならーづけ 奈良漬 (名) 一精漬の一種。瓜(ウリ)・茄子などを漬けたるもの。上品の漬物とす。もと大和國奈良より製し始めたるよりいふ。醒睡笑「瓜の精づけ・奈良づけといふ事は、かすがのあればよいといふ緣なり」二酒に浸かること。さけづけ。さかびたし。傾城反魂香「死髮する奈良漬にして、後日の詮議」大織冠「奈良諸白、飲り過ぎては、酒漬の身は奈良漬けと奈良柏」

ならづけ-うり 奈良漬瓜 (名) 瓜を奈良漬にしたるもの。ならづけ。慶筑波「色付けや奈良漬瓜の春日山」五人女三「奈良漬瓜を片船、蓮の葉に包んで」

ならづけ-くさし 奈良漬臭 (形ク) 酒くさし。熟柿くさし。

ならーとう 一奈良朝 (名) 元明天皇の和銅三年三月より桓武天皇の延曆三年十一月山城國乙訓郡長岡宮に遷都し給ふまで元明・元正・聖武・孝謙・淳仁・稱德・光仁の七代の天皇が、大和國奈良に都し給ひたる時代の稱。

ならーでんじゅ 一奈良傳授 (名) こきんでんじゅ(古今傳授)を見よ。消閑雜記「古今集の相傳あるなり、二條家は爲世卿より頓阿が傳へて、經賢中略宗祇中略と傳來し中略宗祇より牡丹花肖柏へ傳へられし流を堺傳授といひ、南都饅頭屋へそれを傳へしを奈良傳受といふなり」

ならーとり 楢綴 (名) 楢の葉柏を綴ぢ合はせて製したる折敷の大なるもの。賀茂祭に神供を盛るに用ふ。和訓栞

ならーにんぎょう 一奈良人形 (名) 大和國奈良にて製出する人形。春日の社の改築の舊材を用ひて彫刻すといふ。種種の彩色を施し、小さくして雅致あり。多く、緒を通す穴ありて、根附などにす。

ならーぬし 奈良塗師 (名) 大和國奈良の塗師。

ならーぬり 奈良塗 (名) 大和國奈良地方にて製せる塗物。萬寶全書「奈良塗 雅語利休時代なり」

ならーのおともしゅう 奈良御供衆 (名) 室町時代、將軍の大和國奈良へ社參のとき、御供に候ひたる人。又、その家。雅語文

ならーの-ぎ 奈良の木 (名) 【植】なら(楢)に同じ。大和物語「ならの木といふものをぞ二木・三木植ゑたりける」字鏡「楢(樫木也。倉麻乃木)」名義抄「楢(ナラノキ・ナラ)」類聚「楢(樫月木。又、倉木)」

ならーのさんぎ 奈良三會 (名) 佛語。大和國奈良なる興福寺の維摩會と、同藥師寺の最勝會と、宮中の御齋會との總稱。

ならはかし 習 (名) ならはし(習)に同じ。女殺油地獄下「一門・一家みな侍り其の習はかしか、思ひ切っては見返らず、義理がたい生まれ付き」

ならはーがし (名) 【植】くろがし(椚)の異名。

ならはかす 習 (他動四) 一ならはす(習)に同じ。二ならはす(習)に同じ。著聞「人とそあらめ、おもてを並べたる者に心うつしてねたきめ見するに、物ならはかさん」狂言鬼瓦「おのれ總別、此の間甘やかいて置けばはうりやうもない、散散にならはかいてやらう」

ならはし 習 (名) 一ならはすこと。馴れしむること。練習。習慣。拾遺雜四「手枕のすきまの風も寒かりき、身はならはしのものにぞありける」伊勢集「木がくれてさ月待つともほととぎす、聲ならはしに枝うつりせよ」源少女「舞ひならはしなどは、里にていとようしたてて」二ならひ。しきたり。習俗。風習。風儀。俗。

ならはしーがほ 習顏 (名) ならはす如き顏つき。ならはしと思へる如きやうす。安元元年十月右大臣家歌合「淋しさは樂れて ふりにし山里に、ならはしがほの今朝の初雪」

ならはしーもの 習物 (名) ならはしとなるもの。ならはしによりてともかくもなるもの。古今序「人の身もならはしものを、あはずしていざ心みん戀や死ぬると」元眞集「心をぞならはしものといふなれど、かた時のまもえやは忘るる」

ならはす 習 (他動四) 一慣れしむ。習慣とならしむ。竹取「かくたいたいしくやはならはすべき」源花宴「今はいとようならはされて、わりなくは慕ひまつはさず」二學ばしむ。學習せしむ。教ふ。字津保俊蔭「琴ならはしきこえん、ひき見給へ」源梅枝「いよいよ道道のざえをならはさせ給ふ」三目にもの見す。慰らしむ。字治拾遺「この女人に物ならはさん、いひて、よにあさましき所をさへ、何せんかせんとのりのろひければ」義經記三中略山法

ならはーずがほ 不習顏 (名) ならはぬ如き顏つき。知らずがほ。拾玉「幾秋もわかれぬ年もなきものを、習はずがほに吹きそふ明け方は、ならはず顏に夢ぞおどろく」

ならはせる 習 (他動下) ならはす(習)の口語。

ならはぶ 並 (自動四) ならぶ(並)に同じ。落窪「いみじうくさき物どものならばひ居たる、いみじうみだりがはしく苦しうてなん」

ならばる 並 (自動四) ならぶ(並)に同じ。

ならーはんざらし 奈良半晒 (名) ならざらしのよく晒らさぬもの。昔昔物語「近年は帷子は奈良半晒」

ならひ (名) 一ならふこと。慣るること。習慣。慣習。ならはし。源夕顔日ごろ重く悩み給ふと聞きわたりつれど、例もあつしうのみ聞き侍りつるならひに、打ちたゆみてなん」狭衣「ならひにてさぶらへば、さばかりの物はなじかは苦しと思ひさぶらはん」二よのつね。きまり。あたりまへ。新勅撰三「歎くなよこれはうき世のならひぞと、慰めわきしことぞかなしき」盛衰記「さらぬだに習ひに霞む春の空、落つる涙に掻き暮れて、行くさきも不見けり」狂言「相撲と云ふものは、勝つも習ひ、負くるも習ひぢや」三学ぶこと。学習。練習。源東屋「いとうひうひしうならひに侍る身は、何ごとをもこがましきまでなん」狂言「ならひに参りました、聟入りの次第を教へて下され」四特に、秘事などを口づから授けられて学ぶこと。口傳。口訣。狂言「秘すべし秘すべし口傳に在りとは、如何なる事ぢや。これにも習ひがござる」

(諺)**習ひ、性と成る** 習はしが重なれば、天禀の性質の如くに成る。習慣が第二の天性を作る。書経太甲「兹乃不義、習與性成」晏子春秋「汨常移質、習俗移性」

ならひ 並 (名) 一東北の風。江戸の方言。物類呼称

ならび (名) 一ならぶこと。ならびたること。ならぶもの。なみ。つら。れつ。砂石集「四人、座を並べ中間下座の僧中間並びの座の僧中間第二座の僧中間上座の僧」二たぐひ。比類。等倫。同種類。同等。「同じならびの品」三一味する人。昔時、遊里の語。色道大鑑四ちよしよく(女色)をいふ。奥州の方言。物類呼称

ならひ-あふ 習合 (自動四) 互ひに習ふ。まなびあふ。狂言「聟入互に行く行くはならひあうて致さう」

ならびあふぎ 並扇 (名) 紋所の名。

ならびあふぎびし 並扇菱 (名) 紋所の名。

ならび-おとる 並起 (自動四) つづきておこる。同時に蜂起す。

ならびかた 並方 (名) ならぶしかた。ならびたるさま。ならびやう。

ならび-ぐら 並倉 (名) ならびたてる倉。棟のならべる倉庫。法隆寺伽藍縁起并流記資財帳「合倉漆口」

ならびぐるし 並苦 (形) ならぶに心ぐるし。ならびかねたり。濱松三人人もならびぐるしう、なげかしうおぼされぬべき事ぞかし」

ならひ-ごと 習事 (名) ならふこと。術。習ふべき事實。ならひもの。學事。

ならひ-とむ 習込 (他動四) ならひてよく心に入れこむ。十分に學び覺えしむ。をしへこむ。

ならひ-そむ 慣初 習初 (他動二) なれはじむ。又、初めて學ぶ。續千載秋上「雁鳴きて萩の下葉の色づくは、我が袖よりやならひそめけん」同雜三「かくばかり思ふといふを頼まぬは、誰につらさをならひ初めけん」

ならび-たいみやう 並大名 (名) 一演劇にて、登場俳優の中、大名に扮して居並び、格別のせりふ・しぐさ等のなき役。二列座せる人。席末に列する者。傍觀の地位にある人。浮世床「並び大名めらが、やかましい」

ならび-たからちば 並唐團扇 (名) 紋所の名。

ならびたかのは 並鷹羽 (名) 紋所の名。たかのは(鷹羽)を見よ。

ならび-たつ 並立 (自動四) ならびて立つ。なみたつ。風雅雜中「ならび立つ松のおもては靜かにて、嵐の奥に鐘響くなり」

ならび-つづみのどう 並鼓胴 (名) 紋所の名。

ならひ-とる 習取 (他動四) 學習してうつしとる。學びて我がものとす。字津保俊蔭「琴中藤一つの手殘さずならひとりつ」源若菜下「我が心にあくべき限りなくならひとらんことは、いとかたけれど」

ならび-なし 並無 (形二) ならぶものなし。たぐひなし。無比なり。比類なし。無雙なり。さうなし。になし。字津保忠仁「その北の方、ならびなき世の寶の王なり」源紅葉「ならびなきどちは、げにかよひ給へるにこそは」宇治拾遺「說法ならびなき人いましけり」

ならび-に 並竝併 (接) 相ならぶ物事をつづくる語。また。および。かつまた。榮華物語「とくとく其の心ちつくろひやめて、速かに下すべき由、ならびに母北の方速かにあげ奉れと宣旨あるに」大鏡「朱雀院ならびに村上のおほぢにておはしまし」

ならひ-ひばち 奈良火鉢 (名) 今戸燒の如き土燒きの火鉢。大和國奈良に產す。笑覽「東海道名所記「奈良火鉢又は目のつぶれたる摺鉢に火をいけ」

ならび-はばき 並羽帚 (名) 紋所の名。

ならび-ひさご 並瓢 (名) 紋所の名。

ならび-ひひらぎ 並柊 (名) 紋所の名。

ならび-へいし 並瓶子 (名) 紋所の名。(へいし(瓶子)を見よ。

ならひ-もの 習物 (名) 一ならひごと(習事)に同じ。二能樂などの藝事にて、免許を得ざれば稽古するを得ざるもの。口傳すべきもの。口訣を要するもの。秘事。傳授物。

ならひ-や 並屋 (名) 幾つもならびたる家。大安寺私財帳「並屋」

ならひ-や 並矢 (名) 紋所の名。やを(矢)を見よ。

ならび-やう 並樣 (名) ならびかた(並方)に同じ。

ならび-やはず 並矢筈 (名) 紋所の名。やはず(矢筈)を見よ。

ならひ-ひら (名) しやうとくひら(正德平)に同じ。萬金產業袋「夏袴地、京織にしなじなあり中藤なら平、ならじまに又强し。正德年中より多く出づるがゆゑ正德平共いへり」

ならひ-りぶこ 並立鼓 (名) 紋所の名。

ならふ 慣馴 (自動四) 一慣る。たびたび出合ひて常となる。しならふ。見ならふ。聞きならふ。習慣となる。雲異記「鳥常啄効(比天)、毎日來餐」土佐日記「のこもならはぬはいとも心ばそし」古今春上「ことしより春知りそむる櫻花、散るといふことはならはざらなん」二なれむつぶ。親しくなる。なつく。竹取「ここにはかく久しく遊びきこえて、ならひ奉れり」同「使はるる人人も、歳ごろならひて立ち別かれなんことを中なげかしがりけり」

ならふ 倣傚 (自動四) まねてなす。摸擬す。摸倣す。光德紀「如」是等類、愚俗所染(ならふ)、競後撰春中「つらきかなとて樣のものかなる、春の心にならはざりけん」

ならふ 習 (他動四) まなぶ(學)に同じ。神代紀「有二鵜鳥一、飛來搖二其首尾一、二神見而學(ならふ)之、即得二交道一」推古紀「書生(ならふ)」字津保俊蔭「琴中藤そひゐて、ならふに、一つの手殘さずならひとりつ」

(諺)**習はうより慣れろ** 殊更に學習せんより、おのづから慣れたる方、效果多し。學習して覺えざりし事も、慣るれば事もなく知るに至る。毛吹草「習はねど馴るれば露にいろはかな」國姓爺「師匠はなけれど夫の打ち太刀、習はうより馴れての事」

(諺)**習はぬ經は讀めぬ** 素養なき物事は出來るものにあらず。

(諺)**習はんより慣れよ** 習はうより慣れろに同じ。毛吹草「習はんよりなれよ」

(諺)**習ふは一生、學ぶ事には際限なし。**

ならぶ 並竝列 (自動四) 一列(つら)なりてあり。つらなる。なむ。そろふ。列す。羅列す。並列す。萬三「ふたり那良思(ならぶ)ろ、かたらひし」宇津保俊蔭「ならべる木の蔭に、同じき皮を撰きて」二劣りまさりなし。ひとしくあり。たぐふ。匹敵す。比肩す。同等なり。類す。萬十「さ奈良柴(ならぶ)る麓はなけむと、心には思ひ詩りて」竹取「皮きぬ中藤うるはしきことならぶものなし」源帚木「この御匂ひには、ならび給ふべくもあらざりければ」俳諧三「遠からぬ前後にあり。まぢかし。保憲女集「過ぎにし年ごろ、ならべる月日の中に求むれど、我が身のごと悲しき人はなかりけり」

ならべる-えだ 並枝 きやうだい(兄弟)に同じ。言語

ならべる-き 並木 次條に同じ。八雲御抄

ならべる-きり 並錐 そう(僧)の異名。八雲御抄 藻鹽草十四「ならべるきり」

ならぶ 並竝列 (他動二) 一ならばしむ。つらぬ。列をなさしむ。つづけしむ。仁德紀「うま人の立つる言たて、うさゆづる斷ゆまつがむに奈羅陪(ならぶ)てもがも」萬四「四つの船、船の上奈良倍(ならぶ)」源帚木「はれをならべ、枝をかはさん」二くらぶ。比較す。比す。萬十「をぐさをとをぐさすけをと、汐舟の那良敝(ならぶ)て見れば」源玉鬘「見奉りならぶるに、彼の后をば知りきこえず」

ならぶぎやう 一奈良奉行 (名) 江戸幕府の制。老中の所管の下に、大和國奈良に駐在し、京都所司代の指揮を受けて奈良の社寺を管し、土地の政事・訴訟をも掌り、非常を警備する役。南都町奉行。御暦秘錄「寛永元年(1624)、奈良奉行壹人(役料百石)、與力六人、同心十人」吏徵別錄「奈良奉行、慶長十八年癸丑六月十一日招置」一員」

ならぶろ 奈良風爐 (名) 大和國奈良にて製り出だしたる土製の風爐。茶具備討集「風爐、奈良風爐・銅風爐」

ならべ 並 (名) ならぶること。ならべたること。又、そのさま。ならび。

ならべ-おく 並置 (他動四) ならべておく。並置す。風雅雜中「三つの峰の二つの道をならべおきて、我がたつ杣の名こそ高けれ」

ならべ-じま 並縞 (名) そろひてならびたる縞。一代女「ならべ縞の大幅帶」

ならべ-たつ 並立 (他動二) 一幾つもならべて立つ。一つ一つならぶ。あまたをならぶ。「人形をならべたつ」二ならべていひたつ。數へたてて彼れ是れいふ。「小言をならべたつ」

ならべ-たてる 並立 (他動下一) 前條の口語。

ならべ-まくら 並枕 (名) 並べたる枕。又、枕を並ぶること。枕を並べて共に寢ぬること。若風俗「ならべ枕に打ち解けてより、人の命を取る程の事ありて」同「春の夜のならべ枕」

ならべ-もん 並紋 (名) 並べたる紋形。又、紋所を並ぶること。比翼の紋。五人女「黑羽二重の大振袖に、桐・銀杏のならべ紋」

ならべる 並 (他動下一) ならぶ(並竝)の口語。

ならーほふし 一奈良法師 (名) 古昔、大和國奈良の東大寺・興福寺等の諸大寺に居りたる僧徒。山法師の類。平家物語「奈良法師くるすゆまで盛りきて、いかに物の具をむきぞ取らるる」徒然草「木幡の程にて、奈良法師の、兵士あまた具して逢ひたるに」

(しふぼらな)

ならーぼり 奈良彫 (名) 江戸の彫金工奈良宗良等の一派の彫方。細工巧なりとされども、風韻清雅を主とせるもの。

ならーぼん 一奈良本 (名) 繪卷物・御伽話等を假名文にて認めたる寫本。紺紙に金泥にて模樣を圍して體裁美麗なるを以て遠棚等の裝飾品とす。足利時代の中頃より桃山時代にかけて盛んに行はる。

ならーまちぶぎやう 奈良町奉行 (名) ならぶぎやう(奈良奉行)に同じ。京兆府尹記「奈良町奉行職掌」

ならーまんぢゅう 一奈良饅頭 (名) ちゅうくわまんぢゅう(中華饅頭)の類。大織冠「奈良の名物中藤下戸衆には奈良饅頭」

ならーもめん 奈良木綿 (名) 木綿の一種。大和國奈良市及び其の附近より產するもの。白・紺・絣・縞・無地等の各種あり。

ならーもろはく 奈良諸白 (名) 大和國奈良より產する諸白。奈良酒。大織冠「奈良の名物中藤上戸には奈良諸白」尤草子「用ひらるる品は奈良諸白に字治の白茶」

ならーやま 楢山 (名) 楢の木の生えてある山。もとの水「楢山や柴して戻る夏の雨」

ならーゆえん 一奈良油烟 (名) 大和國奈良にて製する製墨用の油烟。最も上品たり。用明天皇職人鑑「奈良油烟、手合せに朽ちぬ實や握り墨」大織冠「奈良の名物、まづ奈良油烟・奈良團扇」

ならーろくしやう 一奈良綠青 (名) 大和國奈良より產する綠青。繪の具として良品たり。

ならぬーしだ (名) 【植】水龍骨科、貫衆(ヤブ)屬の多年生草本。根莖を有し、之より大なる葉を出だす。葉は三四回羽狀複葉、長さ二尺許り、各小葉は鈍頭、缺刻ありて淡綠色なり。子囊群は葉の裏に散生し茶褐色なり。我が國、各地の山地に自生す。

ならーね 奈良繪 (名) 奈良本の插繪。彩色して金銀箔等をおく。

ならーを 鳴尾 (名) 鷹の尾羽の名。たか(鷹)を見よ。

ならーを 奈良苧 (名) ならそ(奈良麻)に同じ。一代女「奈良苧も氣が盡きます」

なり 爲 (名) 爲ること。將棋の王將・金將以外の駒が敵地に入りて、本來の將・金將に同じ。

力の上に金將と同一の力を得ること。又、その力を得たる駒。なりきん。

なり　形（名）一爲（ナリ）たるさま。物のかたち。形狀。さまかたち。勢語「なりは鹽尻のやうになんありける」平治「物語」勢（ナリ）手鞠計りにして音ある物あり」太平記「三鈷柄の劍なんどのなりにて」二からだつき。身なり。又、衣服など著けたるさま。狀貌。服裝。なりふり。蜻蛉日記「なりを打ち見れば、いとにくげにはあり」枕「わらはべのかしらばかり洗ひつくろひて、なりは皆なえほころび打ち亂れかかりたるもあるが」三ありさま。ていさい。ざま。やうす。狂言「内證」「其のやうに目をまはすなりで、公事はなりますまいぞや」三河物語「貴方之成りは何としたる事ぞ」浮世風呂「「裕衣のなりにて出で來たり」四爲（ナリ）したるさまのまま。なすがまま。其の通り。其のまま。俳諧古選「蹈み倒す形に花さく土おほね」浮世風呂「奉公だから云ふ形（ナリ）になって」

（諺）形に似せて經（キヤウ）を卷く　人は自らの形に似たる經学を卷くものなりといふ如く、各其の性癖などと似たる行爲をなすものなること。面（カ）に似せてへそを卷く。關八州繁馬「「形に似せて經学を卷くと、拗もでっかい子袋」。

なり　成（名）一成（ナ）ること。成就。成功。萬「「を山田の池のつつみにさす柳、奈里（ナ）もならずもなと二人はも」古今東歌「をふの浦に片えさしおほひなる梨の、なりもならずもねて語らはん」二成（ナ）ること。おなり。おでまし。籠中舊記「御なりの事中略御なりの時の御供の樣體」

なり　生（名）一生（ナ）ること。生び出づること。萬「「やとせ子の片生（ナ）の時ゆ」二實（ミ）のなること。結實。萬「「久方のあまぢは遠し、なほなほに家に歸りて奈利（ナ）をしまさに」同「「荒をらはめこの蕨菜（ナ）をば思はずろ、年のやとせを待てどきまさず」

なり　鳴（名）鳴ること。鳴りたる音。おと。ひびき。こゑ。宇津保俊蔭「なりをしづめて」源少「「人人皆ほころびて笑ひぬれば、又なり高し、なりやまん甚ひざうなり」

なり　たかし　鳴高　鳴る音たかし。かしまし。靜肅にすべしと誡むる語。警蹕の類。風俗歌「なりたかしやなりたかし、大宮近くてなりたかし、あはれのなりたかし」西宮記「十八、外「上卿入門內之間、官掌居結政座、唱「鳴高（タカカリ）」」江次第十「內侍「人長起、行事先鳴高、次名對面」

なり（朝鮮語 Neli（齋藤）より出づ）かたゐ。なりんぼ。癩病。癩病やみ。

なり（名）佛語。ないり（泥梨）に同じ。太平記「十「「奈利八萬の底をでも、同じ思ひの炎と成って焦がれ給ふらん」天正太平記「十「「奈利八萬の底までも引き連れて行くべき我れなれば」

なり　也（助動詞）一（にありの約）物事を指定し又は說明する語。にあり。である。記「「あめ那流（ナ）や、おとたなばたのうながせる」同「「うれたくも鳴く那留（ナ）鳥か」同「「此のみきは我がみき那良（ナ）ず」允恭紀「我がせこが來べき宵奈利（ナ）、ささがねの蜘蛛のふるまひとよひしるしも」二動作をいひ終はり、餘情を含ましむる詠歎の語。繼體紀「庭っ鳥かけは鳴く儺梨（ナ）」萬「「みとらしのあづさの弓の音す奈里（ナ）」同「「やまとには鳴きてかくらむ、よぶこ鳥きさの中山呼びぞ越ゆ奈流（ナ）」

なり　助　なりと。にても。でも。「打つなり蹴るなり心まかせ」狂言「枕「「弓の者になりとも、鐵炮の者になり、出うと思ふですは」

なり　と　次條の略。月詣集「「持つ人にわきて聞かせば時鳥、一聲なりとうれしからまし」狂言「塗「「一べんの廻向なりと致さう」

なり　とも　にありとも。にてありとても。にても。でも。なと。本草「平家「三「「「

人のなりすがたより始め、たゆみなく」

なり-すます 成濟（自動サ）全くなる。なりはつ。俳諧新選冬初雪のはや酒に成り濟ましたり」

なり-そふ 成添（自動ハ）出できて加はる。出でき添ふ。源桐壺「人のそねみ深くつもり、やすからぬ事多くなりそひ侍るに」

なり-そぶり 形素振（名）なりとそぶりとの重言。なりふり。身なりと擧動と。井筒業平河内通「わどぜが常常、あの男に心をかくるなりそぶり」膝栗毛「こなさんたちのなりそぶり、胡散臭いと思ひをった」

なり-そむ 爲初（自動ヤ）なりはじむ。なりかかる。新拾遺冬「風寒み空は雪げになりそめて、かつかつ庭に散る霰かな」

なり-たけ 成丈（副）なるたけ（成丈）の訛り。

なり-たち 成立（名）一なりたつこと。なりたちたること。せいりつ。なりはじめ。傾城酒呑童子「女郎の成り立ちは、皆それに似たること」二なりたる過程。三成分。要素。

なり-たつ 成立（自動タ）一確と成る。できあがる。成立（ナリタツ）す。成就す。「相談なりたつた」「提則なりたつ」風雅春三「懸しさになりたつ中のながめには、おもかげならぬ草も木もなし」二人となりて世に立つ。なりいづ。生ひたつ。立身す。蜻蛉「かく心おくべきわたりぞとさすがに知られて、人にもなりたたん事かたし」同少女「おのづからすくせすくせに人となりたちぬれば」

なり-たつ 鳴立（自動タ）どなりたつ。わめきたつ。浮世風呂三「なり立て、にらみつけられ」

なり-たやに 成田屋煮（名）ぢんじふらうに（團十郎煮）に同じ。團十郎は一に成田屋と稱したればいふ。

なり-づ 成出（自動ダ）なりいづ（成出）に同じ。日本紀竟宴歌「狼を助けて後ぞ、おほつちが深草よりは那利天（ナリ）たりける」

なり-づか 成束（名）成文（ナリ）を束ねたるもの。引用者

なり-つくす 爲盡（自動サ）全くなる。殘らずなる。なりきる。新續古今五「君が代はちくまの川のさざれ石の、苔むす岩となりつくすまで」

なり-つけ 形附（名）裁縫などにて、布帛に跡をつけてしるしとするに用ふる、小さき薙刀の形に似たるもの。象牙・竹などにて作る。〈へら〉。

なり-て 爲手（名）なる人。當たる人。狂言人間五「鬼にはなりても御座らうが、罪人にはなりてが御座るまい」

なり-てん （名）（植）なんてん（南天竹）の異名。

なり-ところ 業所（名）一財物の生産する地と宅地と。産地と宅地と。産業地と住宅地と。又、なりはひを營むために設けたるところ。田宅（ナリタクコロ）。仁德紀「決横源而通海」塞逝流」以全田宅（ナリタクコロ）」二別莊。別邸。持統紀「幸飛鳥皇女田莊（ナリタクコロ）」落窪「三つのなり所の勞と、帶一つとどめつる」別業（駢體）

なり-どし 生年（名）果實など、特によく生（ナ）る年。又、年切の柿の實を結ぶ年。

なり-とどのぶ 成調（自動バ）缺けたるところなく成る。出來て全くそろふ。

なり-とどろく 鳴轟（自動カ）かしましきまで鳴る。轟轟と鳴る。

なり-とよぐ （自動カ）かしましく騷ぎたつ。喧騒す。景行紀「晝夜喧譁（ナリトヨグ）」、出入無禮」訟論（駢體）

なり-とよむ （自動マ）前條に同じ。

なり-なんとす 垂（自動サ）ならんとす。も少しにて及ばんとす。なんなんとす。

なり-のこり 成殘（名）一なりのこること、又、そのもの。二除目にて、未だ成文とならざること。

なりのこり の まうしぶみ 成殘申文　除目に成文（ナリ）とならざる申文。羽倉考「成り殘り申文、申文のままに段段任じもてゆく間、其の既に任じたるを殘り申文と云ふ」

なり-のこる 成殘（自動ラ）ならずして、あとに殘る。

なり-のぼる 成上（自動ラ）なりあがる（成上）に同じ。源帚木「たほ人の上達部までなりのぼりたる中納言なりのほれども、もとよりさるべき筋ならぬは、世の人の思へることも、さはいへど猶ことなり」同行幸「内侍のかみ中將その人ならでも、年月のらふになりのぼるたぐひあれど」

なり-はらだい 爲放題（名、副）なりしだいの爲次第に同じ。

なり-はず 鳴筈（名）射る時、殊に音高く鳴る弓なるべし。古義一說、弦打して弓弦の鳴り響くこと。武藏名目抄「萬二梓の弓の奈利弭（ナリハズ）」の說の音すなり」

なり-はためく （自動カ）鳴りとどろく。鳴りひびく。太平記「雷行く前に閃きて、雷大いに鳴りはためく」

なり-はつ 成果（自動ナ）一なりなりてはてとなる。全く成る。なりをはる。古今序「鶯むかげなくなりはてて」源夕顏「なりはてんさまを見ん」後拾遺雜三「よそ人に成りはてぬとや思ふらん、恨むるからに忘れやはする」二なりさがりはつ。おちぶれはつ。なれのはてとなる。國姓爺「成り果てし此の袋、恥ぢを包まず來たりしぞ」博多小女郎波枕「扨はやや物もらひと人目には見ゆるよな、成り果てたり仕なしたり」

なり-はて 成果（自動ナ）前條の口語。

なり-はひ 生業（名）五穀の生（ナ）るやうに務むるわざ。田畠を耕作するわざ。農業。農作。農産。又、汎く生産の事業。世わたりのしごと。なり。すぎはひ。よすぎ。みすぎ。渡世。職業。生業。産業。げふ。崇神紀「農（ナリハヒ）天下之大本也」中略多聞「池溝、以寬民業（ナリハヒ）」萬八「作りたる其の奈里波比（ナリハヒ）を」字津保下「今年のなりはひ・こがひすべき事定む」和名十「農業、日本紀私記云、耕作」倭名抄「耕種・作田」延喜式「登稔」延喜式「生業・農作」産業」

（諺）生業は草の種 生計の方法は、草の種の如く、いかなる土地にもあること。

なりはひ-ぶね 生業舟（名）たぶね（田舟）に同じ。

なり-はぶく 鳴羽振（自動カ）音高く立てて羽ばたきす。國姓爺「數多の蜂、鳴り羽ぶいてぞ出でにける」

なり-ひさご 生瓢（名）【植】（うたん（瀧鹿）の異名。字津保俊蔭「こがねのなりひさご」和名十「瓢、奈利比佐古」「瓢也」著聞八「なりひさごといふ物を腰につけて、酒賣る家に望みて常にこれを乞ひて」

なり-ひびく 鳴響（自動カ）一鳴る音あたりにひびき聞こゆ。鳴りてひびき傳はる。二名聲喧傳す。名、知れわたる。名高し。關取千兩幟三「堀江堀江と國國へ鳴り響いたる岩川が」

なりひら-だけ 業平竹（名）【植】禾本科、山竹（ナリヒラダケ）屬の竹類。稈は苦竹（ナリヒラダケ）に似、葉は山竹に似たり。五月頃、筍を生ず。籬は堅固なるを以て種種の用に供す。我が國・各地の庭園に栽培せらる。なりひらちく。

なりひら-ちく 業平竹（名）【植】前條の異名。

なりひら-づくり 業平作（名）美男子の稱ありたる在原業平に似たる身のつくり。好男子のからだつき。五十年忌歌念佛「ぼんじやりとしてきつとして、花橘の袖の香に昔男の業平作り」

なりひら-びし 業平菱（名）とりだすき（取襷）に同じ。源橘

なりひら-ぶし 業平武士（名）業平竹の如くしなやかなる武士。なまくらぶし。徳言無覺

なり-ひらめく 鳴閃（自動カ）鳴りてひらひらとす。雷なりて稲光りきらめく。源蜻蛉「神なりひらめく」

なりひら-ねづつ 業平井筒（名）紋所の名。

なり-ぶみ 成文（名）太政官より奏聞を經て、既に勅許なりたる文書。除目に申し文のままに既に任官せしめたる文書。西宮記正月下「成文（駢儷文）院宣（勅旨）」江次第九、奏「史更開一枚申云、成文若干枚」

なり-ぶり 形振（名）一なりとふりとの重言。身なりとそぶり。服裝と態度と。すがたつき。醒睡笑「なりふりも人がましきまま」一代男三「懷の内より手をさし入れ、袴を引き上げ、ちよこちよことあるくなりぶり」二ふりあひ。やうす。もやう。形勢。

なり-まかる 成罷（自動ラ）なりゆく（成行）を卑下していふ。まかりなる。今鏡下「女みまかりにければ中略とり捨つることもせで、なりまかるさまを見て」

なり-まさる 成增（自動ラ）まさりて成り立つ。まさりゆく。次第にまさりゆく。竹取「このちご養ふほどに、すくすくと大きになりまさる」古今冬「みよしの山の白雪つもるらし、故郷寒くなりまさるなり」源紅葉「ねび給ふままに、ゆゆしきまでなりまさり給ふ御ありさまかなと、人人めで聞こゆゆるを」

なり-まじる 生交（自動ハ）生（ナ）りて入りまじる。まじりて生（ナ）る。右京太夫集「このごろはかうじ橘なりまじり、木の葉もみつや秋の山里」

なり-みつ 鳴滿（自動ハ）鳴る音、あたりに滿つ。一面に鳴りわたる。源蜻蛉「かみ中略猶やまずなりみちて」榮華初花「御修法・御讀經中略例の聞きにくきまでなりみちたり」

なり-もてゆく 成持行（自動カ）なりゆく（成行）に同じ。字治拾遺「世のおぼえ、やうやう聞こえ高くなりもてゆけば」續後拾遺雜中「末の世になりもてゆけば、稱も昔の香には似るべくもなし」

なり-もの 生物（名）實の生（ナ）るもの。又、その生りたる實。字治拾遺「なり物の木のなりになりたる多かりければ、それを取り食ひて明かし暮らすほどに」醒睡笑三「寓のきては、なり物を荒らす成しなり」

なり-もの 鳴物（名）晉樂に用ふる鐘・太鼓・絃器等の總稱。即ち、樂器。二代男五「菩薩祭り催して、種種の鳴物心を澄ましぬ」若風俗五「其の一日は世上の鳴物止まれば、猶又芝居の役者子共の暇なり」

なりもの ちゃうじ 鳴物停止　鳴物を奏なることを禁止すること。國家の重大なる葬儀ある時などに行ふもの。停止（ナリジ）。徳川禁令考二編貞享八年八月廿六日「法皇崩御に付、普請・鳴物停止の令」享保集成録編年月廿六日「新准后去廿日薨去に付、今日より廿六日迄、鳴物三日停止に候」

なりもの-いり 鳴物入（名）歌舞などの興を深からしむるため、鳴物を應用すること。

なり-や 鳴矢（名）かぶらや（鏑矢）に同じ。萬三「きの國の昔ゆみをの響矢（ナリヤ）もち、鹿（シ）とりなびけしし坂の上にぞある」

なり-やむ 鳴止（自動マ）鳴ることやむ。しづかになる。源蜻蛉「神少しなりやみて」榮華根合「夜ふけてなりやみ、いとしづかなるに」

なり-ゆき 成行（名）一なりゆくこと。なりゆきたること。又、その過程。「相場の成行」二なりゆきねだん（成行直段）の略。「成行にて買ふ」

なりゆき-うり 成行賣（名）取引所の語。成行直段にて賣ること。

なりゆき-かひ 成行買（名）取引所の語。成行直段にて買ふこと。

なりゆき-ちゅうもん 成行註文（名）取引所の語。成行直段にて賣買せんことを依頼すること。

なりゆき-ねだん 成行直段（名）取引所の語。市場のなりゆきにまかせて出來たる直段。

なりゆき-ばいばい 成行賣買（名）取引所の語。成行直段にて賣買すること。

なり-ゆく 成行（自動カ）成りて進み行く。竹取「かくて翁、やうやうゆたかになりゆく」古今雜歌「山あらしも寒く日ごとになりゆけば」拾遺雜「あづまぢの木の下暗くなりゆかば、都の月を戀ひざらめやは」

なり-わたる 鳴渡（自動ラ）一鳴る音、ひびきわたる。一面にわたりて鳴る。狂言雷「心面白う鳴り渡ったれば、ふと雲聞を踏み外いて」二名きこえわたる。汎く評判せらる。

なりんばう （名）（ばうは、しはんばうなどの類。駢儷語）なり名に同じ。癩病。

なりんぼ 成（名）暦の中段の十二直の一。此の日は造家・婚姻・立願・入學・出行・移徙・種蒔等には吉にて、訴訟等に凶なりとす。正月は戌、二月は亥、三月は子、四月は丑、五月は寅、六月は卯、七月は辰、八月は巳、九月は午、十月は未、十一月は申、十二月は酉の日の稱。

なる 爲（自動ラ）一異なる樣にかはる。此れより彼れに移る。變化す。改まる。萬三「此の代にし樂しくあらば、こむ世には蟲に鳥にも吾れは成（ナ）なむ」同五「あめつちは廣しといへども、あがためはせばくや奈理（ナ）ぬる」同四「世の中は戀しけしゑや、かくしあらば梅の花にも奈良（ナ）ましものを」二時日經てそれに至る。至る。經（ヘ）る。經過す。達す。たつ。記上「君が行きけ長く那理（ナ）ぬ、山たづのむかへを行かむ待つには待たじ」垂仁紀「往來之間、自經（ナリ）て十年」萬十「ほとときす來鳴かむ月に、いつしかも早く奈里（ナ）なむ」至（鳳）三　三なりはつ。なれのはてとなる。平家三西光被斬「當家傾けうとする謀叛の奴がなれる姿よ」同三城殿「只兎も角も、愚老が成らん樣を御覽じ果てさせ給ふべうもや候らん」國將基にて、王將・金將以外の駒が敵地に入りて、本來の力の外に金將と同一の力を得るに至る。浮世風呂四「歩を成れと打て」

なれ は なりゆく かはり爲るといひても、かくもかはりはてたり。かはれ

ばかはる。傾城酒呑童子「なれば成り行く身の果てかな」

なれる はて 成果 なれのはて(偽果)に同じ。蓮卒都婆「小野の小町が爲れるはてにてさむらふなり」同鉢木「是れこそ佐野の源左衛門の尉常世がなれる果てにて候」

なる 成 (自動サ) 一できあがる。しあがる。成就す。成功す。萬四「むろがやのつるの堤の那利(ナリ)ぬがに、子ろはいへども未だねなくに」同四「相かがらひ、ことの成(ナリ)しかば」源信「奏し給ふことのならぬはなかりしかば」二思ひがかなふ。望み通りになる。願望成就す。本窓遊げらる。古今雑体「富士のねの成らぬおもひに燃えば燃え、神だにけたぬむなし烟を」夫木三「きの國の昔ゆみをの手にもたる、なるやならずや我が思ふこと」國姓爺後日合戦「今の目もとはなる目元」三なし能ふ。なし得る。できる。狂言「ならぬ事を申し附けう」同「ならぬならぬと云へ」四「塔へ得。よろし。益支へなし。狂言「師匠より譲られた笠でござるによって、雨露にうたせても、又は人に誘れてもなりませぬほどに」同「あれへ出させらるる事はなりません」傾城賢二筋道「うぬらに振まはさされてなるものか」五貴人の御動作あらせらるるにいふ語。御成りになる。おでましになる。中務内侍日記「ねぬるを、御所になりぬるとてあれば、皆起きて拳る」顕政集「行幸なりて侍りけるに」延喜平家「御産とみになりやらず」同「同冬、平家「見て」如は御所御所のなり候時は」六相及ぶ。匹敵す。かなふ。及ぶ。比肩す。狂言「手跡なりとなたには、ならせられますまい」大鑑同「玉津島もならせられますまい」

ならう とと ならう ならうとならばに同じ。

ならう ならば 火鉢の略。

ならう ならば 出來るならば。出來得べくんば。ならば。

ならぬ なか 不成中 不如意なる事らしむき。足らぬがちなる家の内。

ならば 成 一成し能ふことならば。なし能ふと思はば。狂言「つれていんで見せう。ならばつれて行け」大鑑同「腕づくで行くものか行かぬものか、成らば連れていてお見やれ」二なるだけなら。なるべくは。

なりならず 成不成 なるとならざると。成功と失敗と。成敗。できふできぬ。推古紀「善惡成敗(ナリナラズ)」夫木「なりならずおふの浦梨うらなれて、ねぬにかたらふ郭公かな」

なりなる 成成 一成りに成る。できあがる。神代紀「吾身具成(ナリナリ)而、有稱陰元者」歳上「順次になる。なりたる上に又なる。宇治拾遺「をのこ子・女子あまた生みつづけて、又それが妻をとこになりなりしつつ」

なりんじ (なりにしの音便) なりたりし。既成。娥歌加留多「なりんじ事をば說かず、遊げんじ事をば諫めず、既にいんじを咎めず」

なりんしょ なりませう。昔時の遊女の語。傾城酒呑童子「近付もなささうな、局へどんせ、しっぽりと知る人になりんしよ」

なる くち 成口 酒の飲める口。酒の嫌ひでない口。鎌田兵衛名所歌「下地はなる口、者には知行所」膝栗毛「二人ながらなる口ゆ丞、あひのおさへのと飲みかけ」

なる とと ならば ならうとならに同じ。狂言「成る事ならば、妾が共共に肝を煎ってかな(て)進ぜう」

なる とは なし いつ成就すといふ當てもなし。後撰「人知れず思ふ心は大島の、なるとはなしになげく頃かな」續古今「思ふとと猶しき波に、大島のなるとはなくて年のへぬらん」

なる ともなし 必ず成就すといふわけでもなし。狭衣「思ふ事なるともなしに幾かへり、うらみわたりぬ加茂の川波」

なれならざれ 成らうが成るまいが。成らうと成るまいと。成否は兎にかく。國姓爺「成れ成らざれ御返事を、さあ只今」

(諺)**ならぬ内が楽しみ** 事は、成就したる後よりも、却って其の功を欲する間が楽しみの深きこと。待つが花。出來ぬ内が楽しみ。

(諺)**ならぬ塔恕するが塔恕** 夫條の略。業草「塔恕のなる塔恕は誰れもする、ならぬ塔恕するが塔恕」續書錄「恕」所不能恕、容所不能容、惟識童過人者能之」

(諺)**なる塔恕は誰れもする、成らぬ塔恕するが塔恕** 通常人の恕ぶ可からざるを恕ぶが、まことの塔恕といふものなること。

(諺)**なるもならぬも金次第** 地獄の沙汰も金次第に同じ。ぢごく(地獄)の條を見よ。

なる 生 (自動ナ) 一無かりしもの、新に形成りて表れ出づ。生(ナリ)り出づ。出生す。出現す。生ず。出でく。神代紀「天地之中、生(ナリ)一物、狀如葦芽」推古紀「親なしに、なれ奈理(ナリ)けめや」萬四「岩木より奈利(ナリ)でし人か」二實(ミ)が結ぶ。みのる。結實す。天智紀「橘はおのが枝枝那例(ナリ)れども、玉にぬく時おやじ緒にぬく」萬四「冬ごもり春べを懸ひて殖ゑし木の、實の成(ナリ)時を片待つ吾れぞ」三農作物そだちて產業の基となる。なりはひにす。なりはひをなす。萬四「きむりにたむ蔭ぎに家のいもが、奈流(ナリ)べきことを云はずきぬかも」

(諺)**なる木は花から違ふ** 實のなる木は花の時より知らる。

なる 鳴 (自動ラ) 一音たつ。ひびく。音す。壓出づ。「手が鳴る」記「鳥鳴(ナリ)海神(ワタツミ)」萬「負ひそ矢の、そよと奈流(ナリ)まで」なげきつるかも」瀧雲太「御ぞのなれば、ぬぎおきて」二ひびきわたる。あまねく知らる。聞こえわたる。

(諺)**鳴るは瀧の水** 古昔の延年舞などの歌のはやし。平家一「うれしや水、鳴るは瀧の水、日は照る共不絶とうたりと囃しつつ」

なる 慣馴 (自動ラ) 一たびたび出會ひてめづらしからずなる。ならはしとなる。何とも思はぬやうになる。古今「見てもまた又も見まくのほしけれど、なるるを人はいかがせど、ことにもあらぬやつといふさま、いとなれたり」二ならはしの如くになりて能く知るに至る。習熟す。熟知す。熟練す。柴蔭衣「まだなれぬ山がくれに住みそむる、谷の嵐はいかが吹くらん」新六帖「白かしの枝葉おしなみ雪ふれど、なれたる山は道も迷はず」三屋近づきて隔てなくなる。親しみなつく。むつる。むつぶ。なつく。なじむ。萬「み猟するかりばのをぬのなら柴の、奈禮(ナ)はまさらず懸こそまされ」同「なはしるの小なぎが花を衣に摺り、奈流留(ナ)まにまにあぜかかなしけ」勢語「年ごろあひなれたるめ、やうやう床はなれて」源下「猫中將いとよくなれて」四親しみて心やすだてになる。餘りにうちとけたり。なめげなるさまになる。宇鏡「關白黑川殿、後鳥羽院、又、金藤右兵衛尉奈」とけてなれたる姿、つくろはぬかたちを」狩。五ふるくさくなる。新しからず。よどる。なえばむ。萬「紐解かずまろねをすれば、吾がきたる衣は奈禮(ナ)ぬ」同「旅にてもものなくはやこと、わぎもこが結びし紐は奈禮(ナ)にけるかも」源葵生「御調度どもも、いと古代になれたるが、昔やうにてうるはしきを」褒。六生氣うす。新鮮ならず。くさる。甲陽軍鑑「くさるといふ心がけもなくて取り出でて、料理の時、魚のなれたる詮索もなく」

なれ なじむ 馴馴染 なじむ(馴染)に同じ。曾我五人兄弟「一門衆にも馴れ馴染み」

なれ なる 馴馴 馴れに馴る。十分馴る。新古今雜「なれなれて見しは名殘の春やとも、などしら河の花の下蔭」夫木「なれなれし床はふるきのかは衣、君きまさねばあたり寒けし」

(諺)**馴れぬ米商ひより馴れた墨商ひ** 馴れぬ物事に手を著くるよりは、手馴れたる物事を守り行くが萬全なること。知らぬ米商ひより知った紛鎌商ひ。

なる 熟 (自動ラ下) 混じりあひて能くとけとのぶ。よく熟す。義經千本櫻「三押さへて締めてなれさする、味い盛りの振袖が釣瓶鮓とは物らしし」燕村句集「なれ過ぎた鮓をあるじの遺恨かな」

なるい (形口) なだらかなり。おだやかなり。ぬるし。ゆるし。

なる-いかづち 鳴雷 (名) なるかみ(鳴神)に同じ。記「於左足者鳴雷(ナリイカヅチ)居」諸雷「鳴る雷となり、内裏に飛び入り」

なる-いた 鳴板 (名) 清涼殿の孫庇の南端にある、釘付けにせざる床板。踏めば音たてて鳴るよりいふ。見參の人は、至尊の御邊近くて、屢づくろひも憚りあれば、其の音によりて主上の知ろし召されんためなるべし。猶、せいりやうでん(清涼殿)を見よ。なりいた。げざんの板。玉葉(建久元年十二月九日)「聞鳴板聲」源大納言通立、取筥參上」禁秘抄「殿上間、南切妻有鳴板(ナルイタ)」、號見參板(不行也)」名目抄「鳴板(ナルイタ)」

なる-かぶら 鳴鏑 (名) かぶらや(鏑)に同じ。天智紀「有細蔓如鳴鏑(ナルカブラ)」

なる-かみ 鳴神 (名) かみなり(雷)に同じ。萬「天雲をほろに蹈みあたし鳴神(ナルカミ)も、今日にまさりてかしこけめやも」古今雜四「天の原蹈みとどろかしなる神も、思ふ中をばさくるものかは」

なるかみ-づき 鳴神月 (名) 〔雷鳴多き月の義〕陰暦六月の異名。藏玉「十二月異名中略六、鳴電月。夏雨はなほほれやらで、なる神の月にもなりぬ夏や暮るらん」

なるかみ-の 鳴神之 (枕) 雷鳴は音高ければ、おとにかけていふ。萬「鳴神乃(ナルカミノ)音のみ聞きし」

なるかみ-まつり 鳴神祭 (名) 豐稔を祈るために鳴神を祭ること。四時祭式二月「鳴雷神祭一座(十一月准此此準)」雷公祭。小さき竹管を絲にて連ねて板につけ、繩をつけおき、引けば管の板に觸れて音を發するもの。田畠の害鳥などを驚かし逐ふに用ふ。ひた。ひきた。右京大夫集「鶯ふす門田のなる、引きなれて、かくらまうきや秋の山里」夫木「道のべのわさ田のなるこ今日見れば、秋をかけてぞ風も身にしむ」

なるこ (名) 江戸の郊外、西成子村より產する熟瓜。上品とする。

なるこ-うり 成子瓜 (名) 江戸の郊外、西成子村より產する熟瓜。上品とする。

なるこ-すげ (名) 〔植〕莎草科、蔓(スゲ)屬の多年生草本。高さ六七寸乃至一尺。葉は細長なり。花は單性、雌雄同株、各穗をなし、五月頃、綠褐色を呈す。我が國、各地の水田に自生す。

なるこ-だ 鳴子田 (名) 鳴子をかけてある田。鳴子のある田。諸鳥集「賤が鳴子田引き連れて、鳥追船に乘らんとて」

なるこ-なは 鳴子繩 (名) 鳴子に附けてある繩。鳴子を引き鳴らすための繩。小侍從集「厭ふまで思ひなかけそ鳴子なは、稻葉の風の招く心を」

なるこ-びえ (名) 〔植〕禾本科、なることびえ屬の多年生草本。莖の高さ一二尺。葉は割合に巾廣し。花は小穗をなし、五六月の頃、三四分岐せる穗を出だし、一側にのみ花を著け、後、白き毛ある穎果を結ぶ。我が國、各地の原野に自生す。

なるこ-まくは 鳴子甜瓜 (名) 〔植〕葫蘆(ウリ)科、胡瓜(キウリ)屬の一年生草本。甜瓜の一品種。果の形小にして、味頗る甘く、香氣に富む。早熟にして豐產なり。

なるこ-ゆり 黃精 (名) 〔植〕百合科、黃精屬の多年草本。莖の高さ一二尺。葉は長楕圓形、平行脈を有す。初夏、葉腋に三五箇づつ、淡綠色の下垂せる花を開く。我が國、各地の山野に自生す。おほみ。へびゆり。やまゐみ。ゐみぐさ。

なる-さを 鳴竿 (名) 鳴子の類。下文を見よ。祝藏抄「めかれして栗穗きらすなあかしと、鳴る棹持ちてましら追へるうなる。なるさをとは、棹のさきに鳴子をつけて、それを鳴らして、片山里に栗といふ物を作りて猿を追ふ也」

なるたき-ど 鳴瀧砥 (名) 山城國葛城郡鳴瀧山より出づる砥石。黃褐色にて質緻密、板狀に割れ易し。合砥等に用ふ。物考「後撰三「春宮に、なるとといふ戸のもとに、女どものいひけるに、親の戸をさしてるて入りにければ」

なる-と 鳴戸 (名) 禁中にありたる戸。開閉に、いたく鳴りはためけばいふ。

なる-たき 成丈 (副) 出來得るだけ。力の及ぶ限り。なるべく。館ふたげ。

なる-てん (名) 〔植〕なんてん(南天竹)の異名。

なる-と 鳴門 (名) 水が相激して鳴り響くせと。萬「これやこの名に負ふ奈流門(ナルト)のうづしほに、玉も刈るとふあま少女ども」

なるとたび 鳴門鯛 (名) 〔鯛〕まだひ(眞鯛)に同じ。阿波國鳴門の鯉所を通過せしもの珠に美味なりとの事より、此の名ありといふ。

なるはじかみ (名) 〔植〕あさくらざんせう(朝倉山椒)の異名。和名抄「蜀椒奈流波之加美」

なるほど 成程 (副) 一すこぶる。しどく。ずゐぶん。なかなか。可なり。ことのほか。狂言「其の柿は渋うはないか。いやいや成程甘うござる」同「其の參る所はよい所でござるか。成程よい所で、しかも男もよい男でおりやる」二出來得るほど。なるたけ。一代男「どれでも構はぬ 此の所でなる程意氣すぎて、男振るほどの女郎呼べ」、若風俗「脇指抜きて左の小指板數に推し當て、なる程心靜かに、五引き六引きに切り落とし」武家義理物語「なるほどひそかにたづね見まはり」三全く不同意にはあらざるにいふ語。合點したるにいふ語。いかさま。いかにも。狂言「療治をせぬにおいては、たった一つかみにつかみ殺してやら

うぞ中興成程療治致しませう」同狂言「愚僧にも參るやうにと御使でござったほどに、なるほど參りませうと申して約束致してござるが」圖少しも無理ならざるにいふ語。げに。まことに。もっとも。然り。狂言「成程、畑は彼奴が畑ではござれども」同柳樽八「成程彼奴が申す通り」心中萬年草「なるほどなるほど、其の管」

なるほどに 成程　なるほど(成程)に同じ。狂言聟「きてくりやるまいか中興宰せう」

なるみ-しぼり 鳴海絞　(名)　ありまつしぼり(有松絞)に同じ。尾張國鳴海驛より賣り出だすを以ていふ。

なるや 鳴矢　(名)　かぶらや(鏑矢)に同じ。今昔「鳴る箭を以て射たりければ」夫木「なるやも鹿とりなびく夏草に、うらはずふせてねらふさつをか」

なるる-がほ 馴顔　(名)　馴るる如き顔つき。馴れたるやうなるやうす。なれがほ。俊成女集「袖の上になるる顔なる光かな、月こそ旅の心知りけれ」

なれ 慣　馴　(名)　なるること。なれたること。習熟。なじみ。熟練。習慣。萬「ことはぬ木にはありとも、うるはしき君が手奈禮(ナレ)の琴にしあるべし」義經千本櫻「女房顔して言うて見る、さすが酢屋の娘とて、早いなれとぞ見えにける」

なれ 熟　(名)　熟(ナレ)るること。熟(ナレ)たるもの。義經千本櫻「娘が漬けた酢なちば、なれがよかろと買ひにくる」

なれ 汝　(代)　なむち(汝)に同じ。な。推古紀「親なしに那禮(ナレ)なりけめや」萬「この川に朝な洗ふこ奈禮(ナレ)もあれも、よちをぞ持てるいで子たばりに」同「夕されば床のへ去らぬつげ枕、いつしか汝

なれ-あひ 馴合　慣合　(名)　なれあふこと。なれあひたること。なれあひてなすものごと。

なれあひ-さうば 慣合相場　(名)　取引所の語。賣手と買手とがぐるになりてつけたる相場。

なれあひ-てがた 慣合手形　(英 Accommodation bill)　(名)　【商】くうてがた(空手形)に同じ。

なれあひ-まをとこ 馴合閒男　(名)　財賣を食りなどするため、夫婦なれあひの上にてなすま男。つつもたせの類。

なれあひ-めをと 馴合女夫　(名)　なれあひて出來たる女夫。野合の夫婦。

なれ-あふ 馴合　慣合　(自動)　一　互ひに相馴る。互ひに親しむ。なれむつぶ。二互ひに戯れあふ。ふざけあふ。又、互ひにみだりがはしくなる。私通す。野合す。狎合。三互ひに共謀す。協同して惡事をたくらむ。ぐるになる。

なれ-あぶ 熟合　(自動)　互ひに熟る。相熟る。

なれ-かげん 熟加減　(名)　熟れたる加減。熟るるぐあひ。蕪村句集「寂寞と壹岐の鮓の熟れ加減」

なれ-がほ 馴顔　(名・形)　馴れたる如き顔つき。馴るるやうなるやうす。源若紫「いとなれがほに、御帳の内に掻き抱きて入り給へば」同葵「いとなれがほなり」

なれ-きぬ 馴衣　褻衣　(名)　著馴れたる衣。常に著て古びたる衣服。又、ふだんぎ。なれごろも。きなれごろも。愛澄集「なれ衣もぬぎかへがたし、花の香を春のかたみにうつしものを」

なれ-こ 馴事　(名)　よく馴れたる事がら。互ひによく馴るること。

なれ-こ-ぎひ 馴講舞　(名)　互ひに心やすく馴れなじまんとて、寄合講をして舞ひ遊ぶこと。物語名盛衰記「馴勢」奉幣・御神樂なんどこそ力無ければ不叶と、王子・王子の御前にて馴子舞計りをば仕らる」義經記五「馴勢山」「藏にしたがひて思ひ思ひのなれこまひする中にも、面白かりし事は、近江の國より參りける白拍子も、一番舞うてぞ入りにける」

なれ-ごろも 馴衣　褻衣　(名)　なれぎぬ(馴衣)に同じ。萬「別かれにし妹が著せてし奈禮其呂母(ナレゴロモ)、袖片敷きて獨かもねむ」萬代集「ふる里に我がなれ衣重ねん、秋風寒しひなのあら野も」

なれ-すがた 慣姿　褻姿　(名)　なれたる姿。常に居る時の姿。褻(ケ)の姿。きたなげなる姿。源若紫「數にもあらずあやしきなれすがたを、打ちとけ御覽ぜられんとは更に思ひかけぬことなり」柴華岩島「俗などのなれ姿も、いみじうかたじけなう」

なれ-ずがほ 不馴顔　(名・形)　まだよく馴れざる如き顔つき。夫木「秋はさぞ吹くないぶきの山風に、なれずがほにも鹿のわぶらん」

なれ-ずし 熟鮓　(名)　鮓の一種。鹽を稀して魚を壓すること一夜、水氣を拭ひ、冷飯を用ひて桶に藏め、重石を以てこれを壓すること若干日、味熟するに至りて食するもの。紀伊續風土記「物産」「在田・日高兩郡にて、鹽魚を以て馴鮓といふを製す」

なれ-そむ 馴初　(自動)　馴れはじむ。初めてなじみとなる。源若紫「などてかくなれそめしぞと、殿はくるしがり給ふ」續古今雜三「白露のあだなる離れになれそめて、我れにもかかる心おくらん」

なれ-そめる 馴初　(自動)　前條の口語。

なれ-つく 馴付　(自動)　馴れて親しみなつく。なつく。

なれ-っと 馴事　(名)　なれと(馴事)の訛り。浮世風呂「馴れっ事ョになってる所爲(ナリ)か、更に構はぬ」

なれ-ど (接)　次條の略。

なれ-ども (接)　にはあれども。ではあるが。しかれども。しかしながら。されど。けれども。保元「最期の時しも御見參に入らねば、さこそ御心に懸かり侍らるめ、なれども且は八幡の御計らひかと思し召して、痛くな歎かせおはしましそ」太平記「公家の勅裁は、なれども人不用、武家の奉書は憚って渡す人なし」

なれなれ-し 馴馴　(形)　一甚だ馴るる狀なり。いたく馴れたり。いと心やすげなり。宇津保「藤原「宮知り給ひてや、九の君になれなれしき事あらん」源若紫「人よりは心やすく、なれなれしくふるまひたり」二いとなればみたり。いたくなえばめり。新六帖「いつか我れしほ焼くあまのふぢ衣、なれなれしくもいもにあひ見ん」褻褻。

なれなれし-げ 馴馴氣　(名・形)　なれなれしきやう。なれなれしさう。源若紫「なれなれしげに」

なれなれし-さ 馴馴　(名)　なれなれしきさま。なれなれしき度合。

なれ-の-はて 爲果　成果　(名)　なりはてたるところ。なりさがりたるはて。身のなれる終局。おちぶれはてたるところ。零落の極。なれるはて。博多小

女郎波枕「成れの果てを思はれ、不憫さに腹が立つはいや」平家女護島「一門のなれの果て、思ひやられて口惜しや」

なれ-ばむ (自動)　衰されて見ゆ。ふるびてなえばむ。枕「かりぎぬは、何も打ちなればみたる」

なれ-まさる 馴增　(自動)　ますます馴る。いよいよ馴れてくる。風雅「此の頃は月にも翫ぞなれまさる、ねられぬまの老いのすさびに」

なれ-むつぶ 馴睦　(自動)　馴れ親しむ。馴れてむつまじくあり。源若紫「年比なれむつびきこえ給へるを、見奉りおくゝ悲しびをなん、かへすがへすの給ひける」

なれ-もの 馴者　(名)　物事によく馴れたる人。世馴れたる人。世情に通じたる人。今昔「此の爲盛の朝臣は、極めたる細工の風流有る物の物云ひにて、人咲はする馴者なる翁にてぞ有りければ」

なれ-ゆく 馴行　(自動)　馴れてゆく。次第に馴る。おひおひに親しむ。源若紫「なれ行くままに哀れとおぼえしかば、たえだえ忘れぬものに思ひ給へしを」同浮舟「都なれ行く有りさまをかしきも」

なれ-よる 馴寄　(自動)　馴れて近よる。馴れむつびてあたりへ寄る。源竹河「女房にもけ近うなれよりつつ」輔親集「橘の香をなつかしみなれよらん、花の袂も折りて見るべき」

なれる 慣　(自動)　なる(慣)の口語。

なれる 熟　(自動)　なる(熟)の口語。

なぬ (名)　ぢしん(地震)に同じ。武烈紀「おみの子のやぶのしま垣下とよみ、那爲(ナ)がようこば破れむしま垣」宇津保俊蔭上「なゐのやうにつち動く」

なゐ ふる 地震　がいる。大地震動す。允恭紀「地震(ナヰフル)」推古紀「地動(ナヰフル)」、舍屋悉破」柴華花山「なゐなどさへふり

て」

なゐは-むし (名)　【動】あをむし(青蟲)の異名。字鏡集「蝦(ナヰハ)」

なゐ-をなく-とり 鳴名鳥　(名)　【動】うぐひす(鶯)の異名なるべし。一代男「立つ木の白梅に、名を鳴く鳥を宿らせ」

なをは-むし (名)　【動】なゐはむしに同じ。字鏡集「蝦(ナヰハ)」

なをり 波折　(名)　古語。波のをり重なりて高く立つこと。又、そのところ。紀事「一說、波の折り返すこと。又、その所。古事記「潮瀑の那眞理(ナヲ)を見れば遊び來る、鮪がはた手に妻立てり見ゆ」

なをり 名折　(名)　名譽を毀損すること。名辱をきずつくること。不名譽。又、その事がら。なをれ。拾玉「しづのめが麻の衣の花ずりは、萩のなをりのものにぞ有りける」盛衰記「石橋軍の時、源氏の名折りに、何か藏に後を見せ給ふぞ」

なをれ 名折　(名)　前條に同じ。盛衰記「源氏の名折れ不審なりとて、一門に擯出せられて」貧我「一門を空しく鎌倉へ捕へられんこと、寺中・坊中のなをれなり」

なん 一男　(名)　だん(男)に同じ。運歩色葉「男數(ナンソ)」

なん 一難　(名)　一わざはひ。災難。危難。厄難。難儀。易經上「君子以儉德辟難」左傳六年「君姑脩政、而親兄弟之國、庶免於難」二むつかしきこと。かたきこと。困難。史記「爲人排難解紛、而無取也」三批難すべき點。不完全なところ。きず。缺點。なんくせ。源若紫「是れを初めのなんとすべし」同「ゆゑよし過ぎて人目に見ゆばかりなるは、餘りのなんも出できけり」著聞「いかによくかきたる繪にも、必ず難を見出だすも

なんぞ-むし　(名)　【動】あをむし(青蟲)の異名。字鏡集「蝦(ナヰハ)」

なを-なく-とり 鳴名鳥　(名)　【動】うぐひす(鶯)の異名なるべし。一代男「立つ木の白梅に、名を鳴く鳥を宿らせ」

なをは-むし (名)　【動】なゐはむしに同じ。字鏡集「蝦(ナヰハ)」

なを-をり 波折　(名)　古語。波のをり重なりて高く立つこと。又、そのところ。紀事「一說、波の折り返すこと。又、その所。古事記「潮瀑の那眞理(ナヲ)を見れば遊び來る、鮪がはた手に妻立てり見ゆ」

なを-をり 名折　(名)　名譽を毀損すること。名辱をきずつくること。不名譽。又、その事がら。なをれ。拾玉「しづのめが麻の衣の花ずりは、萩のなをりのものにぞ有りける」盛衰記「石橋軍の時、源氏の名折りに、何か藏に後を見せ給ふぞ」

なを-れ 名折　(名)　前條に同じ。盛衰記「源氏の名折れ不審なりとて、一門に擯出せられて」貧我「一門を空しく鎌倉へ捕へられんこと、寺中・坊中のなをれなり」

なん 一男　(名)　だん(男)に同じ。運歩色葉「男數(ナンソ)」

なん 一難　(名)　一わざはひ。災難。危難。厄難。難儀。易經上「君子以儉德辟難」左傳六年「君姑脩政、而親兄弟之國、庶免於難」二むつかしきこと。かたきこと。困難。史記「爲人排難解紛、而無取也」三批難すべき點。不完全なところ。きず。缺點。なんくせ。源若紫「是れを初めのなんとすべし」同「ゆゑよし過ぎて人目に見ゆばかりなるは、餘りのなんも出できけり」著聞「いかによくかきたる繪にも、必ず難を見出だすも

なんぞ-むし　(名)　【動】あをむし(青蟲)の異名。字鏡集「蝦(ナヰハ)」

なを-なく-とり 鳴名鳥　(名)　【動】うぐひす(鶯)の異名なるべし。一代男「立つ木の白梅に、名を鳴く鳥を宿らせ」

なをは-むし (名)　【動】なゐはむしに同じ。字鏡集「蝦(ナヰハ)」

なを-をり 波折　(名)　古語。波のをり重なりて高く立つこと。又、そのところ。紀事「一說、波の折り返すこと。又、その所。古事記「潮瀑の那眞理(ナヲ)を見れば遊び來る、鮪がはた手に妻立てり見ゆ」

なを-をり 名折　(名)　名譽を毀損すること。名辱をきずつくること。不名譽。又、その事がら。なをれ。拾玉「しづのめが麻の衣の花ずりは、萩のなをりのものにぞ有りける」盛衰記「石橋軍の時、源氏の名折りに、何か藏に後を見せ給ふぞ」

なを-れ 名折　(名)　前條に同じ。盛衰記「源氏の名折れ不審なりとて、一門に擯出せられて」貧我「一門を空しく鎌倉へ捕へられんこと、寺中・坊中のなをれなり」

なん 一男　(名)　だん(男)に同じ。運歩色葉「男數(ナンソ)」

なん 一難　(名)　一わざはひ。災難。危難。厄難。難儀。易經上「君子以儉德辟難」左傳六年「君姑脩政、而親兄弟之國、庶免於難」二むつかしきこと。かたきこと。困難。史記「爲人排難解紛、而無取也」三批難すべき點。不完全なところ。きず。缺點。なんくせ。源若紫「是れを初めのなんとすべし」同「ゆゑよし過ぎて人目に見ゆばかりなるは、餘りのなんも出できけり」著聞「いかによくかきたる繪にも、必ず難を見出だすも

なんぞ-むし　(名)　【動】あをむし(青蟲)の異名。字鏡集「蝦(ナヰハ)」

なを-なく-とり 鳴名鳥　(名)　【動】うぐひす(鶯)の異名なるべし。一代男「立つ木の白梅に、名を鳴く鳥を宿らせ」

なをは-むし (名)　【動】なゐはむしに同じ。字鏡集「蝦(ナヰハ)」

なを-をり 波折　(名)　古語。波のをり重なりて高く立つこと。又、そのところ。紀事「一說、波の折り返すこと。又、その所。古事記「潮瀑の那眞理(ナヲ)を見れば遊び來る、鮪がはた手に妻立てり見ゆ」

なを-をり 名折　(名)　名譽を毀損すること。名辱をきずつくること。不名譽。又、その事がら。なをれ。拾玉「しづのめが麻の衣の花ずりは、萩のなをりのものにぞ有りける」盛衰記「石橋軍の時、源氏の名折りに、何か藏に後を見せ給ふぞ」

なを-れ 名折　(名)　前條に同じ。盛衰記「源氏の名折れ不審なりとて、一門に擯出せられて」貧我「一門を空しく鎌倉へ捕へられんこと、寺中・坊中のなをれなり」

なん 一男　(名)　だん(男)に同じ。運歩色葉「男數(ナンソ)」

なん 一難　(名)　一わざはひ。災難。危難。厄難。難儀。易經上「君子以儉德辟難」左傳六年「君姑脩政、而親兄弟之國、庶免於難」二むつかしきこと。かたきこと。困難。史記「爲人排難解紛、而無取也」三批難すべき點。不完全なところ。きず。缺點。なんくせ。源若紫「是れを初めのなんとすべし」同「ゆゑよし過ぎて人目に見ゆばかりなるは、餘りのなんも出できけり」著聞「いかによくかきたる繪にも、必ず難を見出だすも

のなりけり」

なん ちゅう の なん 難中難　難儀なるものの中にても更に難儀なるもの。最もかたきこと。至難。无量壽經「若聞斯經信樂受持、難中之難、无過此難」

なん つく 難附　難癖(ナンクセ)を附く。他の缺點を見出だす。批難す。そしる。又、難がつく。きずがつく。源若紫「女の、これはしもとなんつくまじきは、かたくもあるかな」同「人の上をなんつけ、おとしめざまのことい ふ人をば、いとほしきものにし給へば」心中刃氷期日「家に難つかず、疵が附けば平兵衛が疵」

なん なし 難無　一少しの困難もなし。造作もなし。「難なく出來る」二少しの缺點もなし。批難すべき點なし。源若紫「木の道のたくみ中將定まれるやうあるものを、なんなくし出づることなん」同野分「人としてかくなんなきことは、かたかりける」

なん を かまふ 構難　軍をおこす。兵を集めて互ひに陣を張る。兵を構ふ。戰國策「楚策四」「奉構難數於漢中」同「構難而兵結」

(諺)難なくて七癖 無くて七癖に同じ。なし(無)の條を見よ。

(諺)難に臨んで兵を鑄る 軍を見て矢をはぐに同じ。いくさ(軍)の條を見よ。運歩色葉「臨難鑄兵(ナンニノゾミテヘイヲイル)、臨渴掘井(ノドカワキテイヲホル)、臨難而遽鑄兵(ナンニノゾミテアワテテヘイヲイル)、臨渴而遽掘井(ノドカワキテイヲホル)、雖速本無及已」

なん 一南　(名)　みなみ。南方。「南・北」

なん 何　(代)　なに(何)代の音便。字治拾遺「これは誰が置きたるぞ、なんの料ぞ」狂言惡「これやなんぢや知らぬまで

い」同「なんの御用で御ざりまする」

なん ぞれ か ぞれ 何其彼其　何か知らん。何や彼や。何彼につけて。假名手本忠臣藏「何ぞれかぞれ小用の有るもの」浮世風呂「人と云ふ者は、何ぞれ角ぞれ、取り得のあるもんでござりやすが」

なん たら か たら 何彼　何とか彼とか。なんだのかだの。浮世風呂「いしこらしう、江戸子ぢや、なんたらかたら云うても、上の者の目から見ては、ととやくたいぢやがな」

なん ぢや 何　一何にてあるか。何なるか。狂言どんま「物をひらひました。なんぢや見せい」二いかに。なんと。なに。(呼びかけて問ひなどするにいふ)狂言鬼「なんぢや、さこが處へ行かう」同「なんぢや、手討になるとも、え渡るまい」

なん なり とも 何成共　なになりとも(何成共)の音便。なに(何)代の條を見よ。狂言「なんなりとも、おのれが欲しい物を取ってうせい」同「出家に似やうた事ならば、なんなりとも、おつしやれませい」

なん の いな 次條に同じ。浮呂風呂「夫れは御憚りだね。なんのいな」

なん の いの 何　何でもなし。いふに足らず。何とも思はず。若風俗「君ゆゑの恥ぢはなんのいの」最明寺殿百人上臈「そんな物なんのいの」

なん の か の 何彼　なんだの彼だの。何や彼や。何とか彼とか。とやかく。かれこれ。あれやこれや。いろいろ。狂言惡「出家と申す者も、且那あしらひのなんのかのと申して、とっと六かしい物ぢやによって」同成上「人に取られていはうやうがなきに、なんのかの

なれそめしぞと、殿はくるしがり給ふ」續古今雜三「白露のあだなる離れになれそめて、我れにもかかる心おくらん」

なれ-そめる 馴初　(自動)　前條の口語。

なれ-つく 馴付　(自動)　馴れて親しみなつく。なつく。

なれ-っと 馴事　(名)　なれと(馴事)の訛り。浮世風呂「馴れっ事ョになってる所爲(ナリ)か、更に構はぬ」

なれ-ど (接)　次條の略。

なれ-ども (接)　にはあれども。ではあるが。しかれども。しかしながら。されど。けれども。保元「最期の時しも御見參に入らねば、さこそ御心に懸かり侍らるめ、なれども且は八幡の御計らひかと思し召して、痛くな歎かせおはしましそ」太平記「公家の勅裁は、なれども人不用、武家の奉書は憚って渡す人なし」

なれなれ-し 馴馴　(形)　一甚だ馴るる狀なり。いたく馴れたり。いと心やすげなり。宇津保「藤原「宮知り給ひてや、九の君になれなれしき事あらん」源若紫「人よりは心やすく、なれなれしくふるまひたり」二いとなればみたり。いたくなえばめり。新六帖「いつか我れしほ焼くあまのふぢ衣、なれなれしくもいもにあひ見ん」褻褻。

なれなれし-げ 馴馴氣　(名・形)　なれなれしきやう。なれなれしさう。源若紫「なれなれしげに」

なれなれし-さ 馴馴　(名)　なれなれしきさま。なれなれしき度合。

なれ-の-はて 爲果　成果　(名)　なりはてたるはて。身のなれる終局。おちぶれはてたるところ。零落の極。なれるはて。博多小

とぬかず」

なんのかんの 何彼 前條に同じ。

なんのことはない 何事無 ㊀何事もなし。普通なり。無事なり。㊁何彼と云ふほどのことはなし。なんでもなし。わけもなし。たやすし。㊂何彼と論ずるまでもなし。取りもなほさず。あだかも。ちやうど。ほとんど。

(諺)**何だら法師の柿の核** 人がなんだなんだと問ひたる時、其のなんだを取りて、茶かす心にて戯れいふ語。

なんたる 何 (副) なに(何)爾の音便。

なんたる 何爲 何としたる。何といふ。どうした。「なんたるざま」「なんたる楽しい事」

なんのその 何其 何の其れが。何のそれしきが。高の知れたるにいふ。何とも思はず。曾我扇八景「大名とても何のその」

なんのへちま 何絲瓜 何にもならぬこと、又、何とも思はぬことにいふ語。松風村雨東帯鑑「あったら月日、なんの絲瓜の皮も身も痩せるほどな懇ならば、ずんとする氣ぢや」唐船噺今國姓爺「百日奉行について、何の絲瓜の皮」

なん (感の對) ㊀軟 ㊁やはらかなること。柔軟。

なん (助動) なむ助動の音便。であらう。

なん (助動) なむ助動の音便。願望の意あるもの。

なん (助) なむ助の音便。

なん 何 (接頭) 未知なるを表はす語。いくく。いくばく。いくら。「なんぴと」「なん枚」「なんぴと」「なん月」

なんい 南夷 (名) 南方の蠻夷。南蠻。詩經雅淮夷「淮夷蠻貊及彼南夷」注「南夷之氣、類舟船轉旗」

なんい 難易 (名) かたきとやすきと。むつかしきとたやすきと。因難なることと平易なることと。老子「有無相生、難易相成」禮記學記「君子既至學之難易而知其美惡」

なんえんぶ 南閻浮 (名) 次條の略。盛衰記三「南閻浮大日本國」

なんえんぶだい 南閻浮提 (名) 佛語。なんせんぶしう(南贍部洲)に同じ。平家灌頂巻上「南閻浮提の中には、唯一無雙の御佛」盛衰記廿八「南閻浮提の中に湖海あり」

なんか 南柯 (名) ㊀南にさし出でたる枝。南枝、楽府文帝詩「南柯吟夜猿」㊁なんかのゆめ(南柯夢)の略。

なんかのゆめ 南柯夢 下文の淳于棼の故事より出でて、夢をいふ語。異聞集「淳于棼家居廣陵、宅南有古槐樹、棼醉臥其下、夢二使者曰、槐安國王奉邀、棼隨使入穴中、見榜曰大槐安國、其王曰、吾南柯郡政事不理、屈卿爲守理之。棼至郡凡二十載、使送還、遂覺、守理之。棼至郡凡二十載、使送還、遂覺、因尋古槐下穴、洞然明朗、可容一榻、有二大蟻乃王也、又尋一穴、直上南柯、即棼所守之郡也」

なんか 何 (副) なにか(何)の音便。

なんか (接尾) なに(何)の條を見よ。何かの事か。何もかも。

なんか 等。なんど。「己れなんか知らぬ」「飯なんか食はぬ」

なんかい 南海 (名) ㊀南方のうみ。東鑑治承四年九月廿六日「各向南海列座」謠江島「江野・南海・湖水・湊の口」書經禹貢「導黑水至三危入于南海」㊁南方の海にある國。南國。國姓爺「南海の火浣布」左傳僖公君處北海寡人處南海、唯是風馬牛不相及也」㊂なんかいだう(南海道)の略。

なんかい 南階 (名) ㊀南方に向かひて設けられる階段。南むきのきだはし。著聞「東臺の南階をおりて二拜」同「任大臣の大饗中書者として南階よりねり上りて」㊁特に紫宸殿の前面、南方に面せる階段。南庭に上下する用にて、其の左右に左近の櫻、右近の橘あり。しんでん(紫宸殿)を見よ。著聞「諸司の下部の年たけたるが、南階の邊に鉄ひけるを召して」名目抄「南階」

なんかい 難解 解しにくきこと。解釋しがたきこと。わかりにくきこと。むつかしきこと。又そのもの。江淹文「古者語質而難解、今者語文而易了」

なんかいだう 南海道 (名) 我が國南海中にある四國及び紀伊・淡路六國の稱。紀略延喜二年十五「南海道驛路遥遠」

なんかう 南校 (名) 明治四年七月廿一日大學南校の大學の字を省きて置きたる帝國大學の舊稱。同五年八月三日第一大學區第一番中學と稱せられたり。明治四年九月二十五日文部省達「東南兩校共一先閉校候條」明治五年八月三日文部省第十六號「南校、右第一大學區第一番中學と改稱」

なんかう 軟膏 (名) かうやく(膏藥)に同じ。

なんがく 南學 (名) 我が國に於ける朱子學の一派。躬行・實踐を主とするもの。專ら土佐國卽ち南海に行はれたるよりいふ。天文年中の人、南村梅軒に發り、江戸時代に至り谷時中・野中兼山等最も著る。先哲叢談後「時中唱程朱學於土州、當時稱之南學」

なんかくらん 南閣蘭 (名) 【植】石松科、石松屬の多年生草本。莖は紐狀にして分岐し、長さ七八寸、下垂す。葉は小なる鱗片狀にして密生す。胞子嚢は葉腋に生ず。我が國、各地の山地・杉木等に生ず。

なんかぶるゐ 軟甲類 (名) 【動】甲殼類分類の亞綱。體の環節及び肢の數は一定す。卽ち、頭胸部は十三節、腹部は七節、合計廿環節より成る。尾端の一節を除く外、各節に必ず一對づつの肢を有す。ふなむし・えび・かにの類。分かちて節甲類及び胸甲類の二とす。

なんかん 難艱 ㊀かんなん(難難)に同じ。㊁むづかしきこと。かたきこと。

なんかん (副) なんのかの(何彼)の略。なん(何)代の條を見よ。「好いの惡いのなんかんと云っても」

なんかんもの (なんかんはなんくわ(南華)の訛りなりと。なんくわ(南華)を見よ) ㊀普通に變りたる人。わるもの。變りもの。なまいきなるもの。尼介もの。㊁愚鈍なるもの。

なんぎ 難義 (名) 至難の義理。解きがたき義理。説明に困難なる意義。たやすく解釋しがたき詩文などのわけ。平治物語「藤原信頼、唐僧藤義を問はんとや思ひけん」續古今雜上「世間行ひ侍りける聽聞に中間なんぎの出で來たりけるを中間これはいかにと尋ねたりければ」

なんぎ 難儀 難義 難議 ㊀物ごとのむつかしきこと。至難の事がら。骨の折ること。容易ならぬこと。一大事。太平記「大塩宮」「宮は此の事何れも難議なりと思し召して、敢て御返事も無かりけるを」同「路次の難儀を顧みて、此の内侍をば今堅田と云ふ所にぞ留め置かれたりける」㊁手おもきこと。かるがるしからぬこと。一通りならぬこと。たいぎ。謔歌「既に難義の所勞なれども」同「膝の口を射させ中間藤儀の手なれば、一足もひかれざりしを」㊂くるしみ。なやみ。困難。艱難。若風俗「とても春を待たぬ身の、寒夜の難ぎ凌ぐに息も絶え絶えなり」同「やうやう和田のみ崎に寄せて、しばし難ぎを忘れし」㊃わづらはしきこと。面倒。迷惑。狂言長光「あの盗人ゆゑに、難義をかけまする」㊄生計の樂ならぬこと。不如意がちなること。貧しきこと。難澀。

なんぎ しどく 難儀至極 至って難儀なること。至難。川中島合戰「我が國にての落命、他國の聞こえ難儀至極」

なんぎせんばん 難儀千萬 前條に同じ。

なんきつ 難詰 非難してなじり問ふこと。詰難。後漢書竇憲「更求難詰」

なんぎゃう 難行 困難なる修行。極めてつらき行ぎょう。盛衰記「二六の難行功畢へて、無上正覺成就せり」謠「是れぞ誠に難行の法の薪と思し召せ」

なんぎゃう くぎゃう 難行苦行 佛語。難行と苦行との重言。種種苦難の修行。著聞「上人道心堅固にして、難行苦行し給ふ事は、世もって知れり」法華經「於無量劫難行苦行、積功累德、求佛道、未曾止息」

(諺)**難行苦行とけの行** 難行苦行の餘なきを嘲りいふ語。狂言「それ山伏といっぱ、役の行者の後をつぎ、なんぎやうくぎやうとけのぎやうをする」古今奥曲亀「峰入や或ひは野に臥し山伏の、難行苦行やせとけの行」

なんぎゃうだう 難行道 (名) 佛語。他力をからず、自力にて證果を得んとて難行苦行する教道。自力の法門。自力本願。(易行道の對) 浮土十疑論「娑婆世、塵境塵垢、五欲障蔽、難入於道、故名難行道」

なんぎゃくびゃう 軟脚病 (名) 脚氣病。韓愈文「軟脚病往往而劇」

なんきょく 難局 (名) 事の處理しがたきこと。面倒なる出來事。困難なる時局。

なんきょく 南極 (名) ㊀【天】天球の軸の南端の稱。(北極の對) 宋書天文志「其二端、謂之南極北極」㊁【天】なんきょくせい(南極星)の略。唐船噺今國姓爺「北辰・南極・七曜・九曜・破軍星」漢書天文志「老人星曰南極」㊂【地】地軸の南方の端。(北極の對)

なんきょく 軟玉 (名) 輝石の變種。

なんきょくけん 南極距離 (名) 【天】南極と某天體との距離を、其の天體の南極距離と云ふ。

なんきょくこく 南極圈 (名) 【地】地球の南極より二十三度半北にありて、地軸に垂直なる平面と地球との交りの稱。

なんきょくせい 南極星 (名) 支那の昔の天文にて、南方の天に現はるる星。人の壽命を司るといふより老人星・壽星などともいふ。

なんきょくらうじん 南極老人 (名) ㊀星の名。史記天官「狼比地有大星、曰南極老人」㊁じゅらうじん(壽老人)の異稱。

なんきゃくるゐ 軟鰭類 (名) 【動】魚類の一目。骨骼は硬骨より成り、鰭は柔撓にして硬棘を有せず。腹鰭を具ふるものは胸鰭の下部又は其の前方の位置にあり。鰹は食道に通ぜず。悉く海産なり。比目魚・鰈など之に屬す。

なんきん 南京 (名) 〔南京の字の唐音。〕昔時、支那の首府たりし江蘇省江寧府の一稱。㊁昔時、支那の產、又は支那其の他の外國より渡來せるものに被らしめたる語。「南京繻子」「南京米」㊂珍奇また小さくかはゆらしきものに被らしいふ語。「南京鼠」「南京玉」㊃なんきんやき(南京燒)の略。心中宵庚申「南京の皿、蒔繪の家具」曾我會稽山「氷突き出す染め付けの南京涼し鍋の皿」圓【植】たうなす(唐南瓜)をいふ。大阪地方の方言。

なんきんあやつり 南京操 (名) いとあやつり(絲操)に同じ。風來六部集放屁論「硝子(びいどろ)細工・奉絲傀儡(アヤツリ)」都の手ぶり「人形をかしらより手足まで、あまたの絲もてつけて、うたひものに合はせて絲引きあやどり使ふを、南京のあやつりとなづけて」

なんきんいちじく 南京絲操 (名) 【植】いぬびは(天仙果)の異名。

なんきんいとあやつり 南京絲操 (名) いとあやつり(絲操)に同じ。

なんきんいばら 南京棘 (名) 【植】なにはいばら(金櫻子)の異名。

なんきんうさぎ 南京兎 (名) 【動】かひうさぎ(飼兎)の異名。

なんきんうめ 南京梅 (名) 【植】らぶばい(風梅)の異名。

なんきんかいだう 南京海棠 (名) 【植】蓉薇科、梨屬の落葉喬木。海棠の一品種。花の色濃きもの。

なんきんかんな 南京鉋 (名) 尻(シリ)りを磨鉋の一。唐溝を削るに用ふる小形のもの。

なんきんこざくら (名) 【植】櫻草科、櫻草屬の多年生草本。葉は根生にして、倒卵形、鋭尖頭、鋭鋸齒を有し、質厚く、淡綠色なり。花莖は葉間より抽出し、春季、紅紫色の花數箇を著く。本邦、加賀國白山に多く自生す。はくさんこざくら。

なんきんざくろ 南京石榴 (名) 【植】てらせんざくろの異名。

なんきん皿 (名) 南京燒の皿。多くは形扁し。西洋料理に用ふ。

なんきんじゅす 南京繻子 (名) 絹絲に絹・緯絲に綿絲を用ひたる一種の綿じゅす。初めて支那より渡來したる頃は廣東繻子といへり。

なんきんじらみ 南京蝨 (名) 【動】なんきんむし(南京蟲)の異名。

なんきんずおせん 南京水仙 (名) 【植】あまな(山慈姑)の異名。

なんきんぞめ 南京染 (名) 南京の風に倣ひて染むること。又、その染めたるもの。衣食住記「寶暦ころ中間南京染さらさ染め」

なんきんだけ 慈竹 (名) 【植】禾本科、竹屬の竹類。細くして高さ六七尺に過ぎず。其の筍は幾外に出でず。義竹。考竹。

なんきんだま 南京玉 (名) 貫ける孔ある、極めて小粒の硝子製の玉。種種の色なるあり。おもに女兒が絲につらね、指輪・根がけなどとしても遊ぶ。

なんきんちく (慈竹)の異名。

なんきんぢゃう 南京錠 (名) 巾著の如き形したる錠まへ。なすぢやう。きんちやくぢやう。えびぢやう。

なんきんちゃぼ 南京矮雞 (名) 【動】鳥類中、雞類の一種。ちゃぼの一種。形甚だ小なるもの。

なんきんつばき (名) 【植】たうつばき(南山茶)の異名。

なんきんななかまど (名) 【植】薔薇科、梨屬の落葉喬木。幹の高さ二三丈。葉は羽狀複葉、各小葉は長楕圓形、先端に近く鋸齒を有す。白色にして小なる花は繖房花序に排列し、初夏、開く。我が國、各所の山地に自生す。こばのななかまど。

なんきん-にんぎゃう 一南京人形 (名) 南京あやつりに用ふる人形。伊呂芝居「人を使ふこと、南京人形の絲さばくるよりも易く」

なんきん-ねずみ 南京鼠 (名) 【動】哺乳類中、齧齒類の一種。はつかねずみの一種。胴中に棄ひ、玩弄に供す。

なんきん-はぜ 烏臼 (名) 【植】大戟科、烏臼屬の落葉喬木。幹の高さ二丈許り。葉は廣卵形、鋭尖頭、全緣。花は單性、黃色にして小なり。熟帶亞細亞の原產。種子の皮部より脂肪を採り、石鹸及び蠟燭の原料とす。觀賞用として栽培せらる。きつまはぜ。たうはぜ。りうきうはぜ。

(ぜはんきんな)

なんきん-はと 南京鳩 (名) 【動】べにばと(紅鳩)の異名。

なんきん-ほうふら (名) 【植】たうなす(番南瓜)の異名。

なんきん-まい 一南京米 (名) 印度・暹羅・佛蘭西領印度及び支那等より輸入する米穀の稱。劣等品たり。外國米。

なんきん-まめ 落花生 (名) 【植】豆科、落花生屬の一年生草本。莖は高さ五六寸乃至二尺許り、やや地上を蔓延す。葉は偶數羽狀複葉、四箇の小葉より成り、托葉を有す。夏季、黃色の蝶形花を開き、受精の後、子房は地中に入り、成長して果實となる。果實は莢なり。熱帶亞米利加の原產にして、我が國、各地に栽培せらる。種子は食用とし、又、採油用に供す。たうじんまめ。らくくわせい。

なんきん-むし 南京蟲 (名) 【動】昆蟲類中、有翅類の一種。體圓形にして赤褐、長さ二分。頭部小にして、三節より成れる口吻を有し、數箇の單眼集まりて集眼をなす。胸部凹形、前後に短く左右に廣く、腹部は扁平にして卵形なり。蹇閉、壁の割目、床の隙閉、壁の割目等に潜伏し、夜間出でて人畜の血液を吸收す。一年四回產卵し、幼蟲は凡そ一箇月にして成熟す。とこじらみ。

(しかんきんな)

なんきん-やき 南京燒 (名) 慶長年中、支那より渡來の陶器。駿遊雜記「唐船嘶今國姓爺ちんだの酒壺、朱の血潮に染みたれば、錦手となる南京燒」

なんきん-らくがん 一南京落雁 (名) 【菓】らくがんの一種。小形のもの。

なんきん-りう 一南京流 (名) 俳諧の一派。明暗にはで、それとさとらしむるもの。猶、下文を見よ。花見車「談林風の後、或ひは南京流とて、さぬきを數くと云ひて圓座になし、三輪をひやすとのべて、さうめんに成りたる一體、半年ばかりいひしらけ」

なんきん-わた 南京綿 (名) 南京に產する綿。種が南京より渡來せる綿。今宮心中「中入れの南京綿の上べには」

なんく 一難句 (名) 解し難き句。作るに困難なる詩文の句。著聞集「連歌中興次の句にゐ文字にやゆ附くべきに侍る、ゆゆしき難句にて、人人案じわづらひたりけるに」砂石集「連歌中興難句なりけるに」蘇軾詩「淵源皆有考、奇險或難句」

なんく 一難苦 くなん(苦難)に同じ。

なんぐう 一難遇 遇ひがたきこと。容易く遭遇せざること。盛衰記「比丘尼「遇難遇之大願」建立聖皇大佛殿」

なんくせ 難癖 (名) 難ずべき點。きず。缺點。

なんくせをつける 附難癖 何か缺點を見附けて非難を加ふ。あらを見つけ出して之を指摘す。

なんくわ 一南華 (名) 昔時、遊里などにて、愚鈍なる者の異名。二番はえ。紀三井寺。下文を見よ。浮世物語「心だての二番なる紀三井寺のともがち、中頃は南華とやら名づけし、いかなる故ならん、莊子は寓言とて、無き事をあるやうに書きたる道人なりけるを、南華の篇といふ、定めてうそつきといふ心にや、ただうつけたるものは、今は南花と名づくるなり」色道大鑑「南華。戲けたる者をいふ。むかしは鈍なる者の異名にはいはず、常とかはりたる人をいへり。其の意は南華は莊子なり、莊子が寓言の儒にかはりたるによりていひたる名なるを、今は誤りて鈍なる方に是れをよす」

なんくわ 一南瓜 (名) 【植】たうなす(番南瓜)の異名。

なんくわ 一軟貨 (英 Soft money) (名) 硬貨に對して、紙幣の稱。

なんくわ 一軟化 (名) ㊀硬きものがやはらかになること。變化して柔軟になること。㊁强硬なる論鋒・主張をやめておとなしくなること。硬派が化して軟派となること。㊂取引所の語。買屋が賣屋に變はること。

なんくわ 一南畫 (名) なんしゅうぐわ(南宗畫)に同じ。(北畫の對)

なんくわつ 一軟滑 やはらかくして、なめらかなること。齊民要術「刀陳曾有青葉、津汁軟滑、無物能比」歌陽修歌「時時弄餘聲、言語軟滑如春禽」

なんくわん 一難關 (名) ㊀通過するに困難なる關所又は門。人改めの厳しき關所。㊁きりぬけるにむつかしきところ、又は場合。難儀なる境遇。なんば。

なんくん 一難訓 よみにくきこと。又、漢字の訓。㊁みのむつかしきもの。困難なる字訓。難語又は難句につけたる訓。

なんくん 一南軍 (名) 南方の軍。南方の兵にて組織せる軍。全軍の內の南方に陣せる軍隊。(北軍などの對) 史記「令趙王呂祿爲上將軍、軍北軍、呂王產居南軍」

なんけ 何家 (名) 何がしのいへ。だれそれの一門。枕「なんけの何がし、時丑三つ、ね四つなど、あてはかなる摩にいひて」

なんけ 一難化 教化(ケウ)しがたきこと。容易く教化に服せざること。維摩經「此土衆生、剛强難化」

なんげ 一難解 なんかい(難解)に同じ。本朝文粹「難解難入之門、排屈隔開之悟不測」榮華「難解難入の法、華經を書寫・供養し」法華經「諸佛智慧甚深無量、其智慧門難解難入、一切聲聞辟支佛所不能知」

なんげふ 一難業 (名) 困難なる事業。むつかしきわざ。

なんけん 一難件 (名) 處理に難儀なる事件。取りさばくに困難なる一件。難事。

なんけん 一難險 (名) ㊀甚だ險阻なること。又、その難所。險難。㊁甚だ困難なること。いとむつかしきこと。至難。

なんけんぱふ 一軟憲法 (英 Flexible constitution) (名) 【法】憲法の一。法律制定の手續によりて變更・廢止するを得るもの。軟性憲法。可動憲法。(硬憲法の對)

なんど 何箇 (名) 數人各竊かに若干の小石などを握りて差し出だし、互ひに其の總數を言ひ中てて勝負する戲。一代男「よい年をして蝶まはし・扇引・なんこ呼びて、自と子供心となりて立ち噪ぎ」公裁隨筆(文政十年)「丁半博奕(中略)有り合せ錢を握り出だし成錢惡に付、右はなんこと唱へ、博奕も同樣之趣意に可有之。なんこ博奕致し候ものは、めくりかるた同樣之御仕置き當たりに相成り候」

なんど 一難語 (名) むつかしき語。わかりにくき語。難解の言語。

なんど 一軟語 (名) 穩かにものいふこと。やさしきものいひ。情ある言語。運歩色葉「軟語ナンド」涅槃經「諸佛常軟語、皆爲衆故說」蘆菴語及軟語、皆歸第一義」

なんど 一噛語 ㊀噛噛と語ること。詩「噛噛敎言語」㊁べちやべちやとしやべること。白居易

なんどがい 一軟口蓋 (名) こうがい(口蓋)を見よ。

なんどがい-おん 一軟口蓋音 (名) こうおん(喉音)に同じ。

なんどうじ 一難工事 (名) 爲すにむつかしき工事。至難の工事。

なんどう-ふらく 一難攻不落 (句) 攻撃に困難にして、容易く陷落せざること。

なんとく 一南國 (名) 南方にある國。南州。詩經「小雅」滔滔江漢、南國之紀」

なんとつ 一軟骨 (名) ㊀やはらかなるほね。骨骼の柔軟なること。㊁【動】動物學上の用語。殆ど膠質より成り、石灰分少なく、半透明にして彈力に富み、柔軟なる組織の稱。耳殼・鼻翼等に存す。㊂窟見・踏度などの軟弱なること。强硬の窟見・踏度などを主張・持續し能はざること。窟思の薄弱なること。こしぬけ。

なんとつ-かん 一軟骨漢 (名) 軟骨なる男子。主張を固守し能はざる男。窟思薄弱なるをとこ。こしぬけ。

なんとつ-さよるね 一軟骨魚類 (名) 【動】なんこつるね(軟體類)に同じ。

なんとつ-まく 一軟骨膜 (名) 【醫】軟骨を普覆する强靭なる結締組織の膜。血管及び神經を有す。

なんとつ-るね 一軟骨類 (名) 【動】魚類中の一亞綱。骨は石灰分に乏しく、殆ど軟骨より成る。鱗は楯狀にして、尾は亞尾なり。鰓には鰓蓋なく、鰓孔は直接に體表に開く。分かちて鮫類及び鱏類とす。板鰓類。

なんとん 一男根 (名) 男子の陰部。陰莖。

なんざ 一南座 (名) 幫興丁の稱。孝亮宿禰記(元禄六年五月十三日)「南座役人、今度就女御入內、罷出、布直垂令著用」度旨申之」

なんさう 一南窗 南牕。(名) 南に向かへるまど。南方にあるまど。陶潛文「倚南窗以寄傲」梁武帝詩「南牕北牖挂明光」

なんさう 一南曹 (名) 【動】學院の一稱。大學寮の南にありたるを以ていふ。類聚三代格「勸學院中略爲大學寮南曹」本朝無題詩「勸學院中略爲大學寮南曹」本朝無題詩「史喜南曹復舊基」

なんさう のべん 南曹辨 南曹を管領する辨官。太平記「南曹の辨嗣房參って、諸事を奉行す」

なんざん 一南山 (名) ㊀南方にある山。詩經「小雅」南山有臺、北山有萊」㊁「南山の壽より出づ」ことぶき申すこと。壽を賀すること。いはふこと。㊂あづち(埃)に同じ。運歩色葉「南山ナンザン」弓的秘傳之書「一、南山の事。古へは上を丸く築きたる也。當世は横廣さ一間二尺、上の廣さ下に一尺せばく、高さ七尺計りよし」

なんざん のじ。 南山壽 (下文の詩經の故事より出づ) 人の長壽を祝ふ語。詩經「小雅」如月之恆、如日之升、如南山之壽、不騫不崩、如松柏之茂、無不爾或承」王融文「詩序」上陳景福之賜、下獻南山之壽」

なんざん 一難山 (名) 險難なる山。けはしき山。越すに至難なる山。大磯虎稚物語「嶮嶮・巖壁の山川・谷峰・岸・そば・難所・難山・海上」

なんざん 一難產 ㊀出產の難澀なること。盛衰記「苦しみて分娩すること。難產して死しぬ」同「母は吾れを生まんとて、難產して日まで難產し給ひければ」㊁物事が手輕に成立せざること。長びきて埒の明かざること。

(諺)難產、色に惚りず 難產したる人が、懲りもせで猶淫事を斷たず。

(諺)男子七人あれば長者 男の子多きは幸福なること。盛衰記「「烏」忠盛朝臣子息あまた有りき(中略)日本國には男子七人あるをば長者と申す事なれば、人多く羨みけり」

(諺)男子は七歳まで物あやかり 男の子の幼少の間は、他の感化を受け易きこと。幸若舞曲「御產あらせ給ひし時、武藏が參り產湯をひかせ申し、男子は七歳まで物あやかりと承る、若君の御果報あやからせ給はば、伯父頼朝に御あやかり候へ」

なんし 一南枝 (名) 南方にはへのびたる草木の枝。日に向きたる枝。日あたりのよき枝。朗詠「南枝北枝之梅開落已異」同「露曉南枝花始開」東鑑「梅樹(中略)南枝有鶯栖」古詩「越鳥巢南枝」

なんし 一南至 (名) 冬至の日。此の日、太陽南に廻りて其の極に至ればいふ。左傳「春王正月辛亥朔、日南至」杜注「周正月今之十一月、蓋十一月一日冬至也、自秋分日行南陰、至冬至之日日南極」

なんじ 何時 (名) 【副】なんどき(何時)に同じ。

なんじ 一難事 (名) かたき事。むづかしき事實。處理しがたき事件。困難の事がら。難題。封放文「上略」負才略者不餘于難事、付重難者思得于才人」

なんじ 一難字 (名) むづかしき文字。難解の漢字。四季物語「難字の旨を歌によみ、詩にもつくりて」春渚紀聞「顏識難字」

なんしう 一南州 (名) なんこく(南國)に同じ。後漢書「此必南州高士徐孺子也」柳宗元詩「南州溽暑熱如酒」

なんしくわう-ぶつ 一難思光 (名) 佛語。十二光の一。其の光明の不可思議にして、二乘等の思議し能はざるもの。

なんしくわう-ぶつ 一難思光佛 (名) 佛語。難思光の德に就きて名づけたる阿彌陀佛の稱。

なんしつ 一軟質 (名) 柔軟なる質。やはらかなるたち。

なんじぶ 一難澀 ㊀なやみしぶること。すらすらと進まねこと。澀滯。㊁こまること。もてあますこと。迷惑がること。なやむこと。東鑑「此事不庶幾之由、內內難澀」津國女夫池「公家

の御沙汰に及ばぬこと、不學・短才の蔑武士、善惡の評定恐れありと、難渋してこそ見えにけれ」㊁難儀。貧困。不如意。庭訓往來十三「無難渋之郷保」而、土貫之現利亘多也」

なん-しゃ 〔難者〕（名）難ずる人。批難するもの。

なん-しゃう 〔難症〕（名）癒ゆるに困難なる病症。難病。

なん-じゃう （名）〔植〕かなくぎのきの異名。

なん-じゃく 〔軟弱〕 やはらかく弱きこと。かよわきこと。柔弱。心身弱くして、物事に堪へざること。柔弱。職國策「李園軟弱人也」史記「家貧、親老、妻子軟弱、歳時無以祭祀」

なん-しゅ 〔南斗〕（名）南方の星宿の名。下學集「南斗・北斗（二十六宿南北）」運歩色葉「南斗八、北斗七」三輔黄圖「長安故城、城南爲南斗形」

なん-しゅう 〔南宗〕（名）㊀禪宗の中にて唐の慧能の流派の稱。南禪。北宗の對）神皇正統記「異朝には南宗の下に五家あり」㊁天條の略。中林竹洞翁畫論「畫之高品在南宗事」佩文齋書畫譜「南北二宗、南宗亦唐時分也、南宗則王摩詰始用渲淡、一變拙研之法、其傳両張璪・荆關・董巨・郭忠恕・米家父子、以至元之四大家」

なんしゅう-ぐわ 〔南宗畫〕（名）東洋畫の一大流派。支那唐時代に江南に發り、王摩詰を宗とするもの。本邦へは元祿年中渡來し、御里巷・池大雅など最も秀でたり。南畫。（北宗畫の對）

なん-しょ 〔南所〕（名）かたなしどころ（結政所）に同じ。

なん-しょ 〔難書〕（名）〔非難すべき點ある文書の義〕 申文が書式に違ひたること。又、そのもの。かかる申文は申任せずして翌年に廻さるる例たり。

なん-じょ 〔難所・難處〕（名）險難なる場所。往來に困難なるところ。けはしき所。せっしょ。保元（出拠）「山路險しくして、難所多ければ」太平記十六（新田左兵衛佐義貞中將義興戦死）「彼の山と申すは山陽道第一の難處也」赤松「記」「清水道九百餘里、時有難處」史記「河渠書」

なん-じょ 〔難所〕（名）前條に同じ。運歩色葉「難所（ナンジョ）」「氣陣八島」「越路の雪の憂き難所」

なんしょう-ち 〔難勝地〕（名）佛語。十地の一。斷ち難き無明に能く勝つ地といふこと。

なん-しょく 〔男色〕（名）㊀だんしょく（男色）に同じ。おかま。雞姦。（女色の對）續古事談「漢家に男色の事ありや」若風俗「男色ほど美なる翫びはなきに」㊁容色よき男。男色を驚ぐ男。かげま。ちご。わかしゅ。三代男「主ある男色に思ひかけ、千束していふ文に」

なん-しょく 〔難色〕（名）至難なりと思ふやうなる顔色。好ましげならぬやうす。不承知らしき顔色。又、非難せんとするやうなる顔つき。

なん-ず 〔難〕（他動サ）㊀責む。なじる。難詰す。㊁非難す。そしる。難難をつけ、源氏「玉鬘」「なんずべくきさはひまぜぬ人は、いづこにかはあらん」紫式部日記「人よみたらん歌なんじ、ことわりゐたらんは」孟子「離婁」「於禽獸、又何難焉」

なん-すれ-ぞ 〔何爲〕（副）なにすれぞ（何爲）の音便。神代紀「何爲（ナンスレ）」誤「我於亡者」運歩色葉「胡爲（ナンスレ）」

なん-すわ 〔軟水〕（名）〔化〕かるしうむ及びまぐねしうむ等の鹽を含有せざる水。石鹸液によりて白色沈澱を生ぜず。

（硬水の對）

なん-せい 〔南西〕（名）みなみとにしと。又、南と西との中間。にしみなみ。西南。

なん-せい 〔軟性〕（名）やはらかなる性質。柔軟なる本性。

なん-せい 〔軟聲〕（名）やさしき音聲。穏かなる音。樂籍文帝詩「嬌歌逐軟聲」

なん-せい 〔南征〕 南の方の賊を征伐すること。南方の國を征討すること。左傳（哀公十四）「昭王南征而不復」

なんせい-くわぶつ 〔軟性貨物〕（英soft goods）（名）〔商〕羊毛・綿又は木綿にて製産せられたる貨物。

なんせい-けかん 〔軟性下疳〕（名）〔醫〕花柳病の一。觸接性傳染病にして、下疳圓が皮層・粘膜より浸入するによりて起こるもの。赤き小粒を生じて疼痛を覺え、淺き潰瘍を爲し、多少の膿を分泌す。

なんせい-けんぱふ 〔軟性憲法〕（英Flexible constitution）（名）〔法〕なんけんぱふ（軟憲法）に同じ。（硬性憲法の對）

なん-せきけん 〔軟石鹸〕（名）〔化〕かりせきけん（加里石鹸）に同じ。

なん-せん 〔南贍〕（名）なんせんぶしゅう（南贍部洲）の略。謡曲「南贍信御陀國、波斯彌陀尊者より以來」

なん-せん 〔難船〕 船が難破すること。船舶が坐礁・膠沙・破損又は覆沒などの災難に遭ふこと。又は其の船舶。難破船取計一件（御達）御年貢米并御買上御廻米及難船候節、隨揚いたし候もの」明治十二年内務省達乙第十五號「難船の場所に出張する政府の官吏警察吏又は地方官」

なんせん 〔難戰〕 困難を冒してたたかふこと。又、その戰ひ。苦戰。惡戰苦鬪。

なん-ぜん 〔南禪〕（名）なんしゅう（南宗）に同じ。（北禪の對）

なん-ぜん-くわぶつ 〔難船貨物〕（名）難船に遭ひて投棄せられ又は漂流せられたる貨物。難船物。

なんぜん-じ-とうふ 〔南禪寺豆腐〕（名）京都洛東東山の名物の豆腐。

なんぜん-じ-は 〔南禪寺派〕（名）臨濟宗の十派の一。京都市上京區南禪寺町なる瑞龍山南禪寺を本山とし、其の開山原「臨濟宗、南禪寺派」

なんせん-しんがう 〔難船信號〕（名）危難に罹かりたる船舶が、他船又は陸地より救助を求むる時に使用する信號。海上衝突豫防法（第三十一條）「難船信號」

なんせん-にん 〔難船人〕（名）難船せる人。明治十二年内務省達乙第十五號「難船人護送の官吏の旅費」

なんせんぶ-しゅう 〔南贍部洲〕（梵Dakshina-jambu-dvipa）（名）佛語。須彌の四洲の一。其の南方にあるもの。即ち、吾人の住する現世界の稱。南閻浮提。南閻浮。閻浮提。南贍部洲（ナンセンブシュウ）扶桑洛陽邊」運歩色葉「南贍部州（ナンセンブシュウ）百寶」

なんせん-ぶつ 〔難船物〕（名）なんせんくわぶつ（難船貨物）に同じ。

なんせん-ぼくば 〔南船北馬〕（句）〔支那にて旅行に、南方は船、北方は馬を用ふること多きより出づ〕 絶えずつづけて旅行するにいふ語。

なんせん-もの 〔難船物〕（名）なんせんぶつ（難船物）に同じ。

なんそ （名）〔動〕あをだいしゃう（青大將）の異名。

なん-ぞ 〔何〕（副）〔なにぞの音便〕㊀何ごとぞ。何ものぞ。なにか。宇津保（藤原上）「上たち聞きつけさせ給ひて、なんぞと問はせ給ふ」狂言（金岡）「扇をさし出ださせられて、何ぞ一筆と仰せられた」㊁何をがな。何かしら。何にても。狂言（ぶんしの道）「すがら淋しう御座るが、なんぞ慰み事して參りたら御ざるの」浮世風呂「よく來たの、何ぞやりてえが」㊂何すれぞ。如何ぞ。いづくんぞ、いかにしてかは。神代紀上「何爲（ナンスレ）來之晚也」崇神紀「盡（ナンスレ）命神龜、以極敬祟之所由也」宇治拾遺「心を西方に、かけんに、なんぞ心ざしを遂げざらん」㊃いかなる。何といふ。どんな。宇津保（俊蔭）「哀れなんぞの人か」中將たよりなきすまひはする」

なんぞ いの 〔何ぞよなの轉〕㊀何なるぞ、まあ。どうした事ぞよ。吉野都女補「此のなりは何ぞいの」㊁何でもないことなり。少しも意に介するに足らず。

なんぞ と いふ と 何彼につけて。やもすれば。ともすれば。こては。

なんぞ や 何いかなるものぞとぞよ。何としたることぞよ。咎むる意にいふ。狂言（三本）「祟むる謡ひをば、なんぞやおのれめが、いつのまにがな盗みとり、謡うた事はくせごと」同（大蔵）「何ぞや坊主の分として慮外なやつぢや」浮世風呂「居てやるんだなんぞと太平樂さ」

なんだ 涙（名）なむだ（涙）の音便。

なん-たい 〔男體〕（名）だんたい（男體）に同じ。（によたいの對）諸田村「男體の人の見え給ふは、いかなる人にてまします ぞ」日本武尊吾妻鑑「第二の宮、男體を現し、日本武の尊と稱し奉り」

なん-だ 〔難道〕（名）なんろ（難路）に同じ。

なん-たらか 〔男蹈歌〕（名）をとこたらか（男蹈歌）に同じ。思ひの儘の日記「今年はなむたら歌行はるべしと聞こえしかど、閑院遷幸の後とぞ沙汰ありし」

なんだ-りゅうわう 〔難陀龍王〕（名）佛語。八大龍王の一。跋難龍王の同胞。盛衰記（十八）「八大龍王（中略）難陀龍王」釋迦譜「難陀龍王」

なん-ち 〔難地〕（名）險難なる土地。難澁なる場所。難儀の地位。又、難治の土地。

なん-ち 〔難治〕㊀をさめがたきこと。をさまりにくきこと。老子「民之難治、以其智多」史記（四子講德論）「蒲孝廉士、又難治」㊁なほり難きこと。なほしにくきこと。治するに困難なること。容易く治癒せざること。㊂むづかしきこと。又、そのもの。難事。難物。難澁。難儀。平家（一）「彼れと云ひ是れと云ひ、かたがた難治の事、ことに覺え候」同十一「京都經廻難治閑、隱身於在所所」

なんぢ 汝 爾（代）なむぢ（汝）に同じ。伊呂波字類「汝（ナンヂ）爾（同）（正作）」あがみ（自）おのし・おぬし・そなた（客）おのさま（同）わどり（よ）（豊前）わどれ（講）（内出）（管若）（鎌）（同上）（豊）いし（下語）が（島）（津）おどれ（講）（内）（豊）あやつ・こやつ・そやつ（対馬）（豊）（物語）（平）（同）（豊）

なんぢ 汝が罪 汝をせむ じどふじとく（自業自得）に同じ。狭歌加留多「此の女中に咎あればこそ御成敗、汝が罪汝をせむ、それは是非なし」

（諺）**藍に出づるものは藍に反る** 自らなしたる事は、善惡ともに必ず應報あるものなり。孟子「告子」「戒之戒之、出乎爾者反乎爾者也」

なん-ぢゃう 〔南挺・南廷・南庭〕（名）〔南は南錄の略、挺は廷（ヒ）の如く打ち延べたる義。（續紀）〕なんれう（南錄）に同じ。東鑑（五、文治元年）「南廷三十、唐盛十廷」同（十九、天福元年）「十月廿日、巻絹十疋、南庭一」

なんぢゃ-もんぢゃ 〔植〕天條の略。鹿島紀行「神崎の神社に詣づ、社の前になんぢゃもんぢゃを」

なんぢゃもんぢゃの-き （名）〔植〕ひとつばたごの異名。

なん-ちゅう 〔南中〕〔天〕太陽其の他の天體が、其の地の子午線上に來たること。

なん-ちょう 〔男寵〕（名）男色を以て寵愛せらるること。

なん-ちん 〔難陳〕㊀互ひに辯難・陳述し合ふこと。袋草紙「次第講歌、彼是相互難陳、範兼殊當、張木一定勝負」㊁古昔、改年の時、年號を選ぶにあたり、學者を集めて、其の年號の吉凶・典據等を辯難・議定せしめたること。改元物語「中古より菅家・江家の紀傳道の輩、年號の字を勘過す、數多勘進する中を、陣の坐にて難陳の問答ありて議定せるとなん承る」

なんで 何（副）㊀何にて。何事にて。何物にて。狂言「宝」「そなたに意見がしたうおぢやるはいの。なんでかおぢやるぞ」同「草太」「今の歌のいひだしはなんであったぞ」同「太郎」「何でなり共、參りませい」㊁何故に。何のために。なんだって。鬼貫句選「なんで秋の來たとも見えず心から」

なんで あれ かし 何にてもあれ。なんであらうとままよ。何がなんでも。なんでも。狂言「吟」「度度聟入りをせいとあって、せっせっの使が立ちまする。今日はなんであれかし聟入りを致さうと存ずる」同「山伏」「あれを、なんであれかしたべてから、やすらひませう」

なんでやる　なんであるの訛り。何なるぞ。丹波與作「人呼び廻はってなんでやる」

なん-ていい　〔男丁〕（名）夫役に出づる丁年の男子。若ざかりの男子。壯丁。だんてい。隋書「其男丁、毎歳役不過二十日」

なん-ていい　〔南帝〕（名）南朝の天皇。

なん-ていい　〔南庭〕（名）南にあるには。特に紫宸殿の前庭の稱。保元官位方分「彼れ等を南庭に召されて」建武年中行事「南庭に錦蓆をたてたり」梁間文帝詩「錦蓆映南庶、庭中光景鮮」

なん-ていい　〔南挺〕軟挺（名）なんちゃう（南挺）に同じ。台記「久安四年九月一日十兩唐銀於南圓堂」砂石集「銀の軟挺（ナイ）六つありけり」

なん-ていう　〔南朝〕（名）一なんぼくてう（南北朝）を見よ。太平記「廿一、南朝の年號、延元三年八月九日」二なんぼくてう（南北朝）を見よ。北史序「北朝自魏以還、南朝從宋以降」劉長卿詩「內史舊山空、日暮、南朝古木向人秋」

なん-てつ　〔軟鐵〕（名）〔化〕鐵の一種。不純物を含むこと少なく、炭素の含量〇・五ばーせんと以下、他の鐵類に比して質軟く、焼け難し。融點千六百度以上、一時的に磁石となる性あり。釘・針金等を造り、又、鍛冶屋にて用ふる鐵即ち是なり。

なん-でふ　何條（副）〔なでふの音便〕一なでふに同じ。宇津保「上「なんでふ事も待らず」枕「なんでふ事なき人の、すずろにえがちに物いたくいひたる」砂石集「何條神といひて少しもゆるまず中略なんでふ神といふことや、あらきたなの心や」二なでふに同じ。宇治拾遺「もののつき給（るかといひければ、なんでふもののつくべきぞ」

なん-でも　何（副）一如何なる物事にても。何にても。狂言若市「其の唯今聞いたは何でおりやる。いや何でもどざらぬ」同布施「我れ等如きの貧僧に、なんでも施すを施僧と申す」二いかにしても。是非とも。なんであらうと。何はともあれ。狂言鍋割「富年は、なんでも精を出し、金銀を大分まうけ、仕合せを致さうと存ずる」同冨「あれは世間に重寶する三光とやらいふ鳥であらう、なんでもさいてくれうう」三何にしても。いづれにしても。とにかく。どうも。「何でも少し變だ」「何でもただでは無い」

なんでも　**あても**　何彼　なんでもこを强めていふ語。何であらうと彼であらうと。浮世風呂「なんでもかでも、跡とりはおらが愚太さんだ」

なんでも　**こい**　何來　一何にても來たれ。來たるを拒まぬ意にいふ。二何にても輕卒に引き受けなどするにいふ語。おいそれ。三何にてもえりきらひをせで、受け收むるにいふ語。

なんでも　**どざれ**　何御座　前條に同じ。

なんでも　**なし**　取り立てていふほどの物事にてもなし。つまらぬ。平凡なり。狂言若市「何でもないものを聞すといふが、合點がいかぬ」同枝「なんでもないこと、しさりをれ」

（諺）何でも無いに名人無し　多藝なる人には秀でたる人なし。

（諺）何でも四文　何事をもやす受け合ひすること。又、善惡の差別なく同一に取り扱ふこと。八笑人「おれが事だから、何でも四文と呑み込みやした」

なんでもや　何屋（名）何事をも容易に引き受くる人。かれこれや。

なん-てん　南天竹（名）一植小喬木。幹の高さ四五尺乃至一丈許り。葉は數回羽狀複葉、各小葉は精圓狀披針形、全緣、葉柄脚は莖を包む。初夏、幹の上部に白色の小花を著け、複總狀花序に排列す。果實は球形、小豆大にして、熟すれば赤色を呈す。我が國、南部に自生し、又、各地の庭園に栽培せられ、觀賞用に供せらる。品種頗る多し。材は床柱其の他小器具を作るに用ひらる。きのみなんてん。なってん。なりてん。なるてん。みつば。運歩色葉「南天」狂言鏡「南天や杉の葉」二枚所の名。南天に象りたるもの。だきなんてん・なんてんびし・みつわりなんてん・ゆきわにんてんびし・みつわりなんてん・ゆきわにんてん等種種あり。

（こんてんな）

なん-でん　〔南殿〕（名）一南方にある御殿。南面の殿舍。宇津保「國譲「この得給へる殿は中略この南殿（ナイ）は中納言の君なん賜はり給へる近どなりにて」榮華「花宴「なんでんにぞおはします」北史「王思政傳「臨以白刃、欲引向南殿」二ししんでん（紫宸殿）の一稱。なでん。宇津保「貴「みかどの南殿（ナイ）に出で給へるにたちて」和名「紫宸殿國之玉露叢「大御所本丸江渡御、右御記儀畢りて南殿江出御」

なん-てん-あげはのてふ　南天揚羽蝶（名）紋所の名。

なん-てん-ぎり　南天桐（名）一植いいぎり（椅）の異名。二紋所の名。

なん-てん-ぐさ　（名）〔植〕なんてんはぎの異名。

なん-てん-ぐるま　南天車（名）紋所の名。

なん-てん-さう　（名）〔植〕なんてんはぎの異名。

なん-てん-しょく　〔南天燭〕（名）〔植〕なんてん（南天竹）の異名。本草綱目「本名南燭、俗謂之南天燭」

なん-てん-ちく　〔南天竹〕（名）〔植〕前條に同じ。調味故實「しぎの別足中略かいしきの葉はなんてんちく也」

なん-てん-ぢく　（名）〔植〕前條に同じ。狂言鏡「深草土器になんてんぢくのかいしきを敷き」醜游詩「南天竺子亦微寒。自注南燭、本草俗謂之南天竺」

なん-てん-ぢく　〔南天竺〕（名）五天竺の一。南方にあるもの。宇津保「初「なんてんぢくより渡るに、じねんに年へにたれば」水鏡「南天竺に龍猛菩薩と申す僧いますなり」

なん-てう-づ　南天手水（名）南天竹の葉を常に懷中して、手洗ふ水なき時、塵手水をすること。

なん-てん-ぴ　〔南天蝶〕（名）紋所の名。

なん-てん-の-えだのまる　南天枝丸（名）紋所の名。

なん-てん-はぎ　（名）〔植〕豆科、蘆豆（ヤマハギ）屬の多年生草本。莖の高さ一・二尺。葉は羽狀複葉、二箇の小葉より成り、各小葉は卵形、鈍頭又は鈍頭にて、托葉を有す。夏秋の候、紫碧色の蝶形花を開き、總狀花序に排列す。我が國、各地の山野に自生す。くさなんてん。たにわたし。なんてんさう。ふたばはぎ。

なん-てん-びし　南天菱（名）紋所の名。なんてん（南天）を見よ。

なん-てん-ぶ　〔南天蝶〕（名）紋所の名。

なん-てん-ぶ-の-はだいじゅ　（名）〔植〕い

いぎり（椅）の異名。

なん-と　〔南都〕（名）南方にあるみやこ。南國にある帝都。特に、山城國の京都に對して、大和國の奈良をいふ。十訓「南都の林懐僧都、京へのぼられける時」著聞「南都より瓜を乘りたりけるに」北史「高昌傳「城、盛樂、以爲北都、等故平城、以爲南都」

なん-と　何（副）〔なにとの音便〕一何になりと。何ものと。何ごとと。佛説新選字「何と見んつま踏共の寒金佛」二なにと（何）に同じ。狂言「内侍「これやなんとさっしやれたぞいの」同「なんとおっしやれまするか」三なにと（何）に同じ。本朝三國誌「色に耽り弓矢を忘れ、長袖同前となしたる計略、なんとなんと」心中二枚繪草紙「なんと此の節に違ひがあるか」四なんとして。いかにしても。狂言「「昭」「昭」「昭」

家時代、納戸方をすべ掌る役。

なんと-まちぶぎやう 南都町奉行 (名) ならぶぎやう(奈良奉行)に同じ。政要録「奈良奉行南都町奉行と俗にいふ」武家厳制録「南都町奉行衆御條目」

なんど-めし 納戸飯 (名) 遊女などが、納戸など、客に見えぬ所にて食ふ飯など。遊女などが醒しぐひにする食事。二代男「納戸飯にも淫濃ならでは、よろづの肴も売の時食ひ覚ゆることあり」領城色三味線「領城中事納戸飯とて、越前衆も恥づかしいほど参るげな中略なんぢや納戸で飯食ふがをかしいとや」

なんど-とも 何 (副) (なにとも(何共)の音便) 一なにとも(何共)に同じ。なに(何)面の條を見よ。五人女「人の識り世の取り沙汰、なんとも思はず」二なにとも(何共)に同じ。なに(何)面の條を見よ。狂言怪「殿様に負はれまするが、なんとも迷惑に御ざりまする」

なんとも 何彼 なにともかとも(何彼)の音便。なに(何)面の條を見よ。

なんど-もとかたがしら 納戸元方頭 (名) もとかたなんどがしら(元方納戸頭)に同じ。貴永三年武鑑「御納戸元方頭、飯田總左衛門・新見彦四郎」

なんどやく 納戸役 (名) おなんどやく(御納戸役)に同じ。東武實録六元和五年「杉浦忠左衛門親俊に采地を加賜せられ、舊領總べて五百石を領す天正十八年より御納戸の役を勤む」

なん-と-やら 何 (副) (なにとやら(何)に同じ。なにと(何)の條を見よ。武家義理物語「六十に餘れる人の、形も賤しかるに、若念の契りを結ぶは、なんとやらむづかしき事にぞあれど」

なんどり (副) などり面の音便。曾我會稽山「ああ長まったと、ついなんどりとお受けは成らぬことかは」

なんど-ね 納戸繪 (名) 納戸などの襖などに貼りたる繪。柳樽「山中の家納戸畳に平九郎」

なん-なく 難無 (副) 少しの困難もなく。わけもなく。滞りなく。ぶなんに。たやすく。狂言鬼「是れからねころび打って、あの池へはまるならば、なんなく身は投げませうず」同鬼「なんなく隣國に著きたり」

なん-なら 何 (副) 一事によったら。時宜によっては。都合次第で。二何か意に満たぬならば。氣にいらねば。わるくば。浮世風呂「大東がなんなら、此の下に小束もありやす」

(諺)なんなら茶漬 客の帰りぎはになりて、差し支へなくば茶漬飯なりとも召し上がれと、お世辞をいふこと。

なん-なん 喃喃 私語する擬。べちやべちやささやくこと。白居易詩「喃喃敎言語」北史「乃向西北奉頭喃喃細語」

なん-なん (感) 小歌などの囃し擬。津國女夫池「夜著も揃ひもなんなん、なっこりやいらぬいらぬ」薩摩歌「なんなん、此のなんなん、此の横雲」

なん-なん-と-す 垂 (自動サ変) なりなむとす(垂)の轉。宇鏡集「向ナンナンスト」歩色葉「垂向ナンナンスト」運

なん-にぶ 難入 佛語。悟入しがたきこと。其の道に入りがたきこと。本朝文粹「法華人、難解難入之門」排「扉扃開、悟不測」榮華「難解難入の法華經を書寫供養し」法華經「諸國智愛、甚深無量、其智慧門難解難入、一切聲聞辟支佛、所不能知」

なん-にも 何 (副) (なににもの音便) 一なににも(何)に同じ。なに(何)面の條を見よ。二何物も。何事も。一事も。一物も。少しも。狂言貴「身共はなんにも存ぜぬ者の事で御ざれば」一茶句集「我が宿はなんにもないぞ巣立鳥」

なん-によ 男女 (名) だんぢよ(男女)に同じ。砂石集「京中の男女市を成して詣づる中に」運歩色葉「男女ナンニヨ」

なん-によう-ばう 男女房 (名) 男房と女房と。男房若しくは女房。内蔵寮式「饗王卿及殿上男女房饗」新儀式「四月御分明会御料」「遊女手元祇園御料」

なんの 何 (副) (なにの(何)の音便) 一なにの(何)に同じ。なに(何)の條を見よ。狂言文「なんのはづかしい事が有るぞ」國性爺「大事の眼をくり出したは何のため」芭蕉句集「何の木の花とは知らず匂ひかな」生玉心中「便宜して下ましたか中略なんの如才致しましよ」二なに(何)面に同じ。狂言鬼「おれありながらよう行きたうおりやったの。なんの行かいでは」同六人「夫れはゆるしてくれい。なんのゆるせ」三なんのかの(何彼)の略。なん(何)面の條を見よ。心中刃氷朔日「引き日の何(ナン)のと、てっきり七兩は入りませう」同芋「屋根へ上げの、なんのと云ふ」

なんば 軟派 (名) 一軟弱にして他の説にたやすく盲従する如き當派。主義・政見等のおだやかなる當派。(硬派の對) 二新聞・雑誌にて、文學又は艶種などを擅當するもの。三文學或ひは品行の、自然主義に傾けるもの。四取引所の語。よわき(弱氣)に同じ。「軟派の賣りに對する强氣買に」

なんば 難破 船舶が坐礁・膠沙・沈没又は破壊などの災難に遭ふこと。難風にあひて破船すること。難船。戸籍法「難船の難破に因りて乘組員及び乘客の全部又は一部が死亡したるときは其難破の取調を爲したる官吏」

なんば 南蛮 一船具。綱を繰るに用ふる滑車。管絃(ナンバ)につくるもの三つあり、上南蛮(ナンバ)と鼻鼻御南蛮(ナンバ)と根南蛮(ナンバ)、一名根付(ナンバ)と、又、水禍南蛮(ナンバ)とあり。二なんばんてつ(南蛮鐵)の略。狂言鬼「なんばの鉢というて、鉢びる鉢ではおりない」三かんじき(繪)をいふ。義内の方言。物類呼称 四なんばん(南蛮)に同じ。膝栗毛「かもんなんば(中略上方にてすもうをなんばいるといふ)」

なんば 難場 (名) 難儀する場所。難所。難關。

なんば 南方 (名) 一みなみの方。南の方面。東鑑「元久二年、爲遊覧陳、被行南方高山祭」醒記「自馬東郷西郷、以南方爲上」二なんばうけぬき(南方毛抜)の略。世話燒草「なんばうかぬき冷える皆院の内なちん、月にくさめをする鼻毛ぬき」

なんば-う 男房 (名) 宮仕へする男子。特に藏人の稱。女房の對。西宮中行事八月八日「女房渡之」九條年中行事八月「小食人供奉」同年月日「女房渡之」「祐子内親王家歌合、以女房爲左方」「男房爲右方」侍中群要「男房多女房所供也、男房希有」

なんば-けぬき 南方毛抜 (名) (不毛の義。支那蜀の諸葛亮の出師表に深入不毛南方已出とあるより出づ。近世事說) 尾張國名古屋より製出する鑷子(ピンセット)の稱。卜養狂歌集、ある人なんばうの毛抜を給はり、氣に入りたらば歌よみておこせとありければ。よきといひて頼ひもいざやしら鑷を、これで南方ぬくせかいの國」

なんば-うどん 南蛮饂飩 (名) 南蛮煮のうどん。上方の方言。膝栗毛「名物なんばうどん、あがらんかいな」

なんば-うはってん 南方八天 (名) 佛語。帝釋天宮の南方にある八つの天。

なんば-うりう 南坊流 (名) 茶道の一派。千利休の門人、和泉國堺南宗寺塔中雲院の首座、宗慶を派祖とするもの。茶傳集「本人、南宗寺宗慶左海宗慶宗慶、一休の法嗣す(中略)南坊流の創た」

なんば-ねどさいかってん 南方緯度最高點 (名) 【天】とうじてん(冬至點)に同じ。

なんば-さしや 軟派記者 (名) 軟派に責任せる記者。

なんば-く 難駁 非難して反駁すること。辯難・攻撃すること。晉書王馬、論難駁

なんば-くわぶつ 難破貨物 (名) なんばくわぶつ(難船貨物)に同じ。關稅法第三十八「遭難船舶若は難破貨物を輸入するとき」

なんば-せん 難破船 (名) 難破せる船舶。難破船取計一件「難破船御定法御運賞被下方舊條覽」御觸書集覽「天保十三年八月十四日「上方表より積み取り候注文荷物、於海上難破船之節」

なんば-づきん 難波頭巾 (名) 頭巾の一種。慶友千句「よけ道はけつまづきけり露の暮れの難波づきんに風寒き頃」

なんば-に 難波煮 (名) 料理の一。小鯛とすわきとを合せて煮たるうまに。新水代談「鯛の難波煮、鯉のさしみ」

なんば-もち 南蛮餅 (名) 南蛮煮の鍋煮餅。上方の方言。膝栗毛「上方にてするなんばもちとて、ねぎを入れたるざふに餅なり」

なんば-やき 難波燒 (名) 大阪高津より製出する赤色の陶器。生玉心中「東の難波燒」

なんば-りう 難波流 (名) 蹴鞠の一派。賀茂流の祖、賀茂成平の弟子、難波頼輔の孫刑部卿宗長を祖とするもの。

なん-ばん 南蛮 (名) 一支那にて南方のえびす。禮記曲禮「其在東夷北狄西戎南蛮、雖大曰子」孟子離婁「公上」今也南蛮鴃舌之人、非先王之道」二南方の野蛮人、又は賊徒などの稱。太平記三「南蛮・西戎は已に亂れぬ、東夷・北狄も又如何あらんずらん」三室町時代以來、るそん・しやむ・瓜哇・亞瑪港など南洋諸國を指していふ語。又、その地に殖民し、又は其の地を經て渡來せし西洋人の稱。多くはほるとがる・すぺいん・おらんだ等の國人とす。南蛮寺興廃記「抑、南蛮切支丹國と云ふは國號いすぱにや蛮語と云ふ中略此の國の從屬の亞馬港・呂宋等、日本の南方に當たれり、故に南蛮と號する者歟」回南蛮より渡來せる物、又、珍奇或ひは異風なるものに添へていふ語。「なんばん鍋」五なんばんりう(南蛮流)の略。御所櫻堀川夜討「是れが南蛮秘密の療治」六【植】たうがらし(蕃椒)をいふ。上總・參河・遠江及び奥羽の内の方言。物類呼称七【植】たうもろこし(玉蜀黍)の異名。八なんばんに(南蛮煮)の略。なんば。「鴨なんばん」

なんばん-あさがほ 南蛮朝顔 (名) 【植】でうせんあさがほ(曼陀羅花)の異名。

なんばん-あづき 南蛮赤小豆 (名) 【植】一かいこうづ(海紅豆)の異名。二たうあづき(相思子)の異名。

なんばん-ありのみ (名) 【植】あんら(菴羅)の異名。

なんばん-からやく 南蛮膏藥 (名) 南蛮流の外科に用ふる膏藥。西洋より船來せる膏藥。昨日は今日の物語「まぶたを剪み切って取り、南蛮膏藥をつくれば、二日三日の間にすきとなる」

なんばん-がさ 南蛮笠 (名) 南蛮風の笠。醒見記「馬場入り次第中略大臣家御出馬、黒き南蛮笠を召され」

なんばん-かたばみ 南蛮酸漿草 (名) 【植】みやまかたばみの異名。

なんばん-がね 南蛮金 (名) なんばんてつ(南蛮鐵)に同じ。百合若大臣野守鏡「南蛮金の鐵の弓」

なんばん-かぶと 南蛮甲 (名) 南蛮鐵にて造りたる甲。會津陣物語「川合道敬「角柴螺の南蛮甲を猪頭になし」

なんばん-がらし 南蛮辛 (名) 【植】たうがらし(蕃椒)の異名。

なんばん-きせる 野菰 (名) 【植】列當(ナンバンギセル)科、野菰屬の草本。高さ七八寸、鱗片狀の葉を有するのみ。頂上に一花を著け、夏季帶赤色の脣形花を開く。我が國、各地の山野に見出ださる。禾本科植物の根に寄生す。おもひぐさ。きせるさう。

なんばん-きび 南蛮黍 (名) 【植】たうもろこし(玉蜀黍)をいふ。畿内の方言。物類呼称 太祇全集「朝鮮や南蛮黍も打ちそよぎ」

なんばん-きり 南蛮錐 (名) もぢぎり(鎌錐)に同じ。

なんばん-くわし 南蛮菓子 (名) 西洋より渡來せる菓子。製法が西洋より傳來せる菓子。かすてーら・ぼーるの類。隨落舊記「慶長十八年正月十二日「御樽壹丁・南蛮菓子一折進上」伊呂三味線「三つ取り合ひのなんばん菓子を、一人に一斤あてに荒らし」

なんばん-けぐわ 南蛮外科 (名) 南蛮流の外科。西洋の醫術の外科。又、それを行ふ醫師。薩摩歌「長崎に黄陳といふ南蛮外科」

なんばん-こせう 南蛮胡椒 (名) 【植】たうがらし(蕃椒)に同じ。製造笑話

なんばん-じ 南蛮寺 (名) 南蛮宗の寺院。

なんばん-じっくい 南蛮漆喰 (名) しっくいの一種。下塗に用ふるもの。石灰・蠣灰・苔灰・砂・海藻を調合して製す。

なんばん-しぼり 南蛮絞 (名) なんばんぶき(南蛮吹)に同じ。

なんばん-しゅう 南蛮宗 (名) 南蛮寺より渡來せる宗派。即ち、基督教。南蛮寺興廃記「南蛮宗の如く、財寶を費やし、人民の利欲より歸伏せしむることを未だ聞かず」

なんばん-じん 南蛮人 (名) 一南蛮の人。野蛮人。又、西洋人を卑しめていふ語。南蛮寺興廃記「呂宋等中略南蛮人多く住居するが故に、類屬の國なりと云へり」

なんばん-すな 南蛮砂 (名) 【化】はうしゃ(硼砂)の異名。

なんばん-たいこん 南蛮大根 (名) 【植】ころは(胡蘆巴)の異名。

なんばん-ちゃ 南蛮茶 (名) 【植】たうちや(阜蘆)の異名。

なんばん-づきん 南蛮頭巾 (名) 頭巾の一種。南蛮風のもの。立入左京亮入道隨佐記「御馬乘布之中略信長之御出立者中略しやうぶかはの皮袴、なんばんづきん」

なんばん-づけ 南蛮漬 (名) 酢と酒と鹽とを煎じてさましたる汁に、川魚・鯖・野菜などをつけたるもの。合類日用料理抄「南蛮漬の方、一、酢三盃、一、古酒二盃、一、鹽二盃右三返合せ、炭の火にて二沫ほど煎じ能くさまし、鮎、其の外川魚・小鯖・ほほづき・せうが・ぐらげ、其の外いろいろ

ろつけ申し候」

なんばん-つば 南蠻鐔 (名) 外國より渡来したる刀の鍔。又、それを摸造したるもの。又、南蠻鐵にて製りたる刀のつば。

なんばん-てつ 〔南蠻鐵〕 (名) 足利氏の季世より江戸時代に於て、舶来の精練したる鐵の稱。兜などを鑄造するに用ひられたり。新刃銘盡「南蠻鐵を以て刃金に用ふる事は、越前の孝藤纖を以て始めとす」

なんばん-に 南蠻煮 (名) 料理の一種。蕗を二寸ほどに切り、たちわりて味をつけ、魚・鳥に交へて煮たるもの。

なんばん-はこべ 狗筋蔓 (名) 【植】石竹科、狗筋蔓屬の多年生草本。莖は稍蔓狀を呈す。葉は對生、卵形、鋭尖頭なり。夏季、枝頂に一箇づつ、帶綠白色の花を開く。果實は球形にして黒色なり。我が國、各地の原野に自生す。たうじんかづら。つるせんをう。

なんばん-はこべ 南蠻繁縷 (名) 【植】おはやまはこべの異名。

なんばん-ぶき 南蠻吹 (名) 金屬の吹き方の一。熔融點の甚だしく異なる二種の金屬の合金を熱し、兩熔融點の中間の溫度になしおきて壓すれば、其の熔融點の低き金屬は絞り出されて、熔融點の高き金屬が跡に殘るもの。なんばんしぼり。日本山海名物圖會「なんばんぶきは、たたらかべにつけ、はぐちをして、二ちやうふいどにてふく也。銅より鉛をしぼり取るに用ふる也、又、銅より銀をしぼり取るにもこれを用ふる也」

なんばん-ぶね 南蠻船 (名) 南蠻の船。外國船。若狭國今富名領主次第「南蠻船二艘著岸」

なんばん-まつやに 南蠻松脂 (名) くんろく(薰陸)の異稱。

なんばん-もち 南蠻餅 (名) 餅の一種。甘皮を去りたる胡桃の仁を蒸したる餅米にまぜて搗き、捏ねて小さく切り丸め、どろどろの水飴に入れ、砂糖を加へて煮たる青豌豆を其の周圍につけたるもの。

なんばん-りう 〔南蠻流〕 (名) 南蠻人の流儀。主として醫術・就中、外科にいふ語。西洋風。南蠻寺興廢記「南蠻流の外療を受け」松風村雨束帯鑑「此の青藥で手負ひは癒らず、南蠻流に人の油」

なんばん-りうり 〔南蠻料理〕 (名) 南蠻流の料理。猶、下文を見よ。西洋料理。南蠻料理語「南蠻料理。鵝の毛を引き、頭・脚と尻を切り、拂ひ鍋に入れ、大根を大きに切り入れ、水をひたひたより上に入れ、大根いかにも柔かになるまで煮く。扨、鳥を揚げ、鍋かにむしり、もとの汁へかけを落とし、又、大根を煮て、吸ひあはせ出だし候時、鳥を入れ、さか塩吉し、すひ口にんにく其の外色色、薄味噌にても仕り候、妻に平茸・ねぶかなども入る」

なんぴ 〔難非〕 ひなん(非難)に同じ。太平記「世間・人倫・山門・堂塔・地獄・有るべしと見えたり。人の生涯を尖はん事を不顧、他の難非を顧す此れ停なり」

なんぴと 何人 (名) たれ。いづれの人。なにびと。

なん-びやう 〔難病〕 (名) 急に癒え難き病ひ。難治の病氣。難症。重病。武家義理物語「難病は世にあるならひ、醫ひ昔の形なくとも、是非におくらせ給へ」孕常磐「清盛は火の病ひと申す難病に罹され」

なん-びん (名) (留餅の字の唐音。饅頭・茶菓) あんもち。なんびんもち。あんびん。饅頭・茶菓。

なんびん (名・副) ㊀愚なること。又、その人。又、人を嘲る語。一代女「銀遣ふ客を疎かにして、不斷際で暮らすは、主だふし我が身しらずのなんびん也」能樂「とりん・とられん・なんびん・のび助中語」などと、けがれたる異名を授かる」㊁取引所の語。損失を受けたるに拘らず、重ねて同じ事をなすこと。「なんびんに賣る」

なんびん-うり 〔取引所の語。賣り損失を受けたるに拘らず、また賣り込むこと。

なんびん-かひ 〔取引所の語。買ひ損失を受けたるに拘らず、また買ひ込むこと。

なんびん-は 〔南蘋派〕 (名) 〔支那、清の人、沈南蘋が長崎に來たりて傳へたるよりいふ〕近世、支那より輸入したる寫生畫の一派。

なんびん-もち (名) なんびんもちに同じ。御柑子「田舍がのかぬ手扶のだてのたべつけぬなんびん餅を忍ぶらん」

なん-ぶ 〔南浮〕 (名) 佛語。なんえんぶだい(南閻浮提)の略。砂石集「南浮の衆生は、三障重きが故に不動を念ずべし」

なん-ぶ 〔南部〕 (名) ㊀南方の部分。後漢書南蠻及南部」㊁なんぶおりもの(南部織物)の略、㊂佛語。なんせんぶしう(南瞻部洲)の略。

なんぶ-いと 南部絲 (名) 陸中國南部の附近、即ち青森・巖手二縣より產する絹絲。

なん-ぶう 〔南風〕 (名) ㊀南方より吹きくる風。みなみかぜ。㊁夏季の風。史記「五帝「南風之薰兮、可以解吾民之慍」令」㊂南方の風土の歌謠。南國の風習を唄へる歌。

なんぶう 決そは ず 南風不競 (下文の左傳より出で、南方風土の歌謠の勢ひなきを以て、南國の强からざるを卜する故事に出づ) 南方の勢力の劣れるにいふ。左傳「昭公十八年「吾聞歌北風又歌南風、南風不競、多死聲、楚必無功」」

なん-ぶう 〔軟風〕 (名) 靜かに吹く風。身に當たりて快く感ずるほどの風。輕軟なる風。そよかぜ。溫風。「軟風吹、奈星斗稀」

なん-ぶう 〔難風〕 (名) 航海する船をなやます暴風。航行に困難ならしむる風。著聞集「鳥人ども、難風に吹き寄せられたる舟ぞと思ひて」謠曲「海路心に任せず難風吹いて、もとの地に著しまこと」

なん-ぶうま 南部馬 (名) 舊南部藩領より產する馬。體軀偉大にして性質溫順なるを以て、逸物多し。

なん-ぶおり 南部織 (名) 次條に同じ。

なん-ぶおりもの 南部織物 (名) 舊の南部即ち今の盛岡市の地方より產する織物。

なん-ぶきぬ 南部絹 (名) 舊の南部織物。艷ありて地質つよし。絹布重寶記「南部絹中大體川越に似たる所もあれど、絹につやあり、地性もつよし」

なん-ぶきよく 〔南部局 (名) たくしよくむしやう(拓殖務省)を見よ。明治二十九年三月拓殖務省官制第六「南部局に於ては臺灣に關する事務を掌る」

なん-ぶじま 南部縞 (名) 南部織物の縞物。

なん-ぶしやけ 南部鮭 (名) 【動】さけ(鮭)の異名。鹿手鮭下にて漁獲せらるるものの特稱。品質劣り、形狀また多少の相違ありといふも、別種にあらず。

なんぶ-たうさ 〔南部當歸〕 (名) 【植】

織形科、常齋屬の草本。當歸の一品種。葉の裂片の鋸齒細小なるもの、我が國、北部の高山に自生す。いはてたうき。みやまたうき。

なんぶ-ちりめん 南部縮緬 (名) 縮緬の南部織物。今は殆ど跡を絶てり。

なん-ぶつ 〔難物〕 (名) ㊀扱ひ又は行ふに困難なるもの、處置するに骨の折るるもの。㊁あしらふにむつかしき人。手に餘る者。こまりもの。

なんぶ-つむぎ 南部紬 (名) 紬の南部織りの物。今は殆ど跡を絶てり。

なんぶ-づる 南部鶴 (名) 紋所の名。

なんぶ-つるのまる 南部鶴丸 (名) 紋所の名。

なんぶ-てつびん 〔南部鐵瓶〕 (名) 舊南部、即ち、今の盛岡市より製出する鐵瓶。最も有名にて、鐵氣を生ぜざる特色あり。

なんぶ-とらのを (名) 【植】蓼科、蓼屬の多年生草本。莖の高さ尺に滿たずして、肥厚せる根莖を有す。葉は長卵形、穗狀花序は一寸内外、花は桃色、八雄蕊・三雌蕊を有し、夏開く。我が國、陸中國に產す。

なんぶ-ぬり 南部塗 (名) 陸中國南部のぬり物。五色の繪を畫きて、處處に金箔を押したるもの。品質粗なり。

なんぶ-ゆやう 〔南部模樣〕 (名) 南部梳の花章を摸したる布帛の模樣。

なんぶ-わん 〔南部椀〕 (名) 陸中國南部より製出したる椀。下文を見よ。模塗漫錄「南部椀また秀衡椀ともいふ、其の始め詳ならずと雖も、土人の口碑によれば、藤原秀衡の銅鉢より出でしものなりとぞ、其の製、内朱外黒にして、黒漆の上に朱を以て鶴・花卉の類を描き、ところどころに金箔を押せり。その雅致あるを以て、尤も點茶家に愛賞せらる」

なん-ぶん 〔難文〕 (名) むづかしき文章。わかりにくき文。難解の文。

なん-ぶん 何分 (副) なにぶん(何分)の音便。

なん-べん 何遍 (副) ㊀たび數の知れぬにいふ語。いくたび。なんど。㊁あまたたび。たびたび。數遍。しばしば。

なん-ぼ (副) ㊀何ほど。いかほど。どれだけ。いくち。若干。幾何。狂言「茶中藤「なんぼなりとも參りませう」」本朝三國誌「蹈みたか、なんぼなと蹈ましやんせ」百合若大臣野守鏡「いづれも、なんぼ取る衆か知らぬが」㊁どのやうに。いかやうになして。どんなに。いかに。なんと。何ほども。心中二枚繪草紙「なんぼせいても張り合うても」川中島合戰「なんぼ不孝になるとても、半時や一時の目かりはない」

なんぼ-でも 何と云ひても。何ほどといひても。どうしても。博多小女郎波枕「さあさあ踊りやといひければ、なんぼでも踊らぬ」娥歌加留多「是非是非頼み奉る。いやなんぼでもなりませぬ」

なんぼ なん-でも いかにどうあらうとも。たとへいかにあらうとも。よしやなにしても。

なんぼう 〔なんぼに同じ。盛衰記「世間・人倫・堂塔「此の馬、何ぼうの馬にて候ぞ、御覽ぜよ」謠曲「學問をば、なんぼう御きはめ候ぞ」狂言「文山「われがやうな者と同心すれば、なんぼうの損をするぢや知れぬ事ぢや」」㊁なんぼに同じ。心中刃氷朝日「なんぼう殘り多からう」國姓爺「なんぼう美しうても唐の女房中語辨才天を見るやうで、勿體なうて」同「なんぼうあかれた仲なりとも、今までの情に」㊂何といふ。なんたる。なんと。謠曲「いたづらに飢死につかれて死なん命、なんぼう無念の事ざうぞ」謠曲土蜘「なんぼう奇特なる事にては無きか」同七番「なんぼう土肥殿に、義盛は忠の者にて候ぞ」

なん-ぼく 〔南北〕 (名) みなみときたと。南と北との間。謠曲「宇治川の南北の岸に打ち望み」張融文「東西無里、南北如天」

なんぼく-しゅう 〔南北宗〕 (名) 南宗畫と北宗畫と。畫乘要略「三宗、祖祢先生得、清人季漁芥子園畫譜「大奇」之、遂納之官東、而後十竹齋・佩文齋書畫譜、相等而至、於是人或得見王・黄・倪・吳以下清人風格、百川・南海首倡之、燕村・大村相繼而興、世人始知有南北宗」

なんぼく-てう 〔南北朝〕 (名) ㊀我が國にて、延元元年十二月後醍醐天皇の神器を奉じて大和國吉野に遷幸あらせられたるを南朝、一に吉野朝と稱し、京都にて足利尊氏の擁立し奉りたる光明天皇の皇統を北朝と稱し、爾後、南朝は後村上・長慶の二朝、北朝は崇光・後光嚴・後圓融の三朝を經て、南朝の後龜山天皇の元中九年、即ち北朝の後小松天皇の明德三年まで五十七年間の兩朝の稱。㊁支那にて、我が紀元一千八十年(西紀四百廿年)の頃、劉裕が東晉の祚を簒ひ淮水・漢江の以南に據り建國し國號を宋と稱し、同時に拓跋氏は淮・漢二水の以北に據りて後魏を建つ。前者を南朝、後者を北朝と稱し、南朝は漢族にて、齊・梁・陳に傳へ、北朝は鮮卑族にて、東西に分かれ、東魏は北齊に、西魏は北周に傳へ、北周は周齊を併せて隋に傳へ、隋の文帝九年皇紀千二百四十九年(西紀五八九年)に陳を亡して混一に歸したり。

なんぼう 〔軟毛〕 (名) やはらかなる毛。柔軟なる羽毛。

なんぼうだぶつ (句) 次條の略。

なんぼうみだぶつ (句) なむあみだぶつ(南無阿彌陀佛)の音便。なむ(南無)の條を見よ。

なん-ぼうんくわう (英 Pyrolusite) 〔軟——錳〕 (名) 【化】暗灰色、針狀の結晶をなして天然に產出するもの。成分は二酸化まんがん。なり。

なん-ぼく 〔生滅・鈴木「なに鈴木三郎重家とは、なんぬが事か」

なんぬ (代) 汝の奴。なんぢぬ。狂言

なんめいら (名) 【植】こむらさき(小紫)に同じ。

なん-めん 〔南面〕 ㊀南方に面すること。南方に面したること。みなみむき。みなみおもて。東鑑「十一月九日「法皇出御常御所南面廣廂緣敷疊」」著聞集「南殿の寢殿のたつ殿隅の南面は、女院の御方なり」孟子「南面而征、北狄怨」㊁支那にて、王者は下に對する時は南方に面したるよりいふ」君主の位に即くこと。天子となりて國内を治むること。盛衰記「三周公旦の、成王に代りつつ南面して、一日萬機の政を行ひしに准へて」易經「聖人南面而聽天下」醒睡「明而治」

なんめん-くらゐ 南面位 君主の位。君位。帝位。井筒梁平河内通「君を南面の位に即け」

なんめん-の-たふとき 南面尊 天子の尊き位。著聞「南面の尊きにかはりて、專ら萬機の政敎を垂れて」漢書「處「南面之尊、乘萬乘之權」」

なんめん-の-とく 南面德 君主たる德。君德。帝德。太平記「三・主上、脫再び南面の德を治めて、天下の士を朝せしめんずる處を」

なんーもん 〔南門〕（名）みなみの方の出入の門。南方にある門。著聞集「法成寺の修正に、南門を入りて參りて、退出の時西門へまはされけるほど」左傳僖公廿年「新作南門」

なんーもん 〔難問〕ひつかしきことをたづね問ふこと。論難し質問すること。又、その問題。難題。難問題。大原問答「青葉笛」「路宗舉って難問し中略日夜論談せられけり」後漢書光武紀「朝廷有大議、使難問」「公卿辯論於前」

なんーもんだい 〔難問題〕（名）一解答の容易からざる問題。解釋に困難する問題。二容易ならざる事件。至難の物ごと。

なんーやう 〔南洋〕（名）一南方の大洋。南にある海洋。二我が國よりまらい群島及び大洋州一帶を指していふ稱。

なんーら 何等（代）なにら（何等）の音便。

なんーりょ 〔南呂〕（名）なんろ（南呂）に同じ。運歩色葉「南呂ナンロ」

なんーれう 〔南鐐 煖遼〕（名）〔鐐は白銀の美なるもの。冶練〕一うつくしき銀。質のよき銀。精錬したる銀。上位の銀。盛衰記十「中宮」「砂金千兩、南鐐百、御劒七振」義經記六「藤原秀衡」「なんれうを以てつづりたる黄金の菊形打ったる銅拍子に」二ぎん（銀）の異名。三にしゆぎん（二朱銀）の異稱。浮世床二「南鐐やるといふ事を三度云うこさかひ、一分二朱ぢや」

なんれう-ぎん 〔南鐐銀〕（名）前條に同じ。貨幣秘錄「明和九年壬辰九月、南鐐銀を以て二朱銀を鑄る」

なんれう-ざ 〔南鐐座〕（名）慶長三年十二月以前、和泉堺に置きて、南鐐の極印を打ちたりといふ座。金銀圖錄「往古銀は共に慶長六年五月に定めらるる所なり、蓋し是れより先き泉州堺に南鐐座ありて、自ら極印を打ちたりしに」

なんれう-にしゆぎん 〔南鐐二朱銀〕（名）にしゆぎん（二朱銀）の異稱。南鐐。

なんろ 〔南呂〕（名）一十二律の一。じふにりつ（十二律）を見よ。禮記月令「仲春之月、律中南呂」二陰曆八月の異名。國語「南呂。注八月曰南呂」

なんろ 〔難路〕（名）通過に困難なる みち。險難なる道路。難道。

なんろん 〔難論〕（名）一困難なる議論。難問題の議論。二ろんなん（論難）に同じ。楚辭「世沉淖而難論兮、俗鈐鍼而睫嫉」

なんゐん 〔難韻〕（名）詩を作るに、文字少なくして、押韻に困難む韻。

大正六年十二月一日初版印刷
大正六年十二月四日初版發行
大正十年五月十二日十二版印刷發行
昭和四年三月十五日修正版印刷
昭和四年三月十八日修正版發行

大日本國語辭典第三卷
定價金拾參圓

著作權所有

著作者　松井簡治
著作者　上田萬年
發行者　東京市神田區通神保町九番地　合資會社　富山房
右代表者　同所　合資會社富山房社長　坂本嘉治馬
印刷者　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　高木鳥三
印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　株式會社秀英舍

發行所
東京市神田區通神保町
明治二十九年六月設立
合資會社　富山房
電話九段自一八九二一番至一八九二五番　電信略號（ヤマフ）
振替貯金口座東京五〇一番

終